

強個性であり、万能的
で無敵でもある。ただ
し、ストレス耐性と胃
薬が必要である 『完結』

サルスベリ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

サルスベリの思いつきヒロアカ三つ目！ 思いついた以上は書かないと、書いて供養をしてやらないと。成分的にはヒロアカって井ぶりの中に、艦これとFateなどを混ぜたような感じ。注意事項としては、あまり深い知識がないため勢いで突っ走るくらいです。

原作崩壊確定。むしろ、ヒロアカの世界とキャラで異世界ランチキ騒ぎがあつていような。

では、それが嫌でない方はどうぞ。完結しました。

目次

第一幕 目指した背中を追い掛けて	
転生しました、何回目か覚えてないけど	1
普通に生きたいって願うだけ無駄なのかな	5
黙ってれば美形です、黙ってれば	20
朱に交わったら赤くなる前に真赤だった件	35
正直、何処へ向かっているのか不安です	50
彼の終わり、彼の始まり	65
ヒーローの条件	82
ほうれんそうって知ってる？ 報告、	
連絡、相談だよね。砲撃・連戦・騒動起こすじゃないよね？	106
カレーは皆の大好物、そして皆のケンの元	124
情熱は燃やすもの、理性は冷ますもの、感情は爆発させるもの？	140
デク君がヒーローやりたいけど無個性だから武器庫化しようぜ	155
掛け声って大切だよね、気合いが入るよね	176
乙女の決意はどっかの超人を圧倒す	

る、かもしれない

194

理性は大切なものですが、条件反射は

止めてくれませんか

214

今日もいい天気ですね、いかがですか

と書き始めた手紙の、送り主がそこにい

る気持ち?

235

日常って毎日ってことだけど、

ちよつと異常な日々も毎日と続けば日常

なんだよね

258

類は友を呼ぶっていうけど、同類以上

の奴が来ることもある

274

誰かの声に応え、その限界を超える

294

仁義なき、最終兵器合戦、にやー成分多

め

ある日の、ごくありふれた、とても普通

の、何処にでもあるような、午後の話

339

小さくても、今にも消えそうでも、それ

でもつないでいく

もしも、ヒロアカがドラマだったら?

特殊効果を受け付けない耐性を持つて

いながら、追加効果を忘れて直撃したら

しい

理想のために、夢を追いて、他が為の

385

頑張るって素敵だね、切っ掛けはそこにあるからさ、思い込みは大切だよ、そんな話ですよ

420

参加者は専門家の指示の元、安全に十分に配慮しております。決してマネしないでください

439

矜持と信念にかけて・1

462

矜持と信念にかけて・2

482

矜持と信念にかけて・3

503

他の奴が好きだと思っていた子に、いきなり告白されたと思ったら、その先に色々あった話

523

嫉妬は見苦しいものです、見ていて悲しくなります。でも矛先が違うところを向いていると、見ていて微笑ましくなりませんか？

540

復讐は虚しいものです、終わった後に何も残りません、だから煽りましょうと言われたようなもの

557

地雷を踏み抜いた気持ちで頑張っていたら、大地を割っていた。そんな話

576

春ですね、青春してますか、色々世間は騒がしいでしょうが、学生生活はたった一度なので、青春しましょうよ

594

桜は咲きましたか、春らしくなりまし

たか、ではお花見で騒ぎませんか？

612

胡蝶の夢

631

願いを集め絶望を砕く者、ヒーロー

654

例えば、君がいつか何処かに行つてし

まうとも

671

譲れない想いと、揺るがない真理

692

心の底から震えるほどに、赤く燃えて、

青く冷たくなって、それでも叫び続ける

ような、決意

712

己が自覚を持ち、前を向け

736

ただ一人、理想を求め追い求め、ただそ

れだけを望む

754

光と影、あるいは二つにして一つの存

在

772

それは聖火の如く受け継がれる

794

貴方にとってヒーローってなんですか

？

813

第二幕 彼ら・彼女達の非日常的な日常

風景

悪い知らせ、不幸の便り、そして世界の

絶望を望んで終わる

827

世界の中心にして、人の世の脇役、人の心を壊し癒すもの、あるいは誰かにとつ

ての命

845

少し寂しいけれど、旅立ちつてこんな感じになるのだろう

863

日常的でありふれている会話なのだけれど、している人たちがこの人たちだと周りから見たらどう見えるか理解していただけますか？

885

芸能人に会いたいのか、会えるといいな、隣にいるよって状況です

903

あとがき風味のお話です。

919

第一幕 目指した背中を追い掛けて

転生しました、何回目か覚えてないけど

皆さま、始めまして。あるいはお久しぶりって人もいるかもしれないけど、あえては
じめまして。

どうも、『田中・一郎』と申します。

最初に言っておくと転生者です。うん、たぶん転生者。記憶はあるし、神様に会った
覚えもあるんだけど。

こう、映像を見ている気分になるんだよね。うん、いろんな世界があって多次元世界
とか、可能性の世界って言葉を信じたくなってきたよ。

信じるしかないってこともあるけどね。

あ、俺の転生特典は最初の転生から変わってないよ。いやあく最初
の転生ってさ周
り中が転生者で、俺だけ普通に生まれてさ、困った困った。

艦これって知ってる？ 深海棲艦とかいる世界で提督として戦っていた、戦ってい
たって言っていていいかな。書類と向き合っていたけど、まあそんな世界で生きてきて。気

がついたら元帥までなったんだぜ。

死んだ理由は聞かないでくれ。もうストレスマツハで吐血まで体験したからさ。

ハハハハハハ・・・はあ。

で、転生。次の世界でも同じ原因で転生、次も転生。

神様に会うたびに、『え？ またなの？ 何してんの？』って顔で見られてさ。もう神

様の世界に行くたびに、周り中が『え、また？』って顔で見えてくるからさ。

受付の天使と顔見知りだよ。

うん、胃が痛くなってきた。

過去を振り返るのは以上で終わり！ さあ、今回の世界はどんなだ?!

「誰、お前?」

聞いてください、皆さん。転生したって思ったら、目の前に五歳児が。

え、いや待って、ちょっと待って。なにそれ。

「・・・・・・・・俺は田中・一郎!」

「そう」

なんだろう、この子。元気ないな。元気ないのが悪いことじゃないのは解っているけど、元気がいい子のほうが子供らしいって考えが俺にはあるわけ。

「子供が何してるんだ?」

「そつちも子供じゃないか」

「はい？」

え、ちよつと待つて。俺も子供？ 何言つてんの、こいつ。そんなバカなことあるわけがない。

あ、目線が低い。

俺子供じゃん！

「こ、子供でも俺のほうが年上だ！」

「はあ……」

「とにかくここが何処か……」

話しかけて相手に触ろうとしたら、相手がバつて振り払った。

「触るな！」

「はい？ いや、潔癖症なら触らないけど、そんな反応すると傷つくって」

「違う、僕の個性が……」

「個性？ いやいや潔癖症が個性ってなんだよ。ほら」

嫌がる彼に触れて手をひっぱる。なんだかすごい怯えた顔したけど、何だろう。あ、やつは潔癖症か。人に触られるってそんなに嫌なのかな。

「……なんで？」

「いやこつちこそなんでもって言いたいよ。潔癖症は恥ずかしいことじゃない、立派な『個性』だ。人それぞれだって」

「なんで?!」

なんだろ、凄じ騒いでいるけど、手を離すつもりはない。

だって泣いている子供を放っておけないから。今は五歳児くらいでも、中身は大人だし。

よつし、頑張つて生きるぞ。

普通に、ごく普通に。

『世界総人口の8割が『個性』を持った超人社会は・・・』

あれえくすでに普通の世界じゃない気がしてきたぞ。

普通に生きたいって願うだけ無駄なのかな

さてさて、月日がたつのは早いつていうけど、あれは本当だね。

毎日、毎日、必死に生きてきたけど。

「あれって何してるんだ？」

「さあ？」

戸籍もないんだぜ。本当に生きるために頑張らないといけないって、必死になつていたんだけどさ。

「ふむ、今日も株価は上がっているな」

「おめえ、今度は何処の会社を買ったんだよ？」

忘れていたのさ、俺って転生者だから転生特典があるつて。気づいたのは五歳児でもできる仕事やっていた時だつてね。

裏稼業つてあんな子供も鉄砲玉に使うんだぜ、本当に厳しい人たちだよ。でもおかげで資金はもらえた。子供でも働きには報酬を出すつて、ある意味で表の人たちより筋が通っているよね。

うん、俺ってなんで死んでないんだろ。

「そういえば、一郎さん。通知が来ていましたよ」

「え、なんて?」

珍しいこともあるもんだ。俺のところに通知なんて久しぶりだな。

「個性テストのお知らせ?」

「あゝゝゝついにか」

「ついに、ですね」

「え、ちよつと待って、何これ? 俺の個性ってあるわけないじゃん」

ははははと笑っていると、室内にいた誰もがすつごいたため息ついているし。

え、どういうこと。

「俺の個性に耐えた一郎が無個性って」

「私の個性でも耐えたというのに」

なんでそこで二人が呆れているかな。

「え、弔の個性って識別可能じゃなかったっけ?」

「はあ」

うわあゝゝゝすつげえムカつく。なんだよその、『おまえ、馬鹿って』顔は。泣いてた子供が今じやいい大人してんじやないの。

「今じゃ出来るけど、あの頃は無理だったんだよ。それで家族殺したの知ってるだろ？」
「まあ、それはまあ」

悲しいことなのに、今は普通に話すんだよな。昔は思い出すたびにピーピー泣いてさ、いろんな奴にお世話になったのに。

「うっさいよ、馬鹿」

「人の思考を読むなよ、アホ。で、黒霧、誰からだつて？」

呆れた顔、顔でいいんだよね、今でも疑問を感じちやうけど、うちの『店』の主戦力だから、あまり変なこと言わないけど。

「保健所か病院だろ？ この個性社会で、テスト受けてないっただけで大騒ぎになるんじゃないか？」

「そうかそうか、ついに探知されたか。では我の愉悦が始まるというのだな」

うっさいよ、その名探偵と英雄王。

あ、ちなみにこいつらが俺の転生特典の一部でさ、最初の人生からズツとついてきてくれるいい奴らだ。

時々、俺を追い詰めるけど（泣）。

あれ今なんか、変なこと言っただけでなかつたか？

「コナン、今なんて？」

「だから、テスト受けてないだろ、おまえ」

「………弔?」

「俺、一応あるぞ」

「私もありますよ」

「まさかの二人の裏切り?! え、だって二人とも偽名じゃん!」

「戸籍作つてもらっただろ」

え、誰に? つて聞くまでもないか。電子技術ならなんでもできますって、凄腕の

ハッカーがいるからな。

あれも俺の転生特典なんだけどなあ。

「コナンとギルは?!」

「全員、偽造済みだ、バーロ」

「チツクシヨウ! てめえ、名探偵! それでいいのかよ?!」

正義とか法を護っていたおまえは何処に行った?!

「……プレデターとかエイリアンとか、『あいつら』がいるんだぞ。多少の嘘は許されるだろ?」

ク、昔の綺麗なコナンはもういないのか。俺が転生した世界で『あ、こいつらがいたら白兵戦しなくていい』とかいって、貰ったのが悪かったのかな。

「人が殺されなきやいいさ」

遠い眼をするコナンに、そうだなあつと思つてしまう。

もう転生するたびに死ぬ思いをしたから、色々なところで色々な力を求めたのは、俺の若さ故の過ちつてしたい。

仕方ない、行くか。

「行つてくる」

「最速で帰つてこいよ。もうすぐデイナータイムだ」

何時も通りの服を着ながら、弔がそんなことを言っている。

そうだなあ、なんだろうな。『崩壊』つて個性を持っているのに、なんでこいつはシエフつて仕事についたんだろう。

「弔、今日はいい大根が入りましたよ」

「さすがだ、黒霧。今日は大根をメインに使つてみよう、最近ヘルシー料理が流行らしいからな」

「ヘルシーなら鶏肉もいいだろ?」

「名探偵の推理には恐れ入るな」

なんだか、後ろでそんな会話しているけど、任せていいか。

「じゃ、行つてくる」

『キュシヤ!!』

店の入り口でエプロンと猫耳付けて、掃除をしているエイリアン『トツティ』君と、庭木の世話をしているプレデター『トルテ』君に声をかけて、俺はため息交じりに歩いていくのでした。

あれがあるから、『モンスターレストラン』とか、『バー異世界』なんて言われているんだろなあ。

あ、でも怖いっていうより、『面白おかしい』って感じなんだけど、この世界の感性っていかに？

普通はもつと小さい頃に受けるんだ、とか。なんでもつと速く来なかったとか、色々文句を言われました。

だってそんなのあるって知らなかったし。

あれ、でも甲は知っていたし黒霧も知っていたよな。あれか、あの『先生』って言われているあいつが、色々世話をしたのかな。

やめよう、なんでかあの人のことを話すと甲も黒霧も殺気だらけになるし。

コナンと英雄王なんてさ、フル装備で出ていこうとするから。

「うん、君の個性は『鎮守府』だね」

「あ、はい」

うん、知ってた。それ俺の転生特典。最初の転生の時に貰った、艦これ世界での俺の鎮守府を呼び出せる能力だよな。

あれのおかげで五歳児でも生きていけるし、食糧に困らないからいいんだけど、コナンとギルも『鎮守府にいたから』で呼び出せるし、他の艦娘達も呼び出せるんだけど。

何度も転生して解る、俺の鎮守府の艦娘達の規格外さ。もう常識を投げ捨てたくなってくるくらいだよ。

「珍しい個性だが、どんな個性かまでは解らないね。どうだろう、雄英でも受けてみるかい？」

「いえ、遠慮します」

「学生ならばヒーローを目指すものだが、君は違うようだ」

ヒーローね。

俺には無理かな。だってあんなに傷だらけになりながらも、他人のために戦うなんて俺にはできないさ。

病院を後にして俺は自分の家に戻る。

今の俺は、こう目の前にいる人たちと馬鹿やるだけで十分だって。

「ただいま」

「いいところに戻った！ 今すぐそいつを捕まえろ！」

「は？」

店の入り口から入ったら、中が凄い惨状でした。

テーブルやイスは崩壊。棚は砕け散っていて、食器類が宙を舞っている。

なんでこうして、と視線を入口のところへ向けると、トツティ君とトルテ君が膝を抱えて天井を見ていた。

泣いているんだね、解るよ、その気持ちはよく解る。

「ギユワア!？」

「おまえは今日のダイナーの食材になるんだ。摘み食いの罪は重い」

甲、そのブレスレットを外すと個性の識別できないって言っていたよね、なんで外しているのさ。

「私のゲートから逃げられるとでも？」

黒霧、普段の冷静で紳士的なおまえは何処に行ったんだよ。

「逃げんなおまえ!!」

「我のお気に入りの食器を壊した罪は重いぞ!」

「うわあ〜〜お」

俺は暴れて店内を飛び回る『ギャオス』からそつと視線を外し、続いてトツティ君とトルテ君と共に店の外へ出た。

「私が出来た!! おや、今日は店が随分と騒がしいようだが、どうしたのかね?」

あ、うちの常連さんが来た、でも今日は駄目なんだよね。

「オールマイト、今日は臨時閉店です」

「そうなのか?」

「はい」

俺がそう答えてそつとドアを開けると、噂のナンバーワンはそつと中を見た後に、店の隣にある地下への階段を指差す。

「こつちが早めにやるなんてことは?」

「どうでしょう?」

「そうかあ。楽しみにしていたんだが」

ハハハと二人で笑い、その後に深く俺達はため息をついた。

弔がやっている店は、正式には『ラ・エンテル』って言う。名前からフランス料理って思う人が多いんだけど、実際には『街の食堂屋さん』が近い。

その日に仕入れた食材を使って、弔自身が美味しいと思った料理を出す。メニューはあるけど、誰もがメニューじゃなく弔シェフのお勧めを頼むから、あつてないようなものだけだ。

で、その店の隣には地下への階段があつて、そっちにはバーがある。

黒霧が五年ほどかけて各地のバーを巡って頑張つて修行して、色々なカクテルを作れるようになったから出した店だ。

バーの名前は、『ジェミニ』。黒霧以外でも、俺達が手伝つたりしているのは弔の店と

同じなただけだね。

未成年が店員しているから、警察とかヒーローとか来たことあったけど、あの時は大変だったなあ。

弔の過去とか黒霧の過去とか、感のいい人は察してそうだけど、深く探りを入れてこなかったのは幸運だったな。

後ろでコナンとギルが色々やっていたことは、俺も知っているけど、それだけで潜り抜けられるピンチじゃなかったし。

「ハハハハハ、なるほど。確かに摘み食いは罪だな」

普通は20時くらいからの『ジエミニ』は、今日は18時からの営業となっています。理由、聞くなよ、解るだろ？

「あのチキンめ」

「ここら、死柄木少年。そんな言い方はやめたまえ。おかげで私は、こうして」

と、オールマイルトがテーブルの上に置かれたポークソテーの乗った皿と、淡いブルーの液体の入ったグラスを持ち上げる。

「君と黒霧氏の料理とカクテルが楽しめている」

「上があんな惨状じゃなければ、やらないからな」

「解っているさ。君の信念は、料理はお酒で誤魔化さないだったな。確かに上手いが、ア

ルコールが欲しい人もいるものさ」

「そんなもんか」

弔はいまいち、解らないって顔しているな。

まあ、酒を飲んだことないから、解らないか。料理と一緒に出すことは、弔が反対しているのでやってない。というより、未成年のシェフが作っている料理に、お酒を出すとなるとまた警察とかがうるさいから、できないってほうが大きいか。

お酒を出さないから見逃して、って意味もあるけど。

「つていうか、いいのかよ、ナンバーワン・ヒーロー。酒なんて飲んで」

「私は大人だ。それに酒が入ったくらいで、ヒーロー活動に支障が出るようなことはない。飲み過ぎもないからな」

自信満々に言うオールタイムだが、俺と黒霧は知っている。

最初の頃、黒霧のカクテルのうまさに立てないほど泥酔した、どつかのナンバーワンがいたってことを。

「後で監視カメラを見てもいいか？」

「………ごめんなさい」

うわあ〜、ナンバーワンが頭を下げたよ。監視カメラなんてないのに、そんな口先だけで騙されているのかよ、ナンバーワン。

「と、とにかくだ。上手い飯と上手い酒、それは人生を豊かにする、と昔の人は言っていたぞ」

「うまい飯は納得だな。俺もまだまだ作れない料理のほうが多い。もつと腕を磨かないと」

「え、まだ上を目指すの？」

思わず洗い物をしながら聞いていた俺は、驚いて弔の顔を見た。

「三ツ星とか有名店なんかには、俺は料理で負けたくない」

「あ、そう」

いや弔、なんでそこで背中に炎を背負っているみたいに燃えているのさ。何があったの、お前に。

「昔、何処かの馬鹿が『え、卵焼きも作れないの』と言っていたのは、私の記憶違いであつたか？」

「バ一口、そのまえに『料理できなきや、人間じゃない』って煽った奴がいただろうが」「はっはっはっは、誰だそんなひどい奴」

俺が大笑いで手を振ってみると、全員が指さして叫んできた。

「おまえだよ!!」

「あ、すみません」

昔のことなんて忘れたわ!!

ある街のある場所に、変な店が二つあるって噂話。

個性で人じゃない外見をした存在がいる中でも、異質のような姿形をした店員がいる場所は、多くの人の噂になった。

血色の悪そうなシェフがいて、絶対に忘れないような店員がいて、そこで出される料理は千変万化、世界中の色と味がそこに集められたと言われている。

その店の隣には夜限定のバーがあつて、闇のようなバーテンダーが出すカクテルは、魂の底にまで響くと評判になっていた。

その二つの店は同じ場所にありながら、時間と共にまったく違う顔を見せている。

美味しい飯と、美味しいお酒がそこにはある。普段の日常に疲れたなら、楽しい時間が欲しいならば、どうぞここへ。

「……………なあ、一郎、何してるんだ？」

「ネットの情報にさ、なんだか評判の店って書いてあるから探してるんだけど、中々、見つからなくてさ」

「なるほど、なるほど。ここはいい店のようですね、是非、敵情視察に行きましようか」
「俺も食べてみたくなつたな。何処なんだ？」

「うん、なんでか検索かけると『うち』が出てくるんだけど」

どうして、なんだろうねと振り返って弔と黒霧を見ると、二人は呆れた顔で見ていた。

「おまえ、機械音痴だったか？」

「まったく貴方は、どうしてそう平凡なところでミスをするんですか」

「いやだってさ」

その日、朝方までそんなことで俺と弔、黒霧はワイワイと騒いでいたのです。

「知らぬが花か、こちらの花を愛でる趣味は我にはないな」

「バー口、俺にだつてないさ」

遠くでギルとコナンが、そんなことを言っていたけど。

黙っていれば美形です、黙っていれば

近いからこそ、解らないことは世の中にはある。普段から当たり前のようにあるから、大切だつてことに気づかない。

そういうことつてあるよね。

どうも、田中・一郎です。現在朝の六時です、目が覚めました。もう条件反射のように体を起こして、気がついたら目覚ましを止めていました。

うん、身にしみた軍人生活つて、何度も転生しても抜けないんだよね。俺、元帥までなつたから、軍隊生活がかなり長かつたんだ。

もう一度、寝るか。

寝れたら苦労しないつて。

仕方ないので起きて廊下を歩いて、階段を降りる。俺達の家つて実は五階建てのビルにあります。一階部分と地下が店で、他は住居的な何か。

時々、爆発したり怪しい匂いがしたりするけど、住居。本当に俺の同居人つてマッドがつく科学者とか技術者しかいないんじゃないかな。

あ、弔と黒霧はまともだ。あの二人はすごいまともだ。俺の転生特典で来た連中と比べると、すごい普通の連中なんだよな。

「……………」

普通だよな、俺、自信がなくなってきたよ。なんだろう、なんでこいつは卵を見つめたまま、微動だにしないのかな。

「……………」今日はスクランブルエッグだな」

「うおい！」

フツと笑った弔に、俺は思わずツツコミを入れてしまった。いや、俺は悪くない。キッチンで光を浴びえて、卵を持っていたこいつが悪いんだ。

あつぶねえ、なんか見た目は美形だから、どっかの芸能人って思うところだった。

「目玉焼きの方がいいのか？」

「いや、そこは任せるけど。なんで見つめてたのさ？」

「卵の声を聞いていた」

はい？

え、今こいつ、何を言ったのかな？ え、真顔、真顔ですぞ皆様。冗談抜き我真面目百パーセントで、言い切りやがりましたよ。

「俺は今、卵の声を聞いていた。こいつがどんな料理になりたいか、聞いていただけだ」

「あ、そう」

「コーヒーでいいか？」

「もちろよ」

反射的に答えると、すぐに俺の前にコーヒーカップが。うん、いい香りだ。

「あれ、何時の間に？」

「さつき淹れておいた」

「さようで」

俺はコーヒーを口に運びながら、巾の背中を見つめる。うん、こいつのスーパーチート染みた料理スキル、そこから派生して未来予知を手に入れたんじゃないかな？

料理限定の。

いやだって、俺がコーヒー頼むってどうして解るのさ。昨日はココアを頼んだし、その前は水だったから。

「おまえの考えくらい読めるさ」

「え？ いや、それは、あれか？」

「あれだな」

え、どれ。どれのことだ。親友として同居人として、家族としてはこいつの場合ないだろうから。

「あ、ライク的な?」

「ラブ的だな」

俺は右手に個性で出現させた艦娘の大和の艤装を握り締めていた!

「弔?! 俺は普通に女が好きだぞ!」

「俺もそうだ…….ばあか」

てめえ、そうやって振り返ってにやりと笑う弔は、すっごいいい絵になっていて、ちよつと悔しかったりする。

いきなりだけど、俺の個性は鎮守府。そこにいるのは艦娘はもちろん、妖精もいる。でも、絶対にいるはずの大淀、間宮、明石はいない。俺の鎮守府は特殊だったから、あの三人の艦娘は着任したくないって拒否されたから。

その変わり、珍獣みたいな二人と、もつと規格外な化け物がいるわけなんだけど、それはおいしい。

朝食が終わった俺は、店の掃除を始めた。

弔は厨房で鼻歌を歌いながら仕込みを最中だ。最初はディナーだけだったこの店も、今では小さいながらもランチをしている。

評判いいらしいけど、俺としては信じられない気持で一杯だ。

「ふむ、いい音色だ」

だつてさ、ランチ時に店の片隅でギター弾いている奴がいるんだぜ。

「弔、今度はディナーで歌わないか？」

「止めておく。俺の歌は人に聞かせるものじゃない」

「もつたいないな」

笑いながらギターを鳴らすのは、白くて細い指。うん、本当に解らないよな、こんな奴がギターを奏でてている姿を目当てに、この店に来るやつもいるって言うんだからさ。

「フフフ、弔と私の合唱が待ち遠しいな」

「俺は料理だけがしたいんだよ、アインズ」

「そう言うな」

丁寧にならされているのに、このガイコツは諦めていないらしい。

はい、俺の転生特典のおまけその三、のようなもの。ギルとコナンに続いて俺が鎮守府時代に拾ったガイコツ。

アインズ・ウール・ゴウンって魔王みたいな奴なんだけど、何故かこいつは普段はギター片手に若大将スタイルで歌唱している。

なんでか、最初に会った時からずつとなんだよな。

「どうしたマスター殿？」

「いや、マスターって呼ぶなよ。この店のマスターは弔なんだから」

「は？」

「え？」

あれ、俺、間違ったこと言ったかな？ え、だって料理を作っているのって弔じゃないか。俺は手伝ったことないし、ウェイターの真似ごとしかしてないよな。

「ふむ、私としてはサーヴァントがそう呼んでいたから、マスターと呼ぶ癖がっただけなんだが」

「俺はこの店のオーナーが一郎だから、マスターって呼ぶんだと思っていた」

「え？ あれ、俺がオーナー？」

あれえ、弔が真面目に頷いている。え、俺の名義だったの？ え、まっさかあ。俺は書類を書いてないぜ。

「コナンがやっていた」

「あの名探偵！」

思わず拳を握って立ち上がった俺だが、よくよく思い出してみれば鎮守府時代に書類仕事はあいつに丸投げ、俺はサインだけしていたから、俺のサインや筆跡を真似るなんてできて当然。

「悪いのはマスター殿だったな。昔の悪癖が今の自分の首を絞める」

「ク、昔の俺め。呪ってやる」

アインズの正論に、俺はギョツと拳を握った。

「は?! 出来たぞ! 『呪われよ! 世界中を呪ってやろう! 過去の俺よ呪い殺されるがいい!』だ!」

「………昼間のランチで歌う曲じゃないな」

「呶、そこは怒っていいと思うぞ」

「いやアインズが嬉しそうだからな」

「おまえ、なんでそんなに優しくして穏やかな性格になったんだよ」

最初の頃、痲癩持ちだったじゃないか。

「人は変わるんだ、一郎」

「あ、そうだね、はい」

穏やかに笑う弔に、何があつたかは聞かない。俺がほとんど知っているし、もつと無茶苦茶な状況があつたのも知っているから。

超位魔法と次元回廊と崩壊と乖離剣の全力解放つて、ぶつかると世界くらい軽く消し飛ばすんだぜ、知ってた？

「はあああああ」

時間は少しだけ進んで、ランチから少し経つたくらい。今日も商売繁盛、お客様大勢。そんなわけない、ありえないくらいに入ることはないけど、誰も来ないって日はないのが、この店のおかしいところ。

だってウェイターがプレデターとエイリアンと、時々の俺と真つ黒な黒霧つて店だ

よ。普通に考えて誰も入りたくないでしょう、そんな中に来ると人の感性を疑うね。

時々、店が忙しい時は全員が裏方に回って、表が艦娘の大和と吹雪に、電とかになるけど。エンタープライズやイオナやコンゴウとか入れて頑張っているけど。

あ、アズレンやアルペジオも俺の鎮守府に配属になったことあるから、そっちの艦娘もいるんだよ。それだけじゃないけど。

その時は店が異常な盛り上がりになるから、できれば使いたくないけどさ。

とまあ、そんなことは置いといて。

「なんで溜息なんですか、オールマイト?」

「ああ、すまないね。実は来年から雄英の教師をすることになってね」

「え、ヒーロー引退?」

オールマイトが現場を離れるなんて、どんな心境の変化なんだろ。一生、現場一筋って感じなのに。

「いや、ヒーローは続けるが、現場をよく知る教師が入ったほうが、いずれヒーローとして世の中に出る生徒達の励みになるとか、そういう話があつて断れなかつたんだよ」

「ああ、なるほど」

へえ〜世の中は色々と考えているんだ。なるほどなるほど。

今の世界はヒーローとヴィランの二極化らしいし。

「……まあ、そこに不確定勢力が入ってきたんだが、大丈夫だろう」
「まあ、暴れるつもりありませんから」

オールマイトと弔が何か呟いているけど、なんだろう。まあ、いいか。俺に話が来ないってことは、俺には関係ないだろうし。

「個人で世界の総戦力を超えるか。夢幻だと信じたい」

「まあ、あいつですから」

「本当に頼むぞ、死柄木少年」

「あいつに何かない限りは全員が動くことはないですよ」

あれれ々々なんだか危ない話してないかな？ ちよつと聞き取れないところもあつたけど、全員が動くとか言っていない？

止めてくれよ、俺の鎮守府が最大稼働なんしたら、ヴィランとヒーローの両方から狙われるって。

「で、オールマイトは何をため息ついてるんですか？」

「あ、ああすまないね、田中少年。実は私に教師が出来るか不安があつてね」

「見事に世界に教えを振りまいているのにな？」

グサつと何かオールマイトに突き刺さったような気がした。

あれ、俺は地雷を踏み抜いたかな？

「お、教えを振りまいているかね？」

「いやだつてナンバーワンでしょ？ その言葉の一つ一つが教えみたいに広まっているじゃないですか。それを見本にしてヒーローに憧れた子供たちが育ってるんだから、もう立派な教師じゃないですか？」

「ああ、確かに」

お、弔の同意してくれた。そうだよな、誰もがオールマイトに憧れてヒーローになろうと頑張っているんだからさ。これはもう、知らないうちに誰かを教えているようなものじゃないか。

「大丈夫ですつて！ 何時もみたいにならばいいですから」

「何時もみたいにかね？」

「はい！ 『私が来た』つて！」

カツコイイよな。あのセリフを最初に聞いた時はビビつときたよ。誰もが悲しんでいる中、笑顔で駆け付けるヒーロー。

うん、俺の知っているヒーローたちと同じだった。嵐のように現れて嵐のように去っていく。見返りを求めない、戦いの時だけ現われて、傷だらけになりながらも戦いを収めて去っていくなんて、すごいヒーローらしいヒーローだったからな。

「そうか。そうだな。ありがとう、田中少年。私はやつてみるよ」

「その意気ですよ、オールマイト」

ちよつとだけ背筋が伸びた彼に、俺は精一杯に笑つて見せた。

ニカつて笑うオールマイト、普段から気づかなかつたけど、この人つてやつぱり美形だよな。ドラマになったら二枚目俳優が演じられるくらいに、美形だったんだよな。

ははは、三枚目は俺だけか。

俺はそつと店の隅で涙をぬぐつたのでした。

ランチが終わつて店を閉めた後、俺は弔と一緒に買い出しに出ている。

「牛肉が切れた」

「はい?」

「買い物に行くぞ」

「おっさ」

なんて言葉で連れ出されまして、商店街へと歩いていくわけなんですけど。

うん、解っていた。解っていたんだけど、吊って黙って歩いていると美形なんだよね。朝のことで再確認したけど、こいつって黙って歩いていると、芸能人クラスの美形なんだよ。

色は白いし、シエフやっているから髪型にも気を使っているし、ちよつと目つきが悪いけど、そこは『鋭くて素敵』って言われているからさ。

「なんだ？」

「ちよつと俺のコンプレックスを味わっているだけ」

「坊主にするとか？」

「いや！　そこが俺のコンプレックスじゃないし！」

なんでだよ!?　なんで俺が坊主になるんだよ！　せめて七三くらいに収めてくれよ！

「田中・一郎って坊主じゃないのか？」

「どこのアイデンティティですかねそれ?!　世界中の田中・一郎に謝れ！」

「申し訳ない」

「直球で返すなよおまえ！　なんで真っ直ぐに土下座に行くかな?!」

「おまえが『人間の謝意を示すには土下座が一番』だつて言っていたからな」

お、俺かあ。昔の俺はもう弔に常識を教えるために、無茶苦茶やったからな。あの例の先生の影響か、『俺偉い、俺が最高』的な中二がかかる病気な時期もあったから、もう必死でしたよ。

「冗談だ」

「頼むから真顔で冗談を言うな、頼むから」

ニカつて笑う弔に、俺は全身で脱力した。

はあ、確かに黙つていれば美形なんだけど、話してみると親しみやすい奴なんだよな。

「あ、あの」

「あ?」

「何でもないです」

初対面の人以外には。あのさ、女子高生が話しかけてきたんだから、もうちよつとフレンドリーに対応してあげて。

「善処する」

「どつから持つてきた、そのセリフ。なんでおまえ、敬礼しながら言った?」

「ギルがこう言えば一郎が喜ぶって言っていたからな」

「やっぱりおまえか愉悦王!!!」

俺は力の限り叫んだのでした。

朱に交わつたら赤くなる前に真赤だった件

俺は今、信じられないものを見ていた。

どうしてだと叫びたくても、上手く言葉が出てこない。

なんで、どうして、何故だ。言葉が俺の頭の中をぐるぐると回っている。こんなことあるわけがない。

だって、そうだろ？

「弔、お前」

俺の目の前で、弔が『何か』を崩壊させていた。飛び散った何かと、真つ赤になったあいつの両手が、俺には震えているように見えた。

「一郎、俺は。俺には無理だった」

「何言ってるんだよ、しつかりしろよ」

「やはり俺には無理だったんだ。出来なかった」

嘆くように両手を見つめる弔は、そのまま床に膝をついた。

「できるさー！ おまえには出来る！」

こいつ、やっぱり先生の影響が残っていたのか。今まで普通に過ごしていたのに、今になって衝動が抑えきれなかったのか？

違う、まだ間に合う！ 俺が抑えてやれば間に合うはずだ！ 何があつたか知らないけど、間に合わせる！！

俺には頼りになる仲間がいるから！

「コナン！ 弔が！」

「ああ、やっぱり無理だったんだな」

え、なんだよそれ、おまえまで諦めた目で見ろなよ。

「ギル！！」

「道化はしよせん、道化か。おまえの努力、我が見届けたぞ。安心して逝くがよい」

な、なんだって?! 最初は傲慢だったけど、今は賢王みたいに穏やかな性格になったギルが！ 愉悦に走って俺を虐めるけど！ 絶対に俺以外を見捨てないギルが！

あ、ヤバい。俺が泣きたくなってきた。

「二郎、俺は……俺は！！」

違う！ 今は俺のことより弔だ！ あいつを止めないと！

あれ？

「俺はできないのか？」

あれえくくく？ 変だな、なんかおかしいことになってないかな？

うん、弔の両手は赤い。赤いけど、あれって血じゃないのかな？

「俺は諦めるしかないのか？」

え、でも弔の能力って人間を崩壊させたら、血だけが残る、とかないよな。全部、消えるはずじゃなかったか？

「でも俺はまだ」

「よせ弔！ おまえは頑張った！ 頑張ったんだ!!!」

あ、コナンが叫んで弔を止めている。あれ、弔が何かダンボールから出したけど、あれって。

「よせ！ 弔よ、おまえは十分に努力した。再び身を染めることはあるまい。その努力、この英雄王が認めてやろう」

はい？ なんだかギルが優しく語っているけど、弔の手は止まってない。なんかよく見たことある赤い物体を取り出して。

あれれえくく俺がおかしいのかな？

「ダメなんだ、コナン、ギル。俺は諦めたくない。だから」

「よせえええ!!!」

「このたわけがあああ!!!」

そして、俺の目の前でグシャって音もせず、トマトが崩れた、と。

「で？」

「俺の能力は『崩壊』だ」

うん、それは知ってる。床一面に散乱したトマトの残骸とか、トマトケチャップになりかけた物体とかを掃除しながら、俺は半眼で弔を見つめていた。

「知っている。それで、何してどうしてそうなった？」

「物体を崩したり壊したりできるなら」

モツプをかけていた弔は、そこで顔を上げて汗をぬぐった。本当に清々しいほどの笑顔が、やけに頭に来るんだけど、俺は悪くないよね。

「崩壊を途中で止めたら、みじん切りになるんじゃないかって」

「・・・・・・・・・・」

はい、何だつて？ え、なに、そんな理由でこんな惨状になったわけ？

「それだけじゃない、自家製のトマトケチャップとか、あるいは生搾りのジュースができたりしないかって」

「あ、うん、解った。弔、おまえは疲れてるんだよ。最近、冬の新作料理ができなくて悩んでたんだよな」

「一郎、俺はまだやれる気がする。努力はいずれ報われる、必死にやれば人間はなんだってできるはずなんだ」

うお?! なんでこいつはそんな言葉を真顔で言えるんだよ。なんだよ、どつかの熱血漫画の主人公みたいじゃないか。

え、こいつってこんな性格だったっけ？

違う、弔はもつと違う性格だったはずだけど、何があつたのさ。

「俺はエルの魔法に負けない」

「あいつが原因か?!」

あの女顔の馬鹿は何したのさ?!

エルネスティってのは、俺の『手のひら鎮守府』のおまけその四かなって奴で、技術チートの片割れにして、魔法の天才。機械関係もお手の物なんで、ハッカーっぽいこと

もしている。

エルともう一人の技術チート二人がいれば、地球中のコンピュータにハッキングして内部データを見放題、書き返し放題なんだけど。

「呼びまして？」

「出たな元凶!!」

ピョココって音がしそうな勢いで、ドアから顔を出した馬鹿にモップを突き付ける。

「酷いですよ、僕が何をしたって言うんですか？」

「何をしたって……何してんの？」

怒ろうと思った俺の視界に、エルの全身が入ってきた。

猫耳メイド服を着た銀髪の少年。繰り返しますが、見た目は完全に美少女です、街を歩けば大抵の人が振り返る美少女ですが。

性別、男。

「出来なかつたんですか、弔クン？」

「ク」

うわあ、凄いいい笑顔でエルが笑ってる。

弔、そんなに悔しがるなよ。こいつの魔法が繊細なコントロールできるの、皆知っているんだから。

威力と多様性重視のアインズに対して、エルの魔法って繊細かつ精密、一点突破型が多いからな。

最大威力だとどっちもどちだけど。

「フフフフ、出来なかつたんですね？ そうなんですね?!」

「あ、ああ、できなかつたさ」

悔しがるなよ、弔。この馬鹿エルは、ノリにノツてる時は、こよう意地悪に見えるけど、基本はいい子だから。

悪のりすると、ギルより性質が悪いけど。

「一郎、俺は賭けをした」

「・・・はい？」

「ええ、賭けをしました」

「なんだって？」

え、なに、何をしたの、この二人。俺の知らないところで、何をやろうとしているの？

待って、止めて。後になって『あの大事件が』とか言われる身にもなつて、ねえまた警察に呼ばれて事情を説明されて『何とかして』と泣きつかれるの、俺はもう嫌だよ。

オールマイトにも土下座させる寸前とか、もう二度といやなんですよ。

「さて、弔クン、出来なかった君に罰ゲームです」

「解った」

「潔いですね。では……このボクとおそろいの猫耳メイド服を着て店の宣伝に行きましよう!!」

「ちよつと待とうかエル!! 弔に何を着せるって?!

待て待て待て! それはいろんな方面から怒られる。ただでさえ、色々とやらかしているんだから!」

そんなことしたら俺はまた呼び出しくらって!

「ちなみに、ソープも道連れにしました」

「やつほー」

「待てやこらあああ!!!」

何普通に猫耳メイド服を着てるんだ、おまえ!

あ、こいつはレディオス・ソープって言って、エルと同じおまけで技術チートのもう一人。栗色の髪を三つ編みにしている、男性。

もう一度だけ言うぞ、男性だ。見た目、完全に美少女。男物を着ていても、『男装ですか』って言われるけど、真正正銘の男。

sondでもって、ギルが嫌わない『神様』。本当の名前は『天照』なんだけど、ソープつ

て名乗っている変わり者。

はい、紹介は終わり！

「おまえら三人で何してんだよ!？」

「店の宣伝に！」

凄いいい笑顔のエルと。

「久しぶりにハッチャケたくて」

微笑するソーブと。

「行ってくる」

何かを振り切った弔の三人は、こうして街を歩いてきたのでした。

後日、俺は警察とオールマイトのダブルに呼び出しを食らいました。

俺が悪いわけじゃない。

呼び出し、事情聴取、お説教の三連発を貰って、一郎は帰還しました！

あいつらどっかに閉じ込めておくかな。いや、エルとソープは脱出するよな、アインズかギルに頼んで何か。あ、ダメだ。二人とも『楽しければそれでいい』とかいいそう
だ。

いつそのこと、俺の『手のひら鎮守府』に閉じ込めるか。いや、まった艦娘達が飛び出してきそうだ。

「お疲れのようですね」

「黒霧、頼むからおまえはそのままでいてくれ。おまえだけが俺の最後の良心だ」

「何があったか深くは聞かないことにしておきます」

ああ、察してくれるのか。やっぱり、黒霧はいいやつだ。見た目、完全に宇宙怪獣だ
けど。

「ム、何やら不審な考えが」

「誰だ、そんな奴は」

あつぶねええええ!! なんでこいつまで俺の心を読むのさ?! え、弔だけじゃない
の、俺の考えって顔に出やすいの？

「そうですか。ちなみに、私は宇宙怪獣に例えると何ですかね？」

「え、そりや・・・あ」

「ほう？」

「・・・」

「そりや、なんですか、一郎さん？」

ぐ、圧力が凄い。なんだか、すつごい睨まれているけど、ここで退いたら俺は確実に負ける。負けて何があるか解らないけど、負けたら逃げられない気がしてきた。

気の迷いだろうけど！

「ぜ、ゼットン」

「・・・許しましょう。あの最強の怪獣ならば、本望です」

それでいいのか黒霧！

「光栄です。私がゼットンに似ているなんて。そうですか、私はゼットンですか。ワープはできますが、火球はできません。ギルかアインズに相談すれば、私でも炎が出せるでしょうか」

あれ、何時になく饒舌なんだけど、何があったの。え、黒霧って怪獣好きだったわけ？

「ええ、私はギル達に見せられた怪獣大戦争を、もう三百回は見えています」

「あ、そうですか」

「いい映画ですね」

「ははははは、そうですね。そうだろうね。よし、俺は黙ってしよう。俺は何も言わないし、言えない。」

「あれが実際の出来事だったなんて、言いたくない。ゼットンにケンカを売ったエルが原因で、宇宙怪獣と激突することになったなんて。」

「言えない、あ後にウルトラの方々には凄くお説教貰ったなんて、俺には口が裂けても言えない。」

「ム、何やら楽しい気配が」

「気の所為だ、黒霧。頼むからそっち側に踏み込まないでくれ」

「しかし」

「しかし?」

「私は『愉悦部』に入ったので」

「おまえまでそっち側に行くなよ! 本当にやめてくれよ! 俺だけで突っ込み切れなんだよ!!」

「なんでおまえはそこに入ったのさ?! ギルか! ギルが暗躍したのか?! あの英雄王!! 普段は表側でやらかす癖に、裏側からジワジワを覚えやがって!」

「いえ、私が入ったのはソープの勧めですが」

瞬間、俺はゆっくりと崩れ落ちた。あいつだけは、どんなにふざけて馬鹿やっても、愉悦に塗れないって思ったのに。

その日、最後の防壁が崩れ落ちたのを俺は知ったのでした。

日が今日も落ちた。夕日が沈んだ後の街は、ネオンの輝きが満ちてきたのだけれど、俺はもう背中に闇を背負っていた。

「やった」

「なんですと?!」

「素晴らしい!」

「やったじゃないか!!」

なんだか後ろでエルとギルにコナンが騒いでいるけど、俺はもう振り返れない。最初に甲の小さい声があった気がするけど、もうどうでもいいや。

「ごめんって、ちよつと悪のりしたくなっただけなんだから」

「ソープだけはソープだけはそっちに行かないって」

「だから、ごめんって。黒霧の愉悦は他の人に向いているから、大丈夫だよ」

「誰だよ？」

は、そんな気休めなんて俺は信じないからな。

「『先生』に」

え、あの人に。なんだかオールマイトを追い詰めて、けがさせようとしたから、横あいからアインズとギルの全力攻撃ぶつけて、その上に波動砲と超重力砲に侵食魚雷を雨のように降らせて。

さらに追い打ちにコロニーレーザーとベクターキャノンをぶつけて、荷電粒子砲を打ち込んだのに、なんでか生きていたあの人に？

光子魚雷と反応弾頭も使って、縮退砲とバスターランチャーも使ったのに、なんで生きているのかな？

後始末が凄いい金額になったけど、オールマイトが無傷だったからって、目をつぶってもらったんだよな。

「うん、なんだかね、一郎に『何かした』からって、毎日のようにワープゲートを繋げて何かやっているよ」

「へえ〜〜」

「ご、ご愁傷様。今度、会ったら羊羹でも差し入れてあげようか。今じゃ会心しているって話だし。」

「あいつが会心？　ないよ、今だって一郎の個性を狙っているんだからさ」

「ん、ソープ、何か言ったか？」

「いやなんでもないよ」

変な奴、なんでそんなに笑っているかな。

「一郎、俺はできたぞ」

「何が？」

「『崩壊』によるみじん切り」

え？

俺の目の前で、弔が持っていた玉ねぎとニンジンがみじん切りになって、皿に載せられたのでした。

正直、何処へ向かっているのか不安です

皆さま、年末年始、いかがお過ごしでしょうか？

どうも田中・一郎です。

こちらはね、休みなんてないんですよ、解ります？

労働基準法ってなんだろうね、ないんだろうね。いやあく〜ヒーローって職業がある世界で、労働基準法ってないんだよね。

毎日毎日、ヴィランとヒーローは労働基準法などない日々を過ごしているのは、きつと世界平和が憎らしいからだ。

そうに違いはない！

「一郎、お疲れ様。明日も頑張ろうな」

「.....」

きつと世界平和なんてできないんだ。不可能だ。ギルもよく言っていた『フェイカー』の親父さんが求めた、恒久平和なんてないんだ。

でも！ ないと諦めて生きるより！ あると信じて前のめりに倒れる！ それこそ

が男！ いや漢だ！！

「二郎、そうか、そうだな。俺も頑張らないとな。まだまだ子供たちの笑顔のためにクリスマスケーキを作らないとな」

クリスマスマス！ そんな単語は俺の辞書にはない！ 俺達には休みなんてない、休みなんて情弱な精神を持って社畜なんてできない！

軍人に休みはないんだ！

「今年はクリスマスマスが終わってしまったから、次は御節だな。正月も子供たちが笑顔で過ごすように頑張ろうな」

くくくくく、俺を本気にさせたな、世界よ。いいだろう、我が鎮守府の総戦力がどれほどのものか、見せてやろう。

神よ！ 呪うなら呪うがいい！ 俺を世界に落としたのは貴様なのだからなあ！！

「やる気十分だな、一郎。俺も頑張らないと」

ふふふふふふ！！

「なあ、ギル」

「なんだ、コナン」

「あいつらつて通じ合っていると思うか？」

「ふん、名探偵ともあろう者が、馬鹿なことを言うな。何時もの名推理はどうした？」

「だよなあ。一郎の馬鹿は何時ものことだが、弔はなんであんなに晴れやかな顔で子供の笑顔なんて言ってるんだ？」

「至宝と我が教え込んだ」

「元凶はやつぱりてめえかよ」

ふはははははははは!!

世界よ、俺を恐れるがいい!

「さあ年も頑張ろう」

「平和だなあ」

「そうだな。私の愉悦は、今年も絶好調だ」

改めまして、すみません、田中・一郎です。

飲食店やってるから、年末年始は休みなし。クリスマス一週間前から働きっぱなしだったんだよ。

理解して、休みなしでハイテンションだったんだから。ね、ほら誰だつてナチュラル・ハイになったら、色々たやらかすじゃん。

みんなも忘年会でやらかした経験くらいあるでしょう？

そう、そんな感じ。

「なるほど。忘年会で酔い潰れたり、絡んだりしたのと同じってことだね」

「そうだよ、スープ。頼むからそれ以上は止めてくれ」

「解ったから、正直に話してごらん？　なんでボクとエルの二人が全力で情報操作しなくちやいけないことになったのか？」

「ごめんなさい」

俺は素直に土下座した。

なんか知らないうちに鎮守府最大稼働したらしい。警報が鳴って艦娘達がフル装備で出撃して、さらにエイリアン部隊とプレデター部隊まで展開したから、もう世界が凄いいことになりかけたとか。

「はい！　土下座はいいから教えてください！」

あ、うん、エルもお疲れ様。いや、本当にごめんなさい。なんでやったか覚えてない

んです。本当に。

「せっかく、新しいギミックを組みんだ『変形可能な移動基地型鎮守府』だったのに、試せなかったじゃないですか！」

「うん、エルは黙ろうか」

「イエッサー！」

怖?! うわあ、久し振りに見たよ、冷笑するソープ。さすが神様、その迫力が凄い頼もしくもあり、悲しくもあり。

「で？」

「はい、すみません」

辛くあるんですよ、本当に。

「今回だけだからね。君がやらかして、『地球崩壊』なんて見たくないからさ」

「ごめん、本当に助かったよ、ソープ。でもさ、なんで俺ってそんなことしたのか、記憶にないんだよ」

何でだったかな。あれ、かなり理不尽なことがあって、それに怒って拳を振り上げたのは覚えているんだけど、何だっけ？

「年末年始に休みがなかったからじゃないの？」

「いや、だってそれ軍人時代には当たり前だったから」

「え?」

「はい?」

「……あれ?」

あれえ? なんでソープとエルが固まるかな。いやだって、俺って休んだ記憶がないんだけど。何時も執務室にいて、コナンとギルに挟まれて執務していた気がするし。

「労働基準法って知っている?」

「え? 軍人って適応外じゃないの?」

「……エル、コナンを呼んできた方がいいね」

「そうですね。一郎さん、一応、軍人も適応内ですよ」

「え?」

一郎ショック! 今になって知った驚愕の事実! え、休んでよかったの、だって深海棲艦が世界を脅かしているから、休んでいる時間なんてないって話じゃなかったの? 「というわけだよ、コナン」

「はあ。マスターが怒ったのって、あれだろ? クリスマスのカップルへの嫉妬じゃないか?」

「ええ〜今更?」

いや、ソープさん、なんでそこで呆れているのかな?

思い出したよ、そうか、そうなんだ。彼女いない俺の前でよくも、あんなにいちやいちやと。

いや待った、そんなことじゃなかった気がする。もつとこう、なんだか心の底から叫びたい気持ちになった、何かが。

「で、その嫉妬が溜まりにたまった時に、弔に言われたんだよ」

「へえ〜彼が、なんて言ったのさ？」

『俺がいるじゃないか、一郎』って」

あ、そつか、そうだったんだ。俺はその言葉で精神的な何かがブチつと逝つたんだ。俺は女の子が好きであつて、同性が好きじゃないのを知っているのに、あんなこと言うんだもんな。

「で、本当にところは？」

「ああ、弔はな、『冗談だ。俺が結婚する時の笑い話にしてくれ』とか言つたんだよ」

「え？ 結婚するの、彼？」

「本当ですか?!」

「いつか、な」

「あ〜〜〜」

あいつ！ 絶対に俺をからかうことを覚えやがったな！ 後であいつを女の子がい

る場所に連れ出して置き去りにしてやる！

「二郎って、その時の記憶がないの？」

「飛んだんだろ。まったく、便利な脳細胞をしているよ、あいつはさ」

なんだろう、後ろでコナンが呆れた顔しているけど。ソープとエルがとても暖かい目をしているけど、何があつたんだ？

冗談だつて教えられて、ホッと安心した一郎です。

弔め、なんだかあいつは最近ギルに染まつてないか？ 俺を虐めて楽しんでいるような気がする。

イキイキ楽しんでいるあいつに、ちよつと『良かった』と思うこともあるけど、出来

ればもうちよっと抑えてほしいかな。

「二郎、俺は考えたんだ」

「あ、はい」

そんなことを思いつつ、俺は今日も年末年始関係ない、弔の店の掃除をしている。今日のランチは問題なく終わり。

終わり・・・と思おうか。最近、よく笑うようになった弔目当ての女性客が増えたな、とか。ヒーロー関係者がよく来るようになって、『ヒーローにならないか』ってスカウトしてくるけど、気にしない気にしない。

主に弔とギルとコナン目当てってのも、気にしない。俺に話を振る人はいないのは、気にしない。

あれ、変だな、目から水が。後で目薬でもさしておこう、目が乾いたら大変だ。はははは、はあ。

で、そんなランチが終わってディナーの仕込みに入った弔が、また食材を持って考えていて。

「俺は思った。俺の能力『崩壊』はレベルアップして、今では食材の崩壊を途中で止められるから、千切りもみじん切りもできる。搾りたてのジュースも完ぺきだ」

あ、うん、そうだね。なんだか毎日の努力の結果、弔の能力は識別だけじゃなくて能

力の伝達とか、作用も自在になったらしい。

まさに崩壊関係は万能。今では手に触れなくても目視で複数の目標を、別々の作用で効果発揮できる。

「だけど、これで満足しているのは、墮落じゃないか？」

「いや、弔、何を言っているのか解らないんだけど？」

「俺は能力を使いこなした。料理において、俺はこれ以上ないスキルを手に入れた」

「え、いや、待って。料理限定？ え、料理だけにそれを使うつもりでいるの？」

「俺は時々、俺の両手には神が宿っているような気がする。料理の神が、俺の両手にいて、俺に囁いている」

「え、はい？」

「なんだか、変な方向に話が行ってないですか、俺の気のせいですか、そうだと誰か言つて。」

「もつと料理を作れ、と。俺の料理で万人を救うべきだ、と」

「ヤバイ宗教ですか、弔くん。止めて、それ以上は駄目だ」

「ああ、解っている、一郎。こんな考えは危険だ。そんな考えを持って料理などしたら、味が劣化する。俺自身の包丁のスキルも落ちてしまう」

いやそっちじゃなくて。神が宿るとか、そんな危ない考えを止めろって言うんだよ。

神様なんて、宿ったら碌なことがない。

「ソープが、『まさに神だね!』と褒めてくれたが」

「リアル神様が何やってんだあいつは?!」

「おいおいおい! 何してくれてんの、あいつ! おまえはリアルに『天照』で日本神話の最高神だろうが! 話を聞く限りはもっと上らしいけど、神様に違いないでしょうが!」

なにを弔を洗脳しているんだよ、あいつ!

「違うんだ、一郎。俺は、そんなことは気にしない。俺は傲慢になつてはいない。俺はごく普通の一般人だ。世界を救うとか、万人を救うなんてことはできない。大丈夫、俺はまだまだ調子に乗ってはいない」

「まだまだだって、いつかはってツツコミ待ちですか、弔くん。いや、あの顔は本気でそう思っているだけだ。」

え、本気でまだまだ調子に乗ってないって思っているだけ、本当に?

「俺が気にしているのは、俺は能力を完全に把握したつもりで、達成感に浸っていたのではないか、ということだ」

「なんだって?」

「俺の能力ならば、分子レベルまで崩壊させられるはずだ。そうだ、出来ないはずがな

い。俺の能力は『崩壊』なのだから」

「え、いや、まあ可能性はあるんだけど、それをしてどうするんだよ?」

俺はそこでこちらを向いた甲の、晴れやかだが何処か歪んだ笑顔を、死んでも忘れなかった。

「崩壊させられるなら、俺は『最高の生クリーム』を作れるはずじゃないか?」

「いや、なんでやねん」

誰か俺に教えてください。

うちの甲はいつたい、何処へ向かおうとしているのでしょうか?

「そうだろう!! 物質を分子レベルまで崩壊させられたら、すべての食材を完璧に混ぜ合わせるができる。そうだ、俺は完璧な黄金比率のクリームが作れるはずだ。クリスマスが終わった後に、この事実に気づいた俺は気が狂うくらいに嘆いた。だってそうだろう! 一郎! もうクリスマスは終わってしまった、終わってしまったんだ!! 完璧

な生クリームが作れるはずだったのに、ケーキの時期を逃して能力を完璧に把握したと喜んでいた俺は！　なんて愚かなんだ！　どうしようもないグズだ！　多くの人の笑顔を、もつと笑顔を増やせたはずなのに、どうしてその可能性ももつと速く辿り着かなかったのか。俺はもう悔やんでも悔やみきれない！」

「え、いや、あのさ、甲」

「なんだ?!」

感情が天元突破しているような彼に、俺は残酷なことを告げなければならない。それによって、甲が崩れ落ちることになっても。

「分子レベルで崩壊したら、それって『食べ物』じゃないんじゃないか？」

「?!」

「その前にさ、崩壊したものを混ぜるってできるのか？」

「……一郎、俺は間違えたようだ」

フツと寂しく笑った甲は、そのまま後ろ向きに倒れたのでした。

「なるほど、死柄木少年が寝込んだのは、そういう理由か」

夕方、久し振りにデイナーを食べに来たオールマイトは、店が閉まっていたので心配になって俺に電話をくれた。

事情を話すと、彼は弔の見舞いを申し出てくれたんだけど、弔からは『俺は調子に乗った自分を戒めているところだ、放っておいてくれ』と言われたので、店のほうで簡単な食事を出した。

作ったの、俺じゃないけど。

「任せてもらおうか!」

歌だけじゃなく、料理もできるナイスなガイコツ魔王。

「デザートはお任せを!」

で、ちつこい銀髪チートが甘いものを。

「今日は特別に、こちらをどうぞ」

飲み物はラスボス系黒い存在が。

「これはこれで、特別なデイナーを味わえて、私としてはラッキーだが」

まあ、アインズとエルと黒霧の、たった一名様へのディナーですから。

「しかし、死柄木少年の努力は認めるが、今回の一件は少し張り切り過ぎた上に思いつめた結果の悪循環ではないかな？」

「俺もそう思うんですけどね。あいつは料理に関しては絶対に譲らないので」

「素晴らしい精神だ、と褒めるべきなのか。もっと自重せよ、と叱るべきなのか」

「まあ、弔は一度でも言い出すと止まりませんから」

「彼も難儀な性格をしているな」

ちよつと呆れたような、けれど褒めるようなオールマイトの言葉に、俺は大きく頷いた。

後日。

「二郎、俺は気づいた。食材を崩壊させた後」

「私のワープゲートを通せば混ざる、と」

「え？」

なんだか清々しい顔で笑う弔と、誇らしげな黒霧と。

めちやくちや旨い生クリームの山がそこにあつた。

彼の終わり、彼の始まり

昔を時々は思い出す。

あの日、家族を崩壊させた時のことを。

一郎に会った時のことを。

『……』が崩れ去って、『死柄木・弔』が始まった日のことを。

「そうか、今年も終わるんだな」

弔は窓から見える朝焼けを眺めながら、そう呟いていた。

人生で最悪の日なんて言葉は、誰もが一度は使ったことがあるだろう。けれど、それが本になってしてしまうことなんて、体験したことがある人は少ない。

人生のどん底、世界中が黒く染まって、誰も信じれないような現実を、どうにか受け入れなくちやいけない。

大人になった今ならどうにか向き合えることを、当時の『・・・』は受け入れきれず街中を走りまわって、そして路地裏で泣いていた。

家族が目の前で崩れた、大切な何かを失った、心にぽっかりと穴が空いたような、それでいて何を失ったか解らない感覚が全身を貫く。

小さな子供、世界を知らない幼子の当時の自分は、ただ泣くだけで何処へ行くか、何とかしないとなんてと打開策を考える頭なんてなくて。

泣いて苦しんで悲しんで、叫んで鳴いて。
顔を上げたら、あいつがいた。

ごく普通の顔、何処にでもいるような子供が、きよとんとしたまま、手を伸ばして来て。
て。

触るなどか叫んだ気がした。でも、あいつは気にした様子もなく触ってきて、触れて

きて、もう誰も傷つたくなって拒絶したのに、あいつは平然と俺に触れていた。

手を握って引つ張ってくれて、暗い路地裏から連れ出してくれた。

個性は無差別に使っているはずなのに、あいつが握っている間は何も崩壊しない。誰かに触れたり、ぶつかったりしても、相手が崩れることはなかった。

「よつし、ここにするか。さて、住む場所は確保」

「廃墟じゃなか」

「おう、廃墟だ。でも屋根があつてドアがあつて壁があるから、大丈夫！」

胸を張って宣言したあいつは、本当に心の底から笑っていた。世間を憎むでもなく、悲しいと叫ぶでもなくだ。

自分と同じ年齢の田中・一郎は、今も昔も変わらずに高らかに笑って自分の前を進んでいる。

五歳児が二人だけの生活。今になって思うと、バカなことしたなって思える生活が、長いこと続いていた。

一郎は毎日、何処かに出かけては食料を仕入れてくる。洋服や日常に使う小物なんかを。

「これ何処から持ってくるんだ？」

「ん、色々なところから。気にすんな、俺は気にしない」

ポーズを決める一郎は、自分で『決まっただぜ』とか小さく呟いているが、まったく決まっていない。五歳児が精一杯に手を伸ばして、埠頭に足をかけた海の男らしい格好をしているが、背伸びしているだけのガキにしか見えない。

「アホらし」

「アホでもなんでも、男つてのは格好つけるもんなんだよ」

「そんなもんか」

「そんなもんだ。さて、食おうぜ」

一郎は何時だつて笑顔で多くを語らない。無視しても、返事をしなくても一人で大声で話しかけて、笑つて、怒つて、そして最後にはこつちの言葉を引き出していく。

だから、ポツリポツリと語ってしまう。

「僕は家族を殺したんだ」

「……おう、かなりヘビイな話題が出てきたな」

「僕の個性は『崩壊』だから、触った相手を壊しちゃう」

「え、俺は？」

驚いて下がる一郎に、きよんとした顔を返してしまふ。何を言っているのか、当時の自分は解らなかつたが、今の自分なら解る。

あいつは素で、何の裏側もなく、『え、そんな能力だったの、怖?!』と。

「なんで個性がきかないのか解らないけど」

「へ、へえ〜そっか、そっか。大丈夫ならいいや、さあ食べようぜ」

無理やり話題を反らした感じがする一郎に、当時の自分は気づくことなく頷いた。

そんな毎日が流れて行つた。

一郎は何時だつて生きるのに必要なものを届けてくれた、一年が過ぎて、二年が過ぎても、生活に困らずに暮らせたのは一郎のおかげだ。

笑顔で楽しそうに笑っている一郎に釣られて、自然と笑うようになった。毎日、一郎の話を聞きながら、自分も話せるようになっていった。

笑顔だつた、元気だつた、だから当時の自分は気づかなかつた。一郎が毎日、どうやって食材を持ってきていたのかを。

裏稼業の人たち、命さえ安いものだと考える人たちの使いつパシリ。鉄砲玉のほうが高いような仕事と、自分の命を賭けにして生活に困らないものを手に入れてきてくれた。

知ったのは、三年経ってから。

傷だらけになって倒れるように戻ってきた一郎を見た時に。

「二郎?! 何があつたんだよ?! どうしたんだよ?!」

「いや、ちよつとドジつた。ははは、大丈夫、何とかなるさ」

「何とかつて血がこんなに!」

医者に連れて行かないと死ぬ。子供心に思つた瞬間、一郎を支えて立とうとして、足を滑らせた。

八歳の子供が、同じ八歳児を支えるなんて無理だった。生活に困らなかつただけで、体を鍛えられるようなものはなかつたから、一郎を支えるなんて無理だった。

どうしよう、何ができる、どうにかしないと。頭の中でグルグルと考えが回るだけで、一歩も動けずに立ち尽くす。

そんな時だ、『あいつ』が来たのは。

「君かね、なるほど、二人ともかなり強い個性を持っているようだ」

「誰?」

「私かね？ 私は『オール・フォー・ワン』とでも呼んでもらおうか？ 彼を助けるために来た。二人とも辛かっただろう？ 怖かっただろう？ さあ、私と一緒にいこう」

優しく手を差し伸べてくるあいつを、当時の自分は信じてしまった。一郎が必死に人の優しさを教えてくれたから、この人も信じてもいいのではと思ってしまった。

今になって思えば、あの時に触れて壊したほうが、世界のためだった。あんな奴は存在してちゃいけない。あいつは殺しても足りない、魂さえ消して砕いて、地獄の底で苦しんだ方がいい。

心の底から怒りが湧いてくるほど、憎らしいあいつをこの時の自分は信じてついていってしまった。

『……』ではなく、『死柄木・弔』にとって、最初にして最大の罪だ、これが。

『オール・フォー・ワン』に連れられて、とある場所に連れて来られて、名前を与えられて、すぐに気付いた。

ここは異常だ。世間に対しての憎しみを植え付ける教育、不満を口にして打開する手段を、自分で生み出すのではなく、世界を壊すために使おうとしている。

そして、何より、『徐々になくなっていく子供たち』。

一郎とはあれつきり会えていない。あいつは『治療しているよ』と答えるだけで、会わせてくれない。

日々、焦燥感が募る。あいつは本当に信じれるのか、何か裏側があるのじゃないか。周りの施設で訓練を重ねながら、次第に嫌な予感が膨れ上がる。

「・・・君がいなくなったの」

「昨日は・・・ちゃんが奥に連れて行かれたよ」

小耳に挟む話に、ギリっと奥歯を噛んだ。やはり、あいつは信じられない、あいつは何か企んでいる。

一郎を預けていたら、よくないことが起きる。

探さないと。でもどうやって、施設の中を見回すと監視カメラや監視員の姿がある。明らかに外からの侵入者じゃなく、内側からの脱走を警戒している。

「一郎に教え込まれた、『簡単軍人マニユアル』役に立つな」

ポツリと呟いて、さあ動くかと考えた瞬間だった。

施設が揺れた。微細にじやない、細かくじやない。まるで施設ごと浮かびあがったかのように、吹き飛んだ。

「逃げるな！ この変態があああ！」

叫び声と共に地面を割って出てきたのは恐竜だった。機械で作られた恐竜が両手を上げて何かを追っている。

なんだ、あれは。本当に何が起きているのか。呆けてしまった視界に、三十メートルを超える恐竜の手に乗る、一郎の姿が入ってきた。

「子供達に悪戯して何するつもりだてめえ！」

「い、一郎？」

「大和！ いいから波動砲連射！ あいつを消せ！」

「はい！」

なんだろう、あの女性は。なんか鋼鉄の塊を纏った女性が、恐竜のいたる所に張り付いているんだけど。

それに、なんだかすっごい異形って姿の連中が足元から湧いているけど、あれも一郎の仲間か。

「変態め！ イエスロリータ！ ノータッチ！ この言葉を知らんのか？！ イオナ！

コンゴウ！ 侵食弾頭一斉射！ 資材を気にすんな！」

「了解」

「解った」

「なんだか、見える範囲がすべて黒く染まったけど。攻撃なのか、それとも幻なのか。ふ、ふふふ、いいね、実に興味深い個性だ。君から奪えなかったから、無個性かと思ったら」

「奪うってなんだよ!? てめえは子供なら誰でもいいのかよ?!」

「なるほど、『オール・フォー・ワン』で奪えないわけだ。君の個性は、『君の中にない』。それが君の個性の大元か。なるほど、君の体は個性の『出力のみ』を行っているわけか」

「わけわかんないことを言うな！ 土佐！ 信濃！ 艦載機発艦！」

「オツケー！」

「解りました！」

「誰が考えたか知らないけど、いい『防御策』だね。これなら、個性を無効化されることも、個性を奪うこともできない。何しろ、田中・一郎には個性がない、でも個性を使え

る。なるほど、興味深いね」

なんだか、色々なことが起きているな。人間と同じサイズの航空機が、無数に飛び交って爆弾とミサイルを降らせているのを、遠い目で見てしまうくらいに現実離れしていた。

「おい」

「え？」

「おまえが、『・・・』だな」

声を振り返ると、小学生がそこに立っていた。

眼鏡をかけて半ズボンの少年は、見た目以上に落ち着いた雰囲気、手を伸ばしてきた。

「初めましてだな、俺は江戸川・コナン。探偵だ。一郎から言われて、おまえを保護してきた」

「一郎から？」

「ああ、詳しい話は後で話すぜ。ついてこいよ」

「あ・・・あれ？」

コナンは自然と腕を握ってきた。でも、彼は崩れることなく不敵な笑みを浮かべていた。

「フ、この探偵に暴けない嘘や技術はないんだよ。おまえの個性は俺には効かないぜ。だから、遠慮なく掴めよ」

「なんで、だって一郎以外は触れられないって」

「なら、俺が二人目だな。安心しろよ、俺以外にも大勢がおまえに触れても崩れないって約束するぜ」

コナンはそう言つて、暴れている恐竜を親指で示す。

「あの、俺達の守護神に誓つてな」

何処までも不敵で、何処までも高く、そして何処までも頼りになる顔でコナンはそう告げた。

その後は、毎日が楽しかった。

「ふん、雑種が」

ギルガメッシュに笑われて、怒られて、諭されて。

「初めまして、レディオス・ソープです。一応、男ね」

ソープに技術とか教えられて。

「どうも、エルネステイです。ロボットって好きですか？　好きですよね？　もちろん

ですよね?!」

エルにロボット愛とパソコン関係の技術を教え込まれて。

「よし！　今日の気持ちを歌に込めるのだ!!」

アインズに歌を教えられて。

「ふ、海は何処までも広い。さあ、行くぞ」

エンタープライズや大和、イオナ、コンゴウ、土佐と信濃に連れられて海を進んで。

「にしし、何処見てるにゃしー?」

「もうまた迷子なの？　けがしてない?」

「ほいほいほい」

睦月と如月と夕立に土地感と気配を読むことを教えられて。

「さあ行くわよ！」

「全力で頑張りましょう！」

天津風と榛名に『がんばる』意味を教えられて。

「こつちですよ、こつち」

「なのです」

ジャベリンと電に近接と遠距離攻撃の対処法を叩きこまれ。

「こつちで大丈夫」

「はあ〜〜い」

「さあ、参りましょうか」

ユニコーン、エターナル、フロンティアにマツピングや乗り物を使うことを教えられて。

「ゆっくり歩く」

「後ろを見たらダメ」

イムヤとゴーヤに尾行の仕方、尾行の撒き方を覚えさせられて。

「ばんばかば〜ん」

愛宕に気合を入れて楽しくなる精神制御を叩きこまれ。

「さあ、行きましょうか？」

吹雪に総合戦闘訓練をさせられて、個性の制御を教えられた。

「ほら、どうした？」

コナンに事務仕事全般から、一般教養まで。学校で教えられることをすべて教えてもらった。

そして、一郎に。

「ん、なんだよ、弔？」

「何でもない」

常に前を向いて笑顔で生きることが、教えられた。自分の前を進んでいく背中に、『そうか』と何度も思えた。

生きるって辛いことで、悲しいこともあって、苦しいこともあって。でも、笑顔でいられるなら大丈夫、楽しいと感じて進んでいけるなら生きていける。

そんな強い心を、あの背中に教えられたから。

だから………。

「プレデターとかエイリアンとか、妖精とかに囲まれても、俺は大丈夫だ」

「いや、弔、たまには拒否した方がいいって」

異形とか小さい生き物とか、そんな連中に埋もれた弔に、一郎は心の底からそう呟いた。

「いや、一郎、俺はいいんだ。心地いい」

「マジで？ いや弔がそれでいいなら、いいんだけど。俺は止めたほうがいいって思うんだけど」

「大丈夫だ。俺は今、幸せだ」

「・・・あれ、弔？ いや待った弔?! 返事しろ！ 息してないだろおまえ?!」

返事がない、まるで屍のようだ。

「弔ああああ!!」

「ああ、一郎、『刻が視える』」

「それは幻覚だからああ!!」

だから、死柄木・弔は今日も笑顔で元気で、毎日を楽ししく生きている。
時々、死にかけるけど。

ヒーローの条件

年が過ぎ去って、新しい年が世界に広がって行つた。

「弔、どうした？」

「何でもない」

珍しく携帯電話を握りしめ、睨むように画面を見ていた彼に、一郎は問いかけるが、答えは素つ気なくて少しの拒絶があつた。

「何でもないならいいけど」

「ああ、一郎、今日は店を休みにしたい」

「はい？」

『え、おまえ何言つてんの、熱でも有るの』と顔中で語る一郎に、弔は悪いと小さく呟いて店を出ていく。

「看板、だしておいてくれ」

「解つた、遅くなる前に帰れよ」

背後から聞こえる一郎の声に、弔は小さく手を上げた。

何事もないように、何時もと変わらない様子で手を振りながら、弔は真つ直ぐに前を睨みつける。

おまえを今度こそ、殺してやる、と思いながら。

懐かしいというべきか、あるいはもう二度と会いたくないというべきか。
死柄木・弔にとって、彼は恩人であると同時に、復讐の対象でもあった。
自分に名を与えてくれた人、自分に能力の自覚をくれた人、自分に憤りを植え付けた人。

そして、自分の最大の理解者であり、道しるべを殺しかけた奴。

「先生」

小さく名を呟き、弔は路地裏に入りこむ。

「やあ、死柄木・弔、会いたかったよ」

闇を払うように、彼はゆつくりと歩いてくる。身に纏うのは、漆黒の鎧のような何か。前に会ったとき、一郎の個性『手のひら鎮守府』の総戦力を食らったにしては、随分と元気に歩くものだ。

「これかね？ いやまったく、彼の個性には困ったものだ。最初に会ったときの巨大な機械の恐竜だけかと思つたら、隠し玉まであるとは」

ガチャガチャと音がする。機械仕掛けの鎧は、あいつの声で動き続ける。まるで生きているように。

弔は小さく睨みながら、ブレスレットを外す。同時に胸ポケットの『魔法袍』から『それ』を取り出す。

人の手を模した仮面。平べったいものではなく、人の手そのものといったそれを持ち、ゆつくりと顔につけていく。

「懐かしいね、それは私が最初に上げたものじゃないか」

「黙れ。おまえの気持ち悪いあれと一緒にするな」

弔は一括で斬り捨てる。誰がおまえの道具など持つものか、これはあの後にエルとソープが作ってくれた、人の認識を阻害する道具だ。

正体がバレてもいい、自分が犯した罪は自覚している、自分がどうなってもいい。弔は心の底からそう思っている、罪は裁かれてこそ世界は平穏でいられる。

けれど、今じゃない。今はまだその時じゃない、自分が犯した罪に対しての罰を受けるのは、もっと先の話でなければならない。

これをつけるのは一郎に迷惑をかけないため。正体がバレて自分だけじゃなく、一郎にまで被害が及んでしまったら、弔はとも自分を保てそうにないから。

「つれないね。一時期は私の庇護下にあった、同士じゃないか」

「黙れよ、貴様。同士は否定しない、俺は一郎に『依存』している。おまえみたいにな」
「ふふふ、確かに私は彼の個性が欲しい。英雄王、名探偵、希代の発明家に、天照。艦娘もそうだ、あの魔王も欲しい。すべてが詰まった一つの世界、それが彼の個性なのだから」

うっとりとして語るあいつに、心の何処で同意してしまう。

一郎の個性は、一つの世界だ。科学的な戦力、魔法的な戦力、あるいは超常的な戦力と十分にそろっているが、それが脅威ではない。確かに戦う力はあるが、いいだろうが、彼の個性の強さはそこじゃない。

彼の個性は、『補充がきく』こと。ミサイルや爆弾を使っても、一郎本人の体力が削られることはない。魔法を実行したとしても、一郎の精神力が削られることはない。

すべてが、独立している。ギルが、コナンが、ソープが、エルが、アインズが、艦娘達が、それぞれに力を使ったとしても、一郎本人に影響はない。

あの時、機械の恐竜を使った時も。一郎は、『魔改造の鎮守府だったもの』とか、『デスザウラー凶悪版』とか呼んでいたが、あれを最大稼働しても一郎は平然としているだろう。

万能的で全能、最強無比。一つの国家並の戦力を保持しながら、一郎の体力も精神力も削られない、世界で初めての強個性。

『オール・フォー・ワン』が目をつけたのは、そこだ。個性を複数持っていて、所詮は人間の体。いくら改造を重ねて、個性で強化しても限界が来る。

けれど、一郎の個性ならば。いくら戦っても、いくら戦力を出しても、限界は来ない。個性の持ち主はあくまで、『命令者』であって、『発現者』ではないから。

「だからこそ、僕に相応しい。そう思わないか、甲?」

「思わない。あの個性は一郎だから使えている。おまえみたいな性格破綻者に渡したら、世界が混乱するだけだ」

「言うね」

何処か楽しそうに、あいつは笑う。かつて先生と呼んだあいつは、歪んだ笑顔を浮かべながら機械の手を動かす。

「そうそう、彼の恐竜はデスザウラーという『ゾイド』らしいね」
「だから、何だ？」

「ふふふふ、弔。私はね、彼に感謝しているよ。彼のおかげで、私は見つけることができた。知ることができた」

何の話だ、どうでもいいか。あいつの言葉など聞いてやる必要はない、さっさと終わらせて戻ろう。

弔が右手を開いて、姿勢を低くし体中に力を入れた瞬間だった。

「転生者を、ね」

小さく呟いた言葉と同時に、弔は反射的に飛んだ。

一郎は店の中でボーと時計を見ていた。

なんだか今日は暇だ。店を休んだから、予定が狂ってやることがない。普段なら趣味だとか、話相手だとか、あるいは大騒ぎする連中がいるはずなのに。

「今日はなんで誰もいないんだ？」

チラリと店の入り口を見ると、『トツティ』と『トルテ』が立っていた。今日は店を休むって伝えたのに、律儀に店先にいるとは。

彼らもサービス業の精神が宿ったのか、それはとてもいいことだ。

「弔も帰りが遅くなるのかな？ 連絡もよこさないで」

携帯電話を見ると着信はなし、メールもない。

珍しく、コナンとギルからもない。何時も、うるさいぐらいにメールを送ってくるのに。

「はあ、こんな日を世はこともなしって言うのかな？」

小さく呟き、一郎は立ち上がる。誰か本でも持っていたかな、と思いつながら。

彼がいる店の先、トツティとトルテは店の入り口で直立不動で立っていた。一步も動かず、一ミリも揺れることなく。

目の前の戦いを見続けていた。

「あいつ、まだ諦めてなかったのかよ」

嘆息交じりに答えながら、コナンがサッカーボールをかけた。閃光を放ちながら空中

を突き進むサッカーボールが、隣のビルの屋上から降ってきた黒い物体を弾き飛ばす。

「あの雑種が諦めるなど、ありえぬな。どうした、コナン、もう疲れたか？」

黄金の波紋を浮かべながら、ギルは不敵に笑う。降り注ぐ宝具の雨は、迫っていた黒い物体を貫いて散らす。

「バーロ、そんなわけあるか。ご近所迷惑だつて言つてんだよ」

「ならば良からう。今この場合は、結界の中だからな」

「それは感謝だな」

コナンが見つめる先、豪華なロープをまとったガイコツが、同じく豪華な杖を突き出して天を睨んでいる。

「覚えておいて良かった、ミッドチルダ式魔法だな。封鎖結界はこれでいいだろう。さて」

彼は動きだす。全身から黒いオーラを纏わせながら、ゆつくりと、一步一步と黒い物体に迫る。

「脳無と言ったか？ あいつも無粋なことをする」

死の気配をまき散らしながら、オーバーロードは嗤う。

「おっかねえ」

「フ、不死王の本気か。これは我も気合を入れねばならんな」

「おいおい」

呆れながらため息をついたコナンは、ハツとして身をひるがえす。先ほど吹き飛ばした脳無が、何事もなくそこにいた。

「おい、どういうことだ?」

「確かに奇妙だな」

見れば、宝具に貫かれて消えてはずの脳無まで、その場に復活していた。

「フム、二人ともしばらく様子を見てくれないか? これはひよつとすると厄介事かもしれない」

アインズが考え込み、杖を突き付ける。

探査魔法開始。精密調査を。

「アインズ!」

叫び声に、彼は空を仰ぐように振り返った。その視界に、腕を振り上げた脳無の姿が映る。

そして、衝撃がガイコツを吹き飛ばした。

右腕が鋭く刃のようになった脳無の一撃を避ける。僅かに避け損ねて洋服を斬られたが、気にせずに進む。

右手へ触れる。刃に指先が切れたが、触れた以上は終わりだ。崩壊していく脳無は、やがて崩れ落ちて行つた。

「昔と変わらないな。こんなもので俺を止められると思つているのか？」

「思つていないさ」

「じゃ、なん・・・」

弔はほとんど反射的に飛び退いた。脳無がまた出たか、今度も同じ両腕が刃のような形をした個性持ち。

同じ手をと、弔が考えて掴んだ脳無は崩壊していく。その途中で、『戻つた』。

「な?!」

「そうそう、言い忘れていたよ。その脳無は特別製だね。『DG細胞』というのを使って

いる」

「何だそれは?!」

叫びながらも脳無の攻撃を回避しつつ、相手に触れて崩壊させていく。確かに崩れるが、崩れる速度が遅い。先ほどより明らかに、弔の個性が効いていない。

『自己進化』『自己増殖』『自己再生』を持ったある機械の細胞だよ」

「機械がこんなにも再生するものか」

冷静に相手を観察する、あいつも視界に入れながら警戒して、周辺を観察していく。脳無の反応はある、複数の脳無がいる。けれど、それらはこっちに向かっていない。目的地は、別の場所。一郎の方じゃない、あちらではなく。

「デビル・ガンダムという機械の細胞を使ってみたんだがね、どういうわけかこちらの制御を受け付けなくてね」

「……?!」

瞬間、弔は『オール・フォー・ワン』を無視して走り出した。

「人を無差別に襲うようになってるんだよ」

背中に叩きつけられた言葉に、弔は答えなかった。全力で走る、前を塞ぐ物体は申し訳ないが崩壊させて移動ルートを確保した。

急げ、急げ、もつと速く動け。全身で叫びながら、弔は走る。必死に走って、懸命に

駆け抜けた先、市街地には『悲鳴が舞っていた』。

「おまえらああああ!!」

街を破壊する脳無の一匹に食らいつき、全力で『崩壊』を使う。一瞬で崩れた脳無が、足元に崩れた原子レベルの細胞が、次第に蠢いて結合していく。

「崩れてろ!」

細胞ごと崩壊させればいい。咄嗟に思いついたことに、能力の比重を重くする。さらに深く深く、もつと細かい場所に届くように伝播させた。

脳無は再生途中で鳴動して、そのまま消え去った。

これなら何とかなる。なんとかなるが、こちらの消耗が激しい。一体にこれだけの能力を使っていたら、時間が足りないのではないか。すべて倒すのに、どれだけの時間がかかる。

無理じゃないか。心の何処かで思ったことを、弔は振り払うように走りだす。

「うわああああ?!」

「なんだこいつら?!」

悲鳴が聞こえる。そっちへ行けば脳無がいる、悲鳴が敵の位置を教えてくれるならば、悲鳴を追いかけていけばいい。

「邪魔だ!」

通行人の男女に襲いかかろうとした脳無に右手を伸ばせたが、反対に攻撃を受けた。グサリと突き刺さる刃を崩壊させ、そのままこちらの能力を使う。個性の『崩壊』を徹底的に流して原子レベルで粉碎した後に、さらに追加も叩きつけた。

「お、おい、あんた」

「逃げろ」

呼びかける声に、振り返ることなく告げる。右腹に突き刺さった刃は崩壊させたが、血が止まらない。足もとがふらつく、痛みで足が止まりそうになる。

もう無理じゃないか、必死にやったじゃないか。一人が出来ることなんて、ここまでだ。

弔はそう告げてくる自分を自覚し、足を止めかけた。

「誰か助けて!」

足が動いた。理屈じゃない、理論なんて知ったことか。動く足がある、使える腕がある。個性もまだまだ使用可能だ。

なら止まる理由はない、止まらない理由なら十分にある。

悲鳴を追え、その先に元凶がいるのだから。

弔は走る、傷を負いながら、血を流しながらも、脳無を崩壊させていく。一体、二体、三体と倒しながら進む。

いくら倒しただろうか、もう数えていないから解らない。ただ悲鳴が上がれば全力で駆けつけて脳無を倒すだけ。

後どのくらいだ、どれだけ経った。

疑問と疲労から足を止めて周りを見れば、街の中心街にいた。

「素晴らしい。君がここまでやれるとは思っていなかったよ」

『オール・フォー・ワン』

視界が揺れるが、あいつの存在は見落とさない。

機械の手で拍手しながら、歪む笑顔を向けてくる。

「あれだけの脳無を一人で倒すとは、個性が強くなったようだね」

「余計な御世話だ。今度こそ、おまえを倒す」

「そうか、君の望みだったね。ならば、倒してみるがいい。この『脳無』を倒してからね」

あいつの影から今までの倍以上の脳無が躍り出た。全身を鎧で覆ったような、奇妙な脳無だ。

今の状況では、倒せないか。弔が一瞬でそう判断し、場所を移そうと思考している中へ、冷水のように冷たい声突き刺さる。

「さあ、皆殺しにしなさい」

瞬間、そいつは雄たけびを上げて、『一般人のほうへ向かっていった』。

彼はその背中を生涯、忘れなかった。

傷だらけになりながら、必死に護る背中を。血を流し、ふらついた足で自らの三倍以上の敵に立ち向かう姿を、絶対に忘れなかった。

「どうしてそこまでするの?」

呼びかける声は届かず、倒れて、殴られて、飛ばされても、足を止めることなく巨大な敵へと立ち向かっていく。

小さな背中だった。ヴィランに比べたら、とても小さい背中。

でも彼にとっては、とても大きな背中に見えた。

言葉を話さない、無言でいる彼の背中には語る。

目を合わせなかった、彼の顔は見えなくても、背中が吠える。

『絶対に護り抜く』。

無言の叫び声は、確かに彼らや彼女達に届いていた。

「正直、驚いているよ。どうしてそこまでするのか、私には理解できないな」

傷だらけで倒れている弔に、『オール・フォー・ワン』は語りかける。

「俺も解らない」

体に力が入らない。でも弔は立ち上がる。もうとつくに体力の限界は通り越した、けど弔は立ち上がるのをやめない。

「君はヒーローを嫌っているはずではないか？」

「嫌ってはいないな。憧れてもいない」

口調はしつかりとしていた。でも、視界は歪んで霞んでいる。

「ふむ、理解できないな。今の君はヒーローのようじゃないか。多くを護る、ヒーローに見える」

「俺はヒーローじゃない。そんな上等なものじゃない。俺は罪人だ、家族を殺した俺に、誰かを救うヒーローになんて慣れるわけがない」

「ではなぜだ？」

「助けたいって思ったからだ」

弔は笑う、力なく虚ろな微笑みだったが、その瞳は力を失っていない。

「理屈じゃない、理論じゃない。ただ、俺が助けたと思った。どうしようもない絶望の中で、俺は一郎に救われた。あいつに世界は冷たいだけじゃないって教えてもらった。コナン達にいろんなことを教えてもらった」

世界を憎んで絶望してた自分に、『世界ってあんがい、悪いもんじゃないだろ』と教えてくれた人たちがいた。

毎日を楽しく過ごせるようにしてくれた。人の冷たさを教えてくれた、人の優しさを教えてくれた。

人の卑屈さを知った、人の温かさを知った、優しい世界もあって、酷い世界もあると知った。

「解らないな。それはヒーローの姿じゃないかね？」

「さあな、俺はヒーローじゃないから解らない。でもな、一郎が昔に言っていたことがある」

憧れのヒーローと質問されたとき、一郎はちよつと困つた顔をした後に、こう答えた。彼らは悲劇があれば風と共に駆けつけて、嵐のように去っていく。

戦いがあれば何処へでも向かい、戦いが終われば誰にも知られることなく姿を消す。

アニメみたいな話だ。でも、そんなアニメが好きで、自分の悲劇を救つてくれるヒーローに憧れて、それを生み出した人たちがいた。

そして、そんなヒーローが現実で戦っている世界を見たことがある。

「正義とか悪じゃない。一郎が憧れたヒーロー達はな、『人間の自由のために戦っている』って言っていた」

正義の味方と呼ばれ、悪と戦い続けた人たち。時に人に知られずに世界を救つて、時に世界中から恨まれようとも人々のために戦つた人たち。

誰からも称賛なんてされなくても、誰からも尊敬されなくても。

「誰かの『助けて』に答える。その人が絶望に囚われているなら、悲劇に束縛されているなら、その人の自由のために戦う。そんな人たちに憧れた一郎に」

弔は足に力を入れ、全身の力を振り絞り、立ち上がった。

「そんなあいつに憧れた俺が、人々の自由が脅かされているのに、倒れるわけにいかない

だろ?」

不敵に笑う、おまえなんて敵じゃない。もしもこの人たちに何かしたいなら、先に倒すべきは自分だと告げるように。

「そうか、弔。君は染まってしまうているんだね、可哀そうに。殺せ、脳無」
脅威が迫る。今まで以上の力を込めた脳無が、満身創痍の弔へ一撃を叩きこむために。

人々の悲鳴が上がる。もうダメだ、逃げろと叫ぶ中に、小さな声の一つ。

「負けるな!」

ピクリと弔の手が動いた。

「ヒーロー!!」

轟音が周辺を揺らす。

「.....ハ。俺も憧れていたんだな。たった一声でいい」

脳無が崩れ落ちる、細胞が再生し増殖する中、さらに崩壊は脳無の全身を包み込む。

「大勢じゃなくていい、たった一声で立ちあがる、そんな存在に」

霧が晴れるように、脳無は消えていく。

「そうか、俺はヒーローになったのか」

グツと手を天へと突き出す。

そして歓声が彼を包み込んだ。

「ふむ、助勢は必要なかったか」

「そうだな。アインズ、盛大に飛ばされたみたいだったけど、大丈夫なのか？」

「私の物理防御は、レベル10に上がっている。あの程度、ダメージはない」

興味なさそうに彼は足元に転がっている『脳無』だったものを見ていた。

ダメージを与えたつもりが、自分がダメージを受けていたなんて、滑稽な話もあったものだ、と。

「コナン、全部、終わったよ」

ソープが背後に立つ。栗色の髪が銀髪になっていて、纏う雰囲気普段と違うが誰も

気にしない。

「私のワープで全員が帰還済みです」

黒霧の報告に、コナンはポケットに手を入れて歩きだした。

「事件解決だ。俺達をなめ過ぎなんだよ、『オール・フォー・ワン』」

見下ろす先、彼は姿を消していた。

「追いかけないんですか？」

エルの問いかけに、コナンは首を振った。

「俺達の『事件』じゃないからな。こつから先はオールマイトの事件だ。他人の事件に首を突っ込むのは、探偵にとって野暮だからな」

そう告げて、コナンは最後に全員に伝える。

撤収、と。

「なんで弔は傷だらけで戻ってきたんだよ？」

「転んだ」

「いや明らかに刃物による傷じゃないか」

「包丁持って転んだ」

「おろろい、それで俺が騙されるって思ってるのかよ？」

「俺はおまえを信じている」

「馬鹿にしてませんか弔くん！」

何時も通りの家のリビングで、包帯塗れの弔に対して、一郎は盛大に溜息をついた。

「まったくさ」

「一郎、俺は解った気がする」

「何がだよ？」

「ヒーローが何かを」

はいと一郎は顔を上げて弔を見つめた。

彼は普段と変わらず、晴れやかな笑顔で笑っている。

そっか、なら良かったな。一郎は無言で語りかけながら、微笑んだ。

その後、民衆の間でとある噂が流れた。

嵐のように訪れて、悲劇を碎き絶望を払って、嵐のように去っていくヒーローがいると。

プロ・ヒーロー達は『そんな奴は見たくない』という。都市伝説だとネットで騒がれて、多くの人が『嘘やねつ造だ』と言い始める中。

彼を知っている人たちは、その存在を信じ続けた。

その名は、彼がしていた人の手のような仮面に因んで、『ザ・ハンズマン』。
あるいは、

『傷だらけのヒーロー』

ほうれんそうって知ってる？ 報告、連絡、相談だよ。砲撃・連戦・騒動起こすじゃないよね？

どうも、田中・一郎です。年末年始、忙しかったです。でも、なんだか一日ほど誰もいなかった、暇な日があったのです。

「勘弁してくれと言うしかない」

なんでだろう、そんな慌ただしい年明けが終わって、ちよつと正月気分が抜けた今日この頃、なんだかすごい勢いのオールマイトに電話もらって。

で、現在、警察署の一角で凄いオーラを纏ったオールマイトと、対面で向き合っています。

正直、『あ、この人って近所のおじさんっぽい』って思っていたの、謝らせてください。めちやくちや怖いじゃん、この人。さすがナンバーワン。この人が平和の象徴だって信じられるよ。

あの泥酔したおじさんと、今の姿がまったくの別人に見えるけど。見えるけど！

「え、あの、え？」

「正直な話。君のおかげで助けられた、と考えたい。思い込みみたいのだが、被害を考える
と素直に言えない」

「はい？」

え？ あれ、何かあったの？

ええ、どうしてそんな殺気まみれの顔で見えてくるのかな？

ヴイランつてこんな殺気を受けても、犯罪を止めないって、それは根性あるんじゃないかな。
いかな。

「田中少年」

「はい?!」

「正直、私は今どうすればいいか悩んでいる。一言、そうだ一言！ たった一言だけ伝え
てくれたら、私はこんなにも悩まずに済んだ！」

「え、ええ〜〜〜」

何が何やら、なんでオールマイトがこんなに怒っていて、しかも警察署の一番奥の一番
番機密性が高い場所で話をされているのか。

これ、ヒーロー協会に呼び出されたほうが、いくらかマシなんじゃないかな。行った
ことないけど。

「あの、オールマイト」

「何かね？」

うわ、眼力凄すぎ。これがヒーローか、やっぱり俺には無理だよな。こんな眼力、出せるわけがないし。

あゝあ、仮面ライダーに憧れたことあったんだけどな。あんな人たちになりたいって思ったんだけど、無理だよな。

俺は普通だし、普通でいいし。

よっし、現実逃避完了。さて、本題を告げるか。怖いけど、本当に怖いけど。

「俺は何で呼ばれたか教えてください」

怖?! なんでそこで眼力が上がるの!? 何したの俺?!

「本気で聞いているのかね？」

「はい」

いやだって知らないし、解らないから。教えてもらわないと。

「……先日、『オール・フォー・ワン』が襲撃を仕掛けてきた。新型脳無を引きつけてだが」

「ええ?! 先日って、何時の話ですか？」

「本当に知らないのかね？」

「え?」

いや先日ってことは終わったってことだよな。でも、町の中って被害が出た様子はないさそうだし。いや、ないよな、俺が知らないだけか。

「すみません、知りません」

正直に答えると、オールマイトは気配が一気に沈んでいき、何故か胃を抑えるように体を折った。

え、何それ、どういうこと?

「そ、そうか。実は、『君のところが対応した』から、てつきり君が指示したのだと」

「はい?」

え、今なんて。オールマイトはなんて言ったのかな?

はははは、最近は何が悪くなったようだ。オールマイトがありえないことを言った気がしたけど、そんなバカな話があるか。

だって、俺のところが対応したなんて、あり得ないだろう。報告もなかったし、連絡もない、相談さえなかったんだぜ。普通に、毎日と同じように過ごしていたのに。

あれ、まった、弔が傷だらけになった時がなかったか。

「……オールマイト、すみません」

「うん、やはり知っていた……」

「教えられてませんし、言われてません」

「ははは、もうなにしてんだよ、あいつは。まったく、どうして俺に相談しなかったんだ。」

「胃が痛い。きつと弔のことだから、知らせずに解決したかったんだろうけど、その結果で俺が呼び出されてるんだよ。気遣いは嬉しいけど、後から知る身にもなってみろっつてんだ。」

「そうか。君も大変だな」

「ええ、まあ。それにしても、弔の奴め」

「まったく水臭い。それなら俺に知らせてくれたら、コナン達と一緒に戦えたのに。」

「いや、俺は戦えないけど、何かできたのにさ。」

「死柄木少年？ いや、彼だけじゃないが」

「え？」

「確かに、『ザ・ハンズマン』と呼ばれるヒーローを多くの人が見ているが、それ以外にも『結界』があつたらしい話がある」

「……おうシット」

「つ、つまり、あれか。結界ってことは、アインズが出たってことか。まさか、あの温和になったギタースケルトンが、俺に内緒で動いた、と。」

待った、ちょっと待った。アインズが動いて、他の奴らが動かなかった。そんなわけがあるか。

「オールマイト、ひよつとしてですけど」

「うん、田中少年。君が知らないはずがないと、私が思った理由がそこにある」

「あ、そうですか」

「巧妙に隠されていたが、様々な状況証拠が語っている」

な、なるほど。確かにアインズの封鎖結果は内部の被害を外に出さないけど、その前に準備とか、魔法陣の展開とか色々あるからな。

で、脳無が色々なところで暴れたらしいから、それを抑え込むこともあるだろうから。

あ、その時に見られていたってことか。

「映像データはヒーロー協会と警察のほうで、対応した。政府からも色々と言われているからね」

あ、これはもうダメなやつだ。色々って、『助かったから助けてやろう』じゃない。これはきつと、ギルが何かしたんだ。『いいから黙っている、もみ消せ』とか。

いや、ギルだけじゃない、きつとソープとエルも加担している。

となると、絶対にコナンが絡んでいないはずがない。

コナンが脳無と『オール・フォー・ワン』が来たって知って、戦力を動かしたってこ

とは。

「・・・全軍かあ」

俺は思わず、胃を抑えながら膝をついたのでした。

「コナンいるかああああ!!」

オールマイトの前で胃を抑えながらの土下座をした帰り、俺は店の入り口を蹴破る勢いで突撃した。

「何してんだよおまえら?!」

「どうしたんだ、一郎?」

「弔あああ! 脳無と『オール・フォー・ワン』が来たってどういうことだよ?!」

「何の話だ？」

うわあ、こいつ真顔で答えたよ。本当に知らないって顔しやがって、でも残念ながら俺とおまえの付き合いは長い。

一瞬、目が泳いだのを俺は見逃していない。

「おまえが傷だらけで帰ってきたのは、そう言うことだったんだな」

「だから何の話だ？ 一郎、とにかく落ち着かないか」

「これが落ち着いていられるか」

「いや、客の前だぞ」

「……………」

そこでふと、俺は店内を見回した。

あ、現在はランチタイムか。席がすべて埋まってないけど、お客さんがチラホラという。

不味い、これはサービス業として、かなり不味い。

「……………いらつしやいませ」

精一杯の笑顔で対応するしかない！

「おまえ、それでごまかせるって思っているなら、サービス業舐めるなって言いたい」

「うるせえ、弔。後で話があるからな」

「俺はないな」

「俺があるの」

まったく、こいつは。内心で怒りを抑えながら、俺はカウンターの中へ入って手洗い、エプロン装着。

さてと手伝いに入るか。今日のお客さんは、珍しい子が来ているみたいだし。

「お、ヒミコちゃんじゃん」

「い、こんにちは一郎さん」

「こんにちは」

お、本当に珍しい。二週間に一回くるか来ないかってくらいの、この店の癒しでございます。

金髪にミニスカートの制服って、今どきの女子高生なんだけどき。反応が初々しいと
いいですか、お淑やかかって言うか。それに、仕草も可愛いんだよね。

「きよ、今日は遅かったんですね」

ちよつとしゃべる時、遠慮するのも可愛いよね。うんうん、俺の周りにはいないタイプの
プの子だよ。

「二郎、コナンなら裏にいるぞ」

「よっし甲、ちよつと行ってくる」

なんだと、俺が怒りを秘めているのに、普通に裏にいるなんて。よっし、コナンめ、俺の怒りを思い知るがいい。

「え、でも、店はいいのか？」

「ああ、大丈夫だ」

そうなのか。まあ、トツテイ君とトルテ君もいるし。いざつて時はエルとスープも入るだろうし。

「じゃ、行ってくる」

「ああ。さっさと行ってこい」

あれ、やけに追い立てるじゃないか。急がないといけない理由なんてないよな。まさか、俺がいるとダメな理由でも。

あつたわ。

ヒミコちゃんか熱のこもった目線を、弔に向けているから。クツソ、あいつめ、なんでこの店の女性客は常にあいつに『お熱』なんだよ。傷があっても、イケメンなら許せるってのか。

「ちくしょうめ」

この怒りはコナンにぶつけよう、そうしよう。

店の奥に引つ込んでいく一郎の背中を見送り、弔は小さくため息をついた。
ギリギリか。それとも、手遅れか。できれば間に合ってほしいのだが、手遅れかもしれないな。

どうか、と弔が視線を向けた先、カウンターテーブルに突っ伏している人物が一人。

「無事か、ヒミコ？」

「は、はい~~~~~」

返事はあるが、顔はあげない。全身の力を使ってしまつて、動くことさえできないらしい。

「今日は珍しく怒っていました」

「そうだな」

「怒った顔も迫力があつて素敵でした。心の底から痺れました。あの殺意を受けて平然

となんてできません。私のすべてが訴えています、もう『一郎君のものになっちゃいなヨ』って」

何を言っているんだろう、この子は。弔は内心で呆れながらも、表に出さずに突つ伏したままのヒミコを見つめる。

「ああ、一郎君。あんなに素敵なのに、かっこいいのに、キザっぽくなくて何時も自然体で笑ってくれて。気さくに声をかけてくれるだけでも嬉しいのに、珍しいって言ってくれた。私が何時、来たか覚えていてくれるなんて、お客の来店を一つ一つ覚えていてくれるのね。本当に心優しく、気遣いのできるいいと男。なのに飾らない、威張らない。なんて素敵な殿方なの」

突つ伏したまま、スラスラと出てくる言葉に、さすがの弔も引いてしまう。確かに一郎は、かっこいいと思える。優しいともいえるのだが。

ここまでべた褒めすることはない、優しい良い人ねで止まってしまおうのが田中・一郎だ。

「珍しいって言っていたか？」

「目が語っていました。ああ、素敵な目ですね、一郎君つて。まるで夜に輝く月のように、迷った私を導いてくれる。あの瞳でずっと見てほしい、私だけを見てほしいのに、あの瞳は色々な人を導くためのもの。誰か一人で独占するなんて世界の損失です、そんな

のは許されるわけがない。でもでも、トガ・ヒミコは罪深い女なのです。あの瞳を独り占めしたい、私だけを見てほしいと願ってしまふのです」

弔、今度は完全に引いてしまふ。今まで様々な人間と相対してきた、異常な性癖を持つ者、特殊な趣味を持つ者もいた。

しかし、だ。その中でもトガ・ヒミコはトップにくるほど、異常な存在だった。

まず第一に、田中・一郎に惚れている。それも心の底からのぞつこん、彼を前にしたら上手く言葉でない、体が上手く動かないくらいに惚れこんでいるので、一郎から見たら『初々しい、お淑やか』に見えるらしい。

最初はヒミコも『変に見られている』と頑張って改善していたのだが、一郎がそう思っていると感じてからは、それでいいと直していかない。

それで押せばオツケーなんて打算ではなく、『一郎が良いと思っっているなら私はそれで万事よろしい』と心の底から信じてのことだ。

「ああ、一郎君、一郎君、私はもつと一郎君を見ていたいのに。私の馬鹿、どうしてこう意気地がないの。もつと根性があれば、一郎君を見つめて、一郎君と語りあつて、一郎君の香りを嗅いで、一郎君の温もりを感じられたのに。どうしてこんなに根性がないの」

自己嫌悪に陥った彼女を見つめ、弔は思う。

だったら、顔を上げて反省しろ、と。

「ヒミコ、気色悪いから止めろ」

「どうしてですか、弔君！」

バツと顔を上げて睨みつけてくる彼女に、初々しいとかお淑やかかって言葉は欠片も見当たらない。

一郎の前のヒミコが子猫ならば、一郎がいないヒミコはトラか豹か。肉食獣が前にいるような、妙な感覚を弔は味わっていた。

「一郎君への真摯な想いを語っているのに！ 私自身を変えようと努力しているのに！ どうして気持ち悪いって話になるんですか?! 乙女の純情を貴方はどう考えているんですか?!」

「純情か。本人がいないところで本人の良さを語るのを純情というなら、俺はなくていいな」

瞬間、ヒミコは雷に打たれたように固まった。

確かにそうかもしれない。本人のいない場所での話など、陰口に等しい。相手のことをどう思っているか、どう考えて想いを口に出しているかは違えど、意味合的には同じことではない。

「わ、私は、一郎君になんてことを。私はあ」

一氣に号泣し、今度は別の意味で突つ伏すヒミコに、弔は『え、そこまで』と完全に呆れていた。

放っておくしかないか、元気づける理由もないから。完全放置を決めようとした弔の視界に、店にいた何人かの女性客からの視線が突き刺さる。

『まさか、放っておきませんよね』と無言で語る視線に、小さくため息をついた。

意外に、女性に人気があるのはヒミコの性格か、それとも一途さ故か。普段は凶太い性格をしているのに、一郎の前では子猫化して可愛いからか。

弔は不意に思い知る。これが世間でいうところの『ギャップ萌え』か。

「ヒミコ、俺が悪かった」

「ふえ？」

「一郎のことを思うお前は確かに可愛い。きっと、その想いは一郎に届くだろう」

「え、はい！」

涙が一転、すぐに笑顔を浮かべて拳を握ったヒミコは、立ち上がって宣言をした。

「私は必ず一郎君の心臓を手にいれます！」

「ああ」

何時もと同じ宣言に、店内から盛大な拍手が巻き起こる。

誰もが頑張れと声援を送る中、弔は何時も思うことを繰り返した。

なんでそこで『心とかハートじゃなくて、心臓なんだろう』と。

もしかして、こいつは一郎に会わなければ殺人鬼になっていたのではないかと。

「さすが一郎だな、知らないうちに人を助けるか」

「ええ、さすが一郎君ですね」

弔とヒミコは、まったく違う理由から、同じ人をほめたたえるのでした。

同じ頃、一郎はコナンから話を聞いている最中に襲ってきた寒気に、『俺、やっぱり鎮守府を稼働させてくる』と言いだして、周囲に盛大に止められていたのでした。

周りと被害と俺の精神的苦痛ってなると、俺の精神的な苦痛かなって思った一郎でございませう。

コナンの話を聞くと、仕方ないなあって思うしかない。

それにしても、脳無か。D G細胞なんて何処から手に入れたんだろう。あの人は本当に節操なしだな。

「転生者を見つけたって、弔は言われたんだと」

「そつちもバレたか。あの人は本当に、方々に手を伸ばして、何がしたいんだか」

「さてな。案外、世界征服でも考えてるんじゃないか？」

「ヴィランだけにか」

間違いいじゃなさそうだよな。コナンが、呆れ顔で言った内容に、俺は合っているように思えてきた。

「世界征服かあ……あれって楽しいのかな？」

「さてな。世界とは元々、我のものであったからな、最初からあったものに対してどう思うかなど、考えたこともない」

ギルはそうだよな。

「俺はごめんだね。世界を手にしたって苦勞するだけだ」

コナンは、呆れた顔してるけど、確かにそうだよな。

「世界を率いることは、自分以上の天才を従えることでしかない。心勞で毎日、死にそうになる」

意外に、アインズが重いこと言ってるな。何かあったのかな？

「面白みに欠けますね。僕はロボットがあればいいですよ」

エルはブレないなあ。

「世界は、多種多様な人が暮らしている場所だ。それを一人の存在が統括するなんて、不可能だ。独裁をして意見を封じ込めたら、最後には打ち取られて終わる。一個人がどうにかできるなんて、夢想でしかないよ」

スープもかなり重いこと言ってるし。神様の前に王様でもやっていたのかな？

「だよなあ……本当に、何を目的にしているのかな？」

理解できないから、放っておこう。

「で、俺に内緒で暴れたのって誰だったの？ 艦娘は全員、出撃したってことは解るけど」

「ああ、全員だよ。マジで」

「え、マジで？」

「そうマジで。総戦力を動かしたんだよ」

え、あ、そう。

コナンの言葉に、俺は無意識に胃を辺りを抑えたのでした。

今度、いい胃薬を買ってこよう。俺は不意にそんなことを考えていたのでした。

カレーは皆の大好物、そして皆のケンカの元

昔、死柄木・弔はそれを食べて涙を流した。

家族を失って、一郎と暮らすようになって、やっと食べられた、食べ物らしい食べ物。きちんと人の手が入った、ジャンクフードじゃない食事に、弔は涙を流して夢中になって食べた。

それは彼にとって、大切な思い出の一つ。

今でも大切になっている、とても重要な食べ物の思い出。

昔、海軍さんは海上にいて曜日感覚を失わないように、決まって金曜日にカレーを出

したそうな。

カレーはスパイスが入っている、野菜も入っている。栄養もとれるし、大人数分が作りやすい、滋養強壮にいい。何より作り方が簡単。

というわけで、うちも金曜日はカレーなんですよ。

どうも、田中・一郎です。

「よっし、今日はカレーだ」

うちのカレーは弔が拘るから、インスタントではなくてスパイスから作り上げているカレーなんですよね。

常連さんの中には金曜日にカレーが出るのを知っていて、金曜日にしか来ない人達もいるくらいに、弔のカレーは美味しいものです。

「ム?! 弔よ、どういうことだ?」

あれ、ギルの手が止まった。何時も美味しそうに食べるのに、何でか憤怒の形相なんですけど、何があつたのかな?

「何がだ?」

カレーをかけながら、弔は疑問を浮かべているけど、それは俺もだよ。

「何が、だど? この王の中の王に出すカレーが、これとは。我も舐められたものだな」

「はい？ いや、待った、ギルどうしたんだよ？」

「どうしたではないわ！」

うひゃ?! こ、こっちに殺気が向いてきた。なんて威力だ、前のオールマイトを超えている。さすがが王の中の王、カリスマ全開で怒るとこんなに怖いんだな。

「貴様ら！ このカレーを食して何も思わんのか?!」

「え、カレー？ え、今日のカレーって何時もと違うの？」

そんなバカなど俺は口に運んで食べて、一瞬だけ止まった。

あれえ〜なんだろ、俺は舌が馬鹿になったのかな？ え、これを作ったの弔だよな。あの弔がこんなカレーを作るなんてこと。

「味見したのかよ？」

コナンがスプーン持ったまま止まっている。さすが名探偵、何人か食べてから食べ始めるなんて、おまえはまさに洞察力の塊だな。

いや、ギルが食べる前に止めてくれよ、お前。その洞察力、なんで自分を護ること全開で使ってたんだよ。

「味見したな」

「ならばどういいうことだ?! 貴様！ この我に！ こんな甘いカレーを食せというのか?!」

あ、うん、そうなんだよね。何時も弔のカレーはちよつと辛い、大人向けのカレーなんだけど、今日のカレーはほんのり甘い子供向けなんだよね。

「味見した」

「まだ言うか貴様!!」

ちよつとギル待った!

「おまえ『エア』を抜くほどか?!」

「止めるよギル! こんなどころで宝具なんて使うなよ!!」

コナンと俺で止めるのだが、ギルはもう鎧を纏っていて、絶対に許さないって顔している。これは一発くらいは覚悟しないとだめか?!

「味見はした。ユニコーンがな」

ピタリと、ギルが固まるように止まって、そのまま自然な動作でイスに座りなおした。

「でかしたぞ、弔、お代りを持って」

「おいギル!!」

「おまえはそれでいいのかよ!?!」

すつげえ清々しい顔で笑ってんじやないよ! さっきまでの怒りは何処いったんだよおまえ?!

「何を言う、雑種ども。あのユニコーンが味見したカレーが不味いわけなからう」

「甘いって怒ってなかったか？」

俺が口を挟むと、ギルはフツと笑った。

「男には、いや王には退けぬこともある。故に、すべてを飲み込むものだ」

いやそれ王様関係ないじゃん。ただ、ユニコーンが可愛いだけだろうが。

「てめえ、やっぱりロリコン王って呼んでやろうか？」

半眼のコナンの意見に、俺は大いに同意する。なんでか、最初からギルってユニコーン関係はマジになるんだよな。

具体的には、ユニコーンが出撃するとエアを持ったギルが追従するくらいに。

あれって、天と地を裂いた一撃じゃなかったかな、とか思ってたものさ。

「ふ、名探偵よ、その侮蔑は万死に値するぞ。我はロリコンではない」

「じゃなんだよ？ 幼女趣味じゃないって言うつもりか？」

「当然だ。我はユニコンだ」

え、なんて？ 今、なんておっしゃいました？ 棒が抜けただけに聞こえたんだけど、なんて言ったのさ？

「おいおい、マジかよ」

え、コナンは解つたの。なんで顔を抑えて蹲りそうなの？

「フ、我はユニコーン・コンプレックスだ。略してユニコンだ。フハハハハハ！」

「……誰か、精神科医紹介してあげて」

「なんだか、馬鹿げた話になってきた、もうこいつのユニコーン関係は放っておこう。そうしよう。」

「ギルが大人しくなって、やっと食事ができるって思っていました、俺はかなり甘いよ。うです。」

「やっぱりカレーは牛肉だね」

「スープが凄い真面目な顔で言ったことに、空気が凍りついた。」

「聞き捨てならんな、スープ。今、カレーは何と言った？」

「え、アインズがそこに食いつくの？ いやスケルトンでも、食べ物を食べられるって喜んでいたのは知っているけど、今そこで食いつくの？」

「牛肉と言ったんだよ。僕はカレーの肉は牛肉が至高だと思ってるって」

「ふ……ふははははは!! ギャグにしても笑えんぞ、スープ」

いや笑ってんじやん。って、今度はアインズが怒りだしたんだけど、何でだよ。食事時なんだから、静かに食べられないのかよ。

「ギャグ? アインズこそ、何を言っているのか、解らないんだけど?」

「カレーは豚肉こそ至高であると、私は言わせてもらおう」

「な?! 正気なのかい? 豚肉なんて、そんなものは邪道だ」

「邪道ではない! あの深い味わい、油と肉と見事なハーモニー。菌ごたえがあり、噛むたびにうまみが出るのは豚肉だけだ」

えつとくくあのさ、アインズ、なんでそんなに語るかな。え、今って食レポの時間だったっけ?

「ふう、まさかアインズともあろうものが、そんなバカな考えを持っているとはね。カレーは牛肉が入ってこそ、トロミが増す。牛肉をじっくり煮込み、カレーと混ぜり合わせたらうま味は、まさに天下一品」

さあつと髪をかきあげ、言い切った顔でスープは最後に指をアインズにつきつけた。

「豚肉なんてものを入れたらカレーが脂っこくなる!」

「笑止!! 牛肉こそ脂の塊ではないか?!」

「君、少し味覚を鍛えた方がいよ?」

「それは貴様だろう、馬鹿舌が」

バチリと二人の間で火花が散った。

え、待って、カレーの肉の話でそこまで本気になるの。え、待ってアインズ、杖は持ち出さないようにしようよ。スープも髪の色を戻して、封印解いてんじゃないよ。

え、カレーの話題で二人が全力戦闘って。

「待ってください!!」

「エル! おまえはさすがだ! おまえは止めてくれるって信じてた!!」

よっし、エルが割って入った。これで止まる。

「カレーは鶏肉です! チキンカレーこそ至高に相応しいものです!」

「裏切り者おとおお!!」

「ム! 一郎さんは、チキンカレーを冒瀆するんですか!」

「そうじゃない! いやそれでも有るけど! なんで火に油を注ぐようなことしてんだよ?!」

「譲れないからです!」

燃える瞳で言い切るなよ! なんでおまえまで参戦してんだよ!

「フ、これは勝負をつけねばならんか」

「そうだね。白黒はつきりさせた方がいい」

「当然の結論ですな」

アインズ、ソープ、エルの三人が睨みあって、それぞれの右手が武器を持ち上げる。

あ、ダメだこれ。もう止められない、こいつらを止めるためには俺も最終手段を使うしかない。

「ギルガメツシユ！」

「なんだ？」

「令呪を持って命じる！」

「待てマスター！ こんなことで令呪を使って何をさせるつもりだ?！」

「宝具を」

「さらに待て!! 貴様、まさか我の至高の宝具を、カレー戦争を止めるために使用させるつもりか?！」

「し、仕方ないんだ、ギル。俺はもうどう止めていいか解らないんだ」

震えるように、絞り出すように伝えると、ギルは悔しそうに視線を反らした。

「そう、か。これも人の世の常か。無情だな、マスターよ」

「すまない、ギル。おまえの至高の宝具を、こんなことに使用させるなんて。俺を恨んでくれていいぞ」

「何を言う。あの時、我はおまえに言ったはずだ。最後まで付き合おう、マスター。私のマスターはおまえのみだ、と」

「ぎ、ギルう」

慈愛のこもった瞳を向けてくる英雄王に、俺は思わず涙ぐんで俯いてしまった。その肩に、ギルが優しく手を置いてくれる。

「では行くぞ、マスターよ。我のマスターらしく、胸を張るがよい」

「ああ、ギル、おまえの雄姿は俺が見届ける」

「フ、ならば心してみるがいい！これが英雄王の戦いよー！」

ああ、眩しいな、おまえは何時も眩しい奴だよ。

「………コナン、俺はビーフもポークもチキンも作ったんだが、言った方がいいか？」

「戻ってきたら教えてやればいいんじゃないか？」

「戻って来れるんだろうか？」

「さあ、な」

後ろで弔とコナンが、そんなことを言っていたが、俺は聞かなかったことにした。

さあ、て。馬鹿騒ぎは以上で終わりだな。もう誰も騒がないな、誰も騒がせないぞ、今度騒いだら鎮守府を動かしてやる。

「波動砲と縮退砲と超重力砲にバスターランチャーつて一斉に撃つたことないな」

「待てマスター！ 落ち着け！」

「そうだぞ！ 我のマスターともあろうものが、短絡過ぎる！」

「悪い冗談だよ、止めた方がいいよ」

「そうです！ ロマンの欠片もありませんよ！」

コナン、ギル、スープ、エル。おまえらさ、そんな必死になるんだつたら、カレーの味やカレーに入っている肉の種類でマジになるなよ。

まったくさあ。

あれ、アインズは何やってんだ？ あいつだけ反省してない？

「いや喉ないでしょ!? おまえスケルトン! ガイコツで喉がないでしょうが!」

「ふむ、おかしなことを言う。ではなぜ、私は『食べられる』のかな?」

あ、あれ。なんでアインズが食事ができることに、疑問を感じなかったのか。どうして毎日、同じ食卓にいたのに、疑問が浮かばなかったのか。

ま、まさか、お前。

「ククククク、我が名はアインズ・ウール・ゴウン。ナザリック大墳墓の主にして」

「おまえ俺たちに精神系魔法を!」

「今は流しのギター若大将!」

「はい?」

「正直! 私も何故、喉があるか知らん! 食事が取れる理由など、考えたこともない!」

「なんだと!?! じゃ、なんで今、俺にそんなことを言った?!」

「その方が面白いからだ!」

おう、シット。納得してしまった。面白いってことで、俺の中で疑問が消えてしまっただけ。

「アインズよ、おまえもようやく愉悦が解ったようだな」

「英雄王に認めてもらえるとは。私もようやく一つ上の段階に進めたようだ」

「ようこそ、アインズ、愉悦部へ」

「歓迎しますよ」

「ありがとう、ソープ、エル」

あ、あれ、俺の目の前で凄いい同盟が結束されているんだけど、妨害したほうがいいかな、邪魔した方がいいよね。

いやだって、あの四人が愉悦部を続けたら、確実に俺が死ぬよね。

ダメだ、生贄になる自分しか予想できない。

「おまえらー！」

コナン！ やっぱり俺の味方はお前だけだ！ 絶対に俺を見捨てない、名探偵！ お

まえの観察力と洞察力で、俺をたった一つの真実に導いてくれ！

「俺も、もちろん入れるよな？」

「裏切り者どもがああああああああ!!!」

もう泣いてやる！ もう誰も信じてやらないからな!!

「一郎、俺はおまえの味方だ」

「弔あああ」

「ああ、だから、食事時に騒ぐのは止めろ」

「サーイエツサー!!」

俺達は思わず直立不動で敬礼した。

「なるほど、そのようなことが？」

お酒の仕入れで昼食は外食していた黒霧が戻ってきたので、騒動の顛末をお話しました。

「カレーは弔にとつて、大切な料理ですからね」

「へえくくそうなんだ」

「ええ、自分の人間らしい生き方を教えてくれた人が、最初にふるまってくれた料理とか」

え、そうなんだ。そんな凄い人がいたんだ。そっか、そっか。

「一郎さん、貴方は記憶喪失ですか？」

「え？ そんなわけないじゃん。俺は今までの人生も転生したことも、きちんと覚えて

いるぜ」

カツコよくポーズ決めてやりました。

でも、黒霧に深くため息をつかれたけど。

「やったほうは忘れているが、やられたほうは覚えている。この意味を、こんな時に実感するとは思いませんでした」

「え、何それ？ 哲学？」

「はあ」

あれ、黒霧、なんでそんなに疲れてるのさ。え、俺が悪いの、何かしたの俺？
その日、黒霧はなんで溜息をついたか、教えてくれませんでした。

「一郎、世の中には青いカレーがあるらしい」

「え？」

後日、弔が作った蒼いカレーは見た目に反して、絶品でした。

情熱は燃やすもの、理性は冷ますもの、感情は爆発させるもの？

音楽つて、人を夢中にさせるものらしい。

「憧れよりも遠いものを求め、さらにその先に向かうためにお願い、僕らは旅に出た。もう届かないあの空を懐かしみ、何処までも遙か彼方を歩いていこう」

ランチタイムが終わった店内にいるのは、俺と弔と、もう一人はギター片手にバラードを歌っているアインズ。

「……ムウ。今日の弦は乗らないな」

「珍しい、アインズが歌の途中で止めるなんて」

「なんていうか、何時も勢いで最後まで行くのに、歌詞も途中で投げ出した感じがする。たまにはそんな日もある。私も万能ではないのでな」

「え？」

「いや、おまえは十分に万能だよ。魔法使えて、料理できて、作曲作詞できて、医師免許だつて持つてるじゃん、司法試験とか一発合格つてどんな頭脳しているんだよ。」

医学部、何時の間に卒業したんだよ。

「歌に比べたら人体など、物体があるだけ理解しやすいからな」

「確かに」

え、何それ。え、待って。アインズはまだ解るけど、弔も領いているってどういうこと。え、俺だけ。俺だけなの。飛び級ってあるの、医学部。

「一郎、世の中は進んでいる。きつと、そう言うことだ」

「あれ、俺って今、慰められてるの？ え、なんで『解っている、おまえは素晴らしさはそこじゃない』って顔しているのかな、弔クン」

「解っているじゃないか。一郎の凄さは、その『ガンガン行こうぜ』だ」

「何時、俺がそんなこと言った？」

言った覚えはないぞ、そんなこと。

「なんだと?！」

あれ、アインズ、なんでそんなに驚愕しているのさ？

「うそ、だよな?」

弔、そんなこの世の終わりみたいな顔して、どうしたのさ？

俺が悪いの、え、今の会話の何処に俺が悪い要素があった？

「だっておまえ、追い詰められると『鎮守府』使うだろ?」

「追い詰められたら個性くらい使わないの？」

「デスザウラーを使うのか？」

「……」

納得しちまったぜ、チクシヨウ。

なんでかなあ、あれもエルの悪のりで魔改造が進んでるよな。最初の世界の時だつて、鎮守府の建物じゃなく『敷地すべて』が変形してデスザウラーだろ。で、次の改造でデスザウラーが巨大ロボになって。

現在、そのデスザウラー自体も巨大な翼をもっていたり、大砲を背負っていたりして、面影が消えかけているんだけど。

「……は?! 出来たぞー!」

「え?」

「『ふるえよ我が魂! ロックだバツクだドラフトだ! ファイヤー!』だ!」

「は?」

「絶対におまえを殺す、潰してミンチだこの野郎、貴様が倒れりや俺が前に進める。誰も俺の前を走らせない、一番は俺の専売特許、潰せ、倒せ、ぶつ殺せヤハ!」

いや、何だそれ。アインズがめちやくちやノリノリでギターをかき鳴らしているけど、完全にバラードじゃなくロックだよな。

十六ビートとか言ってやればいいのか？

それともドラムでも出せばいいのか？

「いい曲だな」

「弔、おまえはちよつとは怒ることを覚えたほうがいいって。自分の店であんなに滅茶苦茶な歌を叫ばれて、怒りとか浮かんでこないのか？」

俺が呆れた顔でそう告げると、弔はしばらくアインズを眺めた後、俺に視線を戻してから。

「浮かばない」

「お人よしって言われる前に、ちよつと人並みに怒りを学ぼうか、弔くん」

「アインズは俺の店を盛り上げてくれる。今もこうやって音楽が流れたら、楽しい店だと思つて、ご新規さんが来てくれる。賑わっていた店の終わりに楽しい音楽が流れたら、少しの寂しさも薄れる」

「ごめんなさい、俺が間違っていました」

真顔で語る弔に、俺は思いつきり土下座しました。

うん、そうだね、アインズはいい奴だよ。

俺が悪いんだよなあ、はあ。

「すみません!! 俺を弟子にしてください!!」

「え？」

なんかいきなり、見知らぬ少年が隣で土下座しているんですけど。

店だとなんだから、場所を移して居間に来てもらった。

「爆豪勝己です。雄英を志望しています」

「はあ？」

「噂は聞いています！　どうか俺を弟子にしてください！」

「えつと〜〜」

どういう状況なのでしょう、これ？

アインズが何時も通りにランチタイムの終わりに、ロックを歌っていたら、この少年が弟子入り志願してきました。

俺じゃないよ、弔でもないよ。

「フム、理由を聞いてもいいかな、少年？」

「はい！ 昔、貴方の歌を聞いて惚れました！」

「昔か。なるほど、まだまだ青い頃の私の歌を。恥ずかしいかぎりだな」

「いいえ！ あんな魂にガツンとくる歌はなかった！ だから俺は貴方に弟子入りして戦って歌って勝てるヒーローになりたい！」

「お、ヒーロー志望の少年か。雄英つてのは、確かヒーロー目指す学生が入る学校だったよな。」

あれ、そこはオールマイイトが教師することになってたんじゃ、なかったっけ。

「戦って歌って勝てるか、言うは容易いが行うは難しい。私でさえ、歌って勝ったことはない」

「貴方でも」

「なんか、悔しそうにしている爆豪君。アインズの実力は知らないけど、かなりの強者だつてのは感じているのかもな。」

「二郎、俺は正直に話したほうがいいと思う」

「そうだよな」

「彼は知らないだけだ。真実を話すべきだ」

「確かに知らないよな」

うん、知らないんだよな。アインズが、歌って勝ったことがないのは本当のこと。戦いの中でも、誰かと敵対したとしても、アインズは歌いきって勝ったことは一度もない。だってさ、歌い始めて歌い終わるまでに戦闘終了だぜ。そもそも、魔法の詠唱を『脳内で出来る』アインズを前にして、最後までたっていることは奇跡だって。

「故に私から君に教えられることはない。申し訳ないが、君は君の道を自分で歩んでいくしかない」

ギョツと唇を噛んで爆豪君が俯いている。あれって、きつとかなり長い時間をかけて探したんだろうな。

え、でも、ガイコツでギターを背負っているなんて、解り易いと思うんだけど、今ままで探せなかったってこと。

「だがしかしだ！」

話は終わり、と思っていた俺がいました。

なんかアインズが突然に叫んで立ち上がって、背負っていたギターを差し出していきますよ。

あれえ〜〜。

「君の情熱はよく解った！ ならば私は同じ道を志すものとして、これを贈ることにし

よう!」

「あ、ありがとうございます!」

あゝ爆豪君、泣いているよ。そんなにアインズに会いたかったのか、言ってくれたらいくらでも会わせてあげたのに。

いや、知らなかったから言えないか。

「ところで君の個性を聞いてもいいかな?」

「はい! 俺の個性は『爆発』です!」

「な?!」

アインズ驚愕。アゴが外れんじゃないかってくらい、口を大きく開いているけど、そんなに驚くことか。

「君の個性は爆発なのか?」

「はい!」

「なるほど、なるほど……これが運命か!」

あれ、ちよつとアインズ。なんでガッツポーズ。なんか、ようやく勝てたボクサーみたいな見事なガッツポーズだけど。

「君に見せたいものがある」

「え?」

ガツシリと爆豪君の肩に手をまわしたアインズは、そのまま家ではなく『鎮守府』の方へ連れて行ってしまった。

「俺は凄く嫌な予感がするんだけど、弔はどう思う？」

「奇遇だな、一郎。俺も凄く嫌な予感がする。具体的には、『おまえらなに爆豪を変な方向に向けてんだよ』と、方々から怒られるくらいに、な」

あ、そう。いやそれはもう弔と黒霧で覚悟しているからいいけど。

待った、本当に待った、アインズの奴は何をさせるつもりなんだ。『鎮守府』って何をさせる、っておい!!

「さてアインズ！ おまえ並行世界の記録とか・・・」

「『感情を爆発させろ！ おまえの歌はそんなものじゃない！』」

時すでに遅し。俺はその日、過去の偉人達の偉大な言葉を実感しました。

彼にとって、それはまさに理想の極致。

何万の敵を体一つで叩き伏せ。向かってくる強敵にひるむことなく突き進み、どんな窮地も歌を相棒に駆け抜ける。

止まらない、誰も止められない、歌い出したらもう止まらない。道を阻むものなど何もない。

情熱を燃やし、理性を冷やし、そして感情の爆発のままに突き進む。

彼にとって、その映像の人達はまさに理想そのもの。

圧倒的強者。

他者を寄せ付けない孤高の存在。

仲間と前に進み、正義のために世界を救う。

「次だ」

アインズの手は止まらない。なんだこれは、と爆豪は思う。この映像の人達を見たことがない。アニメか、あるいは特撮か。自分が知っているヒーローとはまったく違う。

けれど、彼らはまさにヒーローだ。心の底から熱くさせてくれる、魂が震えるほどに魅せられる。

「では、最後だ」

そして衝撃が、爆豪の心を揺さぶった。

戦場を舞う戦闘機。幾つもの火線をくぐり抜けながら、一度の反撃もせずに歌い続ける。敵も味方も関係ない、命のやり取りを行う戦場にありながら、彼は常に自らの歌で周囲を魅了し続けた。

「私の理想だ。まさにロック、歌うものとして彼に並びたいと考えている」
そして最後に爆発とともに、彼は叫んだ。

「ファイアー」

自然と爆豪も同じ言葉と眩き、拳を握った。

「俺は目指す者を見つけた」

「ああ、君も理解してくれたか。そうだ、彼こそが我らが目指す者」

「そうか、そうかよ」

沸々と心の中で何かが燃える、グツグツと音を立て始めた何かに突き動かされるように、爆豪は笑みを浮かべて拳をさらに強く握る。

「アインズさん！俺は見えた！もう迷わねえ!!」

「そうだ爆豪！私はおまえに道を示した！後は自らの考えで進むのみだ！」

「ああ!! ありがとうアインズさん！俺はこの道を極める！」

「見事な決意だ！ならば私も負けぬように研鑽しよう！目指すは！」

「歌って勝てるヒーローだ！」

「その意気だ！」

グツと拳を突き出し、爆豪は宣誓した。

その背をアインズは誇らしげに眺めながら、こう思う。

『いつか、特撮ヒーローみたいな登場シーンをやってくれないかな』と。

あの日から、爆豪君はよく家に来ては、戦隊ものの映像を見てはポーズを決め、シンフォギアとマクロス見ては熱唱していった。

「一郎さん、俺は狭いを世界を見ていたんだな」

「そうだね」

もう適当に頷いとくしかない。彼が進んだ道が、彼自身に対して何かしないことを祈るしかない。

「情熱を燃やさないよ、俺はまだまだ個性を使いこなせていない」

「そうだな。個性は磨けば磨くほどに高まる」

「弔さん、ありがとうございます」

「精進しろ、爆豪。おまえの努力は必ず個性を磨く」

「はい！」

あれ、弔がなんだか応援しているんだけど、何で？ 最初は『マズイことになった』つ

て俺と一緒に考え込んでいたのに。

「そして、火力の調整を可能にして、俺の料理に磨きをかけてくれ」

「やっぱ、おまえってブレないよな」

弔はやっぱり、弔でした。

まったくこいつはアインズのやり方に乗っかって、爆豪君に何をさせるつもりだよ。

爆発を使った料理って、何があったつけ？

「ステークを瞬間火力で作ると、おいしくなるらしい」

「え、それって都市伝説じゃ？」

「ディナー用の火力が欲しかった」

「本当におまえは何をさせるつもりなんだよ？」

半眼になって見つめる俺に、弔は清々しい顔で答えた。

「料理だ」

「あ、そうね」

もう放っておこう。

爆豪君に悪い影響が出ないように祈りながら、俺はこの問題を放っておくことにした。

「やってやったぜこのヤロー！」

後日、爆豪君がギター片手に歌いながら、ノリノリで戦隊ものみたいな登場シーンをやっているのを見て、アインズって愉悦部よりは育成に向いているんじゃないかって思った。

気の迷いだろうな。

そして、その時の俺は知らなかった。爆豪君がここに染まったことで、もう一人の哀れな生贄が来ることを。

154 情熱は燃やすもの、理性は冷ますもの、感情は爆発させるもの？

「
こ
こ
かな、
か
つ
ち
や
ん
」

デク君がヒーローやりたいけど無個性だから武器庫化しようぜ

それはある日のことだった。

どうも田中・一郎です。今日も騒がしい日々が始まるのかな、なんてちよつと乾いた笑みを浮かべてみました。

速攻で、弔に病院に行くように言われたけど。

さて、それでは今日の本題です。

「実は相談があるんだが」

「え、アインズが珍しいな、何があつたんだ？」

「ああ、実はな。無個性の少年がヒーローになりたいと言っているので、『武器庫』にしたいんだが、どうだろうか？」

みんな、聞いてくれ。誰か俺に教えてくれ。

うちのアイズはついに、

歌だけじゃなく改造人間を作りたいって言うようになったよ。

危ない、危ない、つい俺の精神がメビウスの輪を超えてしまふところだった。ふう、アムロとシャアに会う寸前で、『どこいくのさ、一郎』ってソープが連れ戻してくれたから助かった。

なんか、駆逐艦に囲まれたシャアが、『やあ、一郎、私はついにやり取りげたよ』とか言っていたけど、気のせいだよな。

めっちゃ、アムロが精神科に通っていて。『俺のライバルがロリコンって病気なんだが』とか相談していたけど。

現実逃避だよ、察してくれよ。

「よっし、戻った、戻せた」

「うむ、見事だぞ、ソープ。さすが我も認める神だな」

「煽っても愉悦情報しか渡さないよ、ギル」

「フッフフ、やはり貴様は見どころがあるな」

「君ほどじゃないさ」

俺の後ろでなんか、黒い影が踊っているけど、忘れた方がいいよな。もう俺の精神は削りに削られているから、関わらない方がいいよな。

触らぬ神にたたりなし。いや、無視する愉悦部の被害はなしだといいな。

「よおおおし、アインズ、それでなんだって？」

「うむ、緑谷出久君という少年がヒーローをやりたいというので、武器庫にしなければいけないと私の何かが叫んでいる」

「……え、待って。ちよつと待ってくれないかな？ え、どういふことで何が目的で

「武器庫?」

「彼は無個性だ。この個性社会でヒーローをやるからには、武器庫くらいはないといけないのだろうか?」

「冗談だよな、アインズ?」

「違うのか?」

あ、これはマジだ。ボケとかジョークじゃなく、マジで武器庫にしなければ(使命感)に駆られている。

「いやヒーローをやるのに、武器は必要かもしれないけど、武器庫にまでしなくてもいいよな」

「そういうものか。私はてつきり、最近の主流は『手数が多い、そんなの当たり前。今の時代は大量の武器でしょ』とばかりな」

おう、これは情報源が危ないってことか。アインズは素直なところは素直だから、知った情報を頭から信じてしまうことがあるんだけど、今回はその情報源が間違っていたんだな。

「と、ギルが言っていたが?」

「ギルううううう!!!」

おまえかやっぱり!　なんでそう俺の周りをひつかきまわすんだよ!　愉悦部って

言い訳ですべてが通ると思ったら、大間違いだからな！

「フ、マスターよ。我が間違えるとしても？」

「明らかに違うだろうが。ヒーローが武器を大量に持っているなんて、何時の時代の話だよ？」

「そうか、良からう。一郎がそう言うのならば、これを見るがいい」

バツとギルが手を振るうと何時もの鎧姿で、マントが翻ってその先に映像が流れてきた。

「これが仮面ライダー1号とウルトラマンだ」

「知っているけど」

え、今になってこれ？ 最初の二人だよな？ 俺にこれを見せて何がしたいんだよ？

「そして、これが令和になっての仮面ライダーとウルトラマンだ」

俺はその瞬間、ギルの前に土下座した。

「ごめんなさい」

「解ればいい。マスターよ、時代は今や『多数の武器と変身道具』。故に、これからヒーローを目指す者には、武器庫は必須のもの。その雑種にはふさわしい道具を与えねばな」

そっか、そうか。俺は間違えていたのか。時代はそうだったものか、大量の武器を

持って戦場に現れて、敵を薙ぎ払って帰っていく。

後にはペンペン草一本さえ生えない、無人の荒野が広がっていると。

うん、ないわ。

「あのさ、ギル、本気で言っているのか？ まあ、確かに最近の仮面ライダーとかウルトラマンって武器が豊富だけど、それってさあ」

「なんだマスター？ 我の決定に異論がある？」

うお、鋭く細められた目が蛇のようにじゃないか。昔は怖かったんだけど、今は平気だぜ。なんでって、もっと怖い状況は敵が一杯いたからな。

泣けてくるぜ。

「大量破壊者って言わない？」

「……フ、なるほど。貴様は我にこう言わせたいのだな？」

「え、何の話？」

「おのれデイケイドおおお!! と」

決め顔で言っても、意味不明なことに変わりないからさ。なんでそこでデイケイドを叫ぶのさ。

最近、うちのギルも愉悦のために体を張るようになりました。昔のギルはプライドが高くて迂闊に触れると死ぬけど、もっとカッコ良かった気がするなあ。

はあ、どつと疲れた。

「一郎さん！ 俺からもお願いします！」

疲れたんだけど、なんでか俺は休めずに居間で土下座を見ていると。

「か、かつちゃん。なんでぼくのために」

「うるせえ！ てめえも頭を下げろやデク！ この人に頼みこめばおまえもどうにかなるんだよ！」

「かつちゃん！」

なんだか感動して涙を流しているのが、デク君ね。で、なんだかすごい勢いで土下座

しているのが爆豪君っと。

あれ、君って確か、デク君のことを嫌っていたんじゃない。

「昔の俺なら、デクのことなんかどうでもよかった。こいつのことが鬱陶しくて、生意気で、言い負かしても反論して止めなかったことがイライラしていた」

「なのに、なんで今は力になりたいって思ったのさ？」

「それは……こいつの魂がロックだからです！」

「よくぞ言った爆豪!!」

え、はい？ あれ、俺だけ。俺だけが理解していないの？

「アインズは立ち上がって大きく頷いているし、ソープとエルも腕組みして頷いているし。」

ギルに至っては凄く優しい笑顔で見つめている。

あれ、コナン、俺が察しが悪いの、ねえ？

「おめえが察しが悪いんじゃないやなくてな、こいつらが感性で話を進め過ぎなんだよ」

「よかった。それで、何がどうなって？」

「はい！俺がロックに目覚めて、熱い魂を知った。その想いを感じることを教えてもらった。だから解るんです！今のデクの気持ちは半端なものじゃない!!こいつは死ぬことになっても、ヒーローになろうって思っている！なら俺は！幼馴染として

俺はこいつの夢を押しやりたい！ こいつの魂が叫んでいるなら俺はその夢と一緒に追いかけてたい！ それが俺にとってロックだからです!!」

「見事だ！ その心意気！ その友を想う気持ち！ まさにロック!!」

「はい！ アインズさん!!」

「爆豪！ おまえは今ロックの神に負けることない熱いハートを持ったぞー！」

「おおおおしやああああ!!」

爆豪君、両手でガッツポーズ。なんだか、ボクサーが世界タイトルをとったように見えるんだけど、気のせいだよ。

「ちなみに、ロックの神って誰だろう？」

「なんでこんな時にそんなこと気にすんだよ。熱気バサラじゃないのか？」

コナンってそつちなんだ。

「え、エル●イス・プ●スリーじゃなくて？」

「この世界にもいるのか、あの人」

いるんじゃないかなあ。あの人って、何処の世界でもキング・オブ・ロックンロールだったよ。

「だからこそ！ 皆の力を借りたい！」

「お、話が戻ってきた。いいけどさ、アインズ。俺の力つてないようなものじゃないか

「？」

技術力ないし、資源力もないし。できることって少ないような。

「大丈夫だ。一郎が一言、『解った』と言ってくれたら皆が協力してくれる。我々の『マスター』だからな」

「え、俺が？ え、でもさ、俺に相談なく物事を何時も進めるよね？ コナンとか率先して隠し事するよね？」

「やろうか、マスター！」

「何を焦ってんだよ、名探偵？ え、何、おまえまた何か隠し事しているわけ？」

「バーロ、そんなんじゃないよ」

ウソつけよ、お前。なんか隠してるんじゃないのか？ それとも、すでに終わった後か？ エルみたいに、『あ、終わりました、書類です』とかやるなよ、お前。

「となるとだが、その雑種の思考を探る必要があるな。武器を持たせたとしても、扱えなければただの重荷でしかない」

「え、ギル、おまえ乗り気なの？」

うわ、珍しい。うちのギルが乗り気ですよ、雑種って呼んでいる相手に対して、そんなに優しく接することができたっけ？

「フ、今回ばかりは我も『宝物庫』を開けようではないか。大盤振る舞いだ」

「おいおいおい、明日はこの星が終わるんじゃないか?！」

ちよつと待てよ、お前。なんでそんなにノリノリなんだよ、しかも自分の至高の財宝が入った宝物庫を開くつて、どんだけ乗り気なんだか。

うわ、明日で世界が終わるか。

「無礼だぞ、マスター。我はただな、アインズの意見に乗っただけだ」

「ふむ、そうだな。私もギルをあの一言で説得できるとは思わなつたが、これも行幸だ」

ギルを一言で説得う? え、なにその方法。俺もコナンもギルを乗せるつて結構な労力を使うんだだけだよ。

「あいつ、未だにギルが非協力的だつて思つてるぜ」

「昔の我は随分とやんちゃだったからな。今は俗世に塗れて見せよう」

「おいおい」

なんか、後ろでコナンとギルが言っているけど、放つていく。さあ、アインズ、俺にギルを乗せるその魔法の一言を!

「令呪があるの、忘れてないか?」

「我がマスターながら、どうしてあんなに忘れっぽいのか」

うるせえよ、お前ら。

「教えてくれ、アインズ」

「ふむ、良かろう。我はただ、ギルにこう言っただけだ」

そこでアインズは両手を盛大に広げ、声高らかに宣言した。

「そのほうが面白いだろう！」と

ああ、なるほど。確かにそれはギルが動く。すつごく喜々として動き出す英雄王が見えるよ。

ただし、それは俺に多大なダメージを与えるカウンタースペルだけだな。

無意識に胃のあたりを抑えながら、俺はフツと笑って膝をついたのでした。

「一郎の許可は貰ったと判断した」

「なんで弔が仕切っているんだよ。え、おまえも愉悦のためにデク君を武器庫化したい

の?」

まさか、こいつもか。止めてくれよ、弔まであつちに染まったなんてことになったら、俺一人で突っ込みが追いつかないんだよ。

「俺もデクは武器を持つべきだと思う」

「おい弔あ!」

「あいつはな、ヒーロー気質だ。困っている人がいたら、考える前に体が動く。誰かの助けてに、条件反射で動いてしまうやつなんだよ」

あれえくくなんだろう、てつきりもつと滅茶苦茶な理由を言ってくると思ったのに、凄い真面目な顔で弔は語ってくるよ。

「自分が危険になるなんて考えは、頭から綺麗に消えてしまう。誰かが困っていたり、助けてって顔していたら、見て見ぬふりなんてできない。このままじゃ命を落とす。だから、あいつの手助けをしてやりたい」

「そうなんですか」

ヤバイ、弔が凄い真面目な顔で語ってくるから、俺の何かが削られていく。具体的に、『ごめん、邪推して』って邪な部分がガンガンと心を叩きつけてくるんですけど。

え、おまえ、こんな純粋に考えている弔に対して、おまえもかとかそんな失礼なことを考えたの、なんて心の声が聞こえてくるようだぜ。

「あいつに人助けやめろなんて、死ねと言っているようなものだから。それにな」
「そ、それに」

止めて甲！ 俺のライフはゼロですわよ！

「あいつは俺に似ている。助けてって声で力になる奴だからな」
フワツと笑う甲の笑顔と、その後ろにさす後光によつて、俺の体は溶けていくのでした。

ああ、もういいや、ララアさん、俺はそつちに行きますね。

「だから、何処に行くんだよ、一郎」

「は?! 危ない、危ない、サンキユ、ソープ」

ふう、また次元の壁を越えてしまうところだった。もううちの甲は純粹で、人を疑うとか貶すってことしないんだから。

「まったくさ、疲れるからもう止めてくれないかな?」

「こ、今回だけだつて」

よっし、じゃあ気合を入れて。

「というわけで、デク君がヒーローになるために」

「違う!!」

ブ?! な、何かで頭を叩かれたんだけど。アインズかこら!

「違うぞ！　ここはこう言うのだ！」

「はい？　え？　『第一回キキデク君魔改造武器庫化計画大討論』？」

待って、なにこれ？　横断幕まで作ってあるんだけど、何がしたいの？

あ、いつの間にか居間の中央が少し高くなって、そこにデク君が座っている。

「おいこら！　何時の間にこんなセット作った！」

「気合と根性だ」

決め顔で止めろ、ガイコツ！

「フ、我に不可能はない」

おまえは引っ込んでいろ、英雄王。

「それよりも！　僕としてはロボットと融合！　ロボットと合体して巨大化を押ししたい

のです!!」

「おまえはブレないなエル！　え、待って何それ?!　何処から持ってきたそのアイディ

ア！」

「なるほど！　ではこの『ダグ●クター』を使って禁断の超火炎合体をデク君に！」

「おまえがそれを持ち出すなよ、アインズ！　何、鎮守府の倉庫から持ち出してくれ

ちゃってるの?!」

おいおいおい！　それは宇宙警察機構の人が、『記念品にね』とくれたもんだろぅが！

「ダメだアインズ！」

「よし、よくぞ言った、コナン。もつとやれ」

「デク君は緑がパーソナルカラーだ！ なら、ここは勇気を源にする石を渡して」

「なるほど！ 最終的に金色の破壊神になる、と！」

「なるほどじゃねえよ！ コナン、おまえも何してんだよ！ その石とライオンは使わないって決めただろ！」

「危ないことしてんなよ、なんだよそれは！ 第一、あれを使ったら星が消えたの忘れたのかよ!」

「探偵の宿命みたいなもんだな。謎は解き明かしたいんだよ。具体的にはどうして勇気がエネルギーになるのかってことをな」

「解き明かしていい謎と解き明かしちゃダメな謎があると思います！」

もうやめなさいよ！ 本当にダメだから止めてくださいよ！

「なるほど。じゃ、アーマードにしてミサイルを多量に積むってことだね」
違うって、ソープも頼むから真面目にやれよ。

「そうか、そうか、そういえば、メタトロンも緑色に発光するはずでは？」

アインズう、どうしてそっちに話を飛ばした？ というより、なんでみんながロボッ

トに話が行くんだよ。

あれか、エルのためか、最初にああいったのは、この時のためか。

「失礼な。僕も状況を選びますよ」

「本当か？」

「はい！ ロボットのためなら手段を選びませんけど！」

「自信を持って答えるものじゃない!!」

ああ、もう俺一人がツツコミって、虐めじゃないか。

その後も、デク君に改造計画、あるいは武器庫化計画は激論が続いた。

「やはりガンダム系がやりやすい！」

「却下です！ 今さらそんなありふれたロボットなんて僕のロボット主義が許しません！」

「いや、ロボットから放れようぜ。武器庫だろ、武器庫」

エルが絶対にロボットにしたいって考えて、そこに固執したり。

「ふむ、ならば変身させてはどうかね？ ここは仮面ライダーのどれかを」

「変身はロマンなんだけどね。デク君との相性が問題かな」

割と真面目なアインズと、それに真面目にシミュレートするソープがいたり。

「おい、ギル。おまえの『宝物庫』参考にした方がいんじゃないか？」

「当初は私もそう考えたのだが、いかんせん、デク自身の『黄金律』が低すぎる」

「そっか」

危なかった！ もう少して我様デク君爆誕するところだった会話が、コナンとギルの

間でされたりとか。

え、ギル、待って、『宝物庫』を参考にしてもいいの？

「いっそのこと、何かと混ぜますか？」

「そうだな、崩壊させるか」

突拍子もないこと言いだす黒霧と、乗り気になりつつある甲を止めたりとか。

「かつちゃん、本当に大丈夫なの？」

「大丈夫だ、この人たちに任せておけば、おまえもロツクだ」
「ええ〜」

幼馴染のあまりの変わりように、なんだかデク君が涙目になっていたりして。

あ、彼は俺と同類だ。周りに振り回されるタイプだ、なんてことを俺が思ったりしたのは内緒の話だけだ。

「決まらん」

「そりゃ、あんだけ好き勝手に言ったら決まらないでしょうが」

決めるつもりあったんだ、アインズ。俺はてつきり、馬鹿騒ぎで終わりにしたかったのかって思ったよ。

「こうなりや、本人に決めてもらう方がいいんじゃないか？」

「は!! なるほど、それは盲点だったな」

「え、いや普通にそれが一番じゃないの？」

コナンの提案に、アインズが頷いているけど、なんで最初にデク君の話聞いてあげなかつたのさ。

「というわけで、デク君、君はどんなヒーローがいい？」

「ほ、僕は……」

いきなり話を振られた彼は、ちよつとだけ周りを見て怯えた顔になった。あ、怖いよ

ね、周りがこんな連中じゃ怖がって当たり前だけど、気のいい奴らだけだから。

かなり、愉悅に染まって、楽しいことのためなら色々やるけど。

「僕はオールマイイトみたいなヒーローになりたいです!」

へえ〜そうなんだ。そっか。

「つまり、『ハ●ク』になりたいと!!」

「おまえら全員! 頭を冷やしてこいよ!!」

なんでオールマイイトの名前の後に、アメリカのヒーローが出てくるかな?!

まったく、どいつもこいつも。

「デクがオールマイイトになりたいなら、体を鍛えないとな」

「はい! 鍛えます!!」

「そういえば、艦娘の艦装って重いんじゃないやなかったか?」

え、甲、何を言っているのかな?

あれ、デク君、それってどんな顔。え、艦娘を知らない、見たことない。確かこの

世界にはないからね。

艦装がかっこいい。いや、でもそれは男は装備できない。

あ、出来た。え、君って『前世、艦娘』だったりします?!

しかも土佐型の奴を装備ってなんで?!

「というわけで、デク君です」

「ありがとうございます!!」

こうして彼は見事にヒーローになったのでした。なんだけ、緑色の輝きを放つ艦艇の機装を纏ったヒーローの話が、世間で噂されるようになったのですが、俺はその話を聞かずに遠い眼をするようになりました。

「そういえば、爆豪とデクは雄英を受験するそうぞ」

「へえ〜俺、逃げ出したい」

「無理だろうな」

後日、俺はオールマイトに呼び出しを貰いましたとき。

掛け声って大切だよ、気合いが入るよね

金属の心地いい音って、妙にカツコイイって思う瞬間って、ありませんか。え、ない？ あ、そうですか。俺だけなのかなあ。

どうも、田中・一郎です。

デク君、ついに無個性のまま個性を持った相手を下す。

相手が何の個性を持っていても、けが一つなく傷一つなく圧倒。もうね、無双ですよ、無双。だって、艦娘の艦装って『艦艇と同じ』なんだぜ。

人型サイズに縮小されているから、威力も装甲も落ちているんじゃないのって誰もが考えるよね。

とんでもない。霊的な何かが重なった結果、軍艦時代の装甲と火力が倍加している場合のほうが多い。

しかも、デク君が適合したのは土佐型。空母とか、戦艦じゃなくね、『超超超弩級戦艦空母・土佐』のだからね。

七百メートル以上の船体に、五十二センチ三連装が二十四基。飛行甲板二つに魚雷ま

で搭載した、化け物軍艦。

重力子機関の有り余るエネルギーがクライン・フィールドを強固にして、超重力砲の直撃を平然と受け流すって、もう何してんのこいつらって装備なんですよね。

俺の昔の知り合いが、『てめえ、超戦艦五隻分の装備じゃねえかよ。ミラーリングどうした、おら?』とか言うくらい、キチガイな性能なんですよね。

あ、ミラーリングって次元のはざまに攻撃を反らすことで、防御する『絶対防御』の一つらしいんだけど。

デク君がいくら頭がよくても、量子コンピュータには勝てないので搭載してないはず。

「超位魔法!」

「ミラーリング・システム!」

あれえくくくなんだか普通に使っているけど、何で?

え、搭載してないのよね? 搭載したって話は知らないけど。

俺だけ、俺だけがまた知らなかったの?!

「コナン!! どういうことだよ!」

「あんな、マスター」

そこで俺を見るコナンの目は、呆れていました。笑っているんだけど、眼は確実に『こ

いつは、またかよ』って言っていました。

「あいつら、霧の艦艇みたいなもんだろ？」

「だからってデク君じゃんか！」

「妖精さん達はいないと思ったのか？」

「くあ?!」

わ、忘れていたぜ。妖精さん達だよ。今もデク君の汗を拭ったり、艀装の中で整備したり、デク君のコスチュームのところどころにひつついて、補修している妖精さん達を忘れていたぜ。

「量子コンピュータ並らしいぜ。一人一人が」

「俺達、デク君に何をあげたんだっけ？」

「武器庫だな」

「そっか、そうだよなあ」

凄いいい顔で訓練しているデク君を見ながら、俺は笑うことにした。

俺、オールマイトに殺されるかもしれないなあ。あ、でも大丈夫か。あの人はヒーローだから、許してくれるさ。

うん、きつとそうだ。

フラグじゃないよ?! 本当にそう思っているだけだからな!

「マスター」

「な、なんだよ、コナン。なんで俺の肩を掴んで……」

なんだか優しい声で俺の肩を掴んだコナンを見るために振り返ると、訓練場の入口に立っている金髪筋肉のヒーローがいた。

俺の個性、『手のひら鎮守府』は、かなり応用がきく能力だ。他の世界の知識を収めた資料室やら、作戦を考えるための会議室、それから資材倉庫や機装の整備工廠。

それにエルとソープの怪しい研究所や、アインズの野外ステージ。物資の精製場とか。

簡単に言うと、皆が考える鎮守府、あるいは軍事基地みたいなものがそっくりそのまま異世界にあつて、必要なものを必要な時に取り出せるってこと。

逆に、目印をつけておけば、そこに『入っていける』から、よく弔とか黒霧は訓練場

で個性訓練しているんだけど。

たまあに、外では被害が出るから訓練できないってヒーローが、訓練場を使っているんだけどね。

そう、噂のナンバーワンとか。

「いいかね、田中少年？」

「もうちよつと待つてくさい、オールマイト」

説明乙、現実逃避してんだよ。解つてるだろうが。

「私も、大人だから待つとしよう。しかし！ 根気強い私でも、限度があるのを忘れないでくれないかな？」

「は、はい。もちろんです」

ク、怖い。本当に怖い。こんな恐怖を最近は何度も味わっていないだろうか。しかし、この怖さはあれだ。ギルを召喚して二年後、あいつが楽しそうに笑っている時に、『英雄王、俗世に染まる。プ』って笑った時以来だ。

うん、あの時のギルは凄いい残念そうな顔の後に、笑顔でエアを抜いたんだよな。本当、天地を切り裂いたとか、原初の地獄を作り出したって一撃は、凄いい威力だったよ。

俺、よく生きてたなあ。

「田中少年？」

ふう、そろそろ向かい合うとするか。

「どうぞ、オールマイト」

「よろしい・・・では」

その日、俺は彼がナンバーワンだと改めて知ったのでした。っていうか、怖いよ、なんだよあれ。お説教だけなのに、死ぬ思いだよ。なんで俺ばかりこんな目に合うんだよ。

俺が悪いのか、俺がダメなのか。俺が罪深いからか、あれか何回も転生しているから幸運が逃がっているのか。

「ギル~~~~幸運を上げる宝具かして」

「マスター、幸運とは自分でつかみ取るものだ」

お説教が終わった後、俺は速やかにギルに泣きついた。そろそろ、俺は限界かもしれない。

「解った」

「待て！ 貴様は何をしようとしている!？」

「え、令呪を使つて」

「令呪を思い出したと?! ま、待て話せば解る」

フフフフ、ギルう。おまえの令呪への耐性が落ちているのを、俺は思い出したんだぜ。

今のおまえは令呪の強制力に逆らえない。しかも、俺の令呪は神様特典で強化されている。

『神様クラスでも大丈夫さ』と、いい笑顔で言った神様に、俺は感謝しているのさ！

「待て、待つんだ、マスター！ 何をするつもりだああ?!」

「令呪を持つて命じる！ ギルガメツシユよ！」

「貴様ああああ!!」

「俺に幸運くれ！」

「は？」

何を呆けているんだよ、ギル。いいから俺に幸運くれよ、絶対にその手の宝具、持っているだろ。いいからよこせ、俺に幸運をくれよおおお！

「マスター、それは不可能だ」

「え、何で？」

「おまえの幸運は転生と我とコナンの召喚、アインズ達を招いたこと、鎮守府を強化し、絆を多くの者と結んだことで使い果たした。増加はしない」

「え？」

あれ、なんだろ、ギルの姿が歪んでいる気がする。え、あれ、そうなの。俺つてもう幸運が上がらないの。

は、はははは、おかしいな、俺は立っているはずなのにさ、今すぐに意識を失いそうだよ。眠いのかな？

お休み。

「田中少年」

「はいオールマイト?!」

怖?! な、なんだ俺は何をしていたんだ?! え、待った俺はギルに令呪を使って、使つて。

「何があつたんだらう?」

「戻ったか。ならばよろしい。では、話を続けよう」

「え、オールマイト。お説教は終わりなのでは?」

続くの、止めてもうダメだよ。俺のライフをマイナスにするつもりですか?

「いやお説教ではなくな。緑谷少年の装備のことだが、防御はかなり高いと聞いたが?」

「そりゃ、軍艦の装甲ですから」

「なるほど。では」

ではって…….……はい?」

「私の攻撃を受けられるかな、緑谷少年?」

「お、オールマイト?! もちろんです!」

「では行くぞー！」

「はい!!」

え、あれ、何してんだろ、あの二人？ え、待って、オールマイト。なんで初対面のデク君に攻撃、え、全力。

「ちょ!?!」

そして、俺は衝撃で弾き飛ばされました。

ここ、俺の個性の中なんだけどなあ。

「ハーハツハツハツハ！ いやすまないね。重装甲の防御と聞いて思わず試してしまっ
たよ」

「いえ！ 僕も憧れのオールマイトと試合できて嬉しかったです！」

「そうかそうか」

目の前で笑い合う二人を見つめ、俺はそつと右手を握り締める。

「エル、俺は今ならデスザウラーを完全に使える気がする」

「え、はい。使うんですか？」

「ああ、使える気がする」

沸々とわき上がるこの感情はなんだ。この全身を締め付けられるような、それでいて何もかも切り裂きたいようなこの気持ちは。

俺は、そうか、そう言うことか。この感情は。

「まさに愛だ」

「ちつがあああう!! 弔おまえはなあ?!」

「違うのか？」

え、そこできよとんと見るの、弔クン？

「愛なのか？」

「あ、愛ですか？」

「そこ！ オールマイトとデク君！ 違うから俺は普通に女の子が好きな男の子だから

！」

「不純異性交遊はヒーローとして認められないな」

「オールマイト!! なんでもそんなに真顔で問い詰めてくるんですか?!」
「いや、君の周りには美少女ばかりだからね」

美少女? え、誰のこと?

あれ、と周りを見回して俺はエルとソープが手を振っているのを見て、慌てて首を振った。

「あいつら男ですから!!」

「何を言っている、田中少年。もちろん知っているぞ」

「じゃ誰のことですか?!」

艦娘か?! 彼女達ならば美少女ばかりだから納得だけど。

「彼女のことだよ」

オールマイトが指さした先、何故か猫耳をつけた『トツテイ』君が。

「え?」

「彼女は女性だろうか?」

驚愕の事実、エイリアン『トツテイ』君は、実は『トツテイ』ちゃんでした。

「え?」

「マスター、おまえまさか知らなかったのか?」

コナンが呆れた顔で見えてくるので、俺は小さく頷いておいた。

「はあ、あいつ『エイリアン・クイーン』だぜ」
あ、確かに女性でした。

訓練が終わり、デク君は艀装を解除した。パツと光つて艀装が消えて、彼の首元にペンダント形の船がぶら下がっているんだけど。

「完璧に使いこなしているな」

「ありがとうございます、弔さん」

「ああ、後はあの訓練だな」

え、あれ、何か残っていたのか。

「一郎、とても大切な訓練が残っているんだ」

「とても大切な？ でも、艦装は使えますし、展開も問題ないので。後となると」
「デク君も困惑しているな。俺もそうだよ。艦装が使えているんだから、問題ないんじゃないのか。」

あ、戦闘訓練か。あれは確かにまだまだ経験値を積まないとだめだよな。

「一郎、戦闘訓練じゃないぞ。あんなのは戦っていれば自然と身につくものだ。実戦こそ訓練に相応しい。」

「え？ え？」

「死柄木少年は、時々かなり無茶なことを言うな」

「弔あ」

真顔で言っているから、本気なんだよな。確かに弔って実際に戦って経験値を稼いで、実戦で成長するタイプなんだよな。

だからって頭脳派のデク君にそれを押し付けるなよ。

「解んねえのかよデク!!」

「かつちゃん?!」

うお?! え、爆豪君、どっから来たの？

「駅前で歌っていました。俺のロックな魂が、今日は駅前で歌えと告げていたので」
「ビシッと決めた彼の横顔は、とてもかつこよかったです。」

でもさ、それってロック・シンガーとしてだよ、ヒーローとしてはどうなのさ。

「パトロールも兼ねていましたので」

「俺の心を読まないでくれないかな、爆豪君」

「一郎さんは顔に出やすいですよ」

年下に断言されました、泣いていいよね。

「それで、だ。デク」

「う、うん、なにかっちゃん？」

「次の訓練って言ったなら、決まってるだろうが。俺達がヒーローになるのに必須な」

凄い気迫だ、爆豪君はこの訓練にすべてをかけているみたいだな。そんなに大切な訓

練が残っていたのか。

「そうだな。君たちには雄英に入るための試験勉強を・・・」

「ヒーローに大切なのは『変身の掛け声』と登場ポーズだ!!」

「しっかりと行って・・・へ？」

珍しいものを見てしまった。オールマイトが間抜けな顔しているけど、こんな状況に

出会えるなんて。

うんうん、そっか、掛け声と登場ポーズ、はい？

「かっちゃん」

ほら、デク君も呆れているじゃないか。爆豪君の手を握って、キラキラした眼を向けて。あれえ〜？

「そうだよな！ 変身と登場ってヒーローのだいご味だよな?！」

「解ってきたじゃねえか、デク。そうだ。俺達に足りないのはそれだけだ」

「いや、ヒーローには資格があつてね」

「そつか、そうなんだ。よし頑張つて考えないと!」

「へ！ 俺が先だデク!」

「負けないよかつちゃん!」

「だから、君たちね」

気合の乗つた少年二人を前に、いくらナンバーワンでも立ち向かえなかつたみたいですね、オールマイト。

俺はそつと彼の肩に手を置いたのでした。

「田中少年、最近の若者はどうしてこう人の話を聞かないのか」

「オールマイト、それを言ったら年寄りですよ」

「そうか、私も年をとつたということか。後継者を探さないとな」

「だから雄英の教師をやるんでしよう?」

「そうだな。その通りだ」

フツと遠い目をするオールマイトの背中が、何処か悲しそうだった。

試行錯誤を繰り返した爆豪君とデク君は、その後に見事な変身の掛け声と登場ポーズを完成させることになった。

うんうん、見事だって言っておくよ。なんだか、ソープが凄い興奮して食いついていたし、アインズも滅茶苦茶絶叫していたけど。

「マスター、我も久しぶりに考えてみたくなつたぞ」
「俺もそろそろ新しくするか」

「え？」

はい、なんでギルとコナンが乗っているのさ。

「私もやりましょう」

黒霧、待っておまえは待ってくれ。

「俺もやろうかな」

「呶、なんで仮面を見つめて微笑んでるんだよ。なんだよ、何があつたんだよ、お前ら。爆豪君とデク君に触発されたのか、え、待つて。その全員で俺を見るのはやめてくれよ。」

「二郎、共に決めポーズまで完成させよう。おまえならやれるさ」

「がんばりましょう、一郎君」

「ふ、二人して優しく言つても俺はやらないからな!」

その後、俺の周囲にはいかにかつこよく変身の掛け声から登場、最後の決めポーズを決めるかまですが、ちよつとしたブームになったのでした。

「はっはっはっはっは! 私が来た!!」

「オールマイトまで。なんでそこまで染まつたんですか?」

「いや、田中少年。私はプロ・ヒーローとして、このスタイルをずっとだね」

「はあ、ずつと信じていたのに」

「待ちたまえ! 何か君は勘違いしてないかね!? 私はプロ・ヒーローだからこそ!」

「オールマイト」

「その憐れんだような瞳は止めてくれないか?!」

ああ、今日も世界は平和みたいだねえ。

薄い暗闇に、光は灯されぬ。

「いい個性だ」

「か、返せよ、俺はそれを……」

「フフフフ、君は転生者だね？ この君の個性は私が使わせてもらよ」

足元に転がった少年を見下ろし、彼はそれを握り締める。

「オールマイト、君に見せてあげよう。残酷なまでのヒーローという者をね」

『オール・フォー・ワン』はそれを腰に巻き、手を添える。

『祝福の時、来たれり!!!』

「なるほど、これはいいものだ」

闇の中、さらに深い闇が鼓動を始めた。

乙女の決意はどっかの超人を圧倒する、かもしれない

彼女は考える。

自分に足りないものは何かを。毎日、よく通う喫茶店の何時もの場所に座って、ジツと外を見つめながら手元のアイステイーをストローでかき混ぜていく。

昔はもっと周りなんて関係ないって思っていたのに。

自分以外は異質なんて切り捨てて、周りの戯言なんて気にしたことないのに。

自分は自分。他のことなんて知らない。こんなのは、馬鹿げた話でしかない。普通に笑顔で好きに生きていたただけだったのに。

でも、出会ってしまった。見つめていたい、自分だけを見てほしいと心の底から願う人に。もう昔になんて戻れない、周りのことを気にせずにはいられない。彼が自分をどう思っているのか、どう見ているのか、ずっと気になっているのに問いかけることはできない。

ストローが渦を描くアイステイーに、一度も視線を向けない。ずっと目線は外に固定されて、小さくため息をつく。

あの店、もつと言え、田中・一郎が働いている店。

どうすれば彼を真つ直ぐ見れるだろうか。どうすれば、彼とお話しても緊張せずに済むのか。

グルグルと毎日、考える。いつそのこと彼の傍にいて、毎日のように店に通えば耐性がつくのではないか。

よつしと気合を入れて立ち上がりかけて、一郎の顔を思い浮かべて座り直す。

ダメだ。思い出ただけで顔が赤くなって、全身の力が抜けてしまう。もう立ち上がれない、あの声を思い出すだけに、自分の体じやないように熱を持って、心臓がうるさいくらいに音をだしている。

「はあ」

小さくため息をついて、トガ・ヒミコは視線を店の方へと投げた。

一郎君、一郎君と心の中で呟くだけで全身が熱くなって、胸の奥から暖かい気持ち溢れてくる。前にはこんなことなかったのに、今ではこの気持ちで全身に満ちて、それが心地よくて楽しくて。

でもとても苦しい。彼の傍にいたい、声を聞きたい、香りに包まれない、彼の血に触れてみたい。全身で彼を感じたい。もつと近くで、もつと触れるくらいの距離で。

願つてみても、体は動かない。こんな気持ちを知られたら、彼はどう思うだろうか。

笑ってくれるだろうか、微笑んでくれるだろうか、照れてくれるだろうか。

もしも、もしも彼に拒絶されたら。気持ち悪いと言われてしまったら。そう考えるだけで全身が震えてくる。そんなこと言われたら、生きている自信なんてない。速やかに首を落として死ぬ自身の方が強い。

確かめたいのに、確かめたくない。

もう少し前に出るべきなのに、どうしても一歩が踏み出せない。自分の個性を思い出して、自分の生い立ちを思い返して、彼の近くにいたら迷惑になるのではないかと考えてしまう。

どうして何故、そんなこと関係ない。自分の心がそう呟く、彼を手に入れて彼を自分の傍において、逃げられないように四肢を斬って、体だけ持って帰ればいい。そうすれば、もう彼は自分のもの。

絶対にダメ。彼は皆のもので、一人が独占していいわけがない。彼を独り占めするなんて世界に対しての損失だ。

両極端な意見が自分の中でわきあがり、口論になって体を縛ってしまい、今日もヒミコは店に入ることなく、喫茶店で過ごしていた。

「はあ」

たまに零れる溜息が艶やかで、妙に色っぽい。女子高生の制服を纏いながら、大人の

女性も負けるような色香を出す彼女は、近所では密かに噂になっていた。

『ため息の天使』とか。

「ああ、一郎君」

そして今日もヒミコは、うつとりした顔で彼の一日を観察するのでした。

相手の感情も状況も関係なく、自らの愛ゆえに相手を追い求め、一時も忘れることな
く思い続け、狙い続ける。

人はそれを『ストーカー』という。

ヒイ?!

な、なんだ？ 今、妙な寒気がしたんだけど、何かあるのか。ここ最近、妙に寒気を
感じる人が多いんだけど、何があつたのかな？

今度、ソープあたりにお祓いしてもらうか。それか、ギルに宝具でも貰おうかな。

「一郎、具合でも悪いのか？」

「妙な寒気がしたただけだから、大丈夫だ」

「そうか。もうそんな時間か」

え、時間ってなんだよ。俺の寒気って時間で来るの、いやそんなことないだろうが。

「弔さ、何か知っているなら教えてくれないかな？」

「俺は知らないな」

「そっか。そうなんだ、と誤魔化されないからな」

絶対に何か知っているだろう、お前。目線がちよつとそれたぞ、おまえが嘘つく時って、

俺から目線を反らすんだよ。昔っからそうだろうが。

「気の所為だ。目にゴミが入っただけだ」

「俺の思考を読むなよな。まったく、本当に何か知ってるわけじゃないんだな？」

「ああ。ヒミコが見つめているだけだ」

はい？ えっと、何か言ったようだけど、声がそこだけ小さくて聞き取れないんだけど。

「何でもない」

「いや、だからさ」

弔に質問しようとして、店のドアが開いた音がして顔を向けた。お客さんが来たから、弔への尋問は後にしよう。尋問だ、絶対に聞きだしてやる。

「ヒミコちゃん、いらつしやい」

「お、お邪魔します、一郎さん」

珍しいお客さんだね、今日も可愛いよね〜。これで弔狙いじゃなければ、なあと思
うんだけどさ。仕方ないか。

はにかんだ笑顔も可愛いし、頬がちよつと赤いのもいいね。

「あ、ありがとうございます」

はい？ え、なんでヒミコちゃんにお礼言われたのかな？ あれ、俺って何も言っ
てないはずなのにさ。

「どういたしまして」

「ご注文は？」

おい、弔、俺の癒しの時間に割り込むなよ。まったくさ。

「おススメで」

「解った、大丈夫か？」

「私のライフは残り三です」

なんか、二人してコソコソと話をしているけど、小さくて聞こえないんだよ。もつと

はつきり喋りなさいよ、弔クン。

「二郎、テレビでもつけるか？」

「え、いいの？ おまえ、店をやっている時はつけないって」

「特別だからな」

珍しいこともあるもんだ。弔って食事の時には、味を妨害するなんて考えでテレビはつけさせないんだよな。アイنزの歌はいいって理屈は分からないけど。どっちも音と映像で、料理に集中させないような気がするけど。

『私の歌を聞けえ！』

「お、フロンティアだ。これ、何の映像？」

「街角で発見の歌姫じゃないか？ アイنزも映っているし、エターナルもいるからな」「へえくくそんな番組があるんだ。あれ、エルとソープもない？」

「あいつらはギターもベースもできるからな」

ウソ、そんな技能があつたの。俺は知らないんだけど。

「ちなみに、ドラマはコナンだな」

「あ、本当だ。確か、『新一形体』だったっけ？」

「一日二時間限定のらしいが」

本当に珍しい、コナンがああの形体を使っているってほとんど見たことないんだよな。

子供の姿のほうがやりやすいとか、色々なところに紛れ込んでも『ごめんなさ〜い』って子供供っぽく答えれば、大抵のところは許されるらしいし。

それに、フロンティアとエターナルは姿は『マクロスF』のシェリルと『ガンダムSEED』ラクスだから、歌っている姿は様になってるんだよな。

これも、俺は知らなかったけど、引き当てた時に当時の知り合いが大騒ぎしていたんだけど、あの頃は『へえ、そうなの』だけで終わってたんだよな。

後になって、戦闘時に凄く焦ったけど。

「い、一郎君は、ああいうのが好み、ですか？」

「え、いやまあ」

ヒミコちゃんから、珍しく声をかけてくれた。

好みって言えば、どうなんだろう。可愛いとか綺麗とかって思うけど、はつきり言っ
て自分の艦娘だからね。

あの世界では全員と関係を持ったけど、襲われたけど、いい思い出だよ。

「……そうですか」

「え、あれ、ごめん。まあ、アイドルには憧れるよね」

男なら誰でもさ。

「馬鹿だな、一郎」

「へ？」

何故か、弔が凄く呆れた顔で見えてくるんだけど、何で？

勇気を出した甲斐はあった。

ヒミコは内心で狂喜乱舞しつつ、表に出さずにテレビを見ている一郎を盗み見ていた。

ああいうのが好みか。アイドルに憧れるのか。つまり、自分を見てもらうためには、ああいった感じになればいいのか。

そうときまつたら、実行あるのみ。

「い、い、ちそうさまでした」

「うん、ありがとうね、ヒミコちゃん」

「は、はい、また、来ますね」

笑顔で手を振る一郎に手を振り返し、ヒミコは店から出て、足を進めていく。次第に大きく足を出して、やがて早歩きになって、最後には走り出した。

一郎の好みは知れた。可愛いと綺麗であり、アイドルのような女性がいいということだ。

つまり、だ。

「一郎君に好きになってもらうためにはアイドルになるのが一番！」

清々しい顔で、ヒミコは街を走り抜けた。

目標は決まった、後は手段の選定と結果をもぎ取ってくるのみ。決意の決まったヒミコは、もう止まらない暴走状態。

最後の『アイドルになる』に辿り着くまで、決して止まるつもりなんてない。誰も邪魔させない、邪魔するなら悉くを斬り捨てる。

まずはどうすればいい。アイドルになるには事務所のスカウトに呼び止めら得つるのが一番の近道。

携帯で検索した後、スカウトマンが多い場所へ行く。

足に向けかけたヒミコは、鏡に映った自分を見て、足を止めた。

ルックスは行ける気がする。見た目は上の方だ、と思い込みたい。かつこうは制服、これは駄目ではないか。

いや平日に学生が制服も着ずにいるのは、他の方々にスカウトされてしまうからこのままで行こう。

もし、警察の御厄介になってしまったら、あの一郎にどんな目で見られるか。もしも『え、そういう子』なんて思われた。

想像した未来を思い浮かべ、ヒミコは蒼白になって首を振った。

よし、このままで行こう。汗はかいているが、時間が惜しい。けど、ちよつとお化粧直しをした方がいいか。元々、そんなものはしていないが、身だしなみに気を使うのは乙女の必須。

アイドルになろうとするなら、もっと重要なものになってくるのではないか。

どうするか。お化粧道具はある。鞆の中に一式、そろってはいるが一郎はナチュラル・メイクのほうが反応が良かったため、それほどの道具は揃っていない。

何処かで購入するべきなのでは。目的地とは別方向へ足を向けかけて、ヒミコはハツと思いなおす。

違う、目的は一郎に『好きになってもらう』ため。アイドルは最終目標に向かうための手段でしかない。目的を見誤ってはいけない。ここで化粧なんてしたら、アイドルに

なれたとしても一郎の好みから外れてしまう。

このまま行けば、いや待った、このままではスカウトに捕まるか。決して美人ではない自分が、スカウトマンに認めてもらえるか解らない。

ヒミコはショーウィンドウの鏡の前で百面相を繰り返す。通り過ぎる人たちが見ているのは気にしないし、意識の中に入ってこない。

彼女の頭の中にあるのはアイドルになる、一郎が好きになる、一郎と付き合う、一郎と結婚して子供を産む、という過程だけ。

全力で妄想して老後まで突っ走った後、いやんいやんと首を振って深呼吸をひとつ。もう見ているだけで危ない人、でも鏡に映る表情の二つか三つはちよつと可愛い笑顔のため、そのギャップのあまりに激しさに通行人は足を止めて『あ、可愛い』の後に『あ、猛獣だ』と思つて通り過ぎていく。

「がんばるのよ、トガ・ヒミコ。貴方は誰のためにやるの、一郎君のため。一郎君のためじゃないの。さあ、行きなさい、羽ばたくのよ、ヒミコ！」

自己暗示完了。鏡の自分に向かって話しかける危ない女子高生がいる、なんてネット上で話題になっているのだが、今の彼女はまったく関係なかった。

いざ出陣。

ヒミコは決意を秘めて歩きだす。その背中には、ライオンとトラが浮かんでいるよう

に、周囲の人には見えたという。

ランチタイムが終わった俺は、手のひら鎮守府の訓練場にいた。

「おまえの絶望も、悲劇も、その苦しい檻も。俺が崩してやる。だからもう泣くな。『ザ・ハンズマン』ここに推参」

スツと地面に降り立ち、回転するように立ち上がりながら、右手を前に突き出す。

うん、何これ。え、弔ってそんなヒーロー名にしたの？

「すべての距離が私の前では無意味。悲劇も絶望も、暗黒の彼方へ飛ばしてあげましょう。『ゼットン・ザ・ブラック』参上しました」

黒い霧が立ち込め、その中からゆっくり歩いてきて、名乗りと同時に一礼。右手を胸の前に持つてくる、まるで英国紳士のような一礼でした。

あ、うん、黒霧がいいなら、それで俺は何も言わないよ。

「どんな事件も俺が解き明かし真実を救いだす。迷宮なしの名探偵！」

あ、うん、コナンはセリフが変わっただけで、ポーズは一緒なのね。

「名乗るがいい。貴様の今生の最後の言葉を、高らかに。特別に我が許してやろう」

おい、ギル、なんで抹殺前提で登場してんだよ。しかも、すっごいいい笑顔でさ。腕組みポーズは似合っているから、ちくしょうって言つてやるよ。

「君たちに恨みはないけど、僕の前に立つなら許しはしないからね」

ウインク添えても言葉は怖いんだけど、ソープ。しかも、腰を曲げて腰に手を当ててつて、凄いい色っぽいけど、おまえは自分が男だつて自覚ありますか？

「ロボット魂に命を燃やして！ 世界中にロボット愛を届けるために！ 貴方の悲しみロボットで砕きます！」

うん、エルは通常運転だ。やたらとロボットを誇張しているけど、普通だね。なんか『ガシン、ガシン』つてセリフの合間に音がなるけど、気にしちやダメだね。

「震えよ我が指先！ 奏でよ我がソウル！ 我のすべての感情のままに！ 我が絶唱を聞け！ 『ビート・スケルトン』ここにあり！」

予想通り過ぎて、笑えないぜ、アインズ。なんだよ、そのギターを弾いたままのステツプは。おまえの本業は、本当にギタリストになったんだな。

「ふむ。ではこちらはどうか？」

あ、アインズが豪華絢爛な魔王スタイルになった。

「絶望に染まるがいい！ 貴様はこの私！ アインズ・ウール・ゴウンの前にいるのだからな！ さあ、無様に足掻くがいいぞ！」

完全にラスボスのセリフですね、ありがとうございます。

「というわけだ。場を温めておいたぞ、二人とも！」

うん、アインズ、その言い方だと二人が披露しにくいんじゃないかな。

あれ、そうでもない？

「変身!!」

おお、空中に飛び上がったデク君が、ペンダントを高らかに掲げて、艀装を纏って着地。左右の主砲塔と装甲が彼の体を隠して、そしてゆっくりと立ち上がると。

「誰も悲しませない。僕がいる限り、この世界中の人たちの『航路』は脅かさせない！」

立ち上がったデク君の周囲の装甲が開いていき、右拳を握って突き出す彼が見えた。

「『デク』だ。僕の装甲を抜けるものなら抜いてみる！」

「え、ヒーロー名ってそれにしたの？」

「はい！ やつぱり、一番、これが合っているかなって」

まあ、デク君がそれでいいならいいけど。

そして、ラストが。

爆音が響き渡る、赤、黄色、青、緑といった爆発と煙が流れる道を、彼はゆつくりと歩いてくる。

右手にギターを持って、それを前に回し、弦を一回だけ鳴らす。

「俺の歌は嘆きに負けねえ。俺の力は絶望も悲劇も爆殺してやる」

そこで一際、大きい爆発が彼の背で起こって、煙が一気に天へと流れ出した。

「だからおまえらヴィランは俺のステージからとっと消えやがれ！ 『爆撃王』ここにありだ!!」

ギターを持った手を高らかに上げる爆豪君をたたえるように、再びの爆発が周囲に鳴り響いた。

「いや、それはおかしい」

「な?!」

「やはり、爆撃王か」

「んだ?!」

「やつぱり、もっと違う名前にしようよ」

「とお?！」

全員からのダメ出しを受けて、爆豪君が沈んでいく。

うん、名乗りも演出も登場シーンもいんだけど、ヒーロー名がなあ。どうしても爆豪君のヒーロー名に『これだっつて』者がなくて。

まあ、デク君のほうも全員が納得してないんだけど、彼は譲らないからな。

「という具合なんですけど、どうでしょう、オールマイト?」

俺は隣で難しい顔で黙っているナンバーワンに話を振ってみただけど、黙ったまま
で考え込んでるんだよな。

「……全員に言っておかないといけないことがある」

「はい?」

「ヒーローは免許が必要だ。無免許は犯罪に当たる」

え、嘘。この世界ってヒーローするのに資格が必要なの? え、まさかあと思つて全
員を見ると、『解つてます』と頷いているから、俺だけ知らなかったのかあ。

またかあと思いました。

「プロ・ヒーローの『オールマイト』としては、認められない」

そりゃ、そうでしょうね。

「しかしだ! 一人の男として! ヒーローとしてならば! 見事な名乗りだったと言

わせてもらおう！」

「え、はい」

なんか、凄い勢いで立ち上がった、笑顔で笑い始めたよ、この人。本当に大丈夫かな、どつかで頭でも打ったんじゃないの。

「ところで、皆は雄英を受けるつもりはないかね？」

真顔で語るオールマイトに、デク君と爆豪君以外の全員が首を振ったのでした。

「そうか、有望なヒーローがいるのに、残念で仕方ないよ」

ちよつと悲しそうに項垂れるオールマイトは、背中に哀愁が漂っていました。

まあ、俺達は非合法でも、なんでも人助けするだけだし。いや、待った、ヒーロー活動しないから、これは爆豪君とデク君につき合ったノリだけだから。

絶対にもう危ないことはしないし、させないからな。

よつし、決意したぞ。

「そう言えば、一郎、こんな話を知っているか？」

「なんだよ、甲。また俺を苦しませる話か？」

「いや、違う。ヒミコがネットアイドルになった」

「え？」

あれえ〜ちよつと信じられない話を振られましたよ。え、誰が何になったって？

え、あの純情で恥ずかしがり屋のヒミコちゃんが、何だつて？

「対人恐怖症を克服したらしい。一郎限定の」

「え、そうなんだ」

そっか、そうなんだ。最後に何か付け足しがあつたみたいだけど、深くは聞かないでおこう。

頑張れ、ヒミコちゃん。俺はここから応援しているぞ。

後日、俺は彼女の配信を見ることになって。

『はくくい、こんにちは、ヒツミツコちゃんよろしく』

画面の中でミニスカの和服を着た、ウサ耳つけたヒミコちゃんが笑顔で手を振っていた。

うん、なんだろう、応援してはいけない気がしてきたぞ。

誰か俺に教えてください。

清純のようなヒミコちゃんは、いったい誰がどうして、こんなことになっているのか。
彼女は何処へ行こうとしているのでしょうか？

理性は大切なものですが、条件反射は止めてくれませんか

今更ですが、緑谷出久の艦装は『土佐型』となつていますが、完全に同じものを使っているわけではない。

通常の土佐型艦装の主砲は二十四基。艦娘が身に纏う分の主砲は八基ほど。残りは浮遊しながら艦娘と装甲の周囲を漂っている、自由機動兵装となつているのだが、出久の艦装にはついていない。

これはエルやソープが手を抜いたのではなく、緑谷出久自身に問題があつたため艦装を削るしかなかった。

彼が無個性だから、そこは関係ない。艦装の適合に必要なのは、その者の魂の中にあるもの。何故に彼が艦装に適合できたのかは、さすがのエルとソープも解らなかつた。戦艦から駆逐艦まで、潜水艦や補給艦も含めたすべての艦装を確認したところ、緑谷出久に適合する艦装は『土佐型』ともう一つ。

羅豪型潜水戦艦。回転衝撃角、つまりドリルを装備した海底軍艦だった。

さすがにこれは無理じゃないか、とコナンの意見が挟まれ、出久には土佐型の艦装が

与えられたが、彼の艤装知識の少なき、艦載機などの知識の低さにより土佐型の艤装は三分の一にとどめた。

その中でも、飛行甲板といった航空機はすべて搭載したのは、これから先のことを考えてから。

ゼロから始めた子に、いきなり完全装備は難しい。彼が少しずつ学んでいき、艤装になれたら完全な形の土佐型を与えよう。

コナンの判断に、エルとソープは特に反論なく、出久の艤装は土佐型の三分の一となった。

しかし、だ。彼らは忘れていたことがあった。

一つ、妖精への親和性。艤装に適合できるのだから、出久の妖精への親和性はかなり高い。艦娘と変わりない数値を叩きだすくらいに。

もう一つは我らの愉悦王が、その話を黙って聞いていたことだ。

彼は話し合いが終わり、艤装が完成した後に、その倉庫へと入った。

「そうか、やはり貴様らもそう考えるか」

ギルガメッシュが見下ろす先、資材と設計図を持った妖精たちが、わらわらと艤装に群がっていた。

「よかろう、この我が許す。存分にやるがいい」

妖精達はピシツと敬礼して、出久の艷装に『裏設定』を施していく。

「後は、爆豪のものか。フッフ、あやつの歌は心地よい。王の感情を慰めた褒美だ。受け取るがいい」

『爆豪君の』と書かれたコスチュームに、ギルガメッシュは『ある宝具』を取り付けて行つた。

「さて、一郎、おまえは此度はどのような顔をするであろうな？」

微笑する彼は、悪意などなく、善意も全くない。あるのはただ、『愉悦のため』のみ。

どうしても止められない時って、人間にはある。

ダメだって解つていても。いやダメだと言われると、余計にやりたいって考えてしま
うのが人間だ。

でも、今回の話はまったく関係ないけどね！

『次のニュースです、最近、未登録の個性による事件が多発しています』
物騒な世の中だな。

どうも、田中・一郎です。最近さ、こういったニュースって多いんだよね。一日、三件くらいは確実に聞くんですけど。

まさか、オール・フォー・ワンがまた何かやり出したのか。転生者を狩っているって話も聞くし、転生特典の個性を奪われたら厄介だな。

『先日、ヴィランを撃退したのは、この……』
「あれえ〜〜」

おかしいな、俺の目がおかしくなったのかな？ いやいやまさか、そんなはずないよな。

「どうしたんだ、一郎？」

『噂話でしかなかった、『ザ・ハンズマン』と呼ばれているヒーローです』
「おい弔」

俺が無言で親指でニュースを指差すと、朝食の味噌汁の入ったお鍋を持った弔は、笑顔のままゆっくりと後ろへ下がって行った。

「ちよつと待てコラあ！」

「なんの話だ、一郎。世界は広い、同じ顔の人が三人はいるらしい。だから、同じ名前のヒーローも三人はいるだろう」

「おまえそれでいいわけしているつもり!? ねえ、なんで、どうして? 何してんのおまえ」

「何と言われても」

「よおおおし、何を言ってくるのかな。言い訳か、それとも誤魔化せる手段でも考えているのかな。」

「助けてと言われたから、助けただけだ」

「う?! く、クソ、なんで弔はこんな真つ直ぐな顔で見てくるんだよ。俺は悪くないって心の底から思っている顔じゃないか。」

「しかし! ここで俺が引き下がったら、弔はまたヒーロー活動をやる。本人はヒーローって思っていないかもしれないけど、こんなに頻繁に助けてに答えていたら、立派なヒーローだからな。」

「危ないこと禁止って言ってやろうか。」

『それと、この『ザ・ハンズマン』の隣に必ずいるのが、こちら『ゼットン・ザ・ブラック』と名乗っている人物です』

「黒霧いいいい?!」

おかしいと思っただよ、絶対に無理があるって。なんで弔の目撃情報が全国各地に散らばっているんだよって。

おまえか！ おまえが弔の考えに乗ったのか？！

「一郎さん、私がおかしかったですか？」

「何かっておまえもな！ ヒーロー活動には資格がいるの！」

「はい、知っています。ですが、私達はヒーロー活動をしていません」

「なんだって？」

「私達は人助けをしています」

胸を張って答える黒霧に、俺は思わず拳を握って天井へと突き上げた。

「それを世間じゃヒーロー活動って言うんだよ！」

何を馬鹿なこと言ってるんだよ。言い訳をするなら、もっと考えてからやれよ。おまえ

ら馬鹿なの？ 馬鹿にしてんの？

「なるほど。これは認識の違いというものです。いいですか、一郎さん、私達は善意で困っている人を助けている。確かに助けられたものからすれば私達はヒーローかもしれない。しかしですが、私達は完全に人助けのつもりで行っており、さらに助けた後に賃金が発生したこともない。現在の法律上、個性を使って人を助けた後、賃金の受け渡しがあればそれは『ヒーロー活動』になりますが、私達は相手にお礼も言われていなけ

れば、素性を明かしてもいいない。ただ通りすがりに人を助けた、これがヒーロー活動として問題があるならば、道に困っていた人に道を教えるのも、ヒーロー活動になりますね。これも違法となると、次に困るのは道に迷った人だ。困っている人を助けることがヒーロー活動というのならば、私たちは誰の力も借りずに、また誰かに力を貸すこともできない。そうなると、世間といったものがとても冷たい関係の身になります。すべてが賃金で成り立つ。いいえ、この場合、賃金が発生してのヒーロー活動といった考えを当てはめれば、あらゆる業務や仕事でヒーロー活動になってしまふ。これを違法と考えるならば、現在社会が立ち行かなくなる。それでは人間が生きていくことはほぼ不可能になってしまふ。世界人口の八割が個性を持った世界とはいえ、すべてを個人でどうにかできるほど世界は甘くはありません。そうすると、私達は誰かに賃金を払っての援助も許されない世界において、どのように生きていけばいいのか。まったく見通しのない世界を生きるしかなくなる私たちが、賃金と信頼と善意の助力を抜かれてしまった私たちが、どういった社会を形成していくのか、是非とも一郎さんの見解をお聞きしたい」「すみません、俺が悪かったです」

「解っていただけましたか。では、これから私と甲の善意を許して頂けますか？」

ク、今まで一番に重い善意だぜ。悪気があったとか、騙そうって気配が一欠片もない。あれは完全に黒霧にとっての、善意の人助けだ。

「わ、解ったよ」

仕方ない。俺はそう思いたくなくなった。

『次ですが、中学生か高校生くらい少年も、この活動をしているようなんですが』

『これですね。船を纏っていることと緑色をしていることから、『グリーン・シップ』と呼ばれているヒーローですね』

たらりと、全員に冷や汗が流れたのを、俺は感じた。

さつきまで平然としていた黒霧は、ゆっくりと腰を折って机に突っ伏した。

甲はにこやかな笑顔のまま、顔の向きを変えてあさつての方を見ている。

『それにです。この覆面をつけたヒーローは歌で人々を元気にしたうえに、災害などには真つ先に飛び込んで爆発させて救助しているんです』

『ええ、彼はその両方のことから『シンガー・ボマー』と呼ばれているようですね』

あ、爆豪君のヒーローネームって、それでいいんじゃないかな、なんて場違いなことを俺は思いつつ、現実逃避していた。

「とりあえず、朝飯にしようぜ」

「そうだな」

「ええ、そうしましょう」

今日は三人でのんびりとお食事。ギルもコナンも、エルもソープも、アインズも

ちよつと用事があるんだって。

なんか、『ちよつと最強最善最高の魔王倒してくるから』って、いい顔して出かけて行つたな。

なんか、艦娘全員にプレデター部隊とエイリアン部隊まで連れて。

あれ、でもソープが『赤い十字架みたいな紋章』をつけた連中と一緒にいたけど、あんな奴らいたかな。

後、アインズもいろんな魔物連れていたけど。

あれえ、まさか本当に総戦力を持って行つたの？

時計の針は進む、ゆつくり少しずつ。忌々しいことに、それを止められる手段がない。

ただ進み、やがて時計の針は『十二』を示す。

そして一面が白い砂に覆われた。

「ふむ、見事だ。これを受けて立っていたのは、お前くらいなものだな。それが『オーマジオウ』の能力か」

「クククク、君こそいい個性じゃないか。今のはすべてを強制的に死滅させる魔法かい？」

男の問いに、アインズは答えずに杖を向ける。『スタッフ・オブ・アインズ・ウール・ゴウン』と呼ばれるそれは、怪しく輝き複数の魔法を実行していく。

「なるほど。さすがに平成のすべてを司ると言われるライダーの力だ。しかしだ、それは本来の持ち主が扱ってこそ真価を発揮する。貴様程度では無理だな」

「言ってくれるね。まだ僕を倒せていないじゃないか？」

「倒せていないか……」

小さくアインズは苦笑した。まるで、『見当違いなこと』のように。

「脳無か。あれらもかなりの数を作ったものだ」

「気になるかい？ 君らの仲間は今頃、その脳無に倒されているんじゃないかな？」

あざ笑うように、囁くように、オール・フォー・ワンは語る。

この場にいる脳無は、転生者から奪った個性を入れてある。どれも面白く二度と手に

入らないような個性ばかりだった。

仮面ライダー、ウルトラマン、あるいは戦隊のもの。SAO、アラガミ、ガンダム、マクロス、Fate、様々な世界がある、色々な創作物の世界の能力を持った脳無だ。

恐らくこの世界のヒーロー達では、一撃で倒されることだろう。

誰にも止められない。世界はこうして混乱の中、やがて。

「つまらん玩具だ」

天井から脳無、だったものが降ってくる。

「結構、強かったと思うけどな」

「いうな、天照。『次元回廊』で残らずそぎ落としたのは、誰であつたか？」

「そういう英雄王だって、最初の時に『天地開闢乖離の星』じゃないですか」

「よく言うぜ、エルだって原始分解やったじゃないか」

「名探偵が自分のことを棚に上げてるよ。自分だって『サッカーボール』の一撃で、脳無の能力無効化したくせに」

何があつた、何が起きた。

オール・フォー・ワンの前で、個性を与えられた脳無が、残らず灰になって消えて行つた。

「チェックメイトだ、オール・フォー・ワン。おまえはな、『やり過ぎた』んだよ」

小学生くらいの少年が歩いてくる。いや、見た目に騙されてはいけない。彼こそが、この集団の『統括者』だ。

まとまりのない、考え方や行動理念が違う存在達を束ねて、一つの勢力にまで拡大させた張本人。

推察と洞察、状況分析に瞬時な判断。危機さえ自らの一手にして、逆転の一撃を見舞う者。

騙されているわけではない。最初に会った時から最も警戒していたというのに、彼はその上を行く。

名探偵とはよく言ったものだ。彼の『推理』は、常識の枠の中にはない。

「この世界の個性だけを奪っていたなら、俺達は動かなかった」

恐怖を纏うガイコツの後ろに、異業種達が立ち並ぶ。

「この世界のことは、この世界のヒーローたちが決着をつけるはずだからな」

銀髪に赤い瞳の女神のような人物の後ろ、赤い十字架を掲げた集団が剣を上げていた。

「けどな、他の世界から来た奴らの個性を奪うなら、それは『俺達の事件』だ」

小さな銀髪の少年の後ろに、巨大な機械のロボットたちが整列していた。

「おまえはさ、天を望むあまりに、崩れ落ちるバベルの塔を築いちゃったんだよ」

少年と、金色の鎧を纏った青年の後ろ、不気味な集団が雄たけびをあげていた。生物のものもあれば、機械的な獣もいる。

「よく解っただろ？ なら、おまえの『世界の中だけで暴れてろ』よ」

気がつけば、周囲を船の武装を纏った少女たちが見下ろすように囲んでいた。

「警告はしたぜ、『ラスボス』」

「ということだ。貴様は巨悪であつたが、『極悪』ではなかつた」

ガイコツが微笑む。その空洞のような瞳に、青白い炎を灯して。

フワリとマントが翻り、そこには誰もいなかった。

「ふ、フフフ、私が恐怖を感じるとは。ますます、君が欲しくなつたよ、田中・一郎君」

彼は小さく呟き、空を見上げた。まるで届かない輝きに望むように。

はい、田中・一郎です。コナン達、まだ戻ってこないんだよな。それに、妙な寒気もまだ感じるし。

あれかな、誰かに狙われているとか。恨みを買うようなこと、した覚えはあるけど、そんなに殺意を貰うほどのことしてない気が。

は?! これが世の中でいう、やったほうは覚えてないけど、やられたほうは覚えてるってことか?!

「いいかね、田中少年?」

「はい、オールマイト。気合を入れました、どうぞ」

「解った」

今はね、また呼び出されたのよ。もうね、なんか、警察だけじゃなくて雄英の校長先生までいる場所にね。

根津さんって言うんだって。ネズミみたいな可愛い人。

「何かな?」

「すみません」

可愛い、外見だけ。もうさつきからすつごく睨んでくるのよ、俺が何したって言う

のさ。何もしてないじゃないの。

ごめんなさい、嘘つきました。してます、もうぼつちり色々としていたりします。

仲間が。俺って、あいつらの『提督』だからさ、あいつらがしたことは俺が責任取らないと。戦えない俺があいつらに命令して戦わせるから、そこはせめて俺がはつきりと責任取らないと、あいつらに顔向けできないじゃないか。

って、言っておくと女の子にモテないかな？

「聞いているのかね?!」

「はいもちろんです!!」

「ではなぜ! 死柄木少年と黒霧青年だけじゃなく! 爆豪少年と緑谷少年までやっているのかね?! 君は二人にダメだと教えなかったと?!」

「いや無理でしょうそこ」

素直に俺は答えることにした。

「あいつらのしたことは、俺が責任取りますけど、あいつらを止めるなんて無理ですよ」「責任転嫁のつもりかい?」

根津校長が、少し非難のこもった眼を向けてくるけど、俺は首を振った。

「いいえ、責任は俺にあります。そこだけは間違いない」

「では何だというんだ?」

オールマイトの凄味にある顔にも、今は一步も怯まずに俺は真っ直ぐに見詰めた。ちよつと怖いけど、しようがないよね、俺は提督なんだからさ。

「あいつらは、それが『条件反射』なんですよ」

ピクツとオールマイトと根津校長が反応した。

「誰かの助けてを見過ぎせないんです。誰かが困っていたら助ける、手を差し伸べて救い出す。それがあいつらなんですから」

「しかしだね！」

「それを取ったら、もうあいつらじゃない。オールマイトは、ナンバーワン・ヒーローは人の『性質』も否定するんですか？」

グツと言葉に詰まったね、オールマイト。そりゃ、これはどう答えても人でなしか冷たい人、あるいは冷静な戦略家だろうからね。

「なるほど。しかし、無免許でヒーローをやっている理由にはならないよ」

へえ、根津さんって凄い知能指数高いだろうね。戦略も見事なものを組みそうだけど、俺とは合わないね。

俺って戦術も戦略も平凡だからさ、冷静に状況を分析したことないんだ。

「ヒーロー活動は人を助けてお金を貰っている。でもあいつらは賃金をもらうことも物資を貰うこともしてない」

よっし、前に黒霧に話を振っておいて良かった。

確かに円達は、個性を使っている。でも、それは日常的に個性を使っている人たちと比べたら、三十分の一でしかない。

「あいつらは人助けをしたくて、助けてを見逃せないから動いている、たったそれだけですよ」

「詭弁だ!!」

「詭弁だろうと、曲解だろうと、俺たちにとってはそれで充分なんですよ」

「だからと言って・・・」

「いいだろう、今回の件は多めに見よう」

「根津校長!？」

あれえ、意外だね。もっと食いついてくると思ったのに、そこで折れるんだ。勝ち目がないって思ったかな？

「ただし、あまり無茶しないでくれよ。ヒーローが職業になった今、それで食べている人もいることを忘れないでほしい」

「解りました」

それはもちろん、俺だって自営業でお金を稼ぐ難しさは知っているから。

「後、皆がまだ未成年だということも忘れないでくれ。いくら個性が強くて、まだまだ

子供なんだから」

「肝に銘じておきます」

特に爆豪君とデク君にはしっかりと教えておこう。

「では、今後もよろしく」

げ、食えない奴だな、この校長。つまり、今回の件は目をつぶるかわりに、手を貸してほしいってことか。

「ええ、よき隣人としてね」

助力しないさ、協力もなし。でも、敵対もしないよと伝えてみるけど。

「それで十分さ」

うわあ、この人は解った上で領いたよ。

まったくさあ。

仕方ないか。あゝあ、酔っぱらったオールマイトって、かなり楽しいのに今後は来ないかな。

「あれ、今の考えって愉悦部の？ そんな、俺まで染まるなんて」

ちよつと俺は帰り道で項垂れたのでした。

「私が来たあああ!!」

「へ、オールマイト、あれ?」

普通に来ましたよ、この人。

「いやいや、あの話し合い、かなり険悪だったじゃないですか」

「それはそれ、これはこれだよ、田中少年。それに、プロ・ヒーローとしては反対だが、
一個人やヒーローとしてはよくやったと褒めてやりたいくらいさ」

あ、そうですか。この人も大人なんだな、表と裏を使いこなしている。

俺には無理だな、何回も転生してもそこところは解らないや。

「さて! 今日死柄木少年のメニューは何だろうな。この前はサバの味噌煮だったから、今日は何かね?!」

「肉じゃがだ」

「……死柄木少年、嫁に行くつもりはないね？」
「ああ」

真顔で答える弔は、次の瞬間に俺を見た。

「一郎の嫁には教え込むつもりだ」

「そうか。頑張りたまえ、田中少年！」

「え、あれ、待って、何それ？」

その日、俺は何を言われたかまったく解らなかつた。

そして、後日。

「なあ、コナン、あれって何？ 金色ってギルの趣味じゃないか？」

「ああ、あれはな、魔王の首だ」

「え、首？ ベルトじゃないか。あれって仮面ライダーのベルトじゃないのか？」
「首だよ、マスター。突っ走り過ぎて世界を超えかけた、間抜けな魔王の、な」
「そっか、コナンがそう言うなら、そうなんだろうな。」

何故か遠い目をするコナンに、俺はそう思ったのでした。

今日もいい天気ですね、いかがですかと書き始めた手紙の、送り主がそこにいる気持ち？

自重って言葉を忘れると、痛い目を見るのが世間一般の常識。

どうも、田中・一郎です。

「すみません」

「え、いや、まあいいんだけどさ。俺は関係ない、わけじゃないけど、頑張るのは俺じゃないからさ」

俺の前で、二人の少年が土下座中です。

曇り空の午後、ランチタイムが終わった時に爆豪君とデク君が飛び込んできて、なんか土下座しているんだけど。

話を聞くと、どうもコスチュームを壊してしまったらしい。

え、あれが壊れるってどんな状況？

「ヴィランがそんなに強敵だったの？」

「はい、個性が特殊でした」

「次やったら負けねえ」

へえ〜そんな個性の敵がいたんだ。あれ、待って、君たち待った。

「危ないことしないでよ、お願いだから」

オールマイトにまた怒られたり、警察に呼び出されたりするの、俺なんだし。

あれ、でもさ、なんで俺が関わっているって思われてるのかな？ まあ、俺が関係していても呼び出されて注意で終わるのは、きつとギルとコナンが色々とやってくれるおかげなんだろうけど。

まあ、そっちはあの二人に甘えるとして。

「どんな相手だったの？」

「体が大きくて全身が黒くて、力もありました」

「個性が能力がはつきりしなくて、周りにも人がいたら爆発が上手く使えなかったんです」

「え？ 二人かがりダメだったの？」

うわ、予想外。まだヒーローじゃないとはいえ、二人の能力はかなり高いはずなのに。

もうノリノリなインズやエルが鍛えたり、弔と黒霧まで付き合ったりして、二人の戦闘に関しての能力は上がっているし、他の面でも色々教えているから、そこら辺の

ヒーローに負けないくらいは実力があるはず。

コナンが『まあ、大丈夫だろ』って言っていたから、俺は疑ったことはないんだけど。
「どんな相手……」

「おい、お前ら」

あ、コナン。そんな怖い顔してどうしたんだよ？

「なんで『脳無』と戦ってんだよ？」

「脳無って言うんですか？」

「あのヴィラン、脳無って言うのかよ。次は必ず倒します！」

「はい！ 僕も負けません！」

おっ、いい、君たちね。脳無ってあれだろ、オール・フォー・ワンが作った複数個性の強敵。

え、そんな相手に戦いを挑んだの？

「泣いている人たちがいたんです」

「けがしてた奴らもいた。だから譲れなかったんです」

う、まあその状況じゃ仕方ないか。でも、あの人もまだまだ諦めてなかったんだなあ。

「チ、あいつもしづといな。また作ってんのかよ」

「コナン、しづといって何？ え、また会ったの？ いつ、交戦したのさ？」

「ちよつとな」

「おいおいおい、何かしたのか、またやり合つたのか？ 俺への報告がないんですけど、何時ですか、前の『最強最善最高の魔王を刈ってくる』ってそのことか、ねえ名探偵？」
「とにかく、危ないことすんなよな」

「コナンく〜くん？ 俺への説明がまだなんですけど？ 活動記録とか提出させるぞ、この野郎」

「じゃ、また書類仕事やるか、マスター？」

「ク、不敵に笑いやがっておまえってやつは。俺が書類仕事ができないとでも思っているのか、おまえらに仕込まれた技術はまだまだ健在だぜ。」

「いいんだな、マスター？」

「しかし！ 出来ることとやりたいって気持は別ものだ！」

「解つたよ、今回は見逃すよ、コナン。でも、次の時にはきちんと言えよな」

「了解だ、マスター」

「絶対におまえ、またあつても言わないだろう。」

「長い付き合いだから、コナンが言つてこないことは予想できたけど、俺に言わないってことは『言わなくていいこと』か、あるいは『言いたくない』って考えているんだろうけど。」

俺が知ると俺に負担がかかるのか、そんな余計な気遣いはいらんだよ、名探偵。まあ、俺もコナンに言わないことあるけど。

元々の推理力の差で、バレルことが多いけどな。

「だけど、一郎さん、コスチュームの裏機能なら教えておいてくださいよ」

はい、爆豪君、何の話？

「助かりました！ いきなりドリルとか出た時は驚いたけど、あれで何とかできました！」

「俺の方は槍でした。着弾した時に爆発したんで、使い難くて」

え、デク君がドリルで、爆豪君が槍？ そんな機能、俺は知らないけど。

「コナン？」

「あくくあの愉悦王やりやがったな」

ギルかあ、そっかそっか。

「誰ですか!? 僕らの艦装とコスチュームを魔改造したの?!」

「本当だよ！ この宝具をつけたのは誰?!」

エルとソープが怒鳴りこんできて、俺は頭を抱えたのでした。

「おまえらのじゃないだろうが、バール」

「いいえ！ これは僕らの作品です！ ならば改造する時に一言はあるべきでは?!」

激怒しているね、エル。そりゃ、自分の作品が勝手に弄られたら、怒る気持ちは解るんだけどね。

「エ〜〜ル〜〜く〜〜く〜〜ん」

「ひゃ?! な、なんですか、一郎さん?」

「俺の鎮守府の資材を勝手に使ったり」

「ギク!!」

「俺の鎮守府を勝手に変形合体恐竜やロボにしたりの、誰かなあ?」

「そ、それは・・・」

「それは?」

「きつとロボット愛にあふれた誰かであつて僕じゃありません!」

ひ、開き直りやがったな、てめえ!!

おまえがやってにやらかす度に俺がどれだけ軍令部とかに怒られたか、おまえは解つてないんだろう!」

「おまえなあ! 少しは自重しろよな! それに今回は二人が助かったんだから、いいじゃないか」

「よくありません! 僕がやるはずだった魔改造を!」

「やるつもりだったの!?!」

あれ、なんで俺じゃなくてソープが驚いているの？ あれ、エルだけの暴走だったってわけか。

「もちろんです！」

「よかった、僕だけじゃなかったんだね」

何故か、ほっと安堵して設計図を広げるソープ。それを見て、目をキラキラと輝かせるエル。

「いいですね！ これなら二人のコスチュームは次元を超えます！」

「ふふふ、いいね、やろうか。今度こそ、脳無『程度』には負けないように」

「はい！ 無双して勝って！」

「人々を護り奮い立たせるヒーローに！」

「二人をするために！」

エルとソープはそう言って、がっしりと手を握り合って、そのまま戻って行った。

おう、不味いぜ、二人ともハイテンションの暴走状態だ。

「爆豪君、デク君」

俺は二人に顔を向けてから、土下座した。

「ごめん、今後は『何が飛び出しても驚かないで』」

「一郎さん」

「貴方も苦勞してるんだな」

ふ、ふふふ、二人の優しさが身にしみるぜ。

「おい、愉悦王」

「なんだ、名探偵？ 先に言っておくが、我は爆豪に褒美を与えたにすぎん。奴の歌は我の心を慰めるからな」

「へえ〜〜それはどつちの意味で、だ？」

「無論、愉悦よ」

後ろでギルがすごい調子で笑ってるけど、俺は振り返らない。爆豪君の歌が『音痴』じゃなくて、ギルの心を楽しましたことは解るけど、俺は振り返って問いかけない。

だって、今振り返ったらさ、俺が対象にした何か起きそうだから。

「フ、学んだな、マスター。しかし、だ。我の愉悦が、我だけで終わると、本当に思っているのか？」

「ま、まさか、ギル」

「フ・・・フハハハハ!! 無様よな！ 貴様は勘違いをしているようだ!! この家にあるコスチュームは『幾つか』？」

おまえまさか!?

「黒霧と弔の奴にも細工したのか?!」

俺は思わず振り返ってしまった。

「遅いわたわけ! 我が今まで何もしていなかったと?」

まさか、こいつは前から? 嘘だ、俺はギルが何かしてないかと、確認したはずだ。二人のコスチュームには細工がなかった、なかったって確認を。

そこで俺は気づいた。最後に『してない』と結論を出したのは、俺じゃなかったことを。

「ま、まさか?」

「察したようだな、マスターよ。貴様以外の全員が既に愉悦部の同士! つまりこの家のすべては我が愉悦の結果よ!」

「貴様ああああ!! ギルガメツシユウウ!」

「いいぞ! 実にいい顔をする! やはり貴様は道化の相應しい!」

「何をした?! 何を仕込んだ?!」

「フ」

そこでギルは小さく笑い、その後に真顔になって顔の前で手を振った。

「いやなにもしてない」

「へ?」

「いくら我でも、そこまでは外道ではない」

「え、ないの？ あれ、今の会話は何？」

「あまりにマスターが必死な顔をしていたのでな、A U O ジョークで場を和ませようとしたまでだ」

皆さん、聞いてください。

うちのギルって、こういう奴になったんです。

愉悦のためにがんばることもあれば、人に優しくすることも覚えたんですよ。

その方法が、場違いとか、今そこってツツコミ待ちのボケに見えても、本人にとっては優しさらしいですよ。

俺、もう泣いていいよね？

「デク、爆豪、基本的に『うち』はこんな感じだからな」

「あ、はい」

「ウス」

俺は呆れながらもフォロー入れるコナンを、頼もしく感じました。

もう寝込みたいよ、本当。

爆豪君とデク君のコスチュームは、その後にエルとソープが頑張って修復して本人達に渡しました。

なんか、『再生可能』とか言っていた気がするけど、俺の聞き間違いかな？

「なるほど、脳無か」

現在、ダイナーの後。黒霧の店に来たオールマイトに、とりあえず報告しておきます。

「ええ、二人が接触したみたいですよ」

「私のほうにも報告は上がっている。複数の個性を持つ強敵と。私自身はまだ接触したことはないが」

「デク君の艦装も半壊していました」

「な?! 緑谷少年の艦装が、なるほど。私の攻撃でも傷一つ付かなかったあれが、半壊するほどの攻撃力か」

オールマイト、難しい顔しているな。

そりやそうか。デク君の艦装を壊せる攻撃力つてことは、大半のヒーローが一撃で戦力外、あるいは死亡することだってあるから。

「解った。後でヒーロー協会を通して脳無の情報流そう。無理して戦うことなく、とも伝えよう」

「はい。その時は、こつちでやりますから」

「すまない、田中少年。また借りを作るな」

「オールマイトには、普段からご迷惑をかけていますから、これくらいは」

本当に、毎回毎回、ね。俺の戦力が動いたびに、オールマイトが呼び出すつて彼が壁になって、他からの追及を反らしてくるんだらうね。

国の上の方に話を通して、現場では『そんなの知るか』つて反骨精神の人は多いと思うし。

「私のほうこそ助けられているよ。私一人では救えない人も多い、しかし君たちの力があれば救える人は多くなる。正式に感謝できないのが、辛いところだが」

「感謝は貰っていますよ」

助けた人からの『ありがとう』で、俺達は十分だ。ヴィランとヒーロー、そのどつちでもない、グレーゾーンに俺達はいるからな。

だから、それだけでいいつて俺は思つて、素直にそう告げるとオールマイトは苦い顔

をしていた。

「称賛も栄光もなく、助けた人からの感謝のみか。この先、君たちの存在が大きくなれば、国家が動くかもしれない」

「そうですね。だから、できるだけ穏便にやります」

「しかしだ。君たちはそれでいいのかね？ 本来なら、君たちが正式にプロ・ヒーローになればもつと多くの称賛を受け取れる。多くの資金も手に入る。もつと大きく手を振って、活動できるのじゃないかね？」

「かもしれない。でも、俺は……そういったしがらみは苦手なんですよ」
権力を得て、出来ることが増えていくのは確かにある。

でも同時に『できたことができなくなる』ことだってあるから。俺は軍令部総長までなったから、それを知っている。一個人、一提督時代はすんなりできたことが、多くの人に話を通して、色々なところから許可を貰ってからでないと動けないもどかしさも。

大切なことだったのは解るけど。これが民主主義だって理解はしている。
でも、それで救えなかった命を見て来たから。

「君は自由だな」

ちよつとだけオールマイトは、目を細めて俺を見ていた。

馬鹿にしたような様子もないから、これってなんだろう？ え、まさか羨望とかじゃ

ないよね。ナンバーワンが、まさかねえ。

「私にはできないことも、君たちではできるのだろう。動くたびに、誰かを救う度に思ってしまうことがある。もっと力があれば、もっと素早く動ければとね」

「オールマイト」

「人は、人に来れることしかできない。多くの人を救うために多くの人の協力がいる。私は確かに他の人よりも多くのことができる、けれどそれだけだ。嘆いた人すべてを救うことはできない。解っているんだが」

オールマイトはそう言つて、目線を下げた。彼の前に置かれているカクテルに注がれた視線は、グラスではなく何処か遠くを見ているように思える。

この人はナンバーワンなんだな。常に前を走つてきた人で、だからこそ救えなかった多くのものを見てきた。

でも笑っている。かっこいいほどに笑顔で『私が来た』つて言い続けているのつて、ひよつとして。

そう言つて周囲に示さないと、自責の念で潰れそうだからか？ まさか、そんなことないだろ。

「すまない、湿っぽい話になってしまったな。私は今日は、相当酔っているようだ」
「たまにはいいんじゃないですか」

顔を上げたオールマイトは、何時もと変わらない笑顔でいた。

でも、その瞳にちよつとだけ涙が滲んでいたような。

俺の気のせいだよな。

もう寝ますと一郎が去った後、オールマイトはただ静かにカクテルを飲んでいた。

救いたい人たちがいた、救えない人たちがいた。

そんなことが頭の中で流れ、やがて最近になつて知つた自らの師の家族のことを思い出す。

家族すべてがなくなっていた、個性による暴走の結果かもしれないが、事件は未だ解決されずにいる。

ただ、孫が生き残っている可能性がある。彼を見つけ出して保護して、その後はどうすればいい。

事件は起きた、彼が生きているとすればもう成人間際だろうか。

何を言えればいいか、何を伝えればいいか。オールマイトは答えを出せず、グルグルと考え込んでしまう。

「つまみにどうぞ」

「あ、すまないね、死柄木少年？」

珍しい人物から差し入れに、オールマイトは少しだけ固まってしまう。彼は酒のつまみは造らないのではなかっただろうか。

「俺もようやく吹っ切れました」

「そ、そうか。何か心境の変化でもあったかね？」

「ええ。オールマイト、『志村・転狐』は貴方を恨んでない」

ビクツと彼の体は震えた。

「貴方だって人間だ、救えない人はいる。その結末は、あいつが招いたものであって、貴方が責任を感じるものじゃない」

「まさか君は?!」

「俺は死柄木・弔ですよ、オールマイト」

立ち上がり呼びかける彼に、弔はゆつくりと語りかける。

「だから、これは独り言だ。『志村・転狐』は貴方を恨んでないし、あの結末を仕方なかったなんて割り切つてない」

「しかし！」

「だから俺はここにいます。罪を償うなんて気持ちはない。でも、失ってしまった命の分、それ以上の命と誰かを救います。俺の料理で多くの人を笑顔にして、多くの人に『今日も生きていて良かった』と思わせるくらいに」

弔は穏やかに語りながら、何時もの仮面を顔につける。

『ザ・ハンズマン』は、嘆きや絶望の檻を崩壊させて、人々の自由を護ります。だからオールマイト、貴方はそのままナンバーワンでいてください。貴方が『後を譲つてもいい』と思えるヒーローに出会えるまで」

「志村少年」

「だから、俺は死柄木・弔ですよ、オールマイト」

仮面を外し、微笑しながら、弔は店の奥へと戻つて行つた。

「そうか、君はそうしているのか」

小さく呟き、オールマイトはカクテルに手を伸ばす。

彼は罪を償うのではなく、罰以上の何かを世界に返そうとしているのか、ならば自分

は彼の言う通りにしよう。

ナンバーワンであり続ける。次の世代が追いかけて、自分を超えるヒーローに成長するまで。

『ウイスポー』だったかな」

「はい、『自らの心の声を聞くためバーでは声を潜めて話せ』。そういうカクテルですよ」
確かに、とオールマイトは黒霧の言葉に頷いた。

今は自分の心の声が、よく聞こえそうさ。

随分と長い時間、飲んでいたようだ。ほろ酔い気分となつて店から出たオールマイトは、軽く背伸びした。

美味しい酒と美味しい料理を堪能した。明日からは脳無に対して、動きまわる活力を得た。

「お疲れ様、オールマイト」

「コナン少年？ もう随分と遅い時間だ、君の姿では補導されてしまうのではないかね？」

路地の暗がりから姿を出したコナンに、オールマイトは別の心配を投げかけたのだが、彼はフツツと笑って両肩をすくめた。

「この区画の巡回時間は把握しているよ。念のため、アインズもいるからさ」

誰か来たら知らせてくれる手筈が終わっている。そう告げるコナンに、オールマイトは少しだけ怪訝な顔を向けた。

「内緒話、というわけか？」

「ご明察だよ、ナンバーワン。オール・フォー・ワンが転生者狩りをして手にした個性だが、そいつらを使って脳無を強化している。デクの艦装を壊したのはその一体だ」

「何の話だね？」

転生者、その個性がなんだというのか。そもそも、転生者とは何の話なのかオールマイトはまったく解らなかつた。

「神様が他の世界で死んだ魂を別世界に転生させる時に、転生特典を与えて生き返らせ

る、これが転生者さ」

「なるほど。骨董無形な話だが、君が語ると説得力があるな。となると、私達はそれに対応しないといけないと?」

「いいや、そつちは俺たちが何とかした。オール・フォー・ワンの手元にあるのは、今では『この世界』での個性だけだ」

「君たちが?」

「ああ、あいつはやり過ぎた。転生者の個性をあれだけ狩っていけば、大元が出てきちゃうからな」

オールマイトには、それが何かは解らなかった。理解はできなかったが、察することできた。

神々が、この世界に降り立つ、ということか、と。

「そうか。また世話になったようだな」

「気にすることないさ。これは『探偵への依頼』でもあったからな」

誰からの、とはオールマイトは聞かなかった。

その代りに彼は一つの疑問を投げる。

「何故、私に?」

「筋を通そうと思つてな。この世界に転生者の情報を拡散させるつもりはないが、それ

でもヒーローとしての誰かに話を通すべきだ。それが、オールマイトだったって話だよ」

「光荣だと思っておくべきかね？」

少し挑むように笑いかけると、彼はフツと笑って返した。

「違うな。オールマイトこれは『何時ものお礼』さ。マスターによくしてくれたこと、俺達のことをかばってくれているあんたへのな」

「かばっているつもりはないが、君たちのしていることは人のためになっている。それ故に、我々は『見落としている』だけだ」

本来なら速やかに捕縛するべきなのだろう。個性を勝手に使ってはいけない、自らの生命の危機に対しての自己防衛なら許されるのだろうが、彼らの場合はそれに当てはまらない。

誰もが強力な個性を持ち、個性を抜きにしてもその強さは揺るがない。

「それでもさ、ありがとう『ナンバーワン』。あんたがそこにいてくれたことを感謝するよ」

肩をすくめた後、優雅に一礼したコナンは、話は終わりだと背を向けて歩きだす。

「二ついいかね？ 依頼があつたから君たちは動いたのかね？」

ピタリと、コナンは足を止めて、顔を上げた。その視線の先には、夜空に輝く月があつ

た。

「俺達は、『イレギュラー』だ。本来なら世界にないはずの存在。俺たちがいたから救えたものもあれば、俺たちがいたから失ったものもある」

因果応報、すべての物語は繋がっており、何処かで切れるものではない。原作というものをも大切にしたいが、結局は破綻してしまっていた。

当然のことだ。物語とはそこにいる人物だけで描かれたものだ。そこにまったく違う何かをつけ足せば、それがどんなに小さなものでも物語を、まったく別の何かに変えてしまう。

「本来なら排斥されるべき存在。それを、大切にしてくれたあんたらへの、せめてもの恩返し、だからかな？」

彼は振り返り、そう微笑んで再び歩き出した。

「恩返しか。それは私の方だよ、ありがとう」

すでに誰もいない路地に向かつて、オールマイトは深々と頭を下げた。

「お帰り」

「ただいま、なんだ気づいてたのかよ？」

戻ってきたコナンを出迎えて、俺は飲み物を手渡した。

「俺を誰だと思ってるんだよ？ おまえらのマスターだぜ？」

「そうだったな。マスター、話してきたけど、止めなくて良かったのか？」

「コナンが決めたんなら、それでいいんだろ、頼りにしてるぜ、名探偵」

「まったくおまえは昔っから、俺に投げっぱなしだよな」

「信頼の証だつて」

気楽に笑ってみせると、コナンは呆れながらも笑った。

「これからもよろしくな」

「ああ、こちらこそさ」

そう言つて俺達は乾杯と口にした。

日常って毎日ってことだけど、ちよつと異常な日々も毎日と続けば日常なんだよね

緑谷出久の朝は、実は早い。

朝日が昇ると同時にとか、目ざましが鳴った瞬間に目が覚めるではなく、頬に軽く触れる気配で彼は目が覚める。

「あ、おはよう」

薄く眼を開けてみると、そこには手のひらに乗るくらいの小さな存在、妖精がビシツと敬礼していた。

出久が艤装を受け取ったときに出会った彼ら、あるいは彼女達はこうして毎日、彼が起きたいと思った時間に起こすのでした。

「うん、今日は『一つ目』で起きたから」

ビシツと敬礼する妖精とは別の方向に、出久はゆっくりと顔を向けた。

そこには主砲から弾薬を抜く妖精たちや、飛行甲板に並んだ航空機を格納庫に戻す妖精たち、あるいはミサイルや魚雷を発射管から戻している妖精たちと、色々な妖精たち

がいた。

全員が、出久の視線に対して一度は揃って敬礼して、再び作業に戻っていく。彼は思う、『良かった、今日は朝からお部屋の修復しなくて、済んだ』と。

今日は幸先がいいようだ、これならトレーニングも上手くいくかもしれない。

ホツと安堵している出久だったが、彼自身は気づいていない。朝から目覚まし代わりに砲撃されたり、爆撃されたりすることが異常なことも。朝から部屋を修復しないで済んだことに安堵している自分がいることも、それが普通じゃないことも気づかない。

着替えを始める出久の後ろで、妖精たちが『ニヤリ』と笑っていたことを彼は知らないでいた。

妖精たちにとって、緑谷出久は『よく解らない』存在だった。

最初に艤装と一緒に『配属』した時、彼は艤装に適合するのに艤装の扱いを知らず、また装着できたのに艤装への指示や妖精への指示も出来なかった。

艦娘なら生まれた時からできたことができない、それなのに艤装が使えるよく解らない存在、それが妖精たちから見た緑谷出久という少年。

田中・二郎提督からのお願ひもあつたから、妖精達は仕方なく従っているだけだった。その彼らを変えたのは、艤装を貰つてからひたすら、ただ直向きに訓練を繰り返す出久の姿。

上手くできなければ何度でも。何万回でも繰り返す。できたことは今度は、完璧にどんな状況でもできるように反復訓練を怠らない。

愚直なまでに真つ直ぐに、ただ我武者羅に訓練する彼の姿に、妖精達は強く胸を締め付けられた。

これが新しい主だ、これが彼なんだと。

同時に思う、『あ、この子、何処かで止めないと死ぬまでやる』と妙な焦燥感に駆られたが。

その一件があつてから、妖精たちは出久に心から従うようになった。

彼らも心があるから、出久の気持ちは痛いほど解る。個性社会で無個性でヒーローを目指す、諦めると周囲から言われてもあきらめなかつた彼の一途さ、こうと決めたら曲

げない頑固さ、それは妖精たちが知っている『昔の軍人たち』に通じるものがあつたら。ら。

「もうちよつと」

だから妖精たちは妥協しない。ギリギリのラインを見極め、出久が潰れるか潰れないかの瀬戸際まで追い込んで、後はきつちりと終わらせる。

「うぎゃ?!」

首筋に砲撃して気絶させて。

「……デク、おまえはすげえ奴だよ」

白目を向いて煙にまみれながら倒れる出久に、爆豪はポツリと呟いた。

何度目だろうか、彼が妖精達の止める声ではなく、止める『攻撃』で倒れていくのを見るのは。

やり過ぎ、無個性に爆発を向けて殺しかける、なんてことも平然とやれる爆豪から見ても、妖精達の出久に対する突っ込みというか、『いいから訓練止めなさい』攻撃は、度を越している。

主砲のゼロ距離射撃なんて、元々艦装を持つている艦娘でさえ、訓練でやらない。

接近さえない艦娘ばかり揃っているのが、田中・一郎の鎮守府なのだが、爆豪はしらないので、『あれが普通か?!』と軽く戦慄していたりする。

こうして、出久は砲撃を受けて気絶して、後は艤装の妖精たちが出久を運ん行くのだが、出久の家族は心配しないのだろうか。

爆豪はちよつと気になつて様子を見に行つたことがあつたが、しなければ良かったと後悔したのだった。

「今日もお疲れ様」

すでに異常さを異常と感じないほどに繰り返され、それが当たり前に感じ始めてしまった出久の母の姿と、敬礼して何時も通りと運んで行く妖精達の姿に、爆豪は軽く震えが来たのだった。

とはいえ、出久を止める手段は過激ではあるものの、それ以外では妖精たちは彼に対して素直に従っている。

指示を聞き、願いに応え、想いを叶えるために。

どうも、遅いごあいさつでごめんなさい、田中・一郎です。

今日は俺の個性の『手のひら鎮守府』からお送りしています。

現在ですか、現在は。

爆豪君とデク君対、うちの最強艦娘が戦っています。模擬戦ですよ、大丈夫ですから、もうね妖精さんパワーで傷一つなく訓練場から出てくるから安心してください。

「あつぶねえ!!」

「かつちゃん!!」

「避けるよデク! この人のナイフはマジで死ぬぞ!」

「うん!!」

はい、なんか見事に二人がダンスを踊っているようですがね。ははは、なんだろ、なんであの子はあるに刃物の扱いが上手いのかな。

「大丈夫ですよ。ちよつと『痛い』か、『死ぬ思い』するだけですから」

穏やかに笑うのは、チート過ぎるうちの艦娘の中でも滅茶苦茶チート染みてバグって性能を持っている女の子。

見た目、中学生くらい。田舎にいなような素朴そうな外見なのに、逆手に持ったナイフと二連装の主砲、それに彼女を中心に『空中を進むモーターボート』みたいな独立艦装。

うん、なんか独立艦装の主砲が五十二センチ三連装『電磁併用』になったらしいけど、俺は知らない。あれ、見た目が完全に大和型戦艦みたいで、後部の第三主砲がVLSになっただけで、対空兵装がレーザーとか訳が解らないものなんだけど、俺はもう見ないことにした。

「どつちにしろ痛いじゃないですか?!

あ、爆豪君とデク君の声が重なった。

いや〜〜あの二人って呼吸びつたりだよ。もう訓練で組ませると、面白いほどにお互いの動きがはまるはまる。

一対一だと彼女はナイフ一本で相手しているのに、二人だと艦装フル装備で挑むからね、デク君と爆豪君の二人が組むと技量がどれだけ上がるかよく解るよ。

「マスター、そろそろ現実逃避は止めるよな」

「コナン、もう少しだつて。今日はもうちょっと現実を見たくない」

止めてくれよ。俺はもっと平穩に暮らしたいの。なんだよ、あいつら、この世界に来て練度が上がったつて、どういうことだよ。

改三つて実装されてないって話は、何処に行ったんだよ?

「吹雪・壊参か」

「コナン、頼むからデータを俺に見せるなよ。最初の頃だつて艦装スロットが怖いもの

ばかりだったんだから、あんな状況じゃもつと見たくないからな」

「ああ、俺もできれば見たくなかったぜ。けどな、見ないとダメだろ？」

ク、逃げられないのか。

仕方ない、覚悟を決めよう。

「デクううう!!」

あ、デク君が捕まった。うわあ〜あの艦装、前よりも防御力が上がったのに、一撃で細切れだよ、十六分割だよ。

「第一スロット、『直視の魔眼』」

「あ、そこは変わってないのね」

安心したよ、いや安心しちゃダメだろ。だから、吹雪のナイフは容赦ないんだよな。あの艦装、また修理ってなったらエルが怒らないかな？

「第二スロット『複合戦略級攻撃システム』」

「え？ 何それ？」

はい、俺の知らない単語なんですけど。

「第三スロット」

「え、待って、なんで流すのさ?!」

「『防御貫通絶対ダメージ』」

は、ははははは。え、それってスキルって言いませんか？　ねえ、艦娘の艤装のスロットにスキルって入るの、え、防御貫通の絶対ダメージって何。

「第四スロット、『武芸百般・極み』」

「あ、うん、そうだね、吹雪ってなんでも武器が使えたよね。つて！　おまえ本当に駆逐艦か?!」

思わず叫んだ俺は悪くない。元々、吹雪は何処か異常だったけど、それがこの世界に来て各段に上がったね。

「あ」

「遅い」

デク君が倒れたことに気を取られた爆豪君に、吹雪の右の回し蹴りが決まって、彼も地面に倒れた、と。

「まったくもう！　二人とも気を抜き過ぎですよ！　だからあんな『脳無』程度に後れをとるんです」

プンスカと怒っている吹雪は、年相応に幼く可愛いのであれどね。

「あれの片付け、誰がやるんだろううな」

「は、ははは、誰かやるだろ、誰か」

呆れて半眼で見つめるコナンに、俺はそう答えて帰ることにした。

訓練場、半壊。地面に頭から埋まった爆豪君と、艦装を細切れにされた後に殴って飛ばされたデク君。

うん、かなり怖い訓練場だ、あれで妖精さんパワーが働いてなかったら、二人とも生きてないね。

「あれ？ 妖精さん、白兵戦の訓練ですか？」

え、なんて？

俺は背を向けていた訓練場へ振り返ると、デク君の艦装妖精さん達が、手に銃を持って吹雪に向かって言っている途中だった。

「はい！ ならば吹雪も頑張ります！」

「第二ラウンドだな」

「訓練場全壊にならないといいなあ」

俺はそんなことを神様に祈る、ことはなかったよ、本当だよ。神様に祈ったら、『お前の個性くらいおまえでどうになしろ』って怒られそうだからね。

そして後日、俺は訓練場が消滅しかけたことを、妖精さん達からの報告で知ったのでした。

本当、うちの吹雪って駆逐艦なのかな？

艦装スロットに『ゴジラ』入っている電や、『イデオン』装備できる榛名が全力で訓練

しても壊れることないのに。

資材、足りるといいな。あ、なんだろう、お腹が痛いや。

爆豪は考える。幼馴染は、いったい何処へ向かっているのかを。

艦装を与えられて無個性でもヒーローをやれている。

彼が本気でヒーローを目指しているから、その魂にロックを感じたから田中・一郎に頼みこんで艦装を作ってもらったのだが。

「俺は速まったかもしねえ」

思わずそう考えてしまうくらいに、彼は思い悩んでいた。

強くなつてはいる。個性がとか艦装がとかではなく、精神的にも肉体的にも強くなつていて、背中を任せると頼もしいと感じるくらいには、認めてやつてもいいと思えてしまう。

しかし、だ。同時に彼の周囲にいる妖精たちの存在に、ちよつとだけ怖くなつてしまふ時がある。

昔は自分もデクに対して個性を向けていた。容赦なく攻撃したこともあつたが、それでも無意識に『外す』あるいは威力を落としていたのに。

あの妖精たちに『容赦』の二文字はないのかもしれない。

やり過ぎに対して、主砲で攻撃するか。しかも、ヴィランさえも吹っ飛ばす威力を持つた主砲を、ゼロ距離で放つものか。

いや、やらない。いくらヒーローを目指しているとはいえ、今の彼はまだ中学生。体が出来上がっていない時期から体を鍛え続ければ、いずれ大人になつた時に障害としてでてくるかもしれない。

もしかして、妖精達はそれを知らない。教えてもらっていないのか。

いやそれはない。田中・一郎はそれほど浅慮じやなかつた、その彼についているコンツツ少年も、思慮深く知識が豊富だ。知らないはずがないし、訓練の時には何時もいるから危なくなつたら止めてくれる。

はずだろう。

爆豪の頬を、汗が一筋、流れおちた。

まさか、止めないことはないよな。やれるだけやってダメなら潰れても、なんてこと

を考える人たちじゃない。もし、そういった人たちなら最初の頼みに動かなかったはずだ。

それに、アインズもいる。彼の魔法は、まさに神の奇跡のようだ。少しのけがなら瞬く間に再生してもらえる。

もしかして、それがあるから歯止めを忘れていいのか。まさかそんなことはないか。

爆豪は無意識にギターを握りしめ、かき鳴らす。

悩んでも仕方ない、ウジウジと考えるのもう止めたはずだ。今の自分はロックに生き、ロックのように突き進み、そしてロックのように激しくヒーローをやる。

「なんだ、単純じゃねえか」

ギターを弾いていると、不安とか後悔なんてすぐに消えてしまう。後に残るは明確な決意と、うるさいほどに叫んでくる自分の心のみだ。

「明日は負けねえ」

最後に小さく呟き、爆豪は不敵に笑った。

ギターを丁寧に置き、彼はベッドへと入り眠りにつく。

そこでふと思う、やはり気になる。

自分の幼馴染はいつたい、どこへ行くこうとしているのか、あるいは行かされようとしているのか、と。

悩んでも仕方がないか、と爆豪は割り切って眠りについた。

「今日もダメだったなあ」

自室のベッドに寝転がった出久は、深くため息をついて体の力を抜く。

吹雪の攻撃を回避できる自信はあったのに、実際に対戦してみると手も足も出ない。前に比べて艤装の扱いは慣れており、妖精たちとも意思の疎通ができてるのに、だ。

まだまだ自分は弱いな。

ちよつと暗くなりかけた出久の顔に、ぴしやりと冷たいものが一つ。

「ひゃ?!」

悲鳴をあげて体を起こせば、ベッドの横から艤装が伸びていて、その上に冷たいジュースが乗っていた。

「ありがと、落ち込むなっってこと?」

ジュースの隣にいる妖精はドンと自分の胸を叩いている。

自信、もて、大丈夫やれる、前より強くなった。無言で見つめてくる妖精の言葉が、不思議と出久には聞こえてきた。

「ありがとう」

お礼を言つてジュースを口にする。ほどよい甘みに体の疲れが少しだけ取れた気がした。

何のジュースと出久が問いかけようと顔を向けると、そこには妖精たちがいなくて代わりに『参考書』が置いてあつた。

「受験勉強か」

妖精が『雄英合格当たり前、やるなら首席！』と旗を振っている。相変わらずこの妖精達は手厳しい。

自分に無茶はさせない、でも無理してでも実力を上げさせる。それは戦い方でも、勉強でも同じだ。あらゆることに手をのばさせ、すべてを平均点以上に引き上げようとしている。

矛盾しているように見えて、妖精達の中では明確な線引きが出来ているようだ。ならば、出久のすることはただ一つ、妖精たちに胸を張れるようなヒーローになること。頑張るか、と彼は机に向つたのでした。

「痛い」

間違えると、対空砲が飛んできて後頭部を襲撃するのは、妖精達なりの励ましかと出久は思う。

しかし、だ。

「待って！ それは待って!!」

止めても無駄だ、妖精達の眼はそう語っていた。

すべての主砲に徹甲弾を入れて、狙いを定めてくる妖精たちに、出久は思うのでした。『彼らの信頼が、とても重い時がある』と。

そして、今日も出久の部屋からは攻撃の大音響が響いてくる、のです。

類は友を呼ぶっていうけど、同類以上の奴が来ることもある

望んでも手にできないものは世の中にはある。願っても叶えようと努力しても、どうしても手から零れ落ちてしまうことがある。

努力して試行錯誤を繰り返して、何度も何度も挑戦しても、結果が出ないことなんていくらでもあった。

彼もそうだった失敗の経験はあった。自分がやっていることが無意味かもしれないと、もう諦めたほうがいいのではないかと。

何度も悩み、手を止めて、それでもやり遂げたい意思が心の奥底で燻っているから、止められない。

「もう嫌だよ」

何度も聞いた声と言葉を、また聞くことになっても。

涙を流している彼女がいたとしても、どうしても止められない。

原因を調べて、打開策を考え、誰でもいいからと相談しても、誰からもアイデアが

出てこない。

自分の才能の無さが嫌になる。

どうしてこう自分の個性は、願いに沿わないのか。こんな無駄な個性があっても、無意味ではないか。

挫折と絶望感に支配された彼は、街中を当てもなく歩いていった。

道行く人は誰もが彼女が望んでも手に出来なかつたものを持つて、それが当たり前だと信じて疑わず、無理して背伸びして、世間の何かに流されてごく当然のように『違和感』を身に纏う。

革命が必要だ。誰もが眼を覚ますための、革命を。けれど、自分にはその力がない、才能がない、個性が使い易いなんてバカな話でしかない。

歩くのに疲れた、そうじゃない心が疲れただけだ。

道行く人波を眺めながら、彼は懐から一枚の写真を取り出す。

『白い髪の』。

ハツと彼は立ち上がる、写真の向こうを白い髪の人物が歩いていった。見つけた、いや背格好が違う。けれど、あの服装はなんだ、見事な色彩とデザインのあれはどうしたことだ。

思わず彼は追いかける。

我武者羅に追いかけて、ある店の前で立ち止まった。

『ラ・エンテル』。

「ここか、それかその下か。階段の下を覗けば、『ジエミニ』と書かれている。まさか、ここはあの場所か。」

ある噂を思い出し、彼は全身を硬直させた。

心に染みわたる料理を出す店。そして、魂を救う一杯を出すバー。

「ここならば、自分は見つけられるかもしれない。」

「待っている、エリ」

小さく呟く、決意を込めて男は『ラ・エンテル』の扉に手をかけた。

「皆さま、どうも、田中・一郎です。早速ですが、俺は怒鳴らないといけない。もう心の底から怒鳴ってお説教しないといけない。」

「こちらエル!!」

「はい?」

何事と振り返るあいつは、大きなプラカードを持っていた。『おいしくて安い店、『ラ・エンテル』、貴方の胃に極大魔法!』って書いてある。

うおい! 待った、ちよつと待った! え、何それ? 胃を消滅させたいの、待って、そつちまであるの、俺一人の突つ込みでそれをさばけて。

こいつ、俺を殺しに来たな。

「なんですか、一郎さん?」

「まず最初にだな」

よつし、プラカードは置いておこう、そつちは後でいいや。

まず最初にこいつの格好を叱らないと。

「おまえ、その服装なんだよ?」

「なんだよと言われても」

くると目の前で一回転するエルの『スカート』が翻った。

うん、スカートだよ、スカート。なんだよおまえ、なんで不思議の国のアリスみたいな恰好してるんだよ、しかもエプロンドレスは白でも、その下はピンクって何を狙ってるんだよ。

「ただのアリス・ブランドですよ？」

「何処のブランドだよ？」

服装もそうだけど、その背中の翼は何？ 天使ですか、天使なんですね、まあ似合っているかどうかっていうと、おまえは男かってキレるくらいに似合っているけどさ。

「ギルが投資したブランドです」

「ギルガメツシユウウウウ！！」

元凶はあいつかまったく！ どうしておまえは平穏とか普通に生活できないんだよ、何か俺に恨みでも有るのか！

「フ、どうした我がマスターよ。なんだ、その顔は？ そうかそうか、王の中の王に普通の生活をしろというのだな？ 許せ、マスターよ、我の溢れるばかりの『王のオーラ』が、普通の生活を拒絶するのだ」

「おまえは俺の顔色から察するなら悪ふざけは止める。アリス・ブランドってなんだよ、誰のための」

「フ、馬鹿を言うな、

ユニコーンのために決まっている」

真顔で決めたよ、この馬鹿愉快王。なんでそこでユニコーンのためって言いきるんだよ。おまえはそこまでユニコーン至上主義化か。

「我が人生に、一片の悔いなしといえるほどだな」

「お前」

そこまでか、そこまで何ですか。こいつ、そんなになるまでユニコーンが大好きってわけか。

「マスター、それ以上は止めるがいい。いくら我が寛容でも、それ以上の『称賛』は恥ずかしいものがある」

「褒めてない、絶対に褒めてない」

「照れることはないぞ、存分にユニコーン至上主義の我を褒め称えるがいい。いずれ世界を染め上げて見せようぞ」

「おまえは何処の真珠メーカーのトップですか？」

「世界をユニコーンで染める力を」

ダメだ、今のギルはハイテンションで止められない。

はあ、まったく。でも、ユニコーン以外に反応しないし、それ以外で馬鹿やることはないからいいか。

あの言葉に反応しないだけ、救いがあるよな。

「イエス・ロリータ」

試しに言ってみても、ギルは軽く笑っているだけだ。

「ノータッチ!!!」

へ？ あれえくくなんで別方向からくるかな？

店の扉を吹き飛ばす勢いで、男は叫んでいた。

黒髪の三十歳くらいの男性で、服装はスーツっぽいけど。

「……失礼」

今更、身なりを整えられてもね。

呆れる俺達を余所に、男は大股で歩いて来て、エルの前に片膝をついた。

「君、その服は何処で手に入れたのかな？ あるいは誰が作ったのか、もつと言えばどう

やったら手に入るのか？」

「え、あの、これですか？」

流石のエルも引いてるな。うわあ、目線で『変態です、変態がいます』って訴えてくれるけど、おまえだつて女装しているから変態になるんだけど、解っているのかな？

「おい、客なら注文をしろ」

おまえはさすがだよ、弔。この異様な空気の中、普段どおりに動けるんだからさ。

「これはすまない。つい興奮してしまつてね」

「そうか、変態なのか？」

ちよ?! おまえな、弔! 直球過ぎ! なんてそんなに真つ直ぐに行つたの、普通は少しオブラートに包むとかしないのかよ?!

「何の話だね? 私はいたつて普通の」

「普通の、何だ?」

「小さな可愛い子が好きただけだ」

変態決定! うわあ〜キリツとした顔で言いきつたよ、こいつは間違いなく変態だ。

「誤解があるようだが、私は可愛いものが好きだ。ただそれだけの男でしかない」

「何かあつたのか?」

「少しな、私は自分の才能に限界を感じている」

あれ、なんか弔が相談に乗っている感じになっっているけど。

「限界か。俺も限界は感じたことはある。けれど、それを試行錯誤で乗り越えた先にこそ、新しい道が開けてくると信じている」

「そうか、君はそうしているのか。羨ましいな」

「俺一人の力じゃない」

あれ、なんだか二人の会話がかみ合っているような、かみ合っていないような。あれってなんか、通じ合っていないませんか。

「フ、そうかそこで繋がるか。歴史とは面白いものよな」

「え、ギル、なんでそこでシリアスになるわけ？」

「たわけ、我はいつでもシリアルよ」

え、それって何の話？

「そういえば名乗っていなかったな。『治崎・廻』だ」

「死柄木・弔、ここの料理人だ。それで、おまえは何に悩んでいる」

「ああ。私はこの子のことだな」

そつと治崎は懐から写真を出した。

あれ、えつと娘さんってことでもいいのかな、じゃなければ本当い変態扱いするしかないけど。

写真には白いちよつとウエーブのかかった髪と、右の額から角の生えた少女が、『白いワンピースを着て背中から天使の羽を出して』ちよつと涙目になっていた。

「これが」

「うちのエリちゃんマジ天使」

変態だああああ!!

すつごい速度で俯いて拳を握って小さくガッツポーズして、何か魂のこもった一言を呟いた治崎は、その後すぐに顔の前で手を組む姿勢に戻った。

すげえ、早業。何それ。

「侮れませんね。さすがです」

「エルが何に戦慄しているのか、俺には解らないよ」

なんで額を汗を拭って唸っているのかな、こいつは。

「私が探しているのは、彼女のための服だ。見ての通り、普通の服ではダメだ」
「そうか？」

弔は首をかしげているけど、俺も同意見だよ。別に今の服装がおかしいってわけじゃないし、特別に変なところがあるわけじゃない。

普通に可愛い女の子って見た目だけど、天使の羽以外は。

「ダメだ!!」

いきなり治崎は叫んだ。叫んで立ち上がり、片手を天井へと向けた。

「ダメなんだ! これではエリの可愛さの一億分の一も表現できていない! いいか彼女のサラサラヘアーを見ろ! この艶と色合い、何ものにも汚されぬ白! 天然の髪色としては最上級! いやもはや、この世においてこの色合いに勝る髪は存在しない、まさに天下一品、天空の女神にも勝るものだ!」

「あ、ああ」

おいおいおいおい、なんでそこで力説が入るのさ?!

「しかもだ! この瞳を見ろ! 赤い、とても赤くて健康的だ! まさに太陽! 地上すべてを照らす神々の瞳! その瞳に幼いながらもしっかりとした美を封じ込められている、この瞳だけで三倍は逝ける! 見つめられてみる、おまえもすぐに昇天できるだろう!」

天に昇ってるのはおまえの危なさだよ、みろよ店内にいるお客さんが凄く白い目で見て……ないだ?!

なんで半数が頷いて、半数の人が写真を見て『確かにこの服はな』なんて言ってるの? え、この店って『そういう連中の集まり』?

「だというのに全体的な印象は幼くか弱く儂く。まさに少女の面影そのもの! 守って

やりたくなる衝動を抑えるのに、俺はお経を三十分は唱えるしかない！」

「誰かオールマイトを呼んできてくれ。こいつを捕まえないと」

「変態つてヴィランだったんですか？」

ち、違うのか、でもオールマイトなら何とかしてくれそうじゃないか。

「僕く壊れそうなほどの美しさを持ちながら！ エリは笑顔を見せてくれる！ 精一杯に笑ってくれるのだ!! 私に向かつてだぞ！ 『お洋服ありがとう』などと言われたあの日！ 私は自分の運命を悟った！ 同時に世界を呪った！ 何故だと!!」

治崎は天井へ伸ばしていた腕を床に叩きつけ、そのまま項垂れた。

いや、俺が項垂れたいわ。

「どうしてだ！ どうしてこの世界は『こんなはずじゃなかったこと』ばかりなんだ！ 間違いだ！ こんなのはおかしい！ どうしてだと私は何度も叫んで探した！ 探して探して世界中を旅してしまっただほどだ！」

「話がズレてない？」

俺は思わず弔に訪ねた。

「いや、繋がっているな」

「ほう、さすがだ弔よ、貴様も推察力を上げてきたな」

「英雄王に褒められる日が来るなんてな」

「フッフ」

え、あれ、俺だけ？ えっと、エルは？ あ、ダメだ、なんか凄く頷いている。コナン、俺の最終精神的防壁のコナンは何処だ、名探偵が解説してくれないと俺の精神が崩壊しそうだ。

あ、黒霧と出かけたんだった（泣）

「だが見つからなかった！ 見つけることが出来なかったんだ！ だから俺は決意した！ 見つけることができないなら作るしかないと！」

そして治崎は再び立ち上がり、エリちゃんの写真を高らかに掲げた。

「うちのエリちゃんのマジ天使で可愛いを、さらに引き立てる洋服を!!」

「……え、そこに繋がるの？」

「一郎、おまえは少し回りのことを察することを覚えてくれ」

「我がマスターは相変わらず空気が読めない男だな」

え、俺が悪いって言うのかよ、と振り返って叫ぼうとしたら店中の人達が頷いていた。トツティちゃんやトルテ君までも。

コナン！ コナン、カムバック！ もう俺のライフはマイナスだぜ！

「だが、出来なかった。俺にはこんな駄作しかできなかったんだ」

「そうか、長い旅路だったようだな」

あれ、ギルが妙に優しく治崎の肩を叩いているんだけど。
「お疲れ様でしたね」

エルもなんでそんなに優しいのさ、何があったの。

「これは俺のおごりだ、食べていけ」

弔まで。え、そこまでのオオゴトなのか、だって可愛い子に服を見つけることができないから、自分で作ってやろうぜって話でしょ。

「一郎、おまえは何時からそんな冷たい男になったんだ？」

「あれ、え？」

「フ、マスターよ、貴様は慢心したようだな」

「へ？」

「酷すぎませんか、一郎さん」

「えええ？」

なんで弔、ギル、エルって三連ちゃんて怒られたの。え、俺が場違いっていうか、空気読めない男になってるんだけど、これっておかしいのかな。

飲食店でやる会話じゃないでしょうが。

「皆、ありがとう。しかし、私はついに見つけた。そう、君のその服だ。どうか、私にエリちゃんを天使にする術を授けてくれ」

なんか、神様に祈るように片膝ついた治崎がエルを拝んでいるんだけど、それは違ふよね。

エルじゃなくて、作った人に祈るべきじゃないの。いや祈るっていうより買ってくればいいんじゃないの。

「いいでしょう。貴方のエリへの愛情は、深くそして偉大でした。誇りなさい、このエルネスティ・エチエバルリエが証明しましょう。貴方は今、偉大なる勇者^{紳士}達の列に並ぶことを許されました」

「おおおお!!」

エルが凄く尊大な話し方をすると、治崎は泣いて喜んだのでした。

そういうえば、エルって王族以上の貴族の出だったなあ、なんてことを俺は思いだしていた。

そして、その日から治崎・廻の特訓は始まった。

「ダメです！ 素材をよく見つめなさい！ 同じ布でも質感を感じ取りなさい！」

「は、はい!!」

ある時はエルに布の束に巻かれて廊下を転がされて。

「色合いは自然界の神秘、その色い合いを重ねることで得られるのは神々の領域、しかし人はそれに美を見出し、ファッションとした。さあ、君が望む相手を引き立てる色を描き出すだ」

「はい!!」

ある時は、まさに自然界の色が集められたような滝に打たれ、ソープの教えを聞いた

り。
「ぬるい！ 貴様の愛情はその程度か!! 温すぎる!! 貴様の魂を燃やせ！ 情熱を燃やせ！ ただ着るものへの『敬意と愛情を』注げ！」

「はい!!」

ある時は、アインズによるデザイン講座とかされていたり。いや、アインズのセンスってかなり磨かれたけどさ、それって音楽関係じゃないの。

「知識とは力だ、世界中を探したならば知識はあろう、しかしそれだけ至高は生み出せぬ。過去に学ぶがいい。すべての服飾の知識を入れよ」

「了解だ」

ある時は、ギルによって膨大な資料の海に沈められたり、と。

本当に凄いと思うよ。マジで変態っぽいけど、あの情熱は俺も見習うべきかな。

「二郎さん、あれは何をしてんだ？」

「新しいお弟子さんですか？」

お、爆豪君とデク君だ。学校が終わったのか。

「はい、弟子？」

「違うんですか？ てつきり、また僕とかつちゃんみたいに、何かの教えを請いに来た人かなって」

え、あれ、そんなことしてないと思いたいけど。

「あいつ、アインズさんの攻めにも耐えてるぜ。ロツクな気配がする」

「かつちゃんダメだよ。まだあれって初歩くらいだから」

え、初歩、何を言っているのか、解らないよデク君。初歩って何、服を作るための訓練しているんだよね。

「バー口、デザインに訓練なんてねえよ」

俺はその日、コナンに言われてやっと気がついた。うん、デザインを学ぶだけなら、服を作るだけなら肉体的な修行はしなくていい、と。

止めなくちや。

「一郎、ここは任せてみよう」

「弔、どうしてだ？」

「なんでか、弔が俺を引きとめた。」

「そのほうがあいつのためだ」

「なんでか、治崎を優しく見ているけど、何か共感できるものがあつたのかな。」

「あいつは俺と同じだからな」

「弔と？ そんなに同じ部分はないと思うけど」

「同じさ」

「ちよつとだけ照れたように笑う弔に、それ以上のことは聞けなかった。」

「あいつは俺と同じで、迷って悩んでようやくやりたいものを見つけたんだ」

「何か言ったか？」

「言いや」

「弔はそう答えて、『ザ・ハンズマン』の仮面をしまった。」

治崎・廻。個性、『オーバーホール』。対象を分解し、再構築、あるいは分解したものを同士を結合させることができる彼は、地獄のような試練を潜り抜けた。

「ようやくだ、エリ。ようやく出来たぞ」

壮絶な訓練の果て、彼は個性も使った自分のすべてをかけて少女に服を送った。

「ありがとう」

少し頬を染めて笑顔で告げる少女の姿に、治崎は小さく微笑み返した。

「我が人生、未だ至らず。しかし、その道筋はここに始まる」

エリの笑顔を胸に秘め、彼は歩き出す。

世界中の可愛い少女に、その可愛さを昇天させる服を送るために。

彼は邁進した。やっと手に入れた納得できる技術と、それを叶えるための情熱のままに。

やがて彼は、こう呼ばれるようになる。

『ミスター・クローゼット』、あるいは女性を美しく飾ることから、『ドレッサー』と。

それは、爆豪とデクが雄英の入学を決めてから、少しした頃のお話。

「二つの意味で何か言うことはあるかね、田中少年」

「はい、オールマイト。変態の情熱は世界を活性化させます」

「よろしい！ では君は反省していない、ということではないかな？」

「すみませんでした」

そして、俺こと田中・一郎は、治崎の一件と、『やり過ぎだよ爆豪君とデク君、イン雄英入試試験』でオールマイトに呼び出されたのでした。

誰かの声に応え、その限界を超える

それは、雄英の入試の少し前の話。

「試験内容の変更かい、オールマイト?」

「はい」

根津校長の言葉に、彼は大きく頷いた。

「今になってどうして?」

「今年の受験生に二人、問題があります」

彼の言葉に、根津は机に出された資料に目を落とす。

他の先生方も配られた資料の中、二人のところで止まっている。

緑谷・出久、無個性と『……』。

爆豪・勝己、個性『爆発』と『……』。

二人の入学は雄英にとって、マイナスになる可能性が高い。どの先生も口に出さないだけで、不安やあるいは忌避さえ感じているかもしれない。

「確かに問題児ですが、オールマイトが言われるようなことはないと思います」

相澤先生は、問題とは感じているが『危うい』とは感じてないらしい。確かに今まで二人は無許可でヒーロー活動のようなものをしていて、個性を厳しく制限、あるいは明確な法によつて誰もが傷つかない社会を形成している現在において、この二人はそれを破っていることは明白だ。

しかし、だ。この二人が『本当にあのヒーロー』なのかどうかは、実は他からの情報では知れ渡っていない。

『グリーン・シップ』、『シンガー・ボマー』の二人は、自分達から名乗ったことはなく、また活動中もどれだけ映像や写真で捕らえようと仮面によつて顔は見えず、また全体像は捕らえられても、その顔については常に霧がかかったように映っていない。

だから、二人がそうだと確信を持って言えるものは何もなく、この二人がそうらしいという話だけ。

「映像は見ました。ヒーロー免許がないことを抜かせば、この二人のレベルはかなり高い。状況判断能力、戦闘技能、救助対象への対応、どれも素晴らしいといえるレベルです」

褒める相澤の言葉に、誰もが疑問を投げる。彼がここまで生徒を、もつと言えば生徒になる前の学生を褒めることは、珍しい。

彼は、誰よりもヒーロー活動の危険性を知っているし、命が簡単に消えることを理解

しているのに。

「だからこそさ、相澤先生。二人は『法律を暗記している』」

「そこまでですか？」

驚きは室内にいる誰もだ。まだ中学生の段階で、あそこまでヒーローとしての知識や技術を持っているのに、そこに加えて法律までとは。

オールマイトは知っていることを話す。もちろん、二人がああヒーローであることも含めて。

緑谷と爆豪を鍛えたのは、田中・一郎一派。ヒーローでもヴィランでもない、第三勢力。誰もが知っているわけじゃないが、知っている者は知っている最大勢力。構成人数は不明、個性も不明。目的も不明ながら、行っていることは人助けが大半なので、今まで『見落とす』ことにしていた組織。

組織なのかなあと内容を知った根津が頭を抱えていたこともあったが。

二人を鍛えたのは、そういった集団。何を考えたのか、彼らは全力だった。本当に傍で見ていたオールマイトが、軽く引いて止めようとしたくらいに、全力で鍛えていた。

知識、技術、経験。短時間で効率的に二人を鍛えるために、それでいて学校に影響がないようになって、いつそのことそのやり方をマニュアル化して、全国のヒーロー学校に配りたいくらいに、見事な手腕だった。

知識は法律を始めとして、医療、介護技術、災害時の対応、各種危険物への対応など。二人が資格試験とか受けたら、もう各種資格を一発合格できそうな勢いで。

技術は実際にエルやソープが徹底的に叩きこんだ。素材さえあれば、パソコンが組めるとか、遊具ができるとかレベルじゃない、素材があれば要塞くらいはできそうなくらいに、多方面に渡って。

経験は戦闘時のものから災害発生時まで。死ぬ恐怖さえも経験として叩きこんだ訓練は、二人に土壇場での状況判断能力を上げている。

「それはすでに雄英に入学して学ぶレベルを超えている」

驚愕に染まった相澤の声は、この場にいる先生たちの内心を語っていた。

学ぶべきことなどないのではないか。誰もがそう思う中で、オールマイトだけは違っていた。

二人が育つていくのを傍で見ているからこそ、二人が現在の社会において決定的に足りないものを理解していた。

「それはなんだい、オールマイト?」

「はい、二人に足りないのは、『歯止め』です」

「そうか」

答えに誰もが疑問を浮かべる中、根津だけは解った。いや相澤も解ったように厳しい

目で資料を見ている。

「二人には、『そこで止まる』といった考えがありません」

彼ははつきりと、しかし悔しそうに答えた。

はるうらら、隣は何をする人ぞ、なんて言葉が昔にあったなあ。受験シーズン真つただ中、皆が頑張っている中で、田中・一郎はのんびりです。

「たわけが」

「おう、今日もギルは容赦ないなあ。いいじゃん、試験の一つや二つは落ちててもさ」

人生、一つだけが正解じゃないからね。色々な道があつて、それを選んでいくことも

あるさ。

「あのな、そういう問題じゃないんだよ、マスター」

「え、コナンまでそっち？ いいじゃないじゃん、失敗くらいあるさ」

むしろ失敗のない人生なんて、ないわけだよ。俺だつてそうだし、皆だつてそうなんだからさ。失敗から学んで、次に生かせばいいわけだよ。

「生かせそうにないからだろ、バーロ」

「え、そこまで致命的なこと？ 別に『英雄だけがヒーロー校』じゃないじゃん」

うんうん、そうだよ。別に日本や世界には、他にもヒーロー資格を得られる学校はあるわけだからさ。そこだけを目指して頑張るのは違うと思うわけですよ、俺はね。

「このままじゃ、二人は試験に合格できないって話だよ」

「え、まだ足りないの？」

ウソだろ。あれだけやってまだ足りないって、英雄つてどんだけレベルが高いんだよ。

デク君も爆豪君も、徹底的に鍛えてたじゃない。エルとソープが武器を持っているなんて久しぶりに見たし、アインズはあの豪華な杖を持っていくらいだよ。

しかも、ギルが鎧を纏って『エア』を抜いていたなんて、久しぶりに見た気がするけど。

知識だつてガンガン詰め込んでいたし、六法全書も暗記したんだよね、二人。資格を取らせてないだけで、模擬試験とか全問正解してたじゃないの。

チートを俺は疑ったね！

「でもさ、試験は終わったんだよね？」

俺は覚悟を決めて、闇を背負っている二人を見た。

もう、何があつたんだつて思つたよ。

最初に店に飛び込んできて、『すみません』つて土下座するんだもん。俺は初めて見たよ、ジャンピング土下座。

良かったあ、店にお客さんがいない時間でさあ。

あれ、返事がない。え、二人ともそこまでシヨック。

「土下座のまま動いてないんだけど、気絶してないよね？」

「も、申し訳なくて」

やつとデク君が答えてくれたけど、顔をあげてないし。爆豪君はもう答えてもくれな
いし。

「そこまで気にしなくても」

「俺達のために色々してくれた、一郎さん達に申し訳がたたねえ。こんなんはロツク
じゃねえ」

おくくやつと爆豪君が動いた。え、あれ、えつと。顔を上げた爆豪君は、号泣していた。

「マジで何があつたのさ？」

「二人を狙つた試験内容だつたつて話だよ」

「え？ 高校の受験で特定の生徒を狙うつて、どんだけ酷いの雄英つて」

えげつないな。確かに試験つて本当に合格させる気あるのつて時もあるけど、大抵は生徒を確保しなければいけないから、ある程度のレベルに抑えられているはずなのに。

「この二人だから、だろうな」

コナンが意味深に言っているけど、俺には解らないんだけど、どういふことなんだよ？

「試験内容は例年通りで、実技試験の時になんかあつたらしい」

「へえ〜〜」

「まあ、予想はつくけどな」

さすが名探偵。これだけの情報で推察するなんて、すげえよ。で、何があつたのさ？

「たぶん、試験にマイナス点の『内容があつた』か」

ピクツと二人が震えた。え、そんなのあるのか。いや実技試験じゃマイナス点つてあるか。

「それか、『ヴィランを助けた』か、だろ？」

「なんで解るんですか?!」

「試験結果を見てたんですか?!」

おう、怒涛の勢いでデク君と爆豪君がコナンに迫ったけど、そう言うこと？

え、何か間違ったの？ マイナス点は解るけど、ヴィランを助けたらダメって何で？

「ヴィランは基本的に倒すか、あるいは捕獲が前提条件だからだろ？」

あつさりコナンは二人の突進をかわして、俺の隣に来た。

「ふん、たわけどもが。敵を救おうなどと」

ギルう〜お前ね。呆れて見た俺の視界には、とても嬉しそうに笑っている英雄王が

いた。

あ、これ愉悦じゃない。

「よくやったって褒めてやればいいじゃん」

「馬鹿を言うな、マスター。私の褒め言葉など、簡単に出ると思うなよ」

「お〜い」

口調と表情があつてないぞ、愉悦王。

「で、具体的にどんな内容だったのさ？」

二人に問いかけても答えは戻ってこなくて。ギョツと拳を握って唇を噛んで、めっちゃ

くちや悔しそうだし。

えっと、これってどうなるんだろ？

「こんなこともあろうかと!!」

「映像を手に入れておいたよ!」

「出たな、技術系の自重を忘れた馬鹿二人」

エルとソープが決めポーズを取りながら、映像を持ってきた。

「見てみるか」

今まで黙っていた弔の提案に、俺達はそれを見ることにしたんだけど。

「弔、何してたんだよ?」

「料理を作っていた。試験が終わって腹が減っているだろうからな。人間、空腹だとマ
イナスな思考にしかない」

「すげえ、この状況でそんなこと考えられるなんて、おまえくらいなものだよ。」

映像は試験開始から始まった。

プレゼント・マイクの開始合図は、いきなり開始。準備の時間がないっていうのが気になったけど、確かに現場に出たら『これからやります』なんて掛け声はないよな。

でもさ、団体行動なら声かけあつてやるから、『行くぜ』とかあるんじゃないかなって思っただけ。

「反応はいいな」

「フ、あの程度この二人なら造作もないことよ」

コナンの褒め言葉と、解り辛いギルの称賛に、俺も頷く。

よくあの合図で飛び出せたよな。

あ、爆豪君もデク君もジャージだ。それはそうか、二人のコスチュームは有名になり過ぎたからな。試験で使つて色々といわれるのを防いだのか、それとも力のセーブをしたのか。

でも、デク君は艦装の主機は使っているな。足元と腰に少しあるパーツがそれだね。

ちよつと見はゴツイブーツと、腰のポーチくらいにしか見えないからな。

「試験内容はヴィラン型のロボットを倒してポイントを稼ぐ、ですか。なるほど、なるほ

ど、ロボットをねえ」

「おい、エル、殺気」

「おつといけません。僕としたことが、ロボットが倒されていく姿に怒りが抑えきれませんでした」

こいつは本当にロボットが絡むと自重がなくなるよな。このまま映像を見ていて暴れ出さないか。もつと言えば、雄英に殴りこみをかけないか。

「あれ、この人型もロボットですね」

「え、どれ？」

「これですよ」

エルが指さす先にソープも食い入るように見て、納得したような顔をした後にちよつと悪く笑った。

「なるほど、これかあ」

「え、なにになに？」

「そのうち解るよ」

教えてくれよ。なんでそこで『悪だくみ』みたいな顔、するかね。

まあ、今は試験内容か。へえくく色々な個性があるんだな。これって何処からの映像？

「雄英のデータベースです」

「ハッキングしてんなよ、馬鹿エル」

「失礼な。ハッキングしてませんよ」

「じゃどうやって手に入れた？」

「保護者ですが、試験の映像がみたいですと言いました」

そつちのほうが性質が悪いだろうが、身分詐称じゃんか。

「育てたので保護者です」

日本語って難しいなあ。俺はエルの自信満々な答えに、そう思ったのでした。

「今、どのあたりだ？」

ここで弔が合流、黒霧もいるな。

デク君と爆豪君には試験内容は辛いものだからって、『手のひら鎮守府』に行ってもらった。で、そこで艦娘達と一緒にお食事中、と。

「試験の中盤だな」

コナンの返答に、弔は映像を見た後に大きく頷いた。

「二人は落ちるな」

「え、もう？ 何処でそう判断したのさ？」

「ヴィランのポイントだ。ポイントに『ゼロ』と、『マイナス』がある」

確かに。でもさ、マイナスポイントのヴィランって、そう書いてあるだけでイラストも写真も載ってないけど。

「簡単なことだ、一郎。二人の態度と二人の『性質』を考えれば、な」

「いや簡単って。あれ、ひよつとして俺だけ解ってない？」

え、マジで。なんで全員が領いてんだよ。あれ、俺だけ。

「吹雪も『やつぱりそうなりましたか』って言っていたな」

「え、ひよつとして艦娘達全員が？」

「ああ。予想していたらしい。二人が落ちる理由は、それしかないってな」

え、えええ。こんなに頑張って色々なことができた二人が落ちる理由って。

俺には解らないけど、全員が領いているから解り易いことなんだろうな。

あれ、俺以外の知能指数ってかなり高いから、俺は馬鹿だから解らないって可能性もあるような。

泣きそうだよ、馬鹿野郎。

ちくしょうって俺が思っている間も、爆豪君は爆発で、デク君は拳でポイントを重ねて行った。

あ、妖精が一匹、デク君の肩に乗ってる。あれって、時々是指で指示しているから、きつと上空に偵察機がいるな。で、上空から見た映像をデク君と、後は爆豪君に伝えて

いるんだろうな。

時々、デク君と爆豪君の視線が合わさっているから、あれでアイコンタクト取っているんだろうけど。

連携、見事だな。他の生徒は、と。あれ、まだまだ出来てない。ポイント差が大きな。二人がぶつちぎりの一位と二位で、三位以下と百点差あるんじゃないか。

あれ、でも試験で百点も差がつくほど仮想ヴィランを出すって、おかしくないか。受験生ってまだ素人なんだから、もつと少なくていいはずじゃないか。いくらヒーロー志望でも、こんな数のヴィランに囲まれたら。

「危な?！」

今、女の子が瓦礫の下敷きになりかけたけど!!

咄嗟にデク君が瓦礫を破壊したけど、こんなに危ない試験なの？

あ、あっちでは爆豪君が仮想ヴィランに囲まれた生徒を助けてる。この試験ってなんだろう、まるで『生徒が危険になることを考えてない』気がする。

「セコイ手を使ってるな」

コナンもそう思うんだ。

「例年とは違う試験だな」

「え、吊って前も見ただことあるの?」

「二応な」

へえ〜そっか、まるで違うのか。つてことは、デク君と爆豪君が狙われたのつて間
違いなのか。

オールマイト、何か考えたのかな？

そして試験も終盤。ゼロポイントも敵が二つ出たけど、それもデク君と爆豪君が一撃
で葬った。

瞬殺だったな。出現地点に多くの生徒が固まっていたこともあって、瞬時に倒さない
と被害が出るつて考えたんだろうな。

あれの防御ってかなり硬いつて説明もあるし。

「あれ」

倒したゼロポイントのヴィランが倒れる。二つとも倒れていく先、人型のヴィランが
瓦礫に足を取られていた。

『助けて』

瞬間、俺は二人が落ちた理由を理解した。

そっか、そうだよな。それじゃ無理だよな、二人だから『合格できない』よ。マイナスポイント、それは『ヴィランを助けること』だった。

ぐしやぐしやに泣きながらも、食事を口に詰め込んでいく二人に、誰も言葉をかけていない。

必死に頑張っていたことを知っているから。懸命に努力していたことを見ていたから。二人の熱意をよく理解しているから、何も言わないでいる。

やがて二人は嗚咽を堪えるように食事を終えて、そして机に突っ伏した。

「受かりたかった」

「雄英に行きたかった」

「胸を張って『やった』と報告したかった」

「皆さんのおかげですって言いたかった」

呟く声に誰も答えず、けれど温かい目で見つめる艦娘達。

知っている。二人の誠実さを、二人が努力家なのを。現状に満足せず、これだけでいいなんて考えなんて浮かぶことなく、もつとと前に進んでいた二人の姿を見守っていたから。

涙が流れ、悲鳴と絶望を噛みしめるような二人を見つめた艦娘達は、それでも何か言わない。

「すみません」

「何をだ？」

デクの謝罪の言葉に、エンタープライズは強く答える。

「皆さんの期待を裏切りました」

絞り出すように答える爆豪に、彼女は小さく嘆息をこぼす。

「期待を裏切られた覚えはないな」

「でも僕たちは合格しなかった！」

「落ちたんだぞ!!」

盛大に言い放った二人に、誰ともなく艦娘達は笑った。大声で馬鹿らしいというくらいに盛大に。

「な、なんで？」

「どうしてだよ?!」

「馬鹿を言うな！」

一括はエンタープライズから。そのあまりに迫力に、爆豪とデクは思わず立ち上がった。いつか、ゆつくりと力を抜くように座り直す。

「私たちが裏切られたと感じた？ 馬鹿を言うな。二人ともよくやった、見事だったと褒めたいところなのに、そんな呆れたことを言うからだ」

「で、でもよ」

「私たちが期待したのは、雄英に合格することじゃない」

穏やかに微笑みながら、彼女は語る。二人をゆつくりと見つめ、一言ずつを届けるように。

「私たちが君たちに期待したのは、『ヒーロー』であることだ。誰かを救い、嘆きを砕き、

絶望に立ち向かい、強敵に恐れを抱かず」

交互にエンタープライズは二人を見つめる。

「圧倒的不利な状況でも諦めず、理不尽な暴力に決して屈せず」

艦娘の誰もが二人を穏やかに見詰めていた。誰もが解つていた、試験に落ちたと聞いた時から、怒るのではなく呆れるのではなく、『よくやった』と褒めるために。

「常に勇気を持つて立ち向かい、多くの人を奮い立たせる背中を見せ続ける、そんな『ヒーローである』ことだ」

穏やかに語り終わり、エンタープライズはゆっくりと頷いた。

「よくやった。私たちは誰もがそう思っている。よくぞ、敵であっても見捨てずに助けようとした。確かに犯罪者は悪だろう、裁かれるべき存在だ。被害者にとっては、消えてくれたほうがいいと願う者もいる」

昔からその手の問題は、人につき纏う。被害者と加害者がいるなら、その恨みの感情は消えることはない。

ヒーローは敵を倒す、正義の味方は悪を決して許さない。

けれど、それですべてが終わることはない。

彼がヴィランとなった理由は何だろう。彼が悪事に手を染めた結果は、どこで彼はそれをしなければならなかったのか。

正義の味方であるならば、正義を執行するだけならば、この世界のすべてを刈り取れば終わる。

それで終わったなら、人などどこにも存在しない、冷たい世界だけだろう。

「一郎から聞いていないか？ 彼が語ったヒーローこそ、私達のヒーロー像だ。だからこそ、私たちは君達を誇る、例え相手がヴィランであっても、絶望や悲劇の檻に拘束された人の、『自由を取り戻した』」

彼女は語る、いつかに言われたことを。死柄木・弔が目標とした姿のことを、かつて田中・一郎が憧れた背中のことを。

『^{理想と}人々の自由を護るヒーロー』のことを。

「理想だろう、綺麗事だろうな。ヴィランに苦しめられた人たちからしたら、私達の言っていることは嫌悪か、あるいは憎しみの対象になるかもしれない」

しかしと、エンタープライズは続ける。穏やかに微笑みながらも、決意を秘めた瞳を保持して。

「けれど、その理想と綺麗事を現実にするための、決して逃げない、絶対に退かない、私たちが君たちに期待したのは、そういうヒーローだ」

言葉を止めて、彼女は周囲を見回す。

「こんな冷たくて理不尽な世界だ、誰もが理想を追いながらも、何処かで諦めて折り合い

をつけてしまふかもしれない。現実的に考えて、これで十分だと思ふかもしれない」

艦娘達の視線は二人に注がれる。かつて、戦争を生き抜いた、戦争の中で消えて行つた彼女たちは、二人を通して理想を見ていた。

「けれど、二人は『絶対に諦めないでくれ』。理想を現実にしてほしい、綺麗事を体現してくれないか。私達は常にそう思つて、お前たちを鍛えていた」

そこでエンタープライズはフツと自嘲気味に笑う。

「すまないな、茨の道をお前たちに課してしまつたようだ」

「そんなことありません！」

「皆さんがそう思っているなら僕たちは!!」

涙を流して嘆いた二人は、もうそこにいない。立ち上がり、拳を握つた二人は何時も通りに、前を向いてただ走っていく。誰かの助けてに足を止めず、迷わずに突き進む二人だつた。

「そうか。ならば」

嘆いた者たち
私たちが艦娘から、君たちに願いを託そう。

絶望を砕く最高のヒーロー
どうか人々の自由を護る存在になつてくれ。

「はい!!!」

気合のままに答える二人に、誰もが安心したように笑顔を向けた。

俺が言わなくても、良かったな。

「オールマイト、理想すぎますか?」

「いや、そんなことはない」

食堂の入口で、俺は壁に背中を預けて、入口の反対側にて、同じように背中を預けているオールマイトに声をかけた。

「私は怖かったのかもしれない。あの二人が、あんなにもヒーローらしい二人が立ち止まらずに、消えてしまうかもしれないことが」

「歯止め。何処かで止まらないと、突っ走ってそのまま消えてしまいそうだからですか？」

「ああ」

小さく呟き、彼は天井をみつめたままだ。彼が何を願ひ、何を思い出しているかは俺には解らない。

だけど、これだけは言える。

「爆豪君とデク君は誰よりも強いですよ。誰にも負けないくらいに強い」

「解っている」

「だからこそ、『貴方大人が教えてください』」

ハッとオールマイトが俺を見た。

「世の中の理不尽を、限界があることを、冷たく非常な絶望があることを」

いつだって、世界っていうのはとても暗くて冷たくて、嘆きばかりが多いところだから。

だから俺達は理想を語り、綺麗事を思い描く。それを叶えようと必死になつて頑張っている。

「オールマイト、二人に教えてあげてください」

『二人ナンバーワン・ヒーローの前を走る大人として』

「田中少年……解った、二人には教えよう。世界の厳しさを、現実の非情さを。そして」

オールマイトは真つ直ぐに見詰めてくる。

安心した、この人なら二人に教えられる。絶対に超えられない壁と絶望を。

そして、それを^{ブルース・ウェルトラ}超えることを。

「二人をお願いします」

俺は深々と一礼した。

数日後、雄英の合格が二人の元に届いたのでした。

でも、俺はねえ。

「それとこれとは話が別と思わないかね、田中少年？」

「はい」

雄英の試験の内容、それは問題ないんだけどね。

二人とも、手加減を覚えてくれると嬉しいなあ。

だって、仮想ヴィランすべて粉碎なんてさあ、もうやり過ぎって言葉が笑えてくるよ。

「田中少年！」

「はい、すみません」

俺はその日、雄英の会議室でオールナイト、根津校長に土下座したのでした。

仁義なき、最終兵器合戦、にやー成分多め

ガタガタと全身が震える、もう俺は駄目かもしれない。

どうも、田中・一郎です。

「おい、英雄王、生きてるか？」

「フ、名探偵こそ呼吸をしているか？ 貴様が死んだら誰がなぜ解きをするというのだ？」

「言ってくれなせ。誰のせいだと思ってるんだよ？」

俺の左右で、昔から頼もしい二人が、同じように膝を抱えてガタガタ震えている。

「フ、このギルガメッシュ、間違いななど犯さぬ、と信じていたかった」

「泣くなよ、頼むから泣かないでくれ。おまえは何時だつてかつこいいじゃないか!!」

なんで俺は英雄王の号泣を見なくちやいけないんだよ！ いったって自信に溢れてたおまえが！ 大胆不敵に笑っていたギルが！ 今は小鹿のように震えているんだぜ、笑えてくよ。

「コナン、何とかしてくれ。もうお前しかいないんだ」

「俺に振るなよ、マスター。頼ってくれて探偵冥利に尽きるつてもんだけどな。『あれ』は俺じゃ勝てない。解つてるだろ?」

哀愁を背負っているようなコナンに、俺は唇をかみしめて小さく頷くしかない。

ああ、そうか、俺達は最終兵器を起動させてしまったんだな。

もうアインズも沈んだ。ガイコツなのに、真つ赤に染まって倒れた。

エルは真つ先に吹き飛んだ。もう豪快に赤い液体をまき散らして。

ソープは崩れ落ちるように血の海に沈んで行った。

お、俺達だけなのか? もう止められないのか?

「田中少年」

「オールマイト! さすがナンバーワンだ!! 生きて・・・」

助かったと俺が見た先で、何時もなら豪快に笑って力強くポーズを決めるヒーローが、血の海に沈んで行った。

「すまない」

「お、オールマイト!!! なんで貴方はナンバーワンじゃないか!」

「私も、『男』だったということさ」

フツと笑った彼は、そのまま沈んで行った。

まさか彼も、いや待ったオールマイトと一緒に爆豪君とデク君もいたはずだ! まさ

か、フル装備で立ち向かった二人も沈んだと?!

「一郎」

「弔! 戻ったのか?! 廻はどうした!?!」

確か一緒に他のルートを探していた、と俺が顔を向けた先で弔は血だらけだった。その隣には治崎・廻が、ぐったりとした姿でいた。

「お、おい」

「すまない、一郎君」

小さな声で答える廻は、そのまま血の海に落ちた。

「俺もここまでみたいだな、一郎、楽しかった」

「弔、待てよ、おまえまで逝くなよ!」

「黒霧も先に沈んだ、後は任せた」

寂しそうに笑った弔も、ゆっくりと血だまりに倒れた。

もう後がない、やるしかない。

「ギル、コナン、行くぞ」

「よかろう、ここが我の死地となろう」

「いいぜ、地獄の底まで付き合ってやるよ」

頼もしいな、俺はこいつらがいればなんだってできる、そう思えるさ。

「逝くぜ!!」

そして俺は駆けだした。

どうしてこうなってしまったのか、それは三時間前にまで遡る。

その日は雲一つない青空だった。

寒くもなく熱くもない、春の昼下がりが。ちよつと眠気を誘うような陽気の中で、『ラ・エンテル』は貸し切りで二人の合格祝いをしていた。

「よかつたよ、二人とも」

「ありがとうございます。これから誰にも負けずに勝ち続けてやるぜ!」

「絶対に諦めずに突き進みます!」

うん、いい顔するなあ。落ち込んでいたのが嘘のように、真っ直ぐ前を向いている。

俺も土下座したかいがあつたな。

「ロボットの修理は僕がやりますから大丈夫ですよ！」

「あ、うん、エルってそういう情熱はすごいし技術も信頼しているけど、どっから資材を持って行った？」

「もちろん、鎮守府からです」

「てめえ」

当然のように答えるエルに、俺はゲンコツを作ったけど、悪くないよね。こいつは最初に話を通すとか、やる前に書類提出するって頭はないんかい。

「二人の門出に我が歌を聞くがいい!!」

「待ってましたアインズさん!!」

すげえ、アインズが立ち上がって歌い始めた瞬間に、最前列に爆豪君がいる。めっちゃくちゃ速かったんだけど、あれって何？

「あ、かつちゃんは『ジエツトエンジン』を再現できたそうです」

「へ？」

「はい、燃料を『爆発』させて推力にしているなら、俺にできないことはないって言って」「あ、そう」

そっか、そっか。前に爆豪君、デク君がどこを目指しているか解らないって弔や俺に言っていたけど。

十分に君も何処を目指しているか解らないから、大丈夫だよ。君たちは間違いなく幼馴染だから、どっちもどっちだ。

「最大がマツハ六までしか上がらなかったって嘆いていましたよ」

「うん、本当に何処を目指しているのかな」

「できれば『ビックバン』まではやりたって言ってましたよ」

君は本当に何処を目指しているのさ、爆破の個性で宇宙創造ってできるわけない、ないよね、出来ないよね？ これで爆豪君が宇宙を作ったら、俺はオールマイトにどう言い訳していいか解らないよ。

「僕も負けれないなって思って」

「思ってた？」

「妖精に相談したら、『ゴッドハンドクラッシュ』と『ゴルディオーン・ハンマー』のどっちがいいって聞かれました」

おう、怖い。なんだろう、なんでその二つの選択肢しか持って来なかったのか、後で聞こう。妖精達の拳の一撃の最高ランクって、『オペリスク』だったんだなあ。

で、もう一つは艦装の主機に備わっている、『勇気をエネルギーに変える緑色の石』繋がりがかな？

「俺、次にオールマイトに会ったら『スマッシュ』させそう」

「安心しろよ、マスター。きつと最高の一撃を用意してくれるさ」

「コナン、俺のピンチを救うための謎解きをしてくれ」

「無茶言うなよ」

名探偵でも、この危機は回避できないかあ。

俺が嘆いていると、店のドアが開いた。

そこからが、悲劇の始まりだなんて、その時の俺は気づけなかった。

デク君と爆豪君の合格祝いだからって、俺達だけじゃ味気ないので、ヒミコちゃんにも声をかけた。

最近、ネットアイドルが大人気で、街を歩くと人ごみができるとか、人だかりができて警察が動くななんて話もあるくらいに。

「こ、こんにちは」

だから黒霧に迎えに行ってもらったんだけど。

「こんにちははヒミコちゃん」

「お邪魔します」

深々とお辞儀する彼女の頭に、違和感があつた。あれ、なんでそれをつけているかなあ。

「なんで猫耳?」

「お、男の人は好きらしいので。後はパーティといえ、猫耳つてネットで」

誰だ、純真無垢なヒミコちゃんに余計なことを教え込んだのは。

グツジョブつて言つてやるよ。今日のヒミコちゃんはロングスカートなんだけど、上着が巫女つばいのでよく猫耳が映える映える。

くっそ、可愛い。

「ふきや?!」

「大丈夫か?」

「と、弔クン、ガードです、私のライフを護ってください」

ク、やはり弔か。おまえは俺とヒミコちゃんの間立つな!

「一郎、客がもう一組だ」

「え、誰？ あれ、廻じゃん！」

店の入り口から入ってきたのは、治崎・廻。最初は治崎さんって呼んでいたんだけど、『師にさん付けで呼ばれるのは気後れする』って言われて、呼び捨てになったんだけど、師って何？

死じゃないといいな。

「お招きとのことで参上いたしました、我が師よ」

「いや、なんでそんな古風な言い回し？」

「ちよつとふざけただけだ。さて、紹介しよう」

そう言つて、廻は彼女を紹介してくれた。

「エリだ」

おう、シット。

俺は思わず、呆けてしまった。そこにいたのは、まさに天使。

白い髪と純白の翼を背負つた、天使。可愛いか可憐つて言葉が霞むくらいに、幼く儂く美しい少女だった。

「こんにちは」

「はい、こんにちは……は？」

で、猫耳。あれ、なんで猫耳？

「さすが我が師、気づかれましたか？ 今回のエリちゃんのコンセプトは『マジ天使エリちゃん！ 猫耳をつけて可愛さ天元突破！』です」

あ、そう、うん、可愛いね。可愛いんだけど、いきなりそのテンションはどうなのさ。しかも、コンセプト以外はすげえ冷静って。

「この可愛さはまさに宇宙ー！ 世界を超えて人を超えて！ 天使を超越した我がエリちゃんの可愛さはもはや女神レベル！ 古のあらゆる美の女神を超えた美しさと儚さは！ 世界を革命させる!!」

あ、相変わらず絶対調だな。

「弔君!! 私髪を染めます!」

「落ち着け、ヒミコ」

「いいえ! 落ち着けません! あの目! あの感情! あれを向けられるなんて許せません! 確かに可愛い、もつと言えば可愛いしギョツと抱きしめたい! 天使って言葉を否定する要素はあの子の何処にもない! しかしです!!」

「ヒミコ、それは止めろ」

う、後ろでなんだかヒミコちゃんが暴走している。

「でも!! 女の子として可愛いで負けたくありませんから! 絶対に退けない戦いはここにあるのです!」

「落ち着け、ヒミコ、おまえはそれをどうするつもりだ?」

「猫耳をもつと映えるために髪を解きます!」

「え?!」

思わず振り返った先、ヒミコちゃんが髪を解いて、さらさらと綺麗な髪が風に踊って
いて。

フ、なんだ楽園がそこにあつたのか。もう天使とか女神とかどうでもいいさ、可愛い、
その言葉だけで十分じゃないか。

「あう」

「いいものを見せてもらったぜ、ヒミコちゃん」

俺は思わず親指を立てた。

「はうううううう」

「オーバーヒートか」

「なるほど。それは我がエリちゃんへの宣戦布告と見た!!」

「おまえも落ち着け、廻」

すっげえ絶叫して腰を折って天上へと叫ぶ廻に、冷静に突っ込みを入れる甲だった。
俺はもう立ってられなくて壁に背中を預けているけど、もう任せていいよね。

あ、デク君が顔が真っ赤だ。あれはヒミコちゃんの髪解きを直視したな。

爆豪君は、ヒミコちゃんとエリちゃんを交互に見ているな。猫耳が珍しいって顔しているね、解るよ、君の気持はよく解る。猫耳って、日常的に見れるものじゃないからね。「勝負だ！ ヒミコとやら！ どちらが猫耳をつけるにふさわしいか！」

「望むところですよ！ 私こそが猫耳マスターであることを教えてあげます！」

「ククククク、おまえごときが猫耳マスターを語るなど笑止千万！ 我がエリちゃんのキング・オブ・猫耳の前に沈むがいい！」

なんか、ヒートアップしているな。

俺はその時そんなことを思っていた。

そう、それこそが悲劇の引き金だった。

「控えよ！」

一括だった。すげえ王のオーラと滅茶苦茶なカリスマの気配に、室内にいた誰もがそ

いつを見た。

ギル？ と、ユニコーンだと?!

「待てよギル!!」

慌ててコナンが止める！ さすがな行動力だ！ 俺も今回は気づいた！
咄嗟にエルとソープも動く、アインズも魔法を展開しようとしていた。

だが、すべてが遅かった。

「よく聞くがいい！ 雑種ども!! これこそが!!」

「よせえええええ!!」

「止めろギル!!」

「これこそが『真の猫耳!』、唯一絶対なる王としての猫耳だ!!」

そして、ギルは禁断の『艤装』を使ってしまった。

ユニコーンの艤装スロットの五つ目の装備を。

「にや〜ん」

そして、店の中に静寂が訪れた。

「逃げよ！ 逃げるのだ!!」

真つ先に飛び出したアインズは、『超位魔法』を展開。直撃させて威力を拡散させる寸前で崩れ落ちる。

「さ、さすがはこの私を一度は完全に沈めた威力だ。ふ、フッフ、まだこの私に恐怖を刻むとは」

「アインズ！」

「逃げよ!!」

グツと俺の体が掴まれた、気づけば何故かギルが俺を掴んで、コナンまで俺を掴んでいた。

「誰でもいいからオールマイトを呼べ！ あいつなら！」

誰かがそんなことを言っていた。

エルが突撃していった。目を閉じていたから、見ないようにしていたのかもしれない。でも、ダメだった。

「やはり、僕も男だったんですね」

彼はそういつて沈んだ。

「二度目でも威力が変わらない。流石だよ」

同時に飛び込んだソープも、そう言って倒れた。

後は混乱だ、もう誰が何処にいるか解らない。

必死に逃げて店の中は狭い。どうやっても立ち向かうしかない。

やがて、オールマイトが応援に来た。

「なるほど、解った、田中少年」

「オールマイト」

「大丈夫さ、何故って？ 私が来た！」

「かっこいい、あんたはやっぱりナンバーワンだ。」

「俺も行くぜ、オールマイト」

「あの威力です、数で対応した方がいいでしょう？」

爆豪君とデク君も立ち上がった、それにオールマイトは少し迷っていたようだが、大きく頷いた。

「では行こうか、有精卵ども！」

「おう!!」

「はい!!」

元気よく向かって言ってくれた。何とかしてくれる、どうにかしてくれるって思っていたんだ。

俺はそれにすがりたいだけかもしれない、でもダメだった。

そして、皆が血の海に沈んでいる。

もう後はないから、俺はギルとコナンと突撃していった。

大丈夫、三人もいるから誰か辿り着けるはずだ。

「にゃ～～ん」

「に、にゃ～～ん」

「にゃ～～ん」

俺の目論見は儂くも砕け散った。

なんでだよ、どうしてなんだ。

「ここまでかよ、ちくしょう」

コナンが墜ちた。

「我の唯一の失敗だったな」

ギルは立ったまま意識を失った。

どうしてさ、なんで『三人』になっているのかな？

最初はユニコーンだけだったじゃないか。あの最終兵器、ゴスロリメイド服猫耳装備はユニコーンだけだったはずだ。それがなんでヒミコちゃんとエリちゃんまで着ている

のかな、あれ色が違ってゐるから複数もあるの、なんだよそれなんで三人ともちよつと頬を染めて、恥ずかしそうに笑つてゐるのさ。

猫のポーズをして恥ずかしいのね、うん、君たちの気持ちは解るよ。でもその恥ずかしいが、男にとってはクリティカル・ダメージになるつて知つてくれないかな、もうね恥ずかしいけど一生懸命にやっていますが、可愛くて可愛くて。

誰か一人でも堂々としていたら、俺は立ち向かえたかもしれない。

でも全員がちよつと恥ずかしがつて、照れながらのポーズなんてどういふことなんだろう。

もうダメだ、ユニコーンだけだったら耐性ができているんじゃないかなんて、馬鹿な考えだった。

「フッフ、天使の翼がないほうが威力が高いとは。私もまだまだ未熟だな」

「俺も楽園が見えた、明日からコックとしての技量が上がりそうだ」

俺の後ろで鼻から赤い情熱を流して倒れている廻と弔が呟いてゐる。

「私はヒーローだ、ヒーローだが、その前に男だったようだ」

オールマイト、それは仕方ないんだよ。

「クソがあ、可愛いが最強なのかよ」

爆豪君、それは仕方がない。しょうがないんだよ。

「こ、これを使えばヴィランも救えるかも」

デク君、そんなことしたらヴィランが死ぬよ。

「一郎さん、私も人間だったようですよ」

黒霧、おまえも鼻があつたんだな。お前は今、ブラックじゃなくてレッドだぜ。

く、クソ、どうにかしないと、そろそろ全員が死にそうだ。

「あ……」

その時、ユニコーンが気づいて小さく頷いた。

瞬間、俺の第六感が盛大に叫んだ!! 言わせては駄目だ、と。

「待て!」

「にゃくくんだよ、お兄ちゃん」

ブハ!?

そして、俺は倒れたのでした。

「にゃーんです、お兄ちゃん」

ぐお。

「にゃくくくんです、お兄ちゃん?」

ああ、もうまさか三連撃をもらうなんて。ふ、ヒミコちゃんにお兄ちゃんなんて呼ばれたよ。

「我が人生は幸福でした」

もう俺にはこれしか言えないよ、じゃあな。

「田中少年、あの装備は危険だ。二度と使わないように」

「はい、オールマイト」

絶対に使うか、本当に死ぬじゃんか。

「……オール・フォー・ワンに使ったら、倒せるんじゃないか?」

小さく、オールマイトが呟いたことは、俺は死ぬまで誰にも言わなかった。

ある日の、ごくありふれた、とても普通の、何処にでもあ
るような、午後の話

人生つて予想外のことは多々ある。

転生している自分が言うのだから、信憑性があるでしょう。

どうも、田中・一郎です。

「一郎、現実逃避は止めておけ。おまえのためにならない」

「と、弔」

すっごい形相の弔がね、俺の背後に立っているんだよ。もうね、手に持った包丁が凄味を増しているのさ。

「さ、殺意は人を墮落させるって昔の偉い人が言っていた」

「そうか。俺はどちらかといえ、復讐は正当なる権利の方だな」

「なるほど、なるほど。止めておけ、弔、俺が本気になったらおまえだって叶わないさ」
ク、強がって見せるさ。いくら弔でも、俺に本気で勝とうなんて考えていないはずだ。
そうさ、こいつは何時だって俺を立てる。

立てる？ あれ、弔に立ててもらったことつてあったかな？

「今日は強気だな、一郎。『これ』で俺に勝てると思ってるのか？」

冷たい顔で包丁を持つ弔に、俺は妙な寒気を感じた。

怪しく輝く刃物に、血走った目。こいつ、どんな追い込みをしてきたんだ、まさか本当に目覚めた、と？

「いいぜ、弔、来いよ」

俺は包丁を持ち上げ、できるだけ精一杯の笑みを浮かべる。

「ああ、やろうか」

「来いよ、弔」

そして俺達は包丁を持って、砥石に向かった!!

「今日こそ一郎を超えて見せる、何時までも包丁研ぎでおまえに負けるなんて、俺の料理人としてのプライドが許さない」

「フ、いいかげんに学びたまえ、弔くん。君は絶対に俺の前に走らせない、俺の包丁こそ銀河一の切れ味よ！」

「超えてやる！」

フはははは！ まだまだ甘いわ!!

「なあ、ギル。平和だな」

「そうだな、コナン。ところで、あの二人は我を笑い殺したいのか？」

「英雄王を笑いで撃墜した、最初の人間かあ」

なんか、後ろでコナンとギルが笑い合っているけど、俺は無視した。今はこの包丁に魂込めて！ そうだ、この刃先を見つめ、声を聞いて、鋭く軽やかに磨く。

一か所だけじゃない、丁寧に全体的に、先から鋭く細く、食材の細胞を傷つけないような切れ味のために。

料理の腕じゃ弔に負けても!! 包丁の研ぎ方で負けるわけにいかないんだ!

「俺は絶対にその背中を超えてやる!」

「まだまだおまえに負けないよ弔!」

「超えてやる一郎!!」

「かかってこいや!」

「望むところだ!」

燃えるぜ! この一本の包丁に、俺のすべてをかけてやる!

「その気になれば、世界さえ支配できる男が包丁のためにすべてかけたよ」

「クククク!! フハハハハ! 止めよ、一郎! 貴様、我を笑い殺す気だな! 我が財を自由にしてよいと言って! 最初に望んだのが『じゃ安眠できる枕』と言った貴様の間抜けな顔を! 我に思い出させるとは!!」

「あくくあれはなあ。本当、世界のすべての財が入っている蔵を得て、最初が『安眠で
きる枕』つてなあ」

「よいぞ！ 良いぞ道化よ！ 踊るがいい！ いや止めよ！ やはり止めるがいい！

私の腹がよじれる!!」

「今日も平和だなあ」

うっさいその外野!!

キラリと光った包丁を両手に持って、吹雪は無言で鋼鉄を裁断しました。

「どっちだ?!」

「当然、俺だろう?」

「今回は俺も自身がある」

「……勝者、爆豪君」

はい？

「おっしやああ!!　しやあ!!」

「か、かつちゃん！　なんで包丁研ぎなんてしているのさ?!」

うん、デク君、俺が言いたい、なんでそこで俺らに混じってやっていたのか、そもそも、なんで混ざっているのか、何時からやっていたのか、色々と疑問があるんだけど、なんで爆豪君？

「甘いな、デク。これもヒーロー活動だ」

「はい?」

「いいか、俺達ヒーローは助けての声に答える。それがどんな状況でも、どんな場所でもだ」

あ、うん、そうだね。でもさ、君たちがやっていることは、非合法なんだよね、まだ免許持っていないから。

だから、できればもつと穏便にね、もつと静かにさ。

いや待った、その前になんでヒーロー活動で包丁研ぎ。

「解んねえのかよ、デク」

「え、え?」

「だからおまえは駄目なんだよ。いいか、デク、もしも『料理人が困っていた』ら、おまえは無理だつて答えるのか?」

はい? あれ、何それ、え、どういうこと?

「包丁がなくて困っていたら? 切れない包丁で困っていたら? おまえはそんな人の助けてに、『無理です』つて答えるつもりか? てめえ、それでもヒーローか?!」

「かつちゃん、そんな無茶なことを」

「無茶じゃねえ!! やればできるんだよ! だからやるんだよ!!」

いや、それは無茶苦茶だつて。爆豪君、勢いで乗り切ろうとしてない? ねえ、君の言っている状況つてとても限定的だと思うんだけど。

「弔、そろそろ復活してくれ」

「俺は負けた、爆豪に負けた」

膝をついて泣きそうな弔に、俺は声をかけながらも『え、このカオスどうすればいいの』なんて思っていたりする。

「できないなんて弱音だ! 言い訳を探してんじやねえよ! やれよ、デク、おまえだつてヒーローだろうが」

「か、かつちゃん、僕は」

少し悔しそうにうつむいたデク君は、そのまま吹っ飛んだ。

あれえ〜。

「俯いてんじやねえ！ 弱気になって逃げる理由を探すなよ！ 俺達はヒーローやるんだろうが！ ヒーローは絶対に諦めねえ！ 逃げねえ！ 退かねえ！ おまえは艦娘の皆にそう誓ったんだろうが！」

「……そうだ、僕らは誓ったんだ。ありがとうかつちゃん」

「解ればいいんだよ、やるぞ、デク」

「うん!!」

がっしり手を握り合った二人は、そのまま包丁研ぎにまい進していった。

「甘えんだよ!! なんだその持ち方は!!」

「ご、ごめんかつちゃん！」

「気合入れろ！ これは料理人の魂だ、俺達ヒーローにとつてのコスチュームに匹敵するんだよ！」

「解ったよ！」

うん、何だろう。俺は何を見ているのかな。

というよりもだ、また俺はこの言葉を言うしかないな。

誰か俺に教えてください。

爆豪君とデク君が何処へ行くかとしていたのでしようか？

「一郎、俺はちよつと日本刀の鍛冶師に弟子入りしてくる」

「はい？」

「なんだか復活した弔が、そんなことを言い出しました。

「二人の熱意に負けている。俺はもつと色々な知識を仕入れないと、料理人としてやっていけない」

「え、あれ、待つて、ちよつと待つた弔」

「なんで日本刀の鍛冶師、それが包丁とどう繋がるのか、俺には解らないんだけど。

「幕末に廃刀令が出た時、日本刀の鍛冶師達は包丁を作り出したという。ならば、彼らに弟子入りすれば今以上に料理のための包丁が砥げるはずだ」

「自信を持ち、拳を握つて宣言する弔。」

うん、逆光になって凄くいい顔で宣言しているから、ドラマのクライマックスの主人公に見えるんだけどさ。

言っていることは、とても意味不明なんだよね。

「逝ってくる」

「待てよ弔！ おまえ言っている感じが違う気がするんだけど！」

「心配するな、一郎。俺は必ず戻ってくる、絶対だ。だから、行かせてくれ」

「悟った様な顔してるやつは何処を信じろと?！」

ダメだ、今こいつを行かせたら、絶対に変な風に曲がって戻ってきそうだ。例えば、包丁にうっとりした視線を向けるとか。

自分で想像して怖くなってきた。うっとりした眼で、包丁に頬ずりしながら愛称を口にする弔。

あれ、それはそれで絵になるような、ならないような。

「大丈夫だ、ここにギルから貰った地図がある。ここに行けば、包丁を立派に研ぐ人物がいるらしい」

「え、はい?」

えつと、冬木? どこ、そこ?

「おい、ギルガメツシュ、あれってあの場所じゃないか?」

「ほう、さすがだ、コナン。あの贋作者ならば弔を立派な研ぎ師に育てるだろう?」

「どっちかっていうと、投影魔術使いにしただけだな」

「なるほど。では弔が無事に能力を得たら、我が宝物庫に案内しよう」

「おまえらちよつとは責任感じて止めようか!」

　　なで後ろで楽しそうに笑っているんだよ、ギル!　コナンも止めるよな!　後、宝物

庫を簡単に開放するんじゃないよ、英雄王!

「笑止!　私の宝物庫をどう扱おうが、私の自由よ。それにな」

「それに、何だよ?」

「私は良い言葉を知った。『そのほうが面白からう』という言葉をな!!」

「アインズうううう!!」

　　ここでもさかのあいつが原因なんて!

　　最近ギルが原因が多かったから忘れていたけど、アインズもかなり愉悅に染まってる。そういつたことが多くなってきたんだって!

「呼んだか、一郎!!」

「お前ギルに……はい?」

　　あれ、今日のアインズは服装が。あれ、白い鉢巻に青い羽織、それに白いエプロンつて。あれって魚屋がしているようなエプロンに見えるんだけど、何があったの?

「フ、クククク、気づいたか、さすがだ一郎。いや、マスターと呼ぼう！」

「え、あれ、アインズ？ どうした、何時ものギターは何処に行った？」

「ふははははは!! 今の私はナザリツク大墳墓の主でも！ 流しのギター若大将でもない！」

な、なんだって?! あのアインズがギターを持っていないなんて！ 何があった、といよりなんで包丁を持ち出した？

「今の私は！ 流離の包丁研ぎ師！ この腕の冴えを見るがいい！」

「え？ はい？」

「ちよつと待ったああ!!」

うお!? え、エル？ え、なんでおまえはシェフみたいになかつこうしているんだよ。

「チツチツチ！ 一郎さん、今の僕はロボットではなく包丁を愛する流浪の料理人兼研ぎ師！ この包丁の輝きにひれ伏しなさい！」

あ、うん、いい輝きしているね。でもさ、その輝きを試みたことあるんだけど、何の金属を使ったのかな。

まさか、だよな。

「あれってボーキサイトと鉄鋼ですね」

「ありがと、吹雪、そっか、そうだよね。おいこらエル！ 書類どうした?! 申請書はどこいった?!」

「奇跡の一刀のためには些細な犠牲です!」

「犠牲じゃねえええ!!」

おまえ! ボーキサイトと鉄鋼を集めるのに、どんだけ苦労すると思ってるんだよ!

ただでさえ資材は集めるのが大変なのに!!

「みんな、少し騒ぎ過ぎじゃないの?」

「スープ! おまえだけは・・・そうだよなあ~~~~」

もういいや。

振り返った先にいたスープは、まさに板前さんって服装でした。

「この僕を差し置いて、包丁のことを語るなんてね。一郎に研ぎを教えたのが誰か、忘れたの?」

「確かにスープに習ったなあ」

「なんだと!?!」

あれ、アインズ、知らなかった。

「一郎さんの師匠!?!」

爆豪君、食い付き良すぎ。

「スープ、俺に秘儀を授けてくれ」

「吊!! 土下座つてなんで?！」

それが一番、驚いたよ!

「ちよつと待ったああ!」

「コナン! そうだよな、おまえがいて」

期待して振り返った先、コナンは包丁を片手に持っていた。

「探偵としての俺の洞察力なら、包丁研ぎなんて簡単なものさ」

「言ったね、コナン、僕と勝負しようか?」

「望むところだ、スープ。今度こそ、決着をつけようぜ」

ニヤリと笑うコナンに、怪しい笑顔を向けるスープ。

そして俺は、笑うしかなかった。

「マスターよ、貴様はよくやった。我が認めてやろう」

「ギル、おまえも悪のり・・・してない?！」

「たまには、貴様の苦勞を勞うのも、良いと思つてな」

すげえ優しい笑顔で語る英雄王に、俺は不覚にも泣けてきた。

「さあ、存分に味わうがいい、これが王の勞いよ!!」

「ギルガメツシユウウ!!」

「フハハハハハ堪能せよ！ 噛みしめるがいい！」

「おまえだけだよ！ おまえだけが！」

ああ、いい奴だよ、本当におまえはいい王様だ。毎回、そうであって欲しいのに。

なんてこと、幻みたいに優しいギルガメッシュの労いを受けて、全員が大騒動になった日の翌日。

俺はあいつの愉悦を甘く見ていた。

「なあ、コナン、あの『一位』に輝いた黄金の包丁はなんだ？」

「ギルの奴、宝具を使いやがって」

「あ、うん、解った」

包丁と研ぎ石に原点なんてあったんだなあ、なんて俺は思いつつ胃を抑えたのでし

た。

小さくても、今にも消えそうでも、それでもつないでいく

寒い、つて感じじゃないけど、暖かいつて日でもないなあ。

どうも田中・一郎です。

今日は珍しく、弔と黒霧と買い物ですよ、買い物。

「お酒に合う料理ですか。弔も随分と丸くなりましたね」

「言うな、黒霧。なんだその保護者みたいな顔は？」

「いえいえ、成長したなあつと」

「止めろ、俺の保護者はそつちだ」

なんで俺を指差すかな、弔クン？ おまえの保護者したことなんて、一度も、あれ一度、二度かな、あつたなあ。

「ちなみに、俺の保護責任者の名前は『田中・一郎』になっている」

「おいてめえ!! 同年代！ 同い年！」

「ああ、同姓同名の誰かだろうな」

無理あるだろ、それ。誰も突っ込まないのかよ、誰か違法だなんて言ってくる、ことないかあ。

ギルがいるだろ、スープだろ、エルだろ。いざつて時はアインズが精神系魔法使うだろうし。

うん、捕まらないといいなあ。

「あの一！」

呼ぶ声に、俺は振り返ったけど、弔と黒霧は振り返らなかつた。

「これ受け取ってください！ 死柄木・弔シエフ！」

「あ？」

「黒霧さん！ 何時も美味しいお酒ありがとうございます！」

「はい？」

ようやく振り返った二人の両手に、多くのハート型のお菓子が。

あれ、俺は素通り？ え、二人は山なのに、俺は誰も来ない？

泣いていいよね。

「そうか、バレンタインか」

「なるほど、もうそんな時期ですね」

山のようなチョコを抱えた二人は、しみじみとそんなことを呟いているんだけど、俺

は言いたい。

ちよつともうかなりの勢いで言いたい。

「妬くなよ、一郎」

「そうです。貴方の魅力はもつと違うものですから」

「妬いてない。そもそもだ、バレンタインってなんだよ?」

あれか、ウイスキーの一種か?

「・・・は?」

「え?」

「はい?」

あれえくく俺、おかしなこと言つたかな?

え、あれ、知らないとおかしい話? 一般常識なの?

世の中にはバレンタインデーというものがあるらしい。

好きな異性に気持ちを伝えるために、チョコを贈るとか。チョコの甘みと恋の甘さがかけたとか、恋心がとろけるチョコに似ているとか。

色々あるらしいのですが、最近はお世話になりましたって意味でも贈ることがあるらしいです、はい。

「つてわけでだ。欲しいのかよ、マスター」

「丁寧な説明、ありがとう、コナン。欲しい」

もちろんです、女の子から貰えるなら貰いたい主義ですから。

俺って、モテたことないからなあ。

「一郎ってそうなのか？」

弔、意外って顔するな。

「あ~~~~」

コナン、そんな呆れた顔するなよ。

「悪かったな。俺は貰えないよな」

クツッ、イケメンが恨めしい。

「そんな情けない顔するなよ、マスター。いいことを教えてやるよ」

その時、俺はコナンから魔法の言葉を貰った。これを女性に言えば、貰えるらしい。

「宝くじ並みの確率でな」

「苦笑いか、名探偵。いいのか？」

「弔はあれで成功すると思うか？」

「一人か二人、成功するだろうな」

「あゝあゝあの二人か」

なんだよ、誰だよ。まったく、俺を除け者にして話しやがって。

クツソ、失敗するなら、絶対にくれそうな子にやってやる。

「こ、こんにちは」

「ヒミコちゃん!! ギブ・ミー!!」

丁度いいところに! これならば。だけど、ヒミコちゃんの善意を利用したようで、ちよつと罪悪感がわき上がるけど、彼女なら。

「ふえ」

「あれゝゝ」

真つ赤になって出て行っちゃった。

「チョコレートって言いきれなかった」

失敗か、次だ次。

「コナン、俺は今、恐ろしいものを見た気がする」

「奇遇だな、弔、俺もだ」

「天然だな、一郎」

「あいつが真面目にやったら、スケコマシでも通用するんじゃないか?」

うっさい、後ろの年中モテ期の馬鹿二人。おまえらの後ろにある段ボールの中、チョコ

コレートだって知ってんだよ。

なんだよ、なんで二人はモテてるんだよ。チックシヨウ、俺ばかりなのかよ。黒

霧も貰っているし。

「フ」

ソープなんて男が群がっているんだぜ。あれってチョココレート貰っているんじゃないかって、チョココレートを献上されているように見えるな。

「さあ、僕の相手は誰ですか?！」

エルの奴なんて、ロボットの箱を貰っているし。え、チョコを渡してロボットのプラモを買いで貰っているって。おまえ、最低だ。

「よかろう! 私の歌を聞くがいい!!」

アイズなんてアイドルのコンサートに見えるさ。

で、最大のモテるイケメンは、な。

「助けてくれ、マスター」

「今日の一面は、『英雄王、チョココによって撃墜』かな?」

一トントラック三台分のチョココレートを獲得した、ギルかな。あ、でも、ギルを撃墜したのって、ユニコーンの手作りチョコだから。

タバスコ入りの。

愛は赤いから、赤いのを入れないと思って思ったらしい。

「ク、私のユニコーンへの愛が、これを食せと言っている。しかし、私の本能が『愉悦のために行け』と言っている。だが!! 私の王の矜持が『止めよ』と叫んでいる!! 私はどうすればいいのだ?!

「いや、リア充は死ぬ」

もうなんだよ、こいつは。なんでそんなに愉悦に生きたいのかな、それともユニコーン関係ならばすべて押し通すつもりなのか。

はあ、俺もチョココ、欲しいな。

不意討ちだ、ずるい、決意が一気に消えた。

トガ・ヒミコは路地裏で必死に息を整える。

昨日まで頑張った、何回もシミュレーションしたのに、何度もなくじけそうになった意思を奮い立たせて、ここまで来たのに。

不意討ちにも程がある。あんなに真っ直ぐに、あんなに真剣に、あんなに情熱をこめて向けられた想いに、全身が竦んでしまいそうになって、感情が爆発したから逃げてしまった。

「二郎くうん」

小さく名を呟いただけで、全身が燃えるように熱い。もう感情が抑えきれない、想いが溢れて止まらない。

もつと触れたい、もつと見つめたい、もつと話したい。もつと温もりを感じて、その血に触れて、暖かい心臓の音に身を沈めたくなった。

チヨコも頑張った。一郎が喜んでくれるように頑張って作った。素材から厳選して

何度も失敗して、授業中も頑張つて、必死に作つたのに。

先生に、『あなたにも春がようやく来たのね』とか怒られるのじゃなく、祝福されたのは意外だったか。

今は一郎だ。他のことを考えて感情を抑えよう、このチヨコを渡して今度こそ想いを告げよう。

たつた二文字だ。日常的な会話に比べたら、簡単な二文字を言えばいいだけ。チヨコを渡しても通じるはずだ、何度も思考を繰り返して、何度も練習したのだから大丈夫。

そつと扉を開けて、挨拶して、チヨコを差し出して、たつた二文字を言えば終わる。

なのに、だ。それなのに、扉を開けた瞬間に崩れた。

『ギブ・ミー』君が欲しい。

瞬間、全身から炎を噴き出したような錯覚に陥る。彼は何と言つた、何を欲しいと言つたのか、思い出して否定して、もう一度と思ひ出して、彼女はその場に崩れ落ちる。限界だ、もう無理だ。もう抑えきれない、自分からじゃない相手から言われたことだ。抑えなくていい、我慢しなくてもいい。

これは『田中・一郎』からの想いだ。

「こうしてはいられないわ、トガ・ヒミコ」

よつしと立ち上がり、自分に言い聞かせる。

一郎が求めているならばすぐに行動だ。速やかに対応しなければ。まずは戻って全身にチョコを塗ってこよう。

いいや、全身にリボンを巻いて『プレゼントです!』の方がいいだろうか。どっちだ、どっちならば一郎は喜ぶだろうか。

思考を繰り返す、今までの彼の考えと動き、意思の流れから最高の選択肢はどれだと考えて。

やがて、ヒミコは止まった。

「おい、一郎はチョコレートって繋げようとしたからな」

「弔君、私もそこに辿り着きました」

「なら良かった」

「はい。なので、これから裸になってチョコを全身に塗ってラッピングしてきますね」

「どうしてそうなった？」

心底、残念なものを見る顔になった弔に、ヒミコは小さく首をかしげたのでした。

はあ、チヨコが貰えないなって考えていたら、正午を過ぎたよ。今日も平和な日々だ
といなあ。

「私が、段ボールを持ってきたあ!!!」

「あれ、オールマイト?」

「よかった、田中少年、爆豪少年と緑谷少年はいるかね?」

まあ、いますけど。

ランチタイムが終わったから、店のカウンターテーブルで予習復習してますよ。M I
Tの試験内容を。

うん、おかしい。何してんの、二人とも。

「二人にヒーロー協会から届けものだ」

「俺たちに?」

「なんですか?」

「チヨコレートだ。『シンガー・ボマー』と『グリーン・シップ』に助けられた人達から
の感謝のしるしだよ」

へえ〜。たくさんあるな、これだけ多くの人を二人は助けたってことか。いいこと、なのかな。まあ、オールマイトが持つて来たから、『大目に見るぞ』って意味でも有るんだろうけど。

「あいつか。歌いながら多くを救っている奴だろ？」

「船の個性か。誰なんだろう、僕も参考にしないと」

「あれえ？」

「なにを言っているんだ、二人とも？」

え、あれ、なんだか、話がかみ合っていないんだけど。あれ、二人のことだよ、え、あれえ？

「ああ！」

コナン、何か知っているのか？

「二人から名乗ったことないだろ？」

「え？ まさか、二人は知らないってこと?!」

「シツト!! そうなのか?!」

うわあ〜〜当たりだよ。二人とも、固まっているし。疑問しかない顔をしているから知らないんだなあ。

「はあ、お前らのことだよ」

「はあ?! なんスカそれ!」

「ええ?! 僕たちのことなんですか?!」

「いやいやありえねえだろ! 歌って爆破してヴィランを倒して救助してだから! 俺の個性と同じでもっとすげえ奴だっと思っていたのに!」

「船の個性だから艦装の扱いのヒントになるかもって! 何度も映像を確認しようとしていたのに!」

「俺のことかよ?!」

爆豪君、頭を抱えています。

「僕のことだったなんて!!」

デク君、膝をついて嘆いています。

「そ、そうか。なるほど、知らなかったかあ」

「俺達も知っているもんだと思っていたからな」

オールマイト、ちよつと呆れてません?

コナンも溜息つくなよ。俺も知っているものだと思っていたから、言わなかったから同罪だろうけど。

「そ、それじゃ二人とも、これを受け取りたまえ」

仕切り直してオールマイト持ち上げた段ボールには、それぞれに手紙とチョコレート

が入っていて。

「なんか、上手く言えねえけど」

爆豪君、なんでそんなに俯いているのさ。胸を張りなつて。

「僕も上手く言えませんが、こそばゆいっていうか、その」

デク君、それは解るけどね。

「君たちが助けた人たちからの感謝だ。他の誰でもない、君たちだから受け取る資格がある。本来なら、渡すのは『不味い』のだろうけどね。今回は特別だ。さあ、『ヒーロー達』、人々からの気持ちを受け取ってくれたまえ」

オールマイトに言われて、そつと手を伸ばした二人は段ボールを持った。

「重いな。本当に重いぜ」

「うん、凄く重い。こんなに気持ちが悪かったものなんだね、かつちゃん」

「ああ、デク、俺達はこんなに多くの人たちに感謝されるような、そんなヒーローやれてたんだな」

「うん、そうだね」

二人とも泣いてるな。そつか、二人とも初めてか。感謝の言葉を受けたことはあつても、見える形で『ありがとう』を受け取ったのつて初めてだったんだ。

「懐かしいな。私も最初のファンレターは、胸にこみ上げたものさ。良かった、助けられ

て、自分はヒーローをやれていたんだ、とね」

「へえ〜ナンバーワンにもそんな時があったのかよ？」

「ハハハハ！ それはそうだ。救えなかった時、挫折しそうになったとき、そんな時に支えてくれたのが、こういつた『助けた人からの感謝』だからね」

なるほどね。ヒーローでも人間だから落ち込んだりしたこともあるだろうし、止めたくなることもあった。

でも、それでもと前に進めたのは、こういう気持ちを受け取ったからか。

「君たちの原点、『オリジン』になるかもしれないね」

「オリジンか」

「僕たちの原点」

二人は段ボールを見つめて、そんなことを呟いていた。

うん、きっと二人の原動力になってくれるよ。誰かの助けてに答えて、絶望を砕くヒーローをやる二人ならさ、『ありがとう』を力に変えられる。

「よっし、俺も悩んでないで頑張るか」

チヨコレート貰えなくても、今日も元気に頑張りますよっつと。

暴走しそうなヒミコを宥め、何とか言いくるめて、弔は店へと戻る。後ろをついてくるヒミコは、手に持ったチョコを嬉しそうに眺め、うっとりした危ない表情をしているが、見ないようにしよう。

原因は、一郎にあるのだから彼に責任を取ってもらおう。

「お母さん、あのねあのね！」

店に戻る途中、ケーキを持った母子が前から歩いてくる。何処かのケーキ屋さんによった帰りだろうか。

子供の方に見覚えがある。前の時、脳無との一戦の時に見かけたような。

「どうしたの？」

「私ね、料理人になる！」

「ええ？」

「私の個性は、ヒーローになれないけど、料理人には向いているって言ってたから！」

「まあ、そうね」

「だからね！ あの『お手手のヒーロー』みたいに、『誰かを護れるヒーロー』になりたいのー！」

ピタリと、弔の足が止まった。ああ、そうか、守った人達の中にいたのか、と何となく思い出す。

「それで、料理人なの？」

「うん！ 私の料理で『みんなの心を護るヒーロー』になるの！ いっぱいいっぱい美味しい料理を作って、皆の悲しいを吹き飛ばすの！」

元気に答える子供に、母親は『それじゃがんばらないとね』と答えていた。

「あー！ シェフのお兄ちゃんだ！ 私も料理人になるからね！！ お兄ちゃんみたいにみんなを笑顔にできる料理人になるからね！！」

元気に手を振ってくる少女に、弔は自然と手を振り返した。

母親は小さく頭を下げて、『また伺いますね』と告げてくる。

「また美味しいごはんを食べに行くからね！」

「ああ、待ってる」

「きつとだよ！！ それで私の料理もいつか食べてもらおうからね！」

「解った」

笑顔でバイバイと手を振る親子を見送り、弔は再び歩き出す。

「よかったですね、弔君」

「……ああ」

短く答える彼の言葉に乗った感情を、ヒミコは読み取れなかった。でも呟いた彼の横顔は、何処までも澄み渡るように笑顔だった。

自分が守れたもの、護れなかったもの。

足を止めてしまうこともあった、ダメだと考えたこともあった。

限界だと、もう無理だと、動けないと感じたこともあった。

でもそれでも、一歩でも前に、もつと先にと動き続ける。

自分のためなら動けなくても、誰かのためなら動けるから。

『ありがとう』、その一言で動ける。限界の先に、そのもつと向こうへ。

人々は、ヒーローに守られているのかもしれない。

だが、ヒーローは誰が護ってくれるのか。限界を感じ、ダメだと歩みを止めて挫折しかけても、ヒーローは『護ってくれる存在』によってその先に進める。

ヒーローが護ってきた人たちのありがとうの感謝の心が、今日も危険と隣り合わせのヒーロー達を護り続けるから。

だから、彼ら・彼女らは今日も危険の中に飛び込める、誰かの助けてに真っ直ぐに向かっていける。

感謝の気持ちをも、自分の原点を、オリジンを魂に抱きながら。

もしも、ヒロアカがドラマだったら？

とある町のとあるバー。そこのカウンターに男が二人。

「はあ、まったくどう思う？」

「ふむ、今日の一件かね？」

「当たり前だ」

男は憤慨した様子でカクテルを煽る。喉を通る液体が、おいしいはずなのに苦々しく感じる。

「なんだ、あの不拔けは？ 覇気がない、気合いがない、まったくもって腹立たしい」

「私もそう思うが・・・」

もう一人の男は言葉に詰まる。

確かに、今日の『彼』は何処か元気がなかった。何時も通りのポーズに何時も通りの名乗りだったのに、何時も通りの『気合』が入っていなかった。

「あいつは！ あいつは解っていない!! 自分が何かを！」

声が上がっていく。無念とか悔しさとか、あるいは彼にかけた思いがそうさせるの

か。

「まあ、まあ、落ち着きなよ」

「落ち着けるか！ あいつはナンバーワン『役』なんだぞ!! ヒーローのナンバーワンが強くあらねば！ 貴様だって張り合いがなからう！」

グツと肩を掴まれ、言葉に詰まる。言われていることは解るのだが、彼と自分たちでは年季が違う。

彼は今年、卒業したばかりの新米。対して、二人は十年以上の経験を積んだベテラン。「私達の昔も、そんなものじゃなかったかい？」

今度ももう一人が黙る番だった。

確かに、昔の自分達はがむしやらであつても、『スキル』があつたわけじゃない。毎日、苦悩しながら、何度も読み合わせをして、鏡の前で演技の練習をして、今のように『この役ならば』といわれるようになった。

「しかしだ！」

「まあまあ、『エンデヴァー』、少し落ち着きなよ」

「しかしだな、『オール・フォー・ワン』。あいつは、主役なんだぞ！」

「主役でも、新人さ。だから、僕らフォロワーしていい作品に仕上げる。そうじゃないか？」

「むう」

穏やかに背中を叩くオール・フォー・ワンに、エンデヴァーも何も言えずに口を閉ざす。

新人の頃、演技について先輩から怒られた。気合を入れろとか、もつと作品の心を知れとか、意味が解らないことも言われた。

反発もした、やってられるかと投げ出したこともあった。

でも、どうにかやり遂げたら、『よくやった』と褒めてくれた。出来上がった作品を見て、主役とか脇役とかどうでもよくなった。

ただ、嬉しかった。

「今回の作品は、彼がナンバーワンになるまでの物語。僕が巨悪として彼の前に立ち、君は彼を追いかけるナンバーツーとして、同じ側のヒーローの壁としてだっただろ？」

「確かにそうだが、あいつの気合いが足りん」

「人間、そう簡単に成長しないさ」

再びポンポンと背中を叩かれ、エンデヴァーは再びカクテルを煽った。

重圧というのは、何時の世も付いて回る。

「はあ」

彼はスマフォの画面を見ながら、溜息をついた。

最初に話を貰った時、純粹に嬉しかった。

ベテランばかりの中の新人一人、大抜擢だと友人たちも祝福し、それだけの実力があると自分自身も信じて、そして自分自身の浅はかさを実感した。

何が大抜擢だ。実力も経験もない新人が、主役を張るには重すぎた。何度も撮影を繰り返し、その度に注意しては周囲のベテランからアドバイスをもらって、それでも上手くできない。

どうして、どうやって、何度も自問して練習しても理想とする姿から、遠ざかってしまう。どうやればいい、どうすればいいと何度も繰り返し返す。

上手くないかない、上手く出来る自信がない。その結果、今日はベテランで今まで支えてくれた二人から、盛大に説教を貰った。

『そんなふぬけた態度なら辞めてしまえ』と、激怒されてしまった。

「はあ」

スマフォの画面に再び目を落として、どうしようと考えてしまう。

行つたほうがいいのか、それとも用事があるとお断りした方がいいのか。もう十分も悩んでいるのに、答えが出ずに立ち尽くしていた。

『待つてるよ、ここね』とのメール。末尾にハートマークとかついているとか、あの人らしいと笑うべきか、それともこんなにフレンドリーなのに、役に入ると見事な悪役になるのは、どういうカラクリなのか。

いや、あれがベテランか。役を与えられたら、どのような役でも十全以上に演じてみせる。

いつか自分もああなるのか。まったく自信がない、そうなれるなんて自信もないのに。

「行かない方がいいよな」

結論を出し、断りのメールを送ろうとしたとき、再びメールが入ってきた。

『待つてるよ、僕らのナンバーワン』。

グツと指が止まり、続いてふつと笑ってしまう。まったくあの人は、人を乗せるが上手い。どんな役でも千変万化に演じてみせる、大ベテラン。一たび役に入りこめば、それを十全以上に演じてみせる、多重人格を疑われた大俳優。

彼が誘うなら、彼がそう望むならば彼に相對するような存在になろう。

そうだ、自分が何者か、思い出した。

悩むことなんてない、悩みなんて些細なことを笑つてやろう。

自分は、ナンバーワン。その役を与えられた、『オールマイト』なのだから。

「行くか」

颯爽と笑つて歩きだした。

そして、ドアを開ける。重厚で入る人を阻むような扉、それがバーの扉であること。

昔のバーは、秘密の場所だった。そこでのことは、決して外に漏れない。

昔、バーの中では警察と強盗が一緒に飲んでいたらしい。

そんな話を思い出し、フツと笑つてしまう。今まさに、ここではヒーローとヴィランが一緒に飲もうとしているのだから。

「来たな！ ナンバーワン！」

「遅かったじゃないか」

「すみません」

小さく謝罪を口にしながら、二人の間、一つだけ空いている席に腰を下ろした。

「だからおまえは気合が足りん！ もつと胸を張れ！ もつと前を向け！」

「は、はい」

バシンバシンと何度も背中を叩かれて、もう何度も頷いているのに、彼は許してくれない。豪快に叫び、豪快に動いて、もう役通りの人柄だというのに、その表情は何処か子供っぽい。

ギャップ最高ーエンデヴァー、なんて世間で言われていることを彼は知らないのだから。もしかして、知っているながらやっているのか。それも俳優として必要なことなのかもしれない。

「ちなみに、彼は素だよ」

「なんですと?!」

不意に告げるオール・フォー・ワンの一言に、オールマイトは凄いい勢いで叫んでしまった。

あれが、素。豪快に飲んで、人に話しかけ、酔っぱらって笑っているのに周りが迷惑つ

て顔をしていない。それどころか、周囲の人を巻き込んで騒ぎは大きくなっていく。

見知らぬ相手に話しかけ、色々な話題を振って大笑いして、最後には肩を組んで酒を飲んでいる。

「な、なんたるコミユカ」

「あ、うん、彼はね、こう人当たりがいいというか、周りを巻き込まないといけない宿命を背負っているというか」

「あ、あの、どういう？」

「ライブ会場に突撃して、ライブしているバンドに混ざって、ボーカルと一緒に歌って一万人を動員したこともある」

「はい？」

何それとオールマイトが隣を見ると、闇を背負ったオール・フォー・ワンが項垂れていた。

「もうね、僕らは同期で一緒にやっているんだけどね、彼が馬鹿をやる度に連絡が来るのさ。はは、夜中の二時に『すみません、エンデヴァーがまたお祭りです』なんて言われて、僕はどうすればいいんだろうね。次の日、四時入りなんだよ、そんな中に二時に起こされてどうすればいいって言うのさ」

「お、オール・フォー・ワン先輩」

「いいかい、オールマイト、友人は選ぶべきだ」

鋭く、今までドラマの中で相對した時も見たことがない、マジな目線を向けられ、オールマイトは光速で頷いた。

「どうしたどうした?! 夜はこれからだぞ皆の衆!」

「皆の衆!?!」

いきなり言ったエンデヴアーの古風な言い回しに、オールマイトが驚愕する。英語交じりの日本語を話していたのに、どうしてそんな言葉を選んだのか。

「彼、あの格好で、『時代劇志望』だからね」

「え?」

「侍になりたいから、が役者を目指した理由だよ」

意外な理由がオール・フォー・ワンの口から語られた。

え、あのヒール・ヒーローならばこの人以外にいないと言われる、エンデヴアーが時代劇志望、しかも侍になりたいからって理由はどうなのか。

「ちなみに、僕は刑事役になりたいかった」

「え?」

「子供の頃には憧れたものさ、『タカとユージ』に」

「ええええ?!」

「何の因果だろうね、今じゃ『ラスボス、あるいは巨悪ならば』って、よく言われるんだよね。はあ、一度でいいから刑事やってみたいなあ」

まさかの内容を語られ、オールマイトは固まってしまふ。どちらもベテラン、二人の機嫌を損ねたらプロデューサーの首どころか、制作会社のトップさえ変わるなんて言われているのに。

「飲んでるかオールマイト!!」

「は、はい」

いきなり肩を掴まれ、気がついたらジョッキを持っていた。信じられないほどの早業を繰り出すエンデヴァーに、オールマイトは驚愕した。

「行くぞ皆の衆！ 今宵は任務を忘れて語り明かそうではないか?!」

「おー!!」

「え、は、あれ?」

「はあ、今日もオールナイトか。明日、ドラマの撮影があるんだけどねえ」

深々と溜息をつくオール・フォー・ワンは、ゆっくりと店内を見渡した後、カクテルを頼むのを止めた。

あ、これは一人は素面じゃないと、収拾がつかない、と。

そして目の前で思いっきり酒を飲まされているオールマイトに、暖かい視線を向け

る。

彼、明日、主役の過去話の撮影があつたはずなんだけどなあと思いつつ。

『ハハハハハ!! 私が出来たああ!!』

とある日の撮影時、監督はオールマイトの姿に大きく頷いた。

「お、どうしたの彼? 今日はいいじゃない」

「色々あります」

「オール・フォー・ワン、何かしたの?」

「本当に、色々あります」

「ふっふっふん、バーを一店、『飲み干した』って話、知っている?」

「色々、あつたんですよ、監督。お願いだから思い出させないでください」

深々と溜息をつき、頭を抱えるオール・フォー・ワンに監督は思う。

あ、またエンデヴァーがやらかしたな、と。

「まあいいじゃん、見事に『巨悪として主役を引き立てた』んだからさ」

「そうだといいのですが」

「間違いなしさ。オールマイト、これからすつごく立派になるよ」

「そうなれば、私もラスボスとして嬉しく思いますよ」

そこで二人は軽く笑った。

後日、公開されたこの作品は、興行収益のトップを走り続け、殿堂入りを果たしたのだった。

ただ、そのせいもあり、オール・フォー・ワンはその後も巨悪、ラスボス、の役ばかりが回ってきたという。

エンデヴァーも、ますます侍から遠のいたのでした。

そして、オールマイトは……。

特殊効果を受け付けけない耐性を持つていながら、追加効果
果を忘れて直撃したらしい

世界は何時だつて冷たい、どんな状況であつても、相手が誰であつても、例え幸福の
最中であつても、現実の非情さを刻みつけてくる。

「ダメだ、エリ」

治崎はゆつくりと膝をつき、彼女の目線に合わせる。

「モンスターは封印されるべきだ、解るな？」

「で、でも」

「ダメだ」

少し強めに伝えると、彼女は小さく俯いて頷いてくれた。

「すまない、エリ。だが、どうしても、ダメなんだ。『オヤジ』にこれを見せるわけには
いかない」

彼女が持つているものを受取、嚴重に封筒に収める。

絶対に渡すわけにいかない。何があつても隠し通さなければ。もしこれでオヤジに

嫌われることになっても、絶対だ。

「治崎、何してんだ？」

ビクツと体が震えた。どうしてここにいる、今日は会合があつて遅くなるはずじゃないか。

「なあ、おまえ何を持っているんだ？」

「お、オヤジ」

ゆつくりと振り返り、悟られないように背後に隠して立ち上がる。

「いえ、何も」

「そうか。おまえ、俺に隠れて何か『シノギ』してんじやないだろうな？」

「まさか、俺はオヤジの道を歩いていますよ」

「………エリちゃんは?！」

「マジ天使!!」

間髪入れずに答えると、オヤジは満足そうに頷いた。

「解った、信じてやろう」

ホツと安堵し治崎・廻は一礼して立ち去ろうとした。

「ところで、おまえさん、エリからバレンタインのチョコは貰ったのか？」

「もちろんです。トロフィーにして飾ってあります」

「そうか、俺は額縁に入れたぜ」

満足そうにうなづく二人、傍らから見たら完全に変態だったが、本人達は至って真剣だった。

「なら、次は……」

オヤジの言葉に、治崎は一気に血の気が引いた。

馬鹿な、忘れていただと。自分としたことが失態だ。ありえない、まさか自分がそんな些細なミスを犯すなど。

そして、彼は再び世界を呪った。

いい日、旅立ち。

ああ、まったくチョコが貰えないバレンタインが終わった。終わってしまったんだ、

なんてな!

フフフフ、どうも皆さん、田中・一郎です。

俺が一個も貰えないって思った? まさかあですよ、俺はきちんと貰いましたよ。

誰にだって? 誰だと思う?

艦娘だよ、いいだろ、家族チョコだよ、この野郎。

「チイ」

「一郎、これをやる」

「見そこなうなよ、弔。俺は施しはうけん!!」

「そうか……ヒミコの気持ちは届かないか」

「なんだって?」

小さな声で言うなよ、気になるじゃないか。まったくさ、コナンの魔法の言葉も効果ないし。ヒミコちゃんにはあれからずっと避けられるし。

踏んだり蹴ったりだな。

今日は平和な一日で終わるといいなあ。

「我が師よおおおおお!!!」

夢い願いだったなあ(泣)。

いきなり扉を蹴破る勢いで入ってきた廻に、俺は泣きながら顔を向けたのでした。

「どうした？」

「弔、おまえさ、店の扉半壊してんだけど？」

「なんでそんなに冷静なのさ？ 店、壊されてんだぞ？」

「廻があれだけ焦っているなら、何かあったんだらう」

「おまえの優しき、時々さ、本当に心配になるんだよ。なんでそんなに優しいわけ。」

「我が師よ!! お聞きください! どうかこの愚かな弟子に教えを！」

「いや、俺は君を弟子に取ったつもりはないから」

「三番弟子に慈悲はないと?!」

「いや、一番も二番もないから」

「爆豪とデクがそうなのでは？」

「へえ〜〜何時からそうなったのさ。」

マジで顔を傾げて疑問を浮かべる廻に、俺は盛大に突っ込みを入れたくなった。でも、入れたら負けな気がするので止めた。

「それよりです!! 私は失敗しました。由々しき事態です、取り返しのつかない失敗を、私は!!」

「え、はい、何があったの？」

なんか焦っているけど、こう言う時の廻って焦る理由がエリちゃん関係だから、今回

もそうじゃないかな。

「申し訳ありません。私は、私は『ひな祭り』を忘れていたのです!」
「なんだと?!」

え? あれえくくなんでそこでギルが激怒して立ち上がるかな。さっきまで店の一角にソファーなんて置いて、のんびりうたた寝してたじゃないの。

甲、あれは怒っていいと思う。お客さん達も、『ギルさんじゃ仕方ない』って言うてくれたからいいけど、営業妨害で怒っていいと思います。

怒らなかつたけど。

「貴様! 今、何と言った?!」

「英雄王、私はもはや取り返しのつかない失敗を」

「貴様ああああ!! 失敗だと?! 貴様はここで死ぬか?!」

「お、御許しを。私はモンスターの封印に全力をかけていたのです」

「モンスターだと?」

「誠に遺憾ですが、他に形容のしようのない『あれ』です」

え、何、あれって何さ。

俺が疑問を浮かべる中、激昂していたはずのギルの怒りがさらに上がり、やがて蒼白になった後、小さく肩を落とした。

え、マジ、ギルが止まったの？

「ク、我は何も言えぬ。納得は出来ぬが、理解はできる」

「はい。私も納得などしていません。しかし！ あれは世界を壊す存在、まさにモンスターと呼ぶしかない」と

「無常とはこういうことを言うのか。英雄王である我が、こうも引き下がるしかないとは」

「世界は冷たいものです。それは貴方が最もよくご存じのはずです」

「虚しいな」

「はい」

ギルと廻が項垂れているんだけど、何の話なんだろう。

「弔、何の話か解る？」

「ああ、あれは恐ろしいモンスターだからな」

「恐ろしい？」

え、そんなのいたかな？ 俺が知らないけど、皆は知っているってことか。何時の間

にそんな恐ろしい存在と戦ったのさ。

「恐ろしかった。誰もが血の海に沈んでしまったのだから」

「え、それってまさか」

「ああ。『猫耳』だ」

そっか、そうだよなあ、うんうんよく解ったよ。あれはモンスターって言うしかないよな。

「話を戻して。廻き、雛祭りがなんだって？」

「はい、実はエリのひな人形を用意していません」

え、あれ、今が二月の月末だから、そろそろ飾らないといけないんじゃないかなかったっけ？

俺の鎮守府じゃ、艦娘達が気合入れて飾ったから。もうね、鎮守府の入口に三十メートルのお雛様が飾ってあるわけだ。

見た目がひな人形だけど、俺は騙されない。あれは絶対にエルが関わっているロボッ

トだ。

しかも、雛壇まであるから、鎮守府の建物が小さく見えるつたらもう。

「治崎・廻よ。貴様それでも同盟の末席にいる者か？」

鋭い眼光で睨みつけてくるギルに、治崎はその場で膝をついた。

「申し訳ありません」

「言い訳はいい！ 今すぐにどうにかせよ。できなければ、貴様は除籍とする」

「そ、それは！ お待ちください英雄王！ 私の誓いは未だ衰えることなくあります！

此度の失態を挽回し必ずや我が信念を示してごらんにいれます」

「ならん!!」

うわ?! え、え、ギルの本気の一喝だったんだけど、そんなに重要なこと。いや待つ

た、その前に同盟って何？

「ギル、あのさ、何の同盟？」

「決まっている、『紳士☆同盟』だ」

へえ~~~~紳士ね、そっかそっか。あれ、紳士？

「自らが愛でる存在を見護り、自らが敬愛する存在を育て、その行く末を見守る。高貴にして清廉潔白、ただただ愛し見守る、そういつた紳士達の同盟です、我が師よ」

え、そうか。廻が胸に手を当てて誇らしげに語るんだけど、それってつまりあれだよ

な。

「ちなみに、合言葉は？」

「フ、我は『ユニコーンに殉じ、ユニコーンに生きる』」

「私は『エリちゃんのための天使であり女神という言葉』です」

あ、解った。いいや、もうその話は終わり。つまり、変態紳士同盟ってことね。よく解ったよ、うん。

「ちなみにだが、この同盟の参加者は多い」

「へえ〜」

あれ、でも誰なんだろう。エルとかソープは違うし。

「ちなみに僕は『ロボット娘は可愛いに決まっている』です！」

『可愛いは正義、幼子に勝利を』にしてみたから」

「裏切り者どもがあああああ!!」

なんで普通にエルとソープも同盟に入ってるんだよ！ 絶対に違うって信じてたの

にさー！

「アインズは違うよな？」

「残念ながらな」

本当に悔しそうにつぶやくギルに、ホッと俺は安心した。

「あいつは歌のために生きる求道者だからな」

予想通り過ぎて、逆に安心できるって、俺もかなり精神的に危ないのではって思ったよ。

『息子が可愛過ぎて、怖い顔してメデイアを遠ざける』

「え、誰それ？」

「本名では登録しておらぬが、確か『エンデヴァー』と名乗っていたな」

た、確かナンバーツのヒーローでヒールとかヴィランじゃないかって、言われていた人がそんな名前だったような。

きつと同姓同名で別人だよ、きつとね。

「我が師よ、どうか私にエリのためのひな人形を授けてください」

「治崎!!」

ギルの怒声が飛ぶ中、彼はゆっくりと膝を折り、頭を床につけた。

「貴様、そこまでというのか？」

「もちろんです、英雄王。私のプライドも、未来も現在も、過去さえも。すべてをかけても、エリのためにひな人形を手に入れる。全部をかけて、命さえもかけても。それだけは私は譲れない」

「そうか、どうやら我の目が曇っていたようだ。貴様は今も立派な紳士だ。見事、

『愛^エすべき存在^{ちゃん}』のために、よくぞここまでと認めてやろう」

「英雄王、解^トつていただけましたか？」

「ああ、この王の中の王が認めてやろう。貴様はまさに紳士に相応しい、と」

「おお!!」

あ、うん、そっか、そうだね。

「なあ、弔、俺が変なのかな？」

「これって何の茶番^チ番^{バン}って思^{オモ}っているんだけど、弔。あれ、弔がいない。

「廻、少し待^マっている。俺の包丁に不可能はない」

「すまない、弔。おまえの気持ち、確かに私が受取、必ずエリに届ける」

「フ、そんなに上等なものじゃないさ。けどな、俺はおまえの熱意に答^コえたい。おまえの対応策^テがないなら、俺がやる。だからその後は任せた」

「ありがとう」

「がんばろうな」

嬉^{ウレシ}しそうに笑^ワう弔に、廻は大きく悲鳴^ヒのような歓声^{カン}を上げたのでした。

あれ、これって俺が悪いのか。冷たいのか。

必死に努力した。寝る間も惜しみ、食事も惜しんだ。絶対に退けない戦いに身を投じたことを後悔していない。

誰もが苦しい表情一つせず、ただ黙々と自分出来ることをしていた。

ただ一つの目標のために。

次は君の番だと告げるために。

一人の少女のために作り上げたものは、全員が満足の出来るものばかりで。

治崎・廻はそれを手に、真っ直ぐに立ち向かう。

理不尽に、世の中の冷たさに、世界の過酷さに。

大丈夫、君は愛されていると伝えるために。

「エリ、待たせた」

「どうしたの？」

「ひな祭りを知らないか。すまない、私は君に教えてなかったようだ。世界には女の子が主役になれる日がある。それを教えていなかったようだ」

優しく手を握り、そつと案内した先にあつたのは、絢爛豪華なお雛様。

英雄王ささえ宝物庫を開き協力した人形たち、死柄木・弔渾身の食べられるお雛様も添えられた部屋へと案内し、廻はエリの背をそつと押した。

「さあ、今日の主役は君だ。存分に楽しむといい」

「あ、ありがとう」

「フッフ、礼は不要だ。これが私たち『紳士』の役割なのだから」

満足そうに頷き、廻は指を鳴らす。

スツと室内に入ってきたのは、お手伝いさん達。手に持ったのは桐のタンスに入った着物。

「さあ、エリ。これに着替えて私に見せてくれないか？　世界で最高に可愛く天使な君のひな祭りを」

「はい……でもいいの？」

「もちろんだ。女の子が主役の今日、君が着物を着るのを邪魔する者はいない」

自信を持って答える廻に、少しだけエリは戸惑いつつ周りを見て、そしてギョツと服の裾を握った。

「でも」

「サイズを心配しているのか？　きちんと君に合わせてある。それとも、色合いが気に

なるのか？ 複数の配色の着物も用意してある。好きなものを着るといい」

「違うの」

「何が違うのか？」

廻は戸惑い、彼女の前に片膝をついて目線を合わせた。

エリは服の裾を握ったまま俯いていたが、やがて顔を上げて真っ直ぐ見てから口を開く。

「今日、2月28日だよ」

「……………私も詰めが甘かったなあ」

そうして彼は志半ばで倒れたのでした。

「あの馬鹿が」

組長は一人、自分の部屋で治崎・廻のことを呆れたように告げる。

最高のタイミングでひな祭りを祝うつもりだったのに、先走って勘違いして暴走した結果、エリに余計な気を使わせた。

まったくもってあいつは詰めが甘い。

「それに、な。俺にはエリの可愛さの耐性があるんだぞ。今更、『猫耳』程度で揺れるかよ」

会長の手には治崎・廻が封印したはずの封筒があつた。

ゆつくりと中から引き出されるのは、一枚の写真。あの時、大騒動になった時の猫耳を映したものだ。

「……まったく」

写真を眺め、会長は軽く笑つた。

「治崎、おめえは俺のことをよく理解しているぜ」

猫耳程度で揺らがない。

しかし、だ。その写真に写っていたのは、『猫耳だけじゃなかった』。

「まさか、メイド服たあ恐れ入つたぜ」

そして彼は血の海に沈んだのでした。

「田中少年、最近エンデヴアーが優しいのだが、何か知らないかね？」

「ごめんなさい」

「いや、君の土下座が見たいわけじゃないんだが」

「すみませんでした」

「何があったというんだ？」

俺は後日、オールナイトからの質問に、速やかに謝ったのでした。

理想のために、夢を追いて、他が為の

四月も過ぎた今日この頃、皆さまはいかががお過ごしですか？

なんて真面目な挨拶から始めてみました、田中・一郎です。

今、非常に空気が重いんですよ。

もうめっちゃやくちや、重い。まるで鉛、いやこの感触はオリハルコンか。触ったことないけど。

原因は一つだけ、爆豪君とデク君がカウンターに座ったまま無言なんですよ、もう険しい顔して無言なんです。

普段だったら、もっと色々な話をしてくるんですけどね。

今日は何があつたんだろう。

「・・・雄英に入学して、最初の授業か」

「おお、月日が経つのは早いなあ。え、で、これ？」

俺が親指で二人をさすと、弔は大きく頷いた。

ということ、雄英で何かあった。いや、まさかっつて俺は反論しかけて思い直す。いや、あの入試で二人を狙い撃ちした雄英だから、何かしたんじゃないか。

まさか、根津校長とオールマイトが二人に対して何か罰則でも。いや、そういうことする人たちじゃない、っつて思いたいけど。

「調べるか？」

コナンがそつと提案してくれたことに、俺は頷きかけて。

「私が先生として来たああああ!!!」

「原因、知っている人が来たから教えてもらおうぜ」

クールに決めて言ってみた。

すっごい寒い目で皆が見てくる。いいじゃん、たまにはカッコつけさせてくれよ。

「すまない、田中少年、死柄木少年、少しの間、店を借りてもいいかね？」

「構いませんよ、オールマイト。そちらは？」

弔の声に、オールマイトは少しだけ脇にそれて、背後にいる人物を手で示した。

「こちら、相澤先生だ。二人の担任だよ」

ガタンと爆豪君とデク君が立ち上がり、先生を見つめた。

ちよつと、険悪な雰囲気なんだけど、えつとどうということ？

原因の発端は、二人の個性について。

雄英の初日、他がオリエンテーションとかやったり、授業の説明とかしている中で、運動テストしたらしい。

各自の運動神経を計測して、これからの授業活動の参考にするって。

うん、これだけ聞けば普通の学校みたいに聞こえるけど、これに『個性を使つて』って着くと、さすがヒーロー校って思えるよ。

で、カウンターの雰囲気さらに重い。

殺気交じり、怒気交じり？ いや、爆豪君とデク君のほうは必死に抑えているようだけど、相澤先生の雰囲気がつもなく冷たい。

「初めまして、1年A組の担任をしている相澤・消太といいます。噂の『第三勢力』のトツプ、田中・一郎さんですね？」

「はい?」

え、待つて、ちよつと待つて。何それ、第三勢力つて何? え、俺つて一大勢力に数えられているの。

まつさかあ、そんなわけある・・・かあ。

俺は今までの出来事をすべて思い出して、頷くしかなかった。

「なるほど、肯定すると? 貴方達の目的をうかがつても構いませんか?」

「目的ねえ」

え、普通に穏やかに生活したいってだけです。もう本当に、毎日が平穩なら俺はそれでいいのに。

「話すことはない、ということですか?」

「それはね」

え、あれ、なんで相澤先生が鋭く見てくるのさ。え、俺の言葉が悪かったの、素直に言えばよかつたの。だって先生つて話せる雰囲気じゃないでしょうが、その険悪な気配を引つ込めてからにしてよ。

オールマイト、どうにかして。

俺が期待を込めて見つめると、彼は小さく首を振つた。

あれ、無理つてことね。

「一郎に話があるなら、俺を通せ」

「君は？」

「死柄木・弔。ここのシエフだ」

一瞬、二人の視線が火花が散った気がした。気のせいだよ、そんな一触即発って雰囲気じゃないよね。

「ここは、平和な飲食店、普通に穏やかな午後なんだからさ。」

「弔、落ち着けて、それじゃ話ができない」

「けどな」

「大丈夫だって。相澤先生、俺達の目的が知りたいんですか？」

「よっし、ここは俺が一肌脱ぎましょう。」

「それもあります、二人の『訓練の内容について』も伺いたい」

「二人のね」

そつちとなると、コナンを呼ぶしかないか。あれ、でもコナンに説明させると相澤先生が『子供が』とか言わないよね。

えっと、そうなる俺が言うしかないか。

「二人の訓練については、各自に任せているので。理想とするヒーローにするために、色々教えたみたいですよ」

「そこです。貴方は、二人に『能力を制限しろ』と命じましたか？」
「はい？」

え、そんなこと言った気はないけど。

「待ってくれ先生！ あれは俺たちが勝手にやってることだ！」

うお?! 爆豪君、いきなり怒鳴らないでくれよ、びつくりした。

「そうです！ 僕とかつちゃんで決めたことなんです！」

デク君まで熱くなっちゃって。あれ、となるとそこで先生と激突したの、なんで、あれ個性も使った運動テストだね？

制限って何？

「勝手に『個性を使わず』にテストを受けたというのか？ 合理的じゃないな」

「合理的がすべてじゃねえ。ロジカルだけを追い求めても、結果的に救えないことの方が多いだろうが。理屈だけで世界を回せるほど、この世界はシンプルに出来てねえだろうが」

爆豪君?! 口調口調！ 相手は先生なんだからせめて敬語を使って、お願いだから。

「合理的判断によつて被害が少なくなることはあります。けれど、人間のメンタルにおいて合理的判断は特に被害者に対して、絶対的な圧迫感を与え、かえつてトラウマを深く印象付けることもあります」

デク君、冷静に語っているようで敬語を使っているけど、その目線はちよつとまずいって。なんでそんなに睨むように見ているのさ。

本当に何があつたの、二人とも。他人に対して、そんなに辛く当ることつてなかつたじゃないの。

「確かにそうだが、合理的判断は常に事態を効率よく進める。非効率的な動きによつて救える命の数が少なくなることもある」

「救える命の数じゃねえ！ 絶対に救うんだよ！ 全部な！」

「最初から救えないことを念頭において活動するのが合理的判断なら、僕らには必要ありません。全部を救う、そのための力ですから」

「非合理的で非現実的だな」

「最初から逃げ腰になつた奴が何言つてんだよ！」

「先生は合理的合理的と、物事の基準を語っているようで、合理的つて言い訳をして逃げているようにしか聞こえません」

おくく、二人とも熱くなるなつて。相澤先生も口調は平坦だけど、何かムキになつてないか。

「なるほどな。だから、お前達は個性を使わなかつたつてことか？」

「使つただらうが！」

爆豪君、ちよつと落ち着こうか。今にも嘸みつきそうな顔してるの、止めようね。この人、先生だからね。

「ああ使ったな。あれで全部じゃないだろうが、違うか、『シンガー・ボマー』？」
挑発的な目線を向ける相澤先生に、爆豪君の怒りが上がった。スツと立ち上がって拳を握る。

めちやくちや怒っている。でも思考は凄く冷たい。

「先生、その名前は俺達が名乗ったもんじゃない」

「そうらしいな」

「だから、だ。先生、その名前は俺たちにとって『理想勲章』だ。俺たちが助けた人たちが名付けてくれた名前だ。それを」

二人がそれを誇りにしているのは知っている。自分で決めたんじゃない、多くの人が二人の姿を見て決めた名前は、二人にとって自分達がヒーローである証みたいなもの。多くの人の願いが詰まった、大切な宝物だ。

でも、ね。

「爆豪君、それは駄目だ」

「けど一郎さん!!」

「確かに君たちの勲章みたいなものだ。だからこそ、それは『君たちの自由にできるも

の』じゃない。多くの人が口にできるもので、それを誰がどう使っても君たちが怒る権利はない。もしあるなら、それが悪用された時だけ」

気持ちも解る、爆豪君が怒ったのは、自分が安く見られたことでもなければ、弱く見られたものでもない。

『シンガー・ボマー』（シンガミナノボマー）が低く見られたこと、だ。それが許せなかった。

「多くの人が想いを重ねた名前は、同時に皆のものでもある。それは、相澤先生にも権利がある。君が怒る筋合いじゃない」

冷たくて辛いことを言っているようだけど、これは超えてはいけないことなんだよ、爆豪君。

君たちが勝手に決めたことを、決意は固いことを示すために。

「?! 解りました」

グツと唇を噛んで、爆豪君は席に座った。

「先生、お願いますから、子供を煽らないでください。貴方だってまだ現役のヒーローでしょうが」

まったくもう、これってオールマイトの役目じゃないのかな。なんで俺が言うことになってるのさ。

「貴方は二人からかなり信頼されているようですね」

「二人はいい子ですから。俺なんかのことをかなり慕って来ていますよ」
「だから、利用した、と?」

あれえゝゝゝ何でそうなるかな?

あ、待った!!

「おまえ、死ぬか?」

「彼方へ飛ばしてあげましょうか?」

「雑種が」

「面白いことを言う人ですね、消えますか?」

「へえゝゝゝ次元の挟間に落としてやろうか?」

「無慈悲な死を与えてやろう」

待った、本当に待ったおまえら！

「コナン！」

「じやますんなよ、マスター。こいつは、超えちゃいけない一線を越えたんだよ」

「ちよつと待った！　なんでおまえまで怒ってるんだよ！　何時ものジョークとして流そうぜ！」

なんで全員がフル装備で相澤先生を囲んでるのさ?!

何時の間にオールマイトと爆豪君やデク君を店の端に飛ばしたの！　本当に待って

！　ただの冗談、ほら冗談。

「よっし、落ち着こうか、皆」

ヤバい、俺の後ろで艦娘達が全員機装を纏っているのが解る。トツテイちゃんとトルテ君も種族全部を連れてくる気になっている。

不味い、本当に不味い、ここで全力戦闘になったら。

「個性が消せない？」

「残念ながら、おまえの個性で消せるほど、小さな能力を持った奴はここにはいないぜ、『イレイザーヘッド』」

こ、コナンがマジギレしている。え、なんで、待って、どうして。ギルもエルも、ソープもアインズも、なんでそこまで怒っているのさ。

弔と黒霧はそんな気がしていました。俺への忠誠心って高すぎませんか？

「話中、俺と相澤先生のお話の最中だから、全員撤回。命令」

念を押しして告げると、全員が顔をしかめて舌打ちして退いてくれた。良かったあ、一応まだ提督としての命令権が生きてた。

「とりあえず、利用したことないですから」

「……あれだけの人員がいながら、爆豪と緑谷に何をさせたいんですか？」

「二人が望んだことをそのまま叶えられるように、俺達は手助けしただけです。ヒーローとして、助けると言ってくる人達を救えるように。ただそれだけですよ」

「まさか、本当にそれだけだと？」

嘘はついてない。本当のそうなんだよ。

「相澤先生、気が済んだかね？」

オールマイト、もっと速く動いてくださいよ。なんで俺が寿命を縮めるようなことになつてんですか。

「すまないね、田中少年。相澤先生がどうしても君に質問したいと言ってきかなくてね」

「質問って、俺の目的とか？」

「いや、爆豪少年と緑谷少年の件だよ。二人は今日のテストでコスチュームも艷装も使わなかった」

あ、そう言うこと。だから制限って話になったわけね。

「貴方が二人に言いくるめたのかと疑いました。二人の能力は素晴らしいものがある。確かにあの個性を使わなくとも、今日のテスト結果は二人の独走状態でした。しかし、私から見たら」

「手を抜いているように見えたってことですか？」

「はい。事件は常に危険と隣り合わせだ。手を抜いていいとか、手加減してどうにかできるなんて甘いものじゃない」

なるほどね。そっか、そっか。

「それでもし二人に危険が及んだからって考えたわけですね、相澤先生」

ハッと、爆豪君とデク君が目を見開いた。

まだまだ二人も甘いな。救う相手の心も救えるように、なんて頑張っているもこういったことで人生経験の差が出てくる。

「二人とも、相澤先生は天の邪鬼なんだよ。言っていること、やっていること、その根つこのところには、『二人が大切に仕方がない』って想いがある。見抜けないようじゃ、まだヒーローには程遠いな」

と、カッコつけてみた。うん、これだけなら俺ってあの人達を目指せるかなって思うんだけど。無理かな、無理だよな。

「先生、悪かったよ」

「ごめんなさい、先生。僕たちはまだまだ未熟でした」

素直に頭を下げる二人に、相澤先生はどうにも少し照れたような顔をしていた。

「とにかく、二人に何も言っていないんですね？」

「もちろん。俺達はデク君と爆豪君が『無茶なヒーロー活動して死なないように』鍛えた

つもりです」

「なるほど」

小さく頷き、相澤先生は小さく頭を下げた。

「どうやら私の勘違いのようです。申し訳ありません」

「いえいえ、先生ならそう思って仕方ありませんよ。どうか、二人をお願いしますね」

「はい」

そう答える相澤先生は、確かに『教師の顔』をしていた。

うん、オールマイイト以外にもこんな人がいるなら二人はいい経験を積めるだろうね。

店を後にして、四人は歩く。丁度、帰り道は全員が一緒だったからと歩いている途中で、相澤がふと思いついたように口にする。

「ずっと気になっていたことを。」

「そういや、なんで使わなかったんだ？」

今になって思い出したように口にした言葉に、爆豪とデクは真っ直ぐに彼を見つめ答えた。

「あれは、『自分達のための力じゃないから』と。」

爆豪のコスチュームも、デクの艦装も、どちらも願いの結晶。多くの嘆きを知った存在が、絶望も慟哭も、地獄の底のような現実を見てきた人たちが、それらを砕いて自由を与えてくれるヒーローに憧れて、そんな存在になってほしいと願いを込めて贈ってくれたもの。

「だから、決めたんだ」

爆豪は右手を握り締める。赤と黒のブレスレットが、淡く光を放ちながら揺れる。

「この力を使うのは、『誰かの助けてに答えるため』だけにしようって」

デクは胸元の船のペンダントを握り締める。緑色の輝きを灯したそれは熱く鼓動を繰り返す。

自分のための力じゃない。誰かの絶望の檻を砕き、自由を守るための力だから、どんな状況になっても、例えば自分達が死ぬことになっても『自己のため』には使わない。

「理想だな。理想すぎる、非合理的だ」

「けど、譲れねえ。これだけは譲りたくない。何があっても、絶対に譲れねえんだ。理屈じゃない、馬鹿げているのは解ってる」

「僕とかつちゃん『力』は、無尽蔵に使えば誰にだって負けません。たぶん、どんな相手にも勝てます。だけど、それは同時に僕達の心を『染めてしまう』から。だから、支点が必要なんです」

「好き勝手に使う力は暴力だ、先生。誰も彼も傷つけて、最後には自分さえ殺してしまうかもしれない。だから、線を引いた。どんなに感情的になっても、どんなに苦しい時でも見失わないために」

「僕たちが、ヒーローが護るものが解らなくならないように。例えば、闇の中でも、眩しい光の中であつても、見つけることが出来るように」

二人はそれぞれの『勳章』^{勳章}を握りながら、真つ直ぐに先生を見つめ答えた。

『絶望を砕く最高のヒーロー』であるために、絶対に忘れてはいけないことを刻むため

に、この力は人々のために使うと。

「非合理的すぎる。おまえらはそれでいいと本気で思っているのか？ それで倒れたら？ 護りきれずに死んだらどうする？」

不機嫌な顔で相澤が告げると、二人はお互いに顔を向け会って笑った。

「そんなときや、デクが助けるさ」

「かつちゃんがいるなら大丈夫ですよ」

「二人が倒れたら？」

さらに言葉を重ねると、今度は二人は真つ直ぐに相澤を見つめ、拳を突き出した。

「取りこぼしなんてしねえし、させねえ。そのための『シンガー・ボマー』だ」

『グリーン・シップ』の航路に、倒れるつてことはありませんから」

だから、負けません。もし倒れることになっても、悔いはありませんから。そう望んで進んだ道です。

瞳に宿った決意は、相澤にそう告げている。

そして、その背を見せ続ければ後に続くヒーローが必ず現れます。ナンバーワンに憧れた自分達のように。

「まったく、非合理的の塊だな、お前らは。明日から、厳しく教えてやるぞ」

「はい!!」

元気のいい返事を受けて、相澤は顔を戻し再び歩き出した。
「嫌いじゃないな、そういつた考え」

小さくポツリと呟いた言葉は、淡く街の中へと溶けて行った。

頑張るって素敵だね、切っ掛けはそこにあるからさ、思い込みは大切だよ、そんな話ですよ

雄英に入学して、担任と色々あつて、自分自身を振り返って気づく。まだまだ未熟だ、技術は確かにあるのだが経験値がまだ足りない。

最高のヒーローになるために、もっと色々な経験を増やさないと。

爆豪はそんなことを考え、今日も人間観察に勤しむ。

教室のクラスメートの会話、担任の話し方、人の仕草や表情から内心を推し量る。行動心理学は熟読したが、まだまだ実戦レベルではない。

犯罪心理学はまだ手を出したばかりで、知識が足りていないから、もっと勉強しないと。

「爆豪、お前は何を読んでいる？」

いきなり相澤先生に言われ、彼は真っ直ぐに立ち上がり答える。

「過去十年間の犯罪記録とそのプロフィールングデータです」

当たり前のことを聞く人だな。まさか、何か意図があつて。いや、言葉どおりに判断するのは早計だ。彼は天の邪鬼だから、言葉の裏の裏を読んで対応しないと、また失敗してしまふ。

彼の一挙手一投足を観察し、彼の表情筋を把握するべきだ。微細な表情筋は演技では誤魔化すことができず、その人の内心に直結している。相手の心を読む上では欠かすことができないスキルだ。

これはデクのほうがうまくやれる。他人の機微を読むのはあいつのほうが優れているから、今までは任せていた部分もあつたが。

そこで爆豪は笑つてしまいそうになる。対抗して見下して、遠ざけて馬鹿にしていたのに、今では普通に背中を預けられる。

今までの自分の行動はなんだったのか。心理学で言えば、自分への強迫観念か、あるいは虚栄心からの行動になるのか。いや待った、今は相澤先生の心理だ。彼が何を言っているのか察しないと。

「この問題の答えはなんだ？」

呆れた顔をしている。なんだ、どういうことだ。彼がさしているのはごく当たり前の数学だ。問題自体に不自然な点はない、ごく普通の高校生レベルの数学を、今になって出題するなどあり得るのか。

ヒーローを目指す学生が、『たかが高校生レベルの知識がない』というのはあり得ないことだ。この数式は暗号なのか、まさか昔の旧軍あたりの最高級機密暗号が入れられている。

それか、アメリカなどで使用されている現在最高の機密レベルの暗号文が、何処かに隠されているのか。

さすが、機密情報では世界最高峰のアメリカだ。まさか、一目で見破れない暗号を使ってくるとは。それを知っている相澤先生は只者ではない、なるほど田中・一郎が論すわけだ。自分は知らず知らずのうちに驕って、周りを低く見ていたのか。

危ない、これでは自分は最高のヒーローではない。救える命をとりこぼすところだった。そんなことはあの名前を貰った自分にとって、許されることではない。

「爆豪、授業を真面目に聞いていないのか？」

「聞いていました。さすがです、先生。まさか、そんな暗号文があるなんて思いもしなかった」

「何を言っているんだ、お前は？」

「普通の数式、そこに巧妙に隠された暗号。さすが英雄だ、普通の数学の授業に見せかけて、暗号解読をさせるなんて。すげえな」

「……緑谷？」

矛先を変えたか。悔しいが先生の選択は正しい、こういった暗号の解読は自分よりデクのほうが優れている。

「数式から判断して間違いなく普通の数学だ。いや、待った。配置に意図が隠されているのか、数式だけじゃなくアルファベットの位置、そこに書かれた順番か。書いた後で見られても問題ないように隠されている、これはきつと先生が書くところを見せたことに意味がある。手の動きで別の文章と数字を織り込んで、その上で全体の数式を持つて暗号の解読キーを形成している。いや、違う、それでは単純すぎる。手の動きだけじゃない、相澤先生の全体の動きも暗号化されている？　そうか、先生の表情や目の動きもすべてが暗号を形成していて、数式を書いている先生を見ただけじゃ解けないような高度な暗号信号になっている。凄い、こうやってみても解らないくらいに普通の数式だ。今の世界のヒーローはこんな暗号を使っているのか。だから、一郎さん達は僕たちにあんなに色々な知識を教えてくださいましたのか。ク、なら僕の観察は遅かった。書き始めた先生の動きを見ていなかった。これじゃ暗号の解読は不可能だ。かっちゃん」

「おう、最初の動きだな、それなら俺が覚えてるぜ」
凄まじい勢いで理論を組み立てるデクを頼もしく思いながら、自分の記憶を掘り起こしていく。

推察はデクに負けるが、記憶力なら負けるつもりはない。瞬間記憶ならばこっちの能

力が上だ。

さて、回答を出してやろう。

「……おまえら、少し深読みし過ぎだ」

「先生、俺達を騙そうなんて無理だぜ」

「僕とかつちゃん揃っているのに、騙せると思っているんですか？」

「あのだ」

すぐにだ、すぐに答えを出してやる。爆豪はにやりと笑い、思考を加速させていく。

「これは普通の高校生レベルの数学だ」

「な?!」

「嘘ですよね?!」

「天下の雄英が!! ヒーロー校が今更そんなレベルの数学を教えるのか!?!」

「まさか違いますよね?!」 そうやって僕たちを煙に巻いて、後になって補修させるつもりなんですよ?!」

驚愕に染まる爆豪とデクを余所に、クラスメートたちは何とも言えない表情で二人を見ていた。

最初の出会いから、二人が飛び抜けているのは解った。

試験の時の行動力、判断力は学生というよりはヒーローの、それもトップ・ヒーロー

に並ぶような凄さだった。

運動テストの時、個性を使っていないのに他の追隨を許さない記録を次々に打ち立てた。

授業の時もほぼ即答に近い答えを出し、突発的な質問にも迷うことなく答えつつ、まったく別の書物を読んでいる姿には、畏怖さえ感じてしまうほどだ。

普通なら異質として怖くなるのだろうが、彼らは何処か『面白い』雰囲気を出している、怖いと感じる前に『微笑ましく』なる。

今も、簡単な数式の前に深読みしてカラ回りて、ドツボにハマったようにぶっ飛んだ話をしている。

要するに、癒し系かつ笑い系の二人とクラスメートたちに思われていた。

「……違う、おまえら二人とも少し落ち着け」

とても疲れた声で告げる相澤先生は、肩を落としたままゆっくりと爆豪を指差した。「で、おまえは『何語の本』を読んでいるんだ？」

「フランス語です」

「その下は？」

「ドイツ語です」

「……おまえ、昨日はギリシア語とか読んでなかったか？」

「ヒーローならば語学は必須ですから」

キリツと答える爆豪と、大きく頷くデクを前にして、相澤先生は軽く眩量を感じてしまふ。

あ、こいつらはもうぶっ飛んでるのか、と。

知っていたはずだ。レベルが違うと解っていたはずなのに、自分はまだまだ二人を把握していなかったのか、と。

「おまえら二人とも何ヶ国語、しゃべれる?」

「まだ二十一です」

「僕は二十です」

まだまだ足りないと言外に語る二人に、教室の空気は一気に固まったのでした。

どうも、英語とドイツ語と日本語しか話せない、田中・一郎です。

「何してんですか、貴方は？」

「え、俺が悪いんですか、相澤先生？」

「ええ、もちろんです」

うわ、すげえ言われよう。でも、そっか。今の学生って日本語と英語しか話せないか。俺の時は、ドイツ語も必須だったんだけどな。

あ、提督だからだ。うわあ、やつちやつたなあ。イタリア語とロシア語は駄目だったから、仲間内からは結構な言われて方をしてたんだけど。

「二郎、おまえはそのままでいい。俺が話せる」

なんで優しい目で言うんだよ、弔。その前に、おまえさ、俺は今、相澤先生にかなり言われた方をされたんだけど、怒らないよな？

「二人の担任として強く育ててくれることが解ったからな。反省はしている」

「そっか」

「後悔はしていない」

「おまえは少し自重を覚えようね?!」

なんだよその決め顔は?! 自重しようよ、もつと穏便に平和に生きようよ、いきなり殺そうかって考えは止めてくれよ。

「あれは、警告だったのでは？」

うううう、相澤先生の優しさが今日も身に染みる。あんな集団に囲まれたのに、水に流してくれる優しさ。

あんただっていい大人だよ。

「とにかく、本当に爆豪と緑谷に何を教えたのか、具体的に教えてください。授業が止まります」

「え、はい」

でもさ、完全に把握しているのってコナンだから。その、どうしよう。

「ご心配なく。俺はオールマイトから話を聞いています」

「なら、オツケーです。コナン、ちよつと教えてあげて」

「解ったよ」

そういつてコナンは、五百枚はありそうな用紙を持ち出して、あれえ？

「二人に教えた内容は、こんなところかな？」

あ、そうなんだ。というわけで、と相澤先生が軽く引いてるんだけど。

「具体的な訓練の内容や、そのタイムスケジュールなんかも入れてある。映像も残っているけど、そっちは渡せないからこれで勘弁してくれよな」

「まさか、これほどとは」

受け取った相澤先生がゆっくりと読んでいくんだけど、その表情が険しくなったり穏やかになったり、その後にもまた険しくなったり呆れたり。色々と表情が変わっていくなあ。

「これ、マニュアルとして貰えませんか？」

「ダメだろ、流石に。そいつは非合法なやり方だぜ？」

「いや、今のヒーローの育成のあり方を根底から変えるほどです。ぜひ、譲ってください」

「無理だろうな。やるには今のヒーロー教育設備じゃ、出来ない部分がある。俺達も『科学的な手段』だけじゃ不可能だからな」

「確かにこれは」

まあ、俺達にはアインズとエルっていう、無敵な魔法使いがいるからな。時間停止って、余裕でできるもんじやないだろうし、ちぎれた腕を一秒以下で再生させるとか無理だろうから。

「それにな、そいつらは爆豪とデクに合わせた訓練内容だから、他のやつらには向いてない。二人の特徴と、その『個性』に合わせてその都度に調整してあるからさ」

「個性……そういえば、緑谷は『無個性』と書いてありましたか？」

「臙装のおかげだ。後は『勇者』の加護だな」

うん、そうだね。 艷装だけじゃなくて、あの緑色の石のおかげだね。 本当、あれを使っ
たって知った時は、心臓が止まるかと思っただよ。

「勇者とは誰の？」

「悪いな、これ以上は教えられない。とにかく、そいつは諦めてくれ」
「残念です」

いや、相澤先生、そんなに未練ありそうな顔で見なくても。 雄英ならもつと素晴らし
い教育をしてくれるでしょう。 生徒一人一人に合わせて、そんなに考えてくれる先生が
いるんだから。

「ところで、何時もこんな訓練をしているんですか？」

はい、そうですね。とかが言っておいた方がいいのかな？

「ハーハツハツハ！ 私があ」

「宣言が遅い」

「飛ばされたあああああ?!」

「オールマイト！ だから言ったじゃないですか！」

「あの人は！ デク！ 前を固めろ！ くるぞ！」

「かつちゃん後ろ!!」

何時も、だろうな。 本当に、何時もになるなんてなあ。 なんでオールマイトまで参加

しているのさ。デク君と爆豪君だけでいいじゃないの。

「にやしし、いい感が育ってるね〜」

うわあ、睦月が凄いいい笑顔で姿を消している。あいつの『ハデス』は、完全に姿を消すんだよな。その上に、『デスサイズ・ヘル』のハイパージャマーを使われると、もうリーダーにも映らないし目視でも見えないし。

攻撃の瞬間のちよつとした空気の揺らぎをデク君が察知して、爆豪君が周辺を爆炎で覆って対処したね。

うん、それって睦月だけなら、完全に正解なんだけどね。

今回は如月もいるから。

「残念ね」

六角形のフィールドを展開した如月に、爆豪君の爆破は届かないんだよな。

使徒かあ、まさかエヴァの使徒の全能力を持っているとは思わなかったよ、はあ。

しかも、まだ改になったばかりで、その上に改二があるんだよな。

「斉射!!」

お、デク君の三連装主砲が炸裂した。うんうん、最初は四つしかなかった主砲も今では十個は出せるようになったね。

もう改になったかな。

「残念でしたね」

そんな主砲も、如月の防御を突破できるけど、吹雪のナイフの前には無意味なんだよね。

はあ、本当にうちの吹雪はチートの塊だね。

「はい、終わり」

そして、二人も沈んだ、と。

「もう一度、聞かせてください、何時もですか？」

「大抵は何時もだな」

「はい、申し訳ありません」

かなり引いている相澤先生に、俺は頭を下げるのでした。

ど、土下座まではまだあるはず。あるはずだよね?!

爆豪は考える。今の自分はコスチュームがあれば、大抵の防御は貫通できる。槍に自分の個性を吸収させ、それを放つことで大抵の敵は一層できる。

また個性をコスチュームが吸うことで爆破が防御にも使えるようになった。敵の攻撃が当たった瞬間に、爆発することで敵の攻撃を相手にはじき返すことができる。

リアクティブ・アーマーの強化版と一郎に言われた能力に、満足しているのは嘘じゃない。

しかし、だ。自分の個性はどちらかといえば近距離。デクのような遠距離攻撃の手段がないわけではないが、どうしても回り込まれたりすれば、あるいは手の範囲から内側に入られると対応手段が一気に減る。

そして手の届く範囲プラス十メートルから二十メートルが最大範囲。一点集中して放つ攻撃も、砲撃というよりは狙撃に近いものがあり、範囲攻撃はできない。

面で制圧しないと対応できない場面では、デクに任せるしかない。

加速もそうだ。マツハ六から上がらなくなった。もつと速く、もつと最短で駆けつけたいのに、速度が上がらない。

「どうすりゃいい」

小さく呟き、息を吐く。

デクは強くなっている。艦装の扱いも上手くなった、艦装の攻撃手段も増えてきた。主砲も最大で十五基は出せる。動けなくなるらしいが、主砲ごとに浮遊するから全方位に砲撃できる。

装甲の強度も上がった。今では弾道ミサイルも受け止められるだろう。放射能さえなければ、核の直撃も耐えるかもしれない。

自分も強くならなければ。あいつに負けないように、あいつの背中を預けられるように。

どうすればいい。

考え込む爆豪の視界に、一人の教師が映った。

「あるじゃねえか。俺向きの攻撃方法が」

ニヤリと笑った爆豪は、そのまま一郎の元へと駆け込んだ。

必死に頭を下げて、鎮守府の訓練場に入り、そして彼は決死の修行に挑む。

理論的には可能かもしれない。

あの教師の個性からヒントを得た、遠距離攻撃。広範囲であり、距離も関係ないほどの射程距離を誇る。

唯一の弱点は、気象条件に依存することか。関係ない、風を読めばいい。相手の動き

を観察し、次の一手を予想し、そこに流せばいい。

「かつちゃん、それって」

「デク。俺は気づいた。俺の個性はニトロみたいなものを使って、爆発させてんだ。つまり、俺の汗はニトロだ。けどな、ニトロみたいなものであって、完全なニトロじゃねえ」

「それはそうかもしれないけど」

傷だらけになる自分を心配したデクが止めてくるが、止まるつもりはない。ヒントを得た、チャンスを貰った、ならば後は突き詰めるまで。

形にする、何がなんでも、不可能なんてことは絶対にない。できると信じる心が個性を強くする。

死柄木・弔は最初は手に触れたものしか崩壊できなかったが、次第に視界に捉えたものも崩壊できるようになった。

黒霧は触れたものしかワープできなかつたものが、視界内ならばいくらでも距離は関係なくワープできるようになった。

つまり、個性は『こうだ』と思い込むことで、その能力を限定してしまう。もつと視界を広く、想像を繰り返して自分の『個性』のあり方を変える。

「体臭っていうのは、つまり汗が気化したもんだ」

爆豪は脳裏にあの教師を思い浮かべる。

眠りを誘う女教師の姿を。

「俺の汗は二トロだ、汗なんだよ」

バチバチと小さな火花が散る、これではだめだ。肌の上で弾けるのではない、もっと外へ、遠くへ。もっと先へ、手と足の延長のように、もっと先の視界の隅まで。

「届かせるんだよ。やれよ、爆豪・勝己。やるんだよ」

自己暗示のように繰り返し、脳裏のイメージを全身に叩きつける。

フワリと風に乗る。自分の何かが風に乗って周囲に漂う、それで終わり。抜け落ちるように消えて行った欠片が、今は確かに『そこにある』と感ぜられる。

「へ、やれるじゃねえか」

ゆっくりと息を吐き、そして命じる。

『弾けろ』。

瞬間、訓練場を大爆発が吹き飛ばした。

「かつちゃん?！」

デクは艤装を纏い全力で防御した。それでも艤装が傷つく音がした、自分が誇る最大の楯が悲鳴を上げるほどの攻撃力。爆炎と衝撃は艤装の装甲を砕き、デクの体を押しつけようと荒れ狂う。

「やったぜ」

轟音の中、確かにデクは爆豪の声を聞いた。

「やってやったぜ!!」

叫ぶ、彼は爆発に負けないほど大きな声で叫ぶ。

訓練場の四方は吹き飛んだ。天井も亀裂が走っていた。でも、中心にいる爆豪は無傷のまま。彼がいる場所も無傷のままだった。

「かっちゃん」

「広範囲で遠距離攻撃、面制圧。しかも、『識別可能』だ！ どうだデク!？」

狂喜のような、ではなく純粹に笑う彼を前にして、デクは思う。

『やっぱりかっちゃんは凄いや』と。

同時に感じる、この幼馴染は何処へ向かっていくのだろう、と。

爆豪君、識別可能なMAP兵器を手に入れる。

「田中、どういうことだ？」

「すみません」

「田中少年、説明してくれないか？」

「すみません」

「どうしてなんだろうね、田中君」

「すみません」

その日、俺は相澤先生とオールマイトと根津校長の前で、土下座することになった。

お、俺が悪いわけじゃない、と思いたい。でも、俺が鎮守府の訓練場を貸したから、原因はあるかもしれない。

「説明してくれ」

「本当にごめんなさい」

三人の圧力が怖いから、俺はひたすら土下座しました。

参加者は専門家の指示の元、安全に十分に配慮しております。決してマネしないでください

その日は、とても晴れた日で心地よく、春らしい陽気でありながら風一つない静かな日だった。

思い返すとそれは、『嵐の前の静けさ』だったのだろう。

「お願い」

「な?!」

小さく頭を下げてくるエリに、治崎・廻は言葉に詰まった。

初めてといってもいい、聞いたこともないほどに珍しいエリからのお願いに、全身全霊で答えたい。

答えたいのだが、内容が問題だ。

友達が欲しい、もちろんOKだ。徹底的に背後関係を洗い、当人の性格、普段の行いを観察し、その上で両親のことも観察、日常の生活もすべて調べつくしてから、『友達は

大切にしなさい』と教えるつもりだが。

学校に行きたい、良かろうと答える。国内のすべての私立を調べつくし、学校の内部、設備、制服、生徒達の普段の授業など、全て徹底的なテストを行ってから許可を出す。しかし、だ。今回の彼女のお願いは、まったく違うものだった。

「ダ……」

言い掛けて、治崎は声を無理やりに止めた。能力を使って声帯を壊してしまうほど、必死になって自分の言葉を止める。

涙をためてギュツと手を握ったエリの姿に、『私には無理だ』と内心で嘆いて膝をつく。

エリが涙をためた目で必死に訴えていることを、無理だ不可能だと否定してしまうこととは自分にはできない。

オヤジなら、血の繋がりのある祖父であるオヤジなら、可能ではないか。

気がついて顔を上げれば、相手は渋い顔で腕組みして黙っていた。

ああ、無理だ。彼でも阻止できないのか、これはもうエリの願いを聞くしかないのか。屈辱だ。こんなことでエリを危険にさらすなど、あつてはならないのに。

「解った、ではお願いしよう」

「ありがとう」

笑顔で部屋から出ていくエリを微笑みながら見送り、そのドアが閉まった瞬間に治崎はオヤジに体を向けた。

「正気を疑いますか？」

「仕方ねえだろうが、エリが譲らねえんだ」

「しかし！」

「仕方ねえって言うてんだろうが！ 治崎、頼めるか？」

「は？」

何を言っているのか、こいつは。思わず治崎は右手を握り、振りかぶってしまった。

「てめえ、ボケたかコラ？」

「ボケてねえよ！ その日は会合があるんだ」

「会合？ そんなもんよりエリだろうが！ オヤジ！ あんた日酔ったのかよ!」

「日酔ったわけじゃねえ！」

拳を机に叩きつけて立ち上がったオヤジは、小さく絞り出すように告げる。

「あの、『会合』だ」

「ク、なんでそんな日に」

「頼むぜ、治崎」

穏やかに、けれど確実に肩を落としたオヤジは、ゆっくりと座った後机の上に『ある

もの』を置く。

それで治崎は察した、彼は心の底から悔しがり、魂が叫ぶほどに慟哭しているのだ、と。

「解りました、お任せください」

「ああ、じゃあ俺は会合に行つてくるぜ」

「そちらはお任せします」

深々と頭を上げる治崎に、オヤジは大きく頷いた。

そしてオヤジは『死穢八齋會』の会合へと参加するために、『準備』を始めたのです。

一方、治崎・廻はというと。

春のいい陽気ですね、日差しが暖かいですね、本当にいい日で風もないんですよ。あ、もう本当にいいねえ。

平和だなあ、何にもないいい日であるねえ。

お客さんも今日はあんまりいないし、何時も通りに爆豪君とデク君がカウンターで勉強しているし。

雄英はどうした、二人とも。なんで昼過ぎにいるんだよ。

「今日は半日です」

「あ、そうなの」

顔色を読まれたな。

あ、でも、なんか今日はヒミコちゃんもいるし、普段は出かけるはずの黒霧もいるし。あれ、ギルもソープも、エルも、アインズもいる。コナンだって経営ソフトで何かやっている。

あれえくくなんだろフラグかな？

「我が師よおおおおお!!!」

フラグだったよ（泣）。

「廻はさ、ドアを蹴破らないといけない病気か何か？」

「どちらかといえば、分解したい気持ちになります」

え、何それ、どういうこと。前世にドアに何かされたのかな？

「襖ならば突撃して穴を開けたく」

「聞いてないし。で、何があつたんだよ？」

「忌々しき事態です、我が師よ」

我が師つて、なんでこう切羽詰まると我が師つて呼ぶかな。あれか、俺を煽っているのか、それか俺がそう呼ばれたら願いを聞くとしても。

「どうしたんだ？」

俺は聞かないんだけど、周りはなんでか廻には優しいんだよな。

「実は、エリが」

「エリちゃんか？」

「お願いをしました」

へえ〜そっかそっか、良かったじゃん。今まで控え目で自分の意見を言わなかった子が、お願いをしてくるほどに心を開いてくれたってことか。

いい傾向だね。

「そうか、そうか！なるほど、治崎よ、我が許す、今日を同盟の記念日とせよ」

「ハ！英雄王のご厚意、この治崎、例え死ぬとも忘れません」

「そう畏まることはない。我とおまえは同じ同盟の士、気安く接するがよいぞ」

「恐れ入ります」

あ、うん、なんだろう、ギルがとても上機嫌なんだけど、何かあったかな。いや前から廻には優しかったなあ。

「しかし、そのお願いの内容が」

「何？ 貴様、エリからの願いを断ると？」

「遺憾ながら英雄王、私にはどうしても不可能に感じております」

「ほう、治崎、貴様……」

スツとギルの目が細められる。

「同盟の紳士が、幼子の願いを断るなどあつてはならんことだ」

「まさにその通り！ しかし、今回のお願いは」

「なんだ？」

「はい、実は、『初めてのお使い』に行きたい、と」

え、はい、あれ、えっと待って。なんて言った？

「なんだと!?!」

ギル、驚愕。

「馬鹿なこと言うな!!」

あれ、コナンまで反応してるんだけど。

「そんな無謀なことを?!」

エルまで反応してどうした?

「無茶だ」

ソープ、悩ましげに髪をかきあげるな。

「ありえん!!」

アインズ、頼むからギターから手を離してくれ。

「不可能じゃないか」

弔、なんでおまえは最初っから否定してんだよ。

「そのような願いを口にされるとは」

黒霧、呆れた顔してるけど、何でだよ。

え、あれえ〜俺だけ、俺だけがいいんじゃないって思っているの。

「しかもです! しかも! 隣町まで行こうと言っているのです!!」

瞬間、室内にいた誰もが驚愕に顔を染めていた。

あれえ、普通じゃないの。そりゃエリちゃんくらいだと、かなり遠いって気もするけど、廻の家から隣町ってそんなに離れてないような。

電車で一本だったじゃないの。

「い、一郎君、これは由々しき事態です」

「ヒミコちゃんまで、そつち？ いやいいんじゃないの？」

可愛い子には旅をさせろって言うし。

そんなことを俺が口にした瞬間、全員から鋭い目線が飛んできた。

「呆れたぞ、マスター」

「ああ、呆れたな」

「酷い人ですね」

「君はまったく理解してない」

ギル、コナン、エル、ソープが凄く冷たい眼をしてくるんだけど、そこまでの話じゃないでしょうが。

「鬼だな」

「酷い奴だな、お前」

「冷たい人だとは思いませんでした」

アインズ、弔、黒霧って追撃が来たんですけど。

あれ、俺が悪いの、冷たいの。

「い、一郎さんの素敵さは私が知っていますよ」

「ありがとう、ヒミコちゃん」

「でも今回は冷たいと思います」

うわ、ヒミコちゃんまで言われた。

「あ〜〜解った、廻、じゃ当日のエリちゃんの護衛のお願い？」

「さすが、我が師です。可能でしょうか？」

まあ、出来るんじゃないの。人数もそれなりにいるし、偵察機とか警戒用のユニットもあるからさ。

大丈夫、大丈夫。

そんなことを、俺は思っていました。樂觀的に。

俺は勘違いしていたのかもしれない。

『^{グラ}作戦を説明するぞ^{ランド}^{オー}だ^{ダー}』

本当に勘違いしていたのかもしれない。

『今回の護衛対象は『エリ』だ。隣町の知り合いのところまで、ケーキを買いに行く。到達地点は知り合いのため、話は通してある』

ひどく冷静な声が無線から聞こえてくる。

とても淡々とした声なんだけど、これってコナンなんだよね。

『ルートは三つ、どれも困難が予想される。簡単に行くような作戦じゃないが、全員がそろえば必ずエリが満足できるお使いができるはずだ』

無線、これも使っているのかな。ダメだよな、だってこれ軍用無線だし。いやこの世界の軍用無線じゃないから、別に使ってもいいかなって思うけど。

『先発隊、イムヤとゴーヤはすでに目標地点へのルートを偵察し終えて、現在は目標地点の確保を行っている』

俺の『手のひら鎮守府』の軍用無線だから、使ってもいいんだよな。いいのかな、そうなのかな？

『続いて遊撃にイオナ、コンゴウ、大和、エンタープライズ、土佐、信濃、睦月、如月、夕立だ』

個性だから傍受されない、専用の機器じゃないと電波を受け取れないとか、色々凄いいんだけど、軍用なんだよな。

『前衛打撃艦隊に、フロンティアとエターナル、ジャベリンと電』

それにさ、なんで鎮守府に配属されている情報部隊が動いているんだろう。これってエルとソープが『あつたほうは異世界で助かる』って言って、作った奴だよな。

今まで、一度も動かしたことはないけど。

『後衛打撃艦隊に吹雪、愛宕、榛名だ』

あ、上空を偵察機が飛んでる。あれも光学迷彩がつけられたって言って、妖精さん達が大喜びしていたやつだよな。

『即応戦力として、俺とギル、エル、ソープは本部待機。いざって時はアインズの転移魔法を使ってフォローに入る』

本部って、鎮守府の司令室だよな。あの指示を出したり、地図を睨んで戦術を考える場所の。

え、俺は使っていいって言ってないんだけど。

いやそもそも、子供のお使いのために一軍事基地が全力稼働って、どうなんだよ。不味いなんてもんじやない気がするんだけど、俺だけなのかな？

『ユニコーンは？』

『待機せよ、私の隣にいるがよいぞ』

『お兄ちゃん、ユニコーンは何処にいればいいの？』

『私の隣でよいぞ!!』

必死だねえ、ギル。なんでそこまで必死になってユニコーンを出したくないかな。艦載機の数で言えば、うちの鎮守府最高数なのにさ。

一万機以上で一割以下って、どんだけ格納庫が広くなったのかな。

『弔と黒霧、廻は撮影班だ』

「仰せのままに」

恭しく一礼する廻に、俺はため息をつきたくなった。

オヤジって人の指示で撮影しろって言われたらしいけど、そのビデオカメラってあれだよな。

確かテレビクルーが使うような、高性能なタイプの。

『プレデター部隊とエイリアン部隊もステルスにて全周囲配置済みだ。いいか、俺達に解けない謎はないって教えてやれ!』

『オウ!!』

謎、関係なくね？

コナンって、気合いが入ると解けない謎とか、真実は何時も一つって言っちゃうらしいけど、口癖なのかな。

「さてと、とにかくだ」

俺は小さく咳をして、にっこりと笑ってみた。

「おまえらちよつと落ち着けよ！ 何してんだよ！ エリちゃんのお使いに何でそんなに気合入れているんだよ！」

『黙ってるマスター！ 世の中にはああいった子を狙う変態が多いんだよ！』

「知ってるよ！ 知ってるけどな！ これじゃ国家とガチで戦える戦力だろうが！ 全軍を展開してんなよ!!」

『まだ全軍じゃない。ナザリックとMH、それにゾイドとシルエット・ナイトは動かしてない』

『そうだぞ、何を言っている？』

『本当だよ、エリちゃんのお使いに全力なんて大人げない』

『本当ですよ』

そっか、そっか。アインズ、何を呆れてるのかな。ソープ、大人げないって意味を知っていたのか。エル、溜息ついてんなよ。

「へえくくくなるほどな。おまえら全員、鏡を見てからもう一度いつてみる！」

『いたって普通の自分ですが、何か？』

「この馬鹿野郎どもがあああ!!」

なんで三人とも言葉をそろえたように返答してんだよ！

『マスター』

「なんだよ、コナン。おまえはもう少し冷静だつて思つたよ」

『フ、何か勘違いしてないか?』

何をだよ、おまえまでノリノリになつて悪ふざけすんなよ。

『俺たちがただエリちゃんのために動いているつて思つてないか?』

「へ?」

あれ、まさか、お前ら。この機会にヴィランとか、オール・フォー・ワンとかの情報を洗つたり、周りの敵勢力を探つたりしているのか。

うわあ、勤勉だ。でも、そんなことしなくても平穩にな。

『マスター、俺達はただ全力で稼働させてみたいからやつているだけだ』

「余計に始末に悪いわこの馬鹿どもが!!」

一瞬でも感動した俺が悪かつたよ!

『仕方ないさ。俺達は喜劇の舞台を描える演出家だ。彼女の初めてのお願いのために、その願いを見守る為に動くのは当たり前のことだ。知っているか、マスター? 演出家は、そこに題材があれば裏切ることばできないんだよ』

そうか、そうなのか。なるほど……つて納得するわけないだろうが。

『フ、コナンよ、我らのマスターがその程度で頷くはずがあるまい。良いか、マスター?』

我らはな』

「なんだよ、ギル」

『ただ、幼子の純粋な願いのために動いたにすぎない。あの子が初めて見せた自らの意思を、強く願ったものを無碍にできるほど、我らは冷たくはない。英雄王たる我が請うぞ、マスターよ。此度の一件、どうか了承してくれないか?』

「ぎ、ギル。お前そこまで。そこまでエリちゃんのために動くのか。天下の英雄王が、王の中の王が頭まで下げるって言うのかよ?」

『無論だ。子は宝、その宝のためならば我はいくらでも動くぞ』

ク、あのギルがそこまで言うなら。俺は、俺はあ。

「で、本音は?」

『事態に右往左往するマスターを着に酒を飲む。マジ愉悦』

「てめえええええ!!!」

『フハハハハ! 許すがよいぞ、マスター。我は愉悦のために、そして幼子のために貴様を道化にするのだ!』

やっばりおまえは愉悦王だよ!

こうして、幕を上げたのでした。
エリちゃん初めてのお使い
史上最大の作戦は。

もう、どうにでもして。

『目標、交差点を通過』

『交差点の信号のシステムに入りました。青信号で固定します』

おい、お前ら。

『ルートを外れてるぞ、誰か』

『こちら如月です、変装して接近してルートを戻します』

『頼むぞ』

『睦月、背後からフォローします』

あ、あのな。

『電車が行ってしまふぞ！』

『誰でもいい！爆撃してでも止めろ！』

「お前から待ってって！ 次の電車に乗ればいいだろうが！」

次第に、実力行使も口にした馬鹿どもに、俺は振り回されることになって行った。

『暴走トラックだ！』

『大和！ 波動砲だ！ 波動砲を使い！！』

『はい！』

「待って！ 本当に待って！ 法定速度以上で走っているだけだから！ 大通りだから！」

こ、怖い。法定速度を五キロ超えているだけなのに、波動砲で吹っ飛ばそうとしたよ。

コナン、おまえはもつと冷静じゃなかったか。

『最近、事件を解決してないな。劇場版はもつと過激だったなあ』

「名探偵！ 何があったんだよコナン?!」

ポツリと呟いた言葉は、俺以外には届かなかった。良かったのか、悪かったのか。

『脅威目標発見、危険度が高い』

『ダメだ！ エリに近づけるな！ イオナ！ コンゴウ！ 侵食魚雷一斉射だ！ 撃ち

切れ！』

『了解』

『解った』

「だからあああ!! あれ犬! 大型犬だけど、確かに犬! エリちゃんが怖がっていても鎖に繋がれているから!!」

『超重力砲の方がいいか』

マジでコナン、何があつたんだよ。

『目標確保、続いて帰途に着きます』

『よっし、順次撤収だ。全周囲警戒そのまま、防衛網を狭めるぞ』

あ、終わりね、ようやくだな、疲れた。

『ん?! 待った渋滞だ! ルートを変更するぞ!』

『まずい! あっちは道路工事中だ! ルートを変更させるな!』

『こちら大和! 波動砲準備完了!』

『イオナ、超重力砲発射可能』

『コンゴウだ、こちらも準備を終えている』

『土佐です! 相転移砲準備できました!』

『信濃も大丈夫です!』

『電です、ゴジラさんの最大熱線砲を用意してあります』

『ジャベリンです、ケラウノス使っていますか?』

『エンタープライズだ。光子魚雷、使ってもいいな?』

『榛名イデオンガン準備完了しました!』

え、あれ、え?

『よかろう! 超位魔法を使おう!』

『デスザウラーの荷電粒子砲最大出力です!』

『バスターランチャー準備したよ!』

『行くぞ『エア』よ! 貴様に相応しい舞台が整った!』

「待つて待つて! ただの渋滞! 車が行けばすぐに大丈夫だから! だから! なん
でおまえらは最大の威力をぶつけようとしているんだよ!!」

本当に何をしてんだよおまえらはあ!

「提督権限においてすべての艀装をロック! 続いて令呪を持って全員に命じる! 落
ち着け!」

よ、よっし、これで大丈夫だよな。

『チ!』

「舌打ちした奴は俺の前まで来い! 修正してやる!!」

クツソ、お前らなあ。ああ、疲れた。こうして彼女のお使いは、無事に終わりを告げ
たのです。

後日、編集した画像を見た爆豪君とデク君は言った。

「最終戦争がしたかったんですか？」

俺のせいじゃないやい。

画像の中を、戸惑いながらも必死に歩くエリの姿が映る。画像も問題ない、場面ごとにBGMも入り、字幕まで入れられたそれらは、ちよつと見はドキュメンタリーというよりは、長編映画に見えた。

「よくやったな、治崎」

「ありがとうございます、オヤジ」

「いい出来じゃねえか、次の会合には使えそうだな」

「ではそちらも？」

「ああ、終わったぜ」

椅子に深く腰掛けて、オヤジは片手を上げた。

「では計画は次の段階に？」

「当たり前だ。そろそろ、動くぞ」

片手を上げ指を鳴らすと、壁の一部が動き額縁に入れられた『それ』が出てきた。

「死穢八齋會が表に出る時だ」

「解りました」

額縁に入ったそれには、大きな文字でこう書かれていた。

『エリちゃんを人格化するぜ超世紀最大のアイドル計画』と。

「さあ、行くぜ治崎」

「はい、オヤジ」

そして、エリちゃんファンクラブ彼ら死穢八齋會は動きだしたのでした。

彼らが出て行った部屋の中、エリは路地裏にいた子猫に手をかざし、そして『傷を巻き戻した』。

「なるほど、再生でも治癒でもないか」

男はそれを見ていた。かなりの遠距離、画像は荒いものだが、確かに彼女の個性の発現した場面を捕えている。

「先生、確かに『巻き戻し』のようです」

「フフフ、ついに見つけたようだね。個性さえ巻き戻し、元に戻す能力を」

子猫を直して笑顔のエリを前にして、オール・フォー・ワンは満足そうに頷いていた。

矜持と信念にかけて・1

ひな祭りも終わり、世間は入学式を終えて新しい生活が始まった頃。

「エリ、あまり慌てるな」

「うんー」

前を走る幼子は、元気に笑顔で何処までも進んでいく。昔の影のある表情は消えて、年相応な笑顔で走っていくエリに、廻は頬笑みを向けていた。

やっとここまで来た、前までの少し影のある表情も良かったが、年相応のコロコロと変わる表情も中々に味がある。

「次の『会合』はいいものになるな」

フツと息を吐くように笑う廻は、少しだけ眼を細める。日差しの中をかけていくエリが、不意に立ち止まった。

誰だろうと視線を向けた先にいた人物に、全身が総毛立った。

「エリ!!」

叫びながら全力で走る。

すでに相手はエリの真正面、ここまで接近されて気がつかないとは。なんたる失態か、前までの切り詰めていた、いや張り詰めていた生活ならば絶対になかった失敗が、ここにきて出てしまった。

後悔を置き去りにしながら廻は走り抜け、エリと相手の間に体を何とか滑り込ませる。

「エリちゃん、サインください！」

「事務所を通してください」

「おお！ 守護者の兄貴!!」

なんだか、異名が増えたな、と嘆息をつく。

エリの神格化計画の第一波、ネット画像に乗せて彼女のプロモーションを流してみたのだが、これが凄まじい勢いで再生回数を稼ぎ、今や飛ぶ鳥を落とす勢いでネットアイドルのトップに迫った。

ちなみに、ネットアイドルのトップは猫耳つけてミニスカ和服のヒミコだったりする。

武道館ライブが行えるまでになった彼女に追いつくために、死穢八齋會はあらゆる人脈を使って、使える伝手はすべて頭を下げて、エリのために奮戦している。

その中でも、エリの背後に常に従い、彼女のあらゆる衣装を作り出す治崎・廻はエリちゃんのファンからは『守護者の兄貴』と呼ばれている。

あるいは。

「きやああああ！ ドレッサー様よ!!」

「お願いです私に合う服を!!」

「次の受験のための制服を作ってください!」

曰く、彼の作った服を着れば合格間違いなし。

曰く、彼の衣裳に不可能はない、誰でも天使になれる。

曰く、これぞ世界すべての財宝なり、と。

「事務所を通してください」

「ドレッサー様!!」

「エリちゃん!!」

事務所を通せと言っても一步も引かない彼ら・彼女らだったが、それでもエリと廻に触ろうとしない。

理想は触れるのではなく拝むものである、と皆が知っているから。

「この世界は、ようやく革命を望むようになったか」

多くの人の波を見下ろしながら、治崎・廻は満足そうに頷いた。

その彼と隣にいる少女の姿を、遠くから眺めている者の存在も知らずに。

相澤・消太は頭痛を抑えていた。

もう、こいつらはと内心で盛大に溜息をつくたくなるほど、この二人の存在は周りを鼓舞し、盛り上げ、燃え上がらせて、それでもなお隔絶した存在感を叩きつける。

最初だからと甘く見た個性テストは、個性をほとんど使っていない二人の圧勝。三位以下を大きく話す数字に、『本当に人間か』と疑ってしまった。

次の頭痛の種は、屋内対人戦闘訓練。雄英に入学した学生は、個性を使うことになれていても、戦闘や対人となると尻込みしてしまう。今まで個性を人に使うなど教えられ、周りからも注意と監視のようなものを受けている状況で、いきなり『ヴィラン』だ

からと個性を使って攻撃などできない。

はずだったのに、だ。

他の学生は躊躇した。使っていないと言われても、相手がヴィラン役だと説明されても、同じ仲間に、学生相手に使っていないのかと僅かな躊躇いが見て取れた。

なのに、だ。

爆豪・勝己と緑谷・出久は、最初から全力だった。いや『シンガー・ボマー』と『グリーン・シップ』のコスチュームを使っていないから、全力ではないのだろうが。

いくら、目標の確保が目的とはいえ、『ビルごと吹き飛ばす』なんて考えは出てこないだろう。ヴィラン相手に容赦なし、敵は速やかに殲滅、救助者は最優先に確保、時間との勝負、止まるな駆け抜けろ、そんなヒーローはいることはいるが。

誰だって、『これをやればこうなってます』と考えるはずなのに。

あの二人は、まったく躊躇しなかったし戸惑いもなかった。

後にあの二人に『どうしてやった』とレポート提出をさせたのだが、これがまさか論文のようなものが出てくるとは思わなかった。

先生方総出、校長も含めて検証と読破に三日もかかるとは。

学生じゃなく研究者でも通用するのではないか、と相澤は二人がヒーロー以外の道を目指しても通用することを実感した。

「相澤先生、大丈夫でしょうか？」

隣にいるオールマイトも不安そうだ。彼のほうが二人の容赦なさを知っているから、これから起きることが不安なのだろう。

「大丈夫です、今から行うのは救助訓練ですから」

「そ、そうですよね。まさか、救助訓練で二人がまた無茶するなんてことは」

ない、と言いかけたオールマイトは不意にお腹を抑えて笑顔のまま固まった。瞬間、嫌な予感がして問いかける。

「何か？」

「い、いえ別に。まさかあつと思ひまして。二人は戦闘訓練以外の訓練もしていたな、と」

「戦闘に救助もできると思っていました、まさか学生の訓練で無茶しないでしよう。前回のように、対人戦闘ではないのですから」

「でしようね」

ハハハと笑うオールマイトの姿に、何故か嫌な予感が滲み出していた。

まさか、そんなことはない。これからやる授業は、あくまで訓練前の説明であつて、実際に訓練をすることはない。

ないはずだが、まさか。

そう思ってしまうと、言わずにいられない。

「爆豪、緑谷」

「はい」

「ウツス」

即座に答える二人の視界から、何かが消えた。

「何をしていた？」

「これから救助訓練なので、前にやっていた訓練内容を復習していた」

当たり前のように爆豪が告げる。嫌な予感が盛大に鳴った。

「敵中突破後による味方部隊救出、強襲による要救助者確保、重火器による戦闘の最中の

大規模落盤事故、震度1.0以上の地震の都市部直撃、それと」

「もういい」

次々に訓練内容を上げる緑谷を制して、相澤先生は顔を覆った。

「おまえら二人とも、見学している」

「な?!」

「なんでですか?!」

「いいから見学だ。おまえらが参加したら、他の連中の訓練にならないだろうが」

「俺達だって生徒だろうが！」

「外す理由を教えてください先生！」

「………おまえら二人とも、周りを見てからまた言ってくれ」

なんだと爆豪と緑谷が周りを見回すと、誰もが『え、何を言っているの、お前ら』つて顔をしていたりする。

「つまり、そう言うことだ」

「くっそが」

「解りました」

渋々といった様子で座る二人を見た後、相澤先生は再び座り直す。

「………いっそのこと、あいつらに教師をやらせるか」

「なるほどナイスなアイデアですな！ 人は教えられ、誰かに教えて一人前になると」

「盲点でしたね」

その後、災害訓練の場には呆れた顔の相澤先生と、腕を組んで高笑いしながら冷や汗をかくオールマイト。

そして、真面目な顔で『やって慣れろ』と告げる爆豪と緑谷、死にそうな顔の1年A組の生徒がいたという。

「人間、死ぬ気になりや空も飛べる。個性なんて必要ねえ」

「努力と根性ではどうにもできないけど、精神が最後に物を言うのは当たり前前の考えだ」

から、追い込まれれば追い込まれるほど、実際の現場に出た時に冷静になれる」

「考えるな、感じろ。いいからやれ」

「理論を説明できるけど、それを理解して実践できるだけの余裕があるかな。ないなら動いて、いいから動け」

「止まるな、逃げんな、慌てんな、冷静にやれ。心は熱く、頭は冷たくだ」

「危機の時こそ、冷静に。客観的に物事を見ないと」

次々に言葉を重ねる二人に、クラスメートたちは思う。

『あの二人ってどんな修羅場をくぐって来たのか』と。

誰もが知らない、触れたら死ぬ恐怖を味わったことを。

カランカランと音が鳴った。

どうにかファン達に帰ってもらった後、治崎・廻とエリは自宅に戻ってきた。

「なんだ？」

雰囲気が違う、見た目は変わってないのに、何か『まずい』。

「エリ、離れるな」

「うん」

自分の背後に彼女を隠しながら、廻が一步と家の中に入った。

そして景色が一変した。

「な?!」

崩れ落ちた家屋、倒れている仲間たち。死穢八齋會の看板も半ばで崩れ落ち、風流な門構えも半分が消えていた。

「治崎、逃げろ！」

轟音と共に組長がはじき出されてきた。手に持った長い刀を振りまわし、何かの影と斬り結ぶ。

「エリを連れて逃げろ！ 奴らの狙いはエリだ！」

咄嗟に、廻は振り返る。

声に押されるように振り返った先、エリの背後に手が見えた。黒霧のようなワープではない、先ほどから違和感があった、景色を変質させ、実態を変化させて『無いように見せる』幻惑系。

「何者だー！」

一蹴、右足で蹴とばした手答えはなく、空気を蹴つたような軽さのみ。けれど確実に何かあつたような感触に舌打ちしながらも、右足を地面にたたきつけ体を前に出しエリを捕まえた。

「オヤジ!!」

「いいから行けー！」

見れば傷だらけになりながらも、彼は敵相手に一步も引いてない。周りにいる組員達も傷つき倒れながらも、なおも立ち上がろうとしていた。

誰もが視線がこつちを見ている。正確にはエリを、だ。

任侠、ヤクザもの、半端者、社会のはみ出し者。色々な言われ方をしている、警察からは睨まれ、世間からは疎まれても、それでも生き方を変えられなかった愚か者たちが、ようやく集まってできた我が家。

侠に生き、仁義に死ぬ。そんな時代錯誤の連中が、自分の生き方や信念を曲げるのを良しとしなかった大馬鹿者たちが、初めて『護りたい』と心の底から願った存在。

我らの『旗』のために。

「言つてください兄貴！」

「()は持ちこたえます！」

「しかしな!!」

誰もが傷だらけ、今にも死にそうな奴もいる。こんな状況の『家族』を放って逃げて、それで自分は耐えられるのか。

否だ。絶対に無理だ、エリのために逃げることは出来ても、後になって死ぬほど後悔するに決まっている。

なら立ち向かうしかない。今、襲撃している連中を残らず叩き伏せ、全員で生き残る。

「エリ、すまない」

「大丈夫」

気丈に笑う彼女に、廻は微笑む。震えているのは解る、怖いって顔に出ている。でも泣くことなく笑う彼女に、『いい子に育った』と感慨深く思う。

「死穢エリちゃんファンクラブ代表補佐八斎會若頭、治崎・廻、推して参る」

左手にエリを抱え、右手を振り上げ、男は走った。

どうも、田中・一郎です。

「今日は爆豪君達は来ないって？」

「補修があるらしい」

「弔が携帯を見つめながら言っているけど、あの二人が補習ね。あれ、補修って言った？」

「クラスメートを強化したいって話だ」

「へえ〜」

え、待って、何それ、えっとクラスメートの強化。あの二人は何をしているのかな。

ま、まあ、いいか。オールマイトと相澤先生に、後で殺されるような気がするけど、今はまだ大丈夫。

「降ってきたな」

「ありやく〜今日は店も閑古鳥かな？」

「そうだな」

うわ、本降りになってきたな。

あれ、あそこにいるのって？

俺は慌てて店の扉を開いて外に出た！

「廻!! おまえどうした?！」

傷だらけじゃないか?! 何があつたんだよ!!

「我が師よ。私は……わた……し……は」

「しゃべるな! 弔! アインズを!」

「私は、護りましたよ」

最後にはつきりと彼はそう告げて、俺の腕の中に倒れた。

「廻? 廻いいいい!!」

彼は答えずに腕の中で大事そうに『無傷のエリちゃん』を抱きしめていた。

もうどれだけだろう、もう何度目だろう。何度も自分の体を作り直し、何度も立ち上がり何度も倒した。

限界などもうとつくに通り過ぎた。体中の感覚もほとんどない、けれど腕の中の温もりだけは見失わない。

でも、だ。

足を止めてしまった。もう一步と動かしかけた足が力が入らずに崩れ落ち、バランスを失って倒れる。

寸前で、エリを離す。巻き込まずに済んだエリに微笑みながら、右腕を地面に突きつけた。

「ようやくだね。強化型脳無が三十、君一人に倒された。凄いなえ」

「何者だ？」

相手を睨みつける。見たことない男だ、誰だこいつはと思考を回そうにも考えた傍から零れ落ちる。

「オール・フォー・ワン。今回は、君を貰いにきたよ、エリ」

「貴様!!」

グツと力を入れようとしても、体は動かない。もう限界だと冷めた顔で告げる自分の幻影を、廻はオール・フォー・ワンの背後に見た気がした。

「凄いな、まだ動けるなんてね。でももういいじゃないか、僕はエリちゃんを貰いたいだけ。彼女を手に入れたら、皆は死なないで済むんだよ」

誰かと否定しかけた言葉は、口の中にさえ残らずに消えた。

死穢八齋會は誰もが限界だ、死ぬ寸前の者もいる。手足を失ったり、顔が崩れている者までいる。

オヤジは、門のところにいる。腹部に刀を差されて、崩れ落ちるように倒れている。

「がんばったよ、十分だよ、もういいじゃないか」

語る声が次第に自分の声に重なる。

やれるだけやった、もう限界を何度も超えた、十分じゃないか。ここまでやったならいいじゃないか。自分は頑張ったから。

諦めた顔で語る男に対して、廻は奥歯をかみしめて体中に力を入れる。

ここまでやった、違うここまでしか出来ていない。もう十分じゃないか、間違っている、不十分過ぎる。

「君も動くか、まったくヒーローとは無様なものだね。さあ、エリ、どうしようか。君が来ないと、皆が死ぬ」

「わ、私は」

戸惑い涙を浮かべる少女に、廻は顔を向けようとして蹴とばされた。受け身をとることもできず、無様に転がったまま何かにつかまって止まった。

衝撃に息が止まる、全身の傷が開いたように血が流れ出す。

「どうしようか?」

「……行きます」

死ぬよりも辛い衝撃が、廻を襲った。何を言った、何を言わせた、何を諦めさせた、何を消してしまった。

痛む体に、無理だと叫ぶ自分を怒鳴り付け、顔を動かす。

「もういいよ、私は大丈夫だから」

小さくエリが手を振っている。笑顔を浮かべて、大丈夫と。

そうか、大丈夫か、もういいのか。彼女がそう告げているならば、自分達は彼女の意志に従おう。それが自分達のあり方であり、生き方なのだから。

だからこれでいいのだ。

否だ!!!

「寝てんのかよ、治崎い」

「冗談でしょう、オヤジ」

立ち上がる、誰もが限界など超えた、命の危機に落ちた、死ぬような激痛を味わった。だから、なんだ、たったそれだけだ。

一歩一歩と足を進める、痛みで意識が途切れそうだ。全身が悲鳴を上げているのが解る。

だが、その程度だ。足を止める理由ではない。

「どうして、私が行けば皆が！」

「馬鹿を言うな、エリ。俺達は決めた、俺達は誓った」

足を止めない、誰もが止まらない、脳無が向かって来ても誰もが後退はしない。殴られ、飛ばされ、踏みつぶされ、手足を折られようとも。

「君が笑顔でいられる場所を、君が楽しいと思える日々を、その平凡で何気ない穏やかな毎日を護ると」

体が傷を負い、何度も引き裂かれるような激痛を味わおうとも。

「我ら『死穢八斎會』は『我らの魂』に誓ったのだから」

心が叫び続けるかぎり、止まることなどない。

「だから、その手を離すことは二度とない！」

そして全員が走りだした。誰もが止まらず真っ直ぐにエリの元へ。

自らの魂の『旗』へ。

二度とその手を離すことなどないと、三度の誓いを魂に刻みながら。

傷だらけの廻と、泣きつかれて眠ったエリちゃん。

「マスター、行ってきたぜ」

「うん、コナン、どうだった？」

「死穢八齋會は壊滅していた。誰もが虫の息だったよ」
「そっか」

なるほど、そっか、そうなるか。

へえ〜〜。

グシャつと俺の手の中で缶ジュースが潰れた。

「面白いよ、オール・フォー・ワン、本当におまえは」

全面戦争がお望みか、ならやってやる。

ただのラスボスと『戦争屋』の違い、教えてやるよ。

矜持と信念にかけて・2

人は、本当の恐怖を前にした時、体が竦んで動けなくなる。

本能でこれ以上は自分の存在が消えると知ったとき、生物として自己保存に走るのは当たり前のことだ。

悪くない、君は間違っていない。正しいことだと言われると、それでいいと思ってしまふ。

けれど、『ヒーローはその中に含まれない』。
なぜなら、彼らは。

飯田・天哉にとつて、爆豪・勝己と緑谷・出久は礼儀正しい同級生だった。

最初は爆豪の言葉遣いに苦言したこともあつたが、見ていれば礼儀を弁え困っている人を放つておけない性格だと知つた。

緑谷の方は、真面目で何時も思考している、見習うべきことの多い人物だ。

しかし、だ。

今となつては彼にとつて二人は、『微笑ましい凄い能力を持った、場違いなことで笑いをとる人たち』になつていた。

能力値は高いのだろう、知識や技術は素晴らしい、質問すればどんなことでも答えてくれる、あるいは解釈とか事例まで出してくれるほどに、様々なことに造詣が深い。

「爆豪君、いくらなんでもそれは」

深いのだが、発想は柔軟性に富んでいて、飛んでいる。

「おまえの個性は『エンジン』だろうが。ならやれんだろ」

「いいや、その発想はおかしい。確か俺の個性は『エンジン』だが、俺自身を加速させるので精一杯だ」

「誰が決めた？」

間髪入れずに質問され、『自分が』という言葉を飲み込んだ。彼の、爆豪のあまりに鋭い目線と、その中に宿る『何か』に。

「誰が決めた、誰がそうだと言った、誰が絶対だと言った。違うだろ、てめえでそうだって決めつけて、上を見てないだけだろうが」

「しかし」

「しかしも案山子もねえんだよ、いいからやれよ。四の五と言っている間に、言い訳を口にかけている間に、護れるもんが零れ落ちるんだ。いずれ出来る、そんなふざげなこと考えんな」

真つ直ぐに見詰めてくる爆豪に、反論が口の中で碎け散る。まるで爆破されたように粉々になった。

そうか、彼の個性は『爆破』だったな、と不意に思い出す。

「今やれ、いいからやれ。できるできないじゃない、やるんだよ」

「……君はどうしてそこまで俺に拘る?」

思わず口にしてしまった言葉に、爆豪は首を傾げた。

「こだわったわけじゃねえ、勿体無いと思っただけだ。おまえの個性、そいつは使い方次第じゃ、誰よりも速く誰よりも最短で、『助けて』と嘆く奴らに届く。だから、やれって思っただけだ」

真つ直ぐに曲げることなく、裏側なんてない言葉は不思議なほど心の中に落ちた。それはまさに、彼からの最大の『エール』のように、飯田・天哉の中に落ちて『何か』を押し上げる。

「解った、やってみよう」

「おう」

そう告げて背中を見せる彼に、小さく一礼する。粗野に見えて、乱暴な言葉遣いをしている、彼は自分にはない何かを持っている。

『それ』が何かをまだ自分は解らないが、必ずそこに追いつくと決めた。

絶対に。

「爆豪！ 俺の電気なんだけどさあ」

「うっせえな！ おまえのは帯電率が悪いんだよ！ 伝導率上げろ！ なんで体内で作った電気が阻害されてんだよ！」

「ええ〜〜だつてさあ」

「だつてもくそもねえ!! 電気なんて撃つてよし溜めてよし走らせてよしの万能能力だろうが！ 百万ボルトなんて甘いこと言ってるな！ 一億まで上げろ！」

「え？」

「ゼウスの雷は物体を原子レベルまで崩壊させるんだよ、そこを目指せ」

調子に乗ったような上鳴・電気が固まった。

いやいくらなんでも、同じ電気というか雷で目標に出すのが、大神なんて。上鳴も出てくるとは思わなかったのか、苦笑いしつつ首を振った。

「やれ」

爆豪はゆっくりと首をかつ切る仕草を向けたのでした。

人を煽てる、あるいはやる気にさせることが多い爆豪だが、どん底に落とすこともやるのだとこの時、飯田・天哉は知ったのでした。

轟・焦凍は彼を見つめる。

入学式の時、まるで空を舞うように突き進んだ彼、どんな障害も一撃で叩き潰し、ヴィラン役のロボットさえ助けて見せた彼。

似ている、と思う。面影はない、『あのヒーロー』とは姿が似ているわけではないが、動き方や行動が何処となく似ている。

絶対に退かない鋼の城、鉄壁の防御を誇る無登録ヒーロー。嫌いな父親に質問するほどに、あの背中では憧れだった。

『グリーン・シップ』。正体不明、所属不明、助けを求める声があれば世界中のどこにでも出現するヒーローの姿を、何度も何度も繰り返して見ていた。

自分の能力とは似ても似つかないのに、あんな風に人を助けたいと思ってしまった。誰かのために何かしたいと、心の中からではない『やってみなよ』と背中を押されたような気がした。

追いかけて、追い求めても、届かない。それがいま、目の前にいるような錯覚に、轟・焦凍は自嘲してしまう。

「切島君の個性って硬化だよな？」

「ああ、そうだけ。でもな、あんまり硬くならないんだよ」

「そうかな？」

緑谷・出久、『グリーン・シップ』に似た動きをする新人。無個性らしいが、どう考えても個性があるように見える。

「ああ、もっと硬く。なあ、緑谷はさ、『グリーン・シップ』って知ってるか？」

「え?!」

「あのヒーローが活躍しているところ、見たことあるんだよ。テレビ越しだったけど、ヴィランの攻撃を受けてもさ、一步も退かなかったんだよな」

切島が言っているのはニュースの映像だろう。自分も見ることがある、一般人を護るために砲弾のような攻撃を受けながら、一步も下がらなかつた。攻撃すべてを受けても、『大丈夫、僕がいる』と言っていた。

後で助けられた人達が、笑顔でそう励ましてくれたと言つてた。顔は思い出せなくても、彼が笑顔で砲弾の嵐の中で励ましてくれた、と。

「俺も、ああいうヒーローになりたい。どんな攻撃も弾き返して、護っている人を不安にさせないヒーローに」

「そ、そうなんだ」

明らかに戸惑っている緑谷に、思わず言葉を口にしてしまう。

「俺も」

不意に、二人がこちらを見た。片方は嬉しそうに、もう片方は戸惑ったままで。

「俺もあいつみたいになりたい。あいつみたいな大勢を護れるヒーローに」

ギョツと拳を握る。

母親のことで父親を嫌悪していた。あいつみたいにならないと決めていたのに、『グ

リーン・シップ』を見てから『このままでいいのか』と疑問が膨れてくる。

父親と母親の個性を継いだ自分が、母親のトラウマになってしまった自分が、遠い昔に母に言われたことが、次々に蘇っては疑問を残していく。

自分はこのままで、ヒーローになれるのか、と。

「そっか、二人とも珍しい人を目標に選んだんだね」

ちよつと照れたような緑谷に、思わず反論していた。

「すげえかつこいいヒーローだろうが！」

「俺もそう思う」

切島に先を越され、言葉を思わず飲み込んでしまう。次に出てきたのは無難な言葉だったが、込められた思いは負けていない。

「そっか、そうなんだ」

「デク!! ちよつと来い! この馬鹿に説明してやれ!」

遠くからの声に、緑谷は小さく頭を下げていつてしまう。

「やっぱ、似てるな」

「緑谷だろ? 轟もそう思うか?」

「ああ」

切島と二人で、彼の背中を見つめながら、もしかして思ってしまう。

彼が『そうではないか』と。

緑谷が呼ばれて来てみれば、爆豪が激昂していた。振りとか呆れじゃない、マジギレだ。

どうしたのと顔を向ければ、爆豪の前には『峰田・実』。個性はもぎもぎで、頭のボール状の物体をちぎって、投げたりくっ付けたりできる。

「俺の個性はそんな万能じゃないんだよ!!」

「ふっぎけんな！ てめえの個性はやり方さえしつかりやれば誰よりも強えんだよ！」

「はあ?! そんなわけあるか！」

「解ってねえんだよ！ デク！」

「あ、うん、何となく解った」

なるほど、と頷く。確かに怒るはずだ、彼は自分の能力の高さに気づいていない。あのボール状の物体の粘着力は、素晴らしいの一言に限る。

手に持つてよし、投げてよし、コントロール通りに投げられたなら、後は詰将棋のように相手を完封させられるのに。

「峰田君、じゃあ説明するよ」

「なんだよ、緑谷まで。俺の個性はな」

「うん、強い個性だよ。だって、あの粘着力は、ヴィラン拘束に『最重要な役割』を果たすからね」

「へっ？」

デクは語る。

例えば、攻撃時。相手の攻撃が物理であるならば、もぎもぎを相手の攻撃の着弾点につけて衝撃を逃がす、あるいは攻撃そのものを停止させてしまえる。

「いや、待てよ、緑谷」

例えば防衛時。周囲に張り巡らせたりできれば、その粘着のためにほとんどの攻撃を反らすことができる。相手の足元にも着けたら、あるいは動きの先を読んで地面や壁に吸着して固定してしまえば、相手は何もできずに無力化される。

「おい、おい」

索敵も警戒も自由自在だ。ルート上に配置し、後は待つだけ。相手がくつついて物音をたてたら、そこに敵がいると一発で解る。

「そ、そんな煽てに」

炎も氷も雷も、砲弾も、発生地点さえ抑えてしまえば、狙いを定める個性の発現者に対して、もぎもぎで相手の行動を阻害出来る。

「つまり、峰田君の個性はね、攻撃に使って良し、防御に使って良し、索敵もできるし移動補佐もできる。まさに万能個性なんだよ」

「ほへえ〜〜〜」

「そりゃかつちゃんがるのも無理ないよ。峰田君の能力の万能性は、A組の中でも群を抜いているんだからさ」

後に多くの生徒達は語る、この時の爆豪と緑谷の説明と煽てが、峰田という強者を生み出した。

つまり、『もぎもぎ最強説』の誕生だった。

「そんなに褒めても何も出ないからなあ〜〜」

照れて笑顔でクネクネと動く峰田に、緑谷は微妙な顔で笑っていたのでした。

後に多くの人は語る、『峰田は真面目ならば最強、調子に乗ったら最低』と。

溜息を二人で着く。

まったくあの無自覚な少年は、爆豪や緑谷だけじゃなく雄英のA組さえ改革してしま
うらしい。

もしかしたら、この時を見据えて二人を最大限に鍛えたのか。

「まさか、な」

相澤はそう呟き、授業の終わりを告げようと足を踏み出した。

そして、見えてしまう。

「おまえら!!」

怒声に近い声に誰もがこちらを見た。生徒全員がこつちを見てしまった、それはある
意味で正しく、ある意味で間違っていた。

今は違う、そうじゃない。焦る相澤の視界の中で、こつちを見ていない生徒が二人だ
け。

爆豪と緑谷は、全身に力を巡らせて『天井を突き破って落ちてきた』何かを迎撃した。

忘れもしない、絶対に忘れない、あれからヒーローとして活動している中で、爆豪と緑谷は忘れたことなど一日もない。

「ぶっ殺すー！」

爆豪が飛び込む。あの時は周りに人がいた、周辺の被害が気になって全力では出来なかった。だが、今はできる。ここは雄英の訓練場だから、被害が出たとしても学校内の施設のみだ。

「かつちゃん！」

爆豪が飛び出したから、緑谷は止まった。怒りはふつつつと燃えているが、同時に脳は冷たく冴えわたる。

相手の出方がおかしい、あれだけの能力を持っているヴィランが一点突破して入ってきて、そのまま向かってくるだろうか。

「デク！ 後ろ任せた！」

言われて止めていた足を蹴とばす。艦装の出力を『一パーセント』から『五パーセント』へ引き上げ。速度が劇的に上がる、周りの景色が流れるように過ぎ去っていく中、クラスメートたちが立ちつくす中を通り抜け、手を伸ばす。

「先生！」

叫びに、相澤先生とオールマイトが気づいた。

ふつと振り返る二人の背後、壁を『すり抜ける』ように『脳無』が姿を見せる。前に見た時より大きい、全体的な存在感も増している。

あれは強い。

「こつちに来るな！」

「でも！」

「大丈夫だ！」

心配はしてない。二人なら大丈夫だと思いたいが、相手の数が多い。いったい、敵は何体の脳無を送り出したのか。

索敵を、と視界を横に振ると妖精が『了解』と指を立てる。

瞬間、ポーチの一つから光が飛び出し上空を旋回する。

索敵機の発艦確認、続いて周辺状況の把握開始、敵の現在位置、出現位置、増援の可能性を搜索。

今のところ、施設内の脳無は『八体』。施設の外から侵入を企てているのは、『十八体』。
「そんな?！」

「デク! 情報よこせ！」

遠くからの声に顔を向けた緑谷の視界に、爆豪の周りを埋め尽くそうとする脳無が映る。

「かつちゃん！」

咄嗟に呼ぶと同時に、爆豪が跳ねる。攻撃じゃない、周囲を囲まれるのを回避するために弾け飛んだ。

「チー! やっぱ、強えー！」

爆豪の攻撃が相手に通じていない。爆破を確実に当てているのに、ひるんだ様子もない。ければ傷ついた様子もない。

「デク！」

「うん!!！」

爆豪が左手を上げる。同時に、緑谷も胸元のペンダントを握る。出し惜しみしてる場合ではない。相手は脳無で、強敵だ。今の状況でクラスメートたちは逃げきれていない。周囲から続々とくる脳無を無効化しないと、けが人が出る。

だから、使う。

「変……」

「止めろ二人とも!!」

瞬間、相澤から鋭く声が飛ぶ。

えつと振り返る先、相澤が五体の脳無を操縛布で拘束していた。その間にオールマイトが二人の間をかけぬけ、前方から来た脳無を叩き伏せる。

「大丈夫だ、緑谷少年、爆豪少年、私が来た!」

「で、でもオールマイト」

脳無の数は増えている。今も壁を破り、天井を破り来ている。

「大丈夫さ、私達はヒーローだからね」

「ここは任せろ。おまえたちは『まだ学生』なんだ」

相澤の言葉に、グツと唇をかみしめる。

ヒーロー協会内部でも、『シンガー・ボマー』と『グリーン・シップ』の扱いに揉めているのは知っている。

ファンレターを貰ったのも、『あまりに多いから』であって許したわけじゃない。それにはクラスメートの目もある。今まで非公式でヒーローやっていたことを知ったら、彼らは今まで通りに接してくれるだろうか。

だから、使うな。無言に込められた相澤先生とオールマイトの願いに、二人は体が縛

られたように動けなくなるのを感じた。

これは、願いで出来ているから。絶望を知った人たちが、それでも前に進みたいと願って、そうであつて欲しいと祈りを込めて作られたものだから、先生たちの願いで動けなくなる。

「大丈夫だ」

「任せなさい！」

二人は笑顔で語る。けれど、劣勢は劣性だ。脳無の数は多くなっている、二人はなんでもない顔をしているが、状況は時間と共に不利になっていく。

オールマイトが脳無の一体に飛ばされた。

グツと緑谷は拳を握る、血が滴り落ちるほどに強く。

相澤先生の操縛布がちぎられ、先生が地面に叩きつけられた。

ギユツと爆豪は唇を噛みしめた。血の味が苦々しい想いを伝えてくる。

「止める」

「ダメだ」

二人はそれでも止めてくる。爆豪と緑谷のこれからのことを、ヒーローとしての活動のために命を削って敵を倒している。

チラリとクラスメートを見た。誰もが蒼白な顔で見っていた。いきなりの実戦で動け

るほど、誰もが強い心を持っているわけじゃない。

味方の応援はまだ来ない。来たとしても、状況は不利なままではないか。

「デク、悪い」

「それは僕のほうだよ、かつちゃん」

先生二人の願いよりも、クラスメートたちの瞳のほうか二人の背中を押す。

「先生、先に謝っておくぜ」

爆豪が左手を上げる。

「すみません、相澤先生、オールマイト」

緑谷が胸のペンダントを握り締める。

「止めろ!!」

「君たちが動かなくても!」

「俺達はヒーローなんだよ。助けてって声に答えずに、ヒーローになれるかよ」

「困っている人を助けるのはヒーローですよね」

二人は決意を込めて顔を上げ、同時に叫ぶ。

「ここで逃げたら、理想のヒーロー絶望を砕くになんてなれない!」

だから。

「変身!!」

絶望の淵に立つ者よ、嘆きを叫ぶ人々よ、その悲しみに膝を折るな。

鋼鉄の城が浮かぶ。三連装の主砲と、巨大な飛行甲板に雄々しきドリルを掲げた船が、絶望の海を割って立ち上がった。

斜陽のような光がさす、靡くマントに広がるは爆破の光。あらゆる絶望を爆散させる眩き光が天より降りた。

「人々の自由の海に、絶望の檻も悲劇の港もありはしない。嘆きも悲しみもこの装甲がすべて防ぐ！ この主砲がすべてを砕く！」

装甲が広がる、重厚な船の船体を分け、三連装の主砲を『二十五基』従えたヒーローが立ち上がった。

『グリーン・シップ』、この航路は絶対に邪魔させないぞ！」

朝焼けよりも眩しいマントが広がる。左手に持つのは何処にでも有るギター、それは次第に炎のような色合いを持ち、やがて弾けたような色彩を放つ。

誰もが『爆破』とイメージできるギターを掲げる。

「歌は何処までも自由、ロックな魂に絶望なんてねえ」

右手に掲げるはオレンジ色の槍、二つになり、三つになり、やがて一つへと戻る不可思議な『爆』の宝具。

「悲劇も嘆きも俺の歌でかき消してやる！ 涙なんて俺の爆破で吹き飛ばす！ 『シンガー・ボマー』だ!! おまえら全員！ 俺を信じる!!」

その日、雄英の訓練場に世間をにぎわせるヒーローが降り立つ。

正義じゃない、悪でもない。

ただ人々の自由のために。助けての声に答えるために

矜持と信念にかけて・3

声が響き渡る。

巨大なヴィランが蹂躪する訓練場の中に、彼らの怖さに負けないほどの大ききさで歌声が蹂躪していく。

一つの声に一生分の情熱を叩きつけるように。

たった一音に全身全霊の気合を込めるように。

彼の歌は、叫び続ける。

爆豪・勝己、いや『シンガー・ボマー』のギタリストとしての腕は、まだまだ未熟だ。小さい頃に音楽スクールに通っていたこともあったが、本格的に始めたのはつい最近。

アインズと比べたら、その技術差は明確。同年代のギタリストと比べても、拙い部分が目立つ。

よく言えば荒々しい、悪く言えば粗が目立つ。

けれど、だ。

耳郎・響香は、その歌声を知っている。彼が活躍する場で、彼が現れた事件現場では必ず流れていた歌。

癒すのではなく、包み込むのではない。スツと体の中に入ってきて、そして不安を砕く。怖いや苦しい、悲しい辛いといった感情を爆破して、空いた隙間を埋めるように心の中の『何か』を膨らませる。

テレビ越しでは解らなかった。

彼が助けた人たちが誰もが、泣いていた人たちも、小さな幼子でさえも、真つ直ぐに前を向いていたことが、とても疑問だった。

彼が膨らませたのは、爆破するように押し上げたのは『勇氣』。誰の心にもある、誰もがヒーローになれる気持ち、彼は押し上げる。暴力的なほどの爆発力で、心のすべてを埋め尽くすように。

「そっか、こんな気持ちなんだ」

ギョツと胸の前で拳を握る。

彼が歌うのには意味があった。彼は無駄に歌うのではない、彼は『ここに俺がいる』と示すために、『絶対に助ける』と広く伝えるために歌う。

そして歌に負けないほどの爆破の奔流が、脳無を吹き飛ばす。問答無用、容赦の欠片

もない攻撃の余波は、不思議とA組のところには届かない。

風も光も、圧力も、彼の支配下。響き渡り共鳴し合う音さえ、彼の動きに合わせて踊る。

まさに、ロックのステージ。

暗い感情を吹き飛ばし、前を向けとエールを送る『シンガー・ボマー』の情熱的なヒーローとしての姿を生で見ても、誰もが魅了されていた。

目の前にある恐怖を忘れ、ただ前を向いて笑顔を浮かべて、彼の背中を見つめ続けた。

黒鋼の城が、浮かぶ。

叩きつけるような恐怖が、先ほどまで心の底まで蝕んでいたのに、今では感じなくなつた。

物理的な装甲が、精神的な何かを防ぐなんてあるわけがない。けれど、理論的な説明

がどれだけ積み重ねようとも、目の前のこの装甲を超えることはない。

暴力の前に屈さず、攻撃の嵐に怯むことなく、一步も退くことのない鋼鉄の牙城。

絶望の海にありながらも、それはまったく揺らがずに往く。

難攻不落、絶対無比、あらゆる攻撃を前にして少しも揺れることない船体が、ゆつくりと前に進んでいく。

その背中を見つめると、不思議と震えが止まった。不安はある、怖さもあるのに、何故か『大丈夫だ』と背中を支えられたような気がした。

切島はその背中を涙を浮かべながら見つめていた。

あの時と変わらない。ニュース映像で見た通りの背中だ。小さくて、とても弱そうなのに、見ていると『決して崩れない壁』のように思えてくる。

揺るがない、通さない、決して逃げない。言葉で語ることはなくとも、その背中は雄弁に語る。

轟は、ただその背中を見つめていた。

こうなりたいたと、強く願う。こうでありたいと、誰かを護れるヒーローとはこういうものだと心に刻みつけられていく。

「大丈夫だから、皆はそこにいて」

振り返った彼は微笑んでいた。

穏やかに優しく、見ているだけで不安なんてないような気持ちになってくる。ここにヴィランがいて、まだまだ数が増えているのに、もう怖いなんて思えない。

『グリーン・シップ』。存在感だけで、人を支える鋼の戦船。

彼は一步一步と進む。ヴィランからの攻撃を受けながらも、後ろの一発の攻撃も通さず、すべてを受け止め、さらに前へ、と。

相澤は、初めて二人の姿を見た気がした。

生徒ではない、ヒーローとしての二人の姿を。

一本の筋が通った、どころではなかった。映像で見るよりも鮮明に、彼らの体を多くの願いが支え、その力を倍加させている。

不安を払え、後悔に飲み込ませるな、誰かの悲しみを拭え、そして絶望を砕け。

爆豪の、いや『シンガー・ボマー』の歌が響く。ヴィランを前に歌うなんてと考えていたのが、間違えだった。彼は歌うことで多くの人を鼓舞し勇気づけていた。同時に、『自分が来た、もう大丈夫だ』と高らかに叫ぶために。

緑谷の、『グリーン・シップ』の装甲が見える。攻撃の嵐の中でも、絶対に埋もれない、沈まない装甲を見ているだけで何があっても『大丈夫』だと信じられる。

二人の訓練記録は見た、見事だと思った、これがあれば誰もがヒーローとして活動しても死ぬことはない、簡単に消えるようになくなることはない。そう思っていたのに。

違う、まったく違う。あの訓練があるから二人は強くなったのではない、二人だったからこそ、あの訓練で強く慣れた。

絶対に曲げなかった、絶対に譲らなかった。二度と振り返らなかった。真っ直ぐ前に、目指すものへ辿り着くために二人は妥協をしなかった。他の誰かが同じ道を進んだとしても、何処かで『これでいい』と区切りをつけてしまうことを、二人は『その先へ』と突き進んで行って、あの姿を手に入れた。

圧倒的な力を見せつけながらも、見ている人に恐怖ではなく勇気を与えるヒーローの背中を。

「なるほどな」

小さく嘯みしめるように相澤は呟く。

自分達の後輩は、こんなに凄い奴らだったのか、と。

同時に教師として、二人の『危うさ』をしつかりと感じ取った。

オールマイトは、二人の姿を見て拳を握った。もう止められない、こうなった二人を止めるのは自分でも難しい。後はヴィランが消えるか、助けてと嘆く人達がいなくならないかぎり、二人は何処までも戦い続ける。

傷つこうと、体がバラバラになろうと、絶対に止まらない。命を燃やして、自分のすべてを捧げるように戦っている、そんな二人が何処かへ消えてしまうのではないか、オールマイトはそう思えてしまう。

何時からか、二人の戦う姿を見ていると、そう感じてしまうようになった。

「ナイトアイ、君もこんな気持ちだったのか？」

かつての自分のサイドキック、彼が傷だらけになりながらも事件へ向かう自分を止めたのは、この喪失感故にか。

今更、気づいたとして彼に何を言えればいい。どうすればいい、かつての自分の姿を爆豪と緑谷に重ね、かつての自分の友人を今の自分に重ね、オールマイトは拳を握って今を見つめていた。

訓練場はずでに一方的な戦いになっていた。

脳無の攻撃は二人に届かない。爆破の壁と装甲に阻まれ、A組には届かない。砲撃と爆撃が先生二人から遠ざける。

「デク!!」

「侵食魚雷、三連射」

爆豪の合図と同時に、艀装から噴煙が上がる。次々に漆黒の渦を発生させる魚雷の着弾の合間を縫うように、爆豪が急接近。

脳無に叩きつける爆破の威力は、前の時とはまったく違う。右手の槍の一撃に、脳無が吹き飛ぶ。相手の防御など関係なく、防御の上から叩き潰す威力の一撃に、脳無は成すすべなく沈んで行った。

「そっ!!」

そして緑谷の正確な射撃が脳無に炸裂。直撃した瞬間、砲弾内部の液体が脳無に降りかかり、そして硬化。相手を絡め取り拘束する砲弾が、正確に脳無を無力化していく。先ほどまで一方的だった戦いは、瞬く間に逆転していった。

「これで!」

「終わりだ」

そして、最後の脳無は倒れた。

「終わりか、デク?」

地面に降り立ち右手を振って槍を『消した』爆豪に、緑谷はしばらく周りを見回して頷く。

「周辺に敵影はないよ。念のため、もう少し偵察機は出したままにしておくけど」
「解った。じゃ、あっちだな」

爆豪は真つ直ぐに先生二人とクラスメートを見つめる。

「そうだね」

緑谷も同じように見詰めて、どちらともなく歩き出す。

「言い訳、考えてるか？」

「非常事態における緊急回避とか？」

「馬鹿か、てめえは。そんなんヒーローに適応されるかよ」

「じゃあ、反省文で許してもらおうか」

「仕方ねえか」

「だといいいね」

「じゃ、やるか」

「そうだね、やろうか、かつちゃん」

爆豪と緑谷は同時にため息をつき、そして同時に田中・一郎直伝の必殺技を使うことにした。

「すみませんでした!!!」

土下座、である。

な、なんか、色々と飛ばされた気がする。

「オール・フォー・ワンの拠点はここだな」

まあ、いいか。田中・一郎だ、今はかなり怒っているからここで勘弁な。

「誰もいない倉庫街だね。良かったよ、周辺被害は物資だけだね」

ソープ、それは良かったになるのか？

「だって使うんでしよう？」

「ああ」

使う、使ってやる。今回ばかりは、あいつは許せる気がしない。

「いいんだな、マスター？」

「コナン、俺はもう決めた。あいつは、『生かしておけない』」

ケンカ、売られたってわけじゃない。俺自身に何かされたなら、まあいいかで許してやっても良かった。

でも、だ。でも、廻やエリちゃんを巻き込んだのは、決して許してはいけない。あんな小さな子が、泣きながら『ごめんなさい』なんて謝るなんてこと、あつていいはずがない。

「解った」

「我也出よう、いいな、マスター？」

「頼む、ギルガメツシュ」

俺が見つめつつそう告げると、相手は軽く笑うことなく真顔で頷いていた。

最初から『エア』とか使わないよな。全力で行ってもらいたけど、そんなことしないよな、ギル？

だつてあいつは、そんな一撃で終わらせるなんて、『優しいこと』で許してやるつもりはない。

「最初に半径五キロを封鎖結界で覆って、その後に艦娘達を突撃。目標施設を粉碎する。後は出てきたところを」

「蹂躞戦だ」

コナンの説明を、俺は遮って命令を伝える。

「おい、マスター？」

「蹂躞戦だ、コナン。『抹殺』しろ」

「………解った」

悪いな、コナン。今回は、手加減してやるつもりないんだよ。前の時は見逃したけど、今回は総力戦やってでも仕留める。

出来ればこんな物騒なことしなくなかった。でも、あいつは三度もこんなことをした。もう許してやれる段階じゃない。

許してやれる、か。俺も上から目線で何を言っているのやら、俺の戦力だって一般人からしてみれば、同じような暴力じゃないか。

「コナン、俺も行くぞ」

「私の出番もありますよね？」

甲、黒霧、おまえらは残ってほしいんだけどな。

「一郎、まさか除け者にしないよな？」

「そんな寂しいこと、言いませんよね、一郎さん？」

「解ったよ、おまえらも巻き込むからな」

「当たり前だな」

「当然でしょう」

「まったく、こんな『重荷』背負うことないのにさ。本当にいい奴らだよな、俺はいい友人に囲まれて嬉しい限りだ。」

「作戦はいいな？ 本当にいいんだな、マスター？」

最後のコナンの念押しに俺は頷いて、命令を口に出す。

「作戦、開・・・」

「待ってください!!」

「は？」

「え、あれ？」

「なんでヒミコちゃんが鎮守府にいるのさ？」

「入れてもらいました!!」

あれえ〜ちよつと待った、あまりに意外な乱入者に俺が混乱しているんだけど、誰か説明して。

「一郎君、そんなこととしてはダメです！」

あ、はい。

は?! い、いやいやいやいや、なんでヒミコちゃんがこんな迫力で迫ってくるのさ。何その顔、気合、怖いんだけど。

「二郎君がやろうとしていることは絶対にダメです。そんなことしたら、後で絶対に後悔しますから!」

「え、いやでもね」

「デモじゃないです!!」

ち、近いって! なんでメートル以内に入ってくるのさ! 君はもつとお淑やかで静かな子じゃなかったっけ?

男に触れるくらいに迫るんじゃないやありません!

「二郎君は感情的になり過ぎて戻れなくなっているんです! よく考えてください、そんなことしたら多くの人に迷惑がかかります! 普通を望んで毎日が平穩に暮らすって願っている二郎君なら、そんなこと絶対にしません!」

「いや俺だつてしたくないけど、でもあいつがいたら」

「したくないならしなければいいじゃないですか!」

「あいつがいるとまた誰かが苦しむからさ」

「苦しんでいればいいじゃないですか!!」

「ちよ、ヒミコちゃん、近いって!」

「近いからなんですか?!」

「触れる、息がかかる!　じゃなくて!」

「苦しんでいるのを見過ぎせよって言うのか?」

「見過ごせなんていいません!　一郎君がやらなくていいって言っているだけです!」

「なら見過ごすとの同じだろうが!」

「な、なんだか俺も怒りを感じてきたぞ。なんでヒミコちゃんにお説教されているのかな。俺が悪いのかよ。」

「違います!　ヒーローがいます!　彼らが何とかします!」

「何とかしますって、今やらないとだめだろうが!　ヒーローがあいつを捕まえるまでに何人の犠牲者が出ると思っているんだ?!」

「犠牲者が出たからなんですか?!　犠牲者が出るから一郎君が犠牲になるんですか?!」

「俺が犠牲になるってなんだよ!　俺はやりたいたいからやるんだ!」

「いいえ!!　絶対にいいえです!　一郎君はそう思い込んでるだけです!」

「な、何でこの子は人のことなのに言い切るかな!」

「俺がやりたいからやるんだよ!　ヒミコちゃんは黙ってる!」

「いいえ黙りません!　一郎君が自分を傷つけようとしているのは見過ごせません!　一

郎君を傷つけるのは誰であつても私が許しません！ 例え一郎君本人であつてもです！」

「何でそうなるんだよ！ 第一、何の権利があつてそんなこと言うかな！」

「権利なんて知りません！ 私が言いたいのは一郎君がそんなこと望んでないことだけです!!」

「だからなんで俺のことをそう言えるんだよ！ 君に俺が何が解るんだよ?!」

「解ります！ 毎日見てますから！ 一日だつて忘れたことないです！ 一郎君のことなら私が解らないことなんてないですよ!!」

「なあ?! 変態かよ！ なんだよそれ!?!」

「変態じゃありません！ 私は!!」

「私はなんだよ?!」

「私は一郎君が大好きなだけです!!」

「なんだそれは?! 大好き………え?」

はい、え、なんて?」

あれえくくなんか、ヒミコちゃんが真つ赤な顔で止まっているけど、なんて俺は言われたのさ。

「コナン！ 俺は」

「はい撤収くくくごちそうさま」

「ちよ待つて！ みんな、待つて!! この状況で俺を一人にしないで!!」

なんでそんなに簡単に皆は離れられるのさ?!

勢いは大切だ、何かの本に書いてあつたのを静かに思い出す。そんなことで言えるはずがないと溜息を嘲笑をしたことを、トガ・ヒミコは小さく心の中で謝罪した。

勢いは本当に大切だ。

今まで言えなかつたことが、すんなりといえたのは嬉しい反面で、女子としてそれはどうなんだろうと思つてしまう。

ムードは大切なのではないか。

状況は良くないのではないか。

一郎が怒っていたのを知っている。何があつたかは聞いていたし、怒るだろうなと予想付いたけど、その後の行動は彼らしくないと思つた。

いくら傷つけられたとしても、一部の組織が壊滅させられたとしても、彼の個性をすべて使つて戦争を仕掛けるなんて、平穩と日常を愛する彼らしくない。

きつと、彼は怒りで理性を見失つているだけだ。

知り合いが傷つけられて、それで何も見えなくなつていられるだけ。

だから来た。彼が自分自身の個性で彼を傷つけないように。

来たのだけど、ケンカ腰になつてしまい、珍しく激情している彼について感情的になつてしまつて。

変態とはあまりに酷いではないかと思う。確かにやつていられることを客観的に見れば変態だ。自覚したくはないが、変態にしか見えないが、それでも変態と当人に言われたら怒りたくなる。

自分は誰にでもそんなことするほど、軽い女ではない。初めて会つた時からずっとつめて、ずっと追いかけて、ずっと想つていたのに、それはあんまりではないか。

沸々と再び怒りが渦巻くが、それを深呼吸して抑えつける。

今まで彼と話すときが動かなかつたのに、今は滑らかに動く。

今まで彼に見つめられると体温が上がつて動けなくなつたのに、体は熱くても動くこ

とは動く。

これが脳内麻薬が出過ぎて感覚がマヒしている状態かもしれないが、チャンスなのに変わりはしない。

深く呼吸を整える、ゆっくりと吸って吐いてを繰り返し、両手を胸の前で組み相手を見上げる。

今日のメイクは決まっているか、それは不安で仕方がないがやるしかない。

服装は大丈夫か、香水はつけてないが、それは今までも使っていないから。

髪型は乱れてないか、走って来たから乱れているかもしれないが、整えている時間が惜しい。

何度も練習した、鏡の前に立って何度も妄想した。

その結果を今こそ、彼に届けよう。

全身全霊の、すべてをかけて。

「田中・一郎君」

「は、はい？」

彼は戸惑いながらも、姿勢を正してくれた。

やっぱり、と心の中で呟き、そつと告げる。

「私、トガ・ヒミコは、貴方が好きです」

人生で最高の笑顔を添えて、
精一杯の勇気を込めて。

他の奴が好きだと思つていた子に、いきなり告白されたと思つたら、その先に色々あつた話

人生において、最大の幸運はなんだろう。

どうも、田中・一郎です。

現在、ラスボス前、いざ殲滅戦だ、戦争屋の戦い方を教えてやろう、俺の怒りに震えて眠れつてかっこつけたら、我が店の癒し系が突撃してきました。

もう別人つてくらいに勢いよくカチコミしてきて、あまりに理不尽なこと言われたから怒鳴り返したら、告白されました。

はい、今ここ。何を言っているか解らない？

大丈夫、俺も解らない。

だ、誰か。いやコナン達は撤収してないだとお?!

なんだあいつら！　なんで竹藪とか木の衣裳とか着てるんだよ！

コナンが竹藪なのはいいとして！ その黄金に輝いているのはギルか?! ギルなのか?! 英雄王が木の役つて、色々な方面に怒られないか?!

そつちの『現在、僕は水たまり』つて看板かかかてるのエルだろ?!

ソープうう!! おまえなんで噴水のヴィーナス気取つてんだよ！ 似合つてんだよ！ 止めろよな！

「二郎君」

「は、はい!!」

ヤバい、不味い、今はヒミコちゃんのことだけ考えよう。えっと、告白されて告白があつて、告白だとお!!

待つて待つて!! そりゃ俺は転生者! 何度も人生をやつているから奥さんの一人や二人、あれいたつけ?

あれえくく待つた待つた! 最初の時に艦娘全員に『夜戦しようぜ! 淑女だからな!』されてから、誰かと結婚した記憶がない!?

え、待つた、実質的な告白はこれが初めて? え、艦娘は女の子だから、彼女達の告白はカウントしていいはず!

でもあの時は提督だったから、最初から愛情プラス五十くらいあつたような。

「二郎君!」

「はい!!」

ヤバい、考えがまとまらない。だってヒミコちゃんだぜ、俺が知る限り艦娘も合わせでも上位に入るほどの美人なのに可愛いって、二つの要素が見事に混ざり合った美少女だよ。

その子が俺のこと大好きって、そんな夢みたいなきっかけがあつていいはずない。

と、弔、お前何かしただろ。なんでおまえは屋台を出してんだよ。そこに並んでんの、ヴィランじゃないか。

おいこら! 最前列で焼きそば食ってんのは、オール・フォー・ワンだろうが! なにを和んでんだよ! 俺達はそいつを殺しに来てんだぞ!

「貴様は次の時に、死穢八齋會が殺してやる」

廻いいい!! 何、隣に座ってビールを握り潰してんだよ! その横の男の人、オヤジ

さん? あれ、組長じゃないの!?

「次は負けねえ」

「フフフ、何度でもエリちゃんを狙っていくからね」

「殺すぞG」

「いいねえ〜」

な・〜・む・な!!

頼むからもっと殺伐とした戦場らしい空気で戦ってくれ！ 間違っても一列に地面に座ってビール飲むような仲じゃないから！

「二郎君？」

「はいいい!!」

不味い！ 本気で不味い！ ヒミコちゃん泣きそうじゃんか。男らしくない、こんな可愛い子に告白されて、戸惑っているのは男らしくない。

「解りました、もう一度、言います」

「え、待って！」

「いいから聞いてください！」

「はいいい!!」

もう一度、もう一度か。よっし、田中・一郎、ここは男らしくヒミコちゃんの気持ちに答えて『はい』と言うんだ!!

言うんだぞ!!

場所の空気が静まり返る。今まで騒いでいた、あるいは酒盛りしていた連中すべてが息を飲み、静かに成り行きを見守る。

ヒミコはゆつくりと息を吸う。まだ脳内麻薬は流れ続けて、もう感覚が解らなくなってきた。

今までの緊張感が嘘のように、スラリスラリと言葉を言えそうだ。今なら何でも言える、彼を見つめるとびきりの笑顔で何でも言えそうだ。

こんなチャンスは二度とない、だから思いっきり言おう。

「田中・一郎君」

ヒミコが言葉を紡ぐ。その小さな声には、妙に色っぽい何かがあつて、見ていた男たちはゴクリと唾を飲み込んだ。

その中に、個性を奪うラスボスもいたようだが、周りは誰も気にしていない。

「私は」

一言一言、間違えないように告げる少女の姿は、儂げでか弱く、それでも凜として立つ意思を感じさせる。

まるで華のように、立てば雛菊、座れば牡丹、歩く姿は百合の華。あらゆる華のよう

に雅な彼女に、男たちは自分達の欲望を掻き立てられ。

同時に、そんな彼女の想いを一身に受ける男に嫉妬の目線を向けた。

その中に、かの英雄王は当然に含まれない。黄金の木になりながら、そつと目元をぬぐう。ようやく、彼にも春が来たと。我が事のように喜んでいた。

「トガ・ヒミコと」

先ほどの告白の繰り返し。もう一度、念を押すために声を出す彼女に誰もが頑張れと声援を送る。

しかし、とある名探偵は首をかしげた。あれ、言葉が違うような、と。

顔を真っ赤にして、真っ直ぐに見詰めた少女に対して、田中・一郎は決意を持って見つめ返す。

今度は絶対に間違えないように、すでに口の中に『はい』と待機させて、懸命に想いを告げた少女に答えようとしていた。

「結婚してください!!!」

「はい喜んで!!」

そして、二人の絶叫が響き渡り。

「はああああ!!」

大勢の悲鳴が街を揺らしたのでした。

「いきなりそこかよ?!」

コナン、思わずツツコミで地面を踏み締める。

「うむ見事だぞ! トガ・ヒミコ! 貴様は雑種からレベルアップしてやろう!」

英雄王、ノリノリで黄金の木を破裂させ、周囲一帯を黄金の紙吹雪で満たす。

「いやいや待った待った!」

ようやく気付いたソープが右手をスナップ、見事なツツコミを入れる。

「そうですよ!! まだ交際期間とか恋人期間があるじゃないですか?!」

エルのツツコミは、明後日の方向へ飛んで行った。行方不明なので、探さないように。

「よかろう!! この私! アインズ・ウール・ゴウン自らが祝福の歌を奏でようではないか!!」

最早、祝いたいのか、歌いたいだけなのか解らないアインズは、早々にギターを持ち出して奏で始める。

「そうか、ヒミコが俺の『母』になるのか」

呶、場違いな感動に震える。

「おめでとうございませす、ヒミコさん、ようやく貴方の想いは届いたのですね」

真っ直ぐに称賛を贈る黒霧は、そつと目元をハンカチでぬぐった。

「素晴らしい！ 見事な告白だった！」

そして、本来の田中・一郎が『殺す気でいた』オール・フォー・ワンはスタンディングで大きく拍手、ついでに振り返ってギャラリー達を盛り上げ、全員でスタンディング、一斉に拍手喝采を行ったのでした。

うわあ、カオス。

あれえくく待って、俺は何を言われたの。えっと、ちよつと落ち着こうか。

「はい、これに署名をください」

「あ、はい」

えっと、確かオール・フォー・ワンが死穢八斎會を襲つて壊滅させて。

「次にここにハンコを」

「あ、うん」

で、エリちゃんが泣いているから、俺が怒つて全軍を率いてあいつのアジトに襲撃をかける前に、俺の『手のひら鎮守府』の鎮守府内の会議室で作戦を確認して。

「両方とも未成年なので証人のサインと判子が必要なので」

で、いざ作戦開始つて時にヒミコちゃんが止めに入つて、色々と怒鳴り合いになつて告白されて。

「私のほうはちよつと気味ないので、この場合はオールマイトに頼みましょうか？」

「さすがにオール・フォー・ワンじゃ無理だよなあ」

「その前にだが、私を縛っている鎖は特殊なものなのだろうか？ 先ほどから個性が使えないのだがね？」

「『天の鎖』に『アンドロメダ』の鎖だろ、それと巨人の鎖にバインド系魔法と封印系の魔法縛だから逃げられねえぞ」

あ、なんか簀巻きになったラスボスいるけど、まあいいや。

廻がゴミを見下ろすような眼で見ているけど、エリちゃんの教育に悪いから止めようねえ〜。

「はい、我が師よ」

考えを読まないでくれない。

えつと、それよりも今は。ヒミコちゃんに告白されて、それで。

「はっはっはっは!! 私が証人になり呼び出されてきた!! って、オール・フォー・ワ
ン?!」

「やあ、オールマイト。いい簀巻き日和だね」

「何があつたんだ?! いやその前に、何をしたんだ、田中少年?」

お、俺に聞かないでください。

「オールマイト、ここに署名と捺印ください」

「トガ少女? 何々? そうか、そうか………ホワイ?!」

「ください、ね?」

「オーライ、任せなさい」

うわあ、オールマイトがすげえ震えてサインしてハンコ押ししてる。あれ、足元に転がっているオール・フォー・ワンがガタガタ震えているんだけど、何でだろう。

あれえくくよく見ると、周り中、男は全員が震えているんだけど、何があったのかな。「というわけで一郎君！」

「は、はい!!」

あゝ凄いいい笑顔したヒミコちゃんが、ハートを飛ばす勢いで振り返っているけど、何があったの。その手の紙はなんだろうね？

「早速、市役所に行きましょう!!」

「あ、うん、そうだね」

「はい!!」

元氣いいなあ、可愛いなあ、そうかこの子が。

俺の嫁さんかあ。

ハートと音符が乱舞しているヒミコちゃんに手を引かれて、俺はそのまま市役所に行ったのでした。

あ、うん、そうだね、俺って十八歳にはなっていたんだね。ヒミコちゃん、十六だったの、へえくくそつかそつか結婚できるね。

人生の墓場へようこそ、なんて言葉が聞こえてきたよ。

「というわけで!! 今日から私は田中・ヒミコになりました!!」

「え、トガじゃないの?」

「結婚しましたので!」

あれから、色々とありましたよ。もうね、見事に縄抜けしたオール・フォー・ワンと
ヴィラン達は、一斉に姿を消しましてね。

「発信機、心臓に打ち込んでおいたからな」

「脳細胞にもナノマシンを入れておきました」

「魂にアンカー打ち込んでおいたよ」

コナン、エル、ソープが容赦なく『今ここオール・フォー・ワン』装置を作ったので、
あいつが何処にいるか手に取るようにわかるのです。

ヤバイ、俺は今あいつにかなり同情している。おまえは、俺を敵にまわしたただけにし
ておけばよかつたんだよ、なんでこいつらの怒りを買うようなことしたんだよ。

「ついでに、私の宝具も使っているからな。あいつが逃げられる可能性はゼロだ。良いぞ、マスター、結婚の祝いにこの玩具をくれてやろう」

うわあ〜〜ギルが絶好調で笑っているよ。そんなラスボス系玩具なんていらんから、もう見逃してやろうよ。なんか可哀そうになつてきたよ。

「一郎さん、何があつたんですか？」

「うん、デク君、世界には不思議なことがあるんだよ。君も女の子の扱いには注意しなよ」

「マジで何があつたんですか？」

「爆豪君、君はモテるだろうから、余計にね。きちんと女の子に誠実にならないと、後ろから刺されるよ」

二人は俺の言葉に疑問を浮かべていたようだけど、これは先人としてきちんと教えておかないとね。

「大丈夫です!! 一郎君は女の子の扱いはきちんとしています。私が保証しますから！」

「あ、ありがとう、ヒミコちゃん」

「はいー！」

あ、可愛い。本当にキラキラ笑顔で見えてくるんだよね。でもさ、なんで片手に包丁を

持っているのかな？

「料理を教えてもらっています！」

「ヒミコは筋がいいからな」

「まだまだ弔君には負けます。でも一郎君への愛情では私のほうが上です！」

「フ、俺と一郎の絆はおまえに負けない」

「私の愛情も負けません！」

バチバチと、火花が散っているな。本当に、なんでこの二人はそこで張り合うんだろう。

男と女の時点で、勝負にならないでしょうに。

「そういえば、どうするのだ？」

「何をだよ、アインズ？」

思い出したように、ギターの調整をしていたアインズが、こちらをじつと見ていた。

「結婚式だ」

「はう?! このヒミコ、一世二代の失敗をしました。考えていませんか?!」

あ、ヒミコちゃんが崩れ落ちた。

「そうです、油断していました。婚姻届を出したから、夫婦になったからと油断していました。ヒミコの馬鹿、どうしてそこで気づかないの」

「いや、ヒミコちゃん、まだ間に合うから。大丈夫だから」

「新婚旅行も行きたかったのに」

「大丈夫だって」

あゝ落ち込んで泣いている姿も可愛いなあ。本当、この子が俺の嫁かあ、世界って不思議なことまで溢れているな。

「ごめんなさい、一郎君、私は妻失格です」

「大丈夫だって。そのうちさ、そのうちに行こうよ」

「でも初夜の後に結婚式ってやっていんですか?!」

「あ……」

すっごい大声で言ったヒミコちゃんは、自分が言った内容が頭の中で流れたのか、煙を出して固まった。

そして俺はゆっくりと回りを見回して。

「え、終わったの?」

コナン、ギル、エル、ソープ、アインズ、弔、黒霧が言ってきたことに対して、小さく笑った。

「終わったよ、やったよ! 悪いかよ! こんな可愛い嫁さんを貰って手を出さないってことあると思うか?! 俺だって男なんだよ! 一緒に寝ましようね夫婦なんだから

！　なんて部屋に入つてこられて我慢できると思ふか?!　ヒミコちゃんなんだぞ!
こんな可愛い子が隣に寝て理性を保てる男がいたらそいつは人外か!　男として終
わっている奴だよ!」

「夫婦ならいいんだろ、何を焦つてんだよ、マスター?」

「だつたらなんだよさっきのおまえらの反応?!」

「いやあく〜つつきり緊張のあまり手を出せなくて二人して気絶したんじゃないかっ
て」

は、そんなわけあるか。俺だつてその手の経験がないわけじゃないんだから、こんな
可愛い嫁さんに手を出さないわけないだろ。

「そつかそつか。で、『オツズはどれだ』?」

は?　コナンなんて?

「初日に初夜、大穴だな」

ギル、おまえ、なにを。

「うわあ、誰も賭けてませんよ」

エル、楽しそうだな。

「だつて一郎が初日に手を出すなんて、誰も予想してないよ」

ソープ、ため息つくな。

「ふむ、案外に男だったということか」

「アインズ、それはどういう？」

「あゝそつか、そつか」

なるほどなるほど。

「おまえらは人の夫婦生活で賭けごとしてんじゃねええ！」

「ヤバい！ マジギレだ！ 逃げろ!!」

「コナン！ おまえどうせ主犯だろう！」

「さすがだぜマスター！ 名探偵になれるぞ！」

「待てコラアア!!!」

こうして俺は、店と自宅だけじゃなく、街中を舞台にした盛大な鬼ごっこをすることになったのです。

「はあ、田中少年、君も奥さんを貰ったのなら、もう少し静かに暮したらどうだね？」

「すみません、オールマイト」

後日、お約束のように俺は彼の前で土下座したのでした。

嫉妬は見苦しいものです、見ていて悲しくなります。でも矛先が違うところを向いていると、見ていて微笑ましくなりませんか？

どうも、皆さま、新婚の田中・一郎です。

ふ、ふふふふふ、こんなことを言う日が来るなんてなあ。人生、何があるか解らないって本当だよ。

あゝ嫁さんのいる生活、ビバリあ充生活。

しかも、あんな可愛い嫁さんなんだぜ。ヒミコちゃん、毎日のように可愛くなってる気がするのよ、俺がノロケているからか。

いやいや、間違いない。俺の嫁さんは可愛い。

ちなみに、一緒に住んでます。一緒の部屋です、どうだ羨ましいか、世の中の男どもよ！

でもな、ちよつと疑問があるんだよ。普通さ、嫁さんの手料理つて憧れるもんでさ、食べたいつて思うよな。

思うだろう、けど俺はまだ食べてないんだよ。

なんでだろうなあ。

「どいてください弔君！」

「いいや、どかない。おまえに一郎の食事はまだ早い」

「いいえ！　いいえです！　私は一郎君の奥さんですから！！　旦那様の食事を作るのは

妻の務めです！」

なんでだろうなあ（泣）

朝っぱらのキッチンから、俺の嫁さんの声と、俺の親友の口論が聞こえてくるんだよ、理由は解るだろ。

「今の時代は男女平等だ。それは差別に当たらず、ヒミコ」

「個人の想いに世間は関係ありません！　世間が正しいんじゃない、私が正しいんです！」

「フ、言うようになったな。あれだけ一郎の前で緊張で、言葉を言えなかつたお前が」

「その節は大変、お世話になりました。とても感謝しています」

「ならばいいだろう、おまえに譲れるものはない。ここは俺のキッチン^{領域}だ」

「それとこれとは話が違います！」

仲いいなあ、本当にあの二人つて話をしていると絵になるよ。なんだか、俺じゃなくて二人が夫婦に見える。

「違うからな、一郎」

「勘違いは駄目です一郎君！ 私は一郎君命です！ 一郎君一筋ですから！」

ブハ?! い、いきなり飛びこんでくるのは反則です、ヒミコちゃん。真っ直ぐに飛びかかるようにしてくるのは、もつと反則です。普通の人なら死にますから。

「よくやった一郎、捕まえておけ」

「は?! 謀りましたね弔君!!」

「あ、はい」

ニヤリと笑う弔に、俺は反射的にヒミコちゃんを抱きしめたのでした。

「離してください一郎君！ クンカクンカ！ 一郎君の匂い、温もり、一郎君の鼓動。はうううう私の幸せがここに。は?! ダメよ、田中・ヒミコ、これは罠よ、弔君が私を足止めするための罠なのよ！ 田中・ヒミコ、田中・ヒミコ。ああ、いい響き。私のすべてが一郎君のものになった証。私の体も心も魂もすべて一郎君の腕の中。ああああもうヒミコは世界で一番の幸せ者です！」

離れようとするのか、逃げようとするのか、高揚とするのか、ノロケるのかどれかに

しようよ、ヒミコちゃん。俺はそんなにツツコミきれないから。

「いいぞ、一郎、良くやった」

「まあ、奥さんを抱きしめられるから俺は全然、いいんだけどさ。世間一般でいうところの、『ブラック・コーヒーが甘く感じる』じゃないのか？」

普通、こんなに目の前でいちやいちやしていたら、砂糖が口から出てくるとか、リア充は爆発しろとか嫉妬の眼を向けるんじゃないの。

弔がそんな顔するなんて想像もできないけど。

「何でだ？」

料理を続けながら、背中を向けて弔が疑問を投げてきた。

「普通、男ならそう思うって話さ」

「そうなのか。ありえないだろう」

「いやなんで？」

「当たり前だろ。父親と母親が仲がいいのは、子供にとって嬉しいことだ」

は？ え、あれ、今、弔はなんて言ったの？

誰が父親で、誰が母親だつて？

「俺にとつて一郎は親代わりだ。おまえは男だ、だから父親といえば一郎だろう？」

「待った、そこからすでに話が違う。なんで同年代の俺がおまえの父親になるんだよ」

「だから、その奥さんといえはば」

「待ておまえ！ 話を聞け!!」

「俺の母親じゃないか」

振り返り、凄いいい笑顔で語る弔の両手には何故かオムライスが。

しかもハートのケチャップつきだとお!!

「だから、二人の最愛の息子から愛情たつぷりの朝食だ」

お、おう、愛つて重いなだな。

「ちなみに誰からその話を聞いた？」

解っている、解っているんだが、間違いであつて欲しい。ギルは、あんなに涙を流して祝つてくれたじゃないか、そんなあいつが愉悦のためのネタにするなんてことはない。

「ギルじゃない」

よっし、セーフ。あれ、でもギルじゃないって誰が。

「コナンだ」

「まさかの名探偵の裏切りかああああ!!」

思わず俺は絶叫、ついでに腕に力が入ってヒミコちゃんが。

「ダメです、一郎君、キッチンでなんて」

とか、ちよつと流し目で言ってきました。

おう、俺の嫁さん、俺の周りと同じにいるようにぶつ飛んでんな。

「お洗濯は奥さんの仕事、役割、使命、疲れた旦那様を癒してあげたくて、今日も綺麗にお洗濯、お日さまポカポカ暖かい、洋服ポカポカ温めて。温もりギュッと抱きしめる。でもダメよ、そこは駄目。温もりは奥様だけの特権なのよ」

朝食が終わって、俺と弔が店の仕込みに入る頃、ヒミコちゃんが歌いながら洗濯物を干しに行ってくれているんだけど。

「……………あれはな」

「待て弔！ 言わなくても解る！ アインスだろ！ アインス作詞作曲だろ?!」

「よく解ったな」

解るだろうが！ うちで音楽関係はあいつ以外にいないんだからさ！

「協力、爆豪だ」

「え、マジで？」

あのポワポワの歌に、爆豪君が協力しているって。なんのジョークだよ、そんな話あるわけない。

だって、彼はバリバリのロックじゃないか。

「一郎に何か恩返しがしたいと言っただけ。赤面しつつ書いていたな」

「うわあ〜〜」

「背後に大笑いしたギルがいたが」

「止めようか弔君!! おまえそれ完全に『愉悦あるぜ、今日は大量だ』ってギルじゃないか!」

あいつ、まさか今後は爆豪君に愉悦の対象を移すなんてこと、ないよな。そんなひどいことさせない、俺が絶対に爆豪君を護ってやる。

「一郎、おまえは俺を護ってくれないのか？」

「は? いや、なんだよ、それ? なんでそこでお前が出てくるんだよ?」

「実はギルからこんなものを貰った」

弔が差し出してきたのは、革で出来た本のようなもの。

これ、どつかの幻獣の皮を使ったとかじゃないよな、革っぽいから違うよな。

そつと俺は慎重に受け取って開いてみると、着物を着た女性がいた。

はい？

「見合い写真、というらしい」

「………ギルガメッシュううう!!!」

「呼んだか、マスター」

「出たな元凶!!」

「フハハハハハ、そう褒めるな、我は氣遣いもできる、ナイスな英雄王、マスターが奥さんといちやいちやして弔が寂しくないよう、見合いさせて結婚させてやろうというのだ」

「どっから持ってきた?! 誰だこの人?!」

めちやくちや美人じゃないか?!

「一郎君?」

ヒ?! な、なんで背後にヒミコちゃんの気配が。

おい、弔、震えながら顔を反らすな。ギル、てめえ蒼白になつて固まつてんじやないよ。

「浮気、ですか?」

「え、いや、これは違う。これ、弔にだから」

「そう、ですか。ならいいです。でも、浮気はその許しません。許せないんですけど、一

郎君の魅力を考えると私一人で十分なんて考えられませんか。もちろん一郎君の奥様として頑張ります。でもでも、一郎君の魅力は天下一、この世界に一郎君を超える男はいないから、世の中の女性が放っておかないのは仕方がないこと。ダメよ、ヒミコ、一郎君は私の旦那様、私の夫、その夫の浮気を見逃すなんて、私の独占欲が許さない。でもでもよ、ヒミコ、一郎君の魅力を独り占めなんて、世界の損失、歴史上の汚点！は!? そうよ、今から行つてちよつと総理大臣を脅して一夫多妻制を採用させればいいのよ。私だけの一郎君じゃなくなるけど、これなら世界の損失を回避できる！ じゃ一郎君、私はこれから！」

「いや〜〜！ 俺の嫁さんは今日も可愛いなあああ!!」

咄嗟に俺はヒミコちゃんを抱きしめた。

「一郎くうん」

甘い声出すヒミコちゃんを抱きしめ、俺は体の位置を変えて二人に合図を送る。

確保したぜ。

ギルと甲は、無言で親指を突き出した。グツジョブ、いいぜ、通じ合うっていいよな。「今、私の一郎君と私以外が通じ合ったよな」

「気のせいだよヒミコちゃん!!! 俺の最愛の奥さん！」

「はうううう?! そ、それは反則です、一郎君、レッドカードです、私の心にクリティ

カルです」

ふにやつととろけるヒミコちゃんを見ながら思う。

うん、うちの嫁さんは可愛い。可愛いんだけど、変なスイッチがかなり多くて、ギルとか弔以上に気を使うなあ。

これが結婚生活か。そうか。

「いや、違うぞ、ヒミコだけじゃないか」

「こやつ、やりおる。この英雄王に気迫を向けるとは。危うくエレシユキガルに会いそうになったわ」

おい、おまえらヒミコちゃんが精神的にダウンしているからって、好き勝手に言ってるんじゃない。

「ところで、ギル、弔に持ってきた見合い写真の女性って誰？」

「我の古い知り合いだ」

え、ギルに知り合いっていたの。確かに黒髪に和装が似合う、とても綺麗な女性だけだ。

なんだか、うっかり要素があるような気がする。

「弔のようなしつかりした男には、しつかりしつともどこか抜けている女性がとても合うからな」

あれれれえ〜〜言っていることがまともに聞こえるんだけど、何処か愉悅の匂いがしていないか。

まさかあ、見合いを出しに愉悅やろうなんて、そんなひどいことしないよな。

「で、名前は？」

「イシユタルという」

「女神じゃないかこの野郎！」

「フハハハハハ！ いいではないか！ ここにはすでにユニコーンやエリといった大天

使がいるのだ！ 女神の一匹や二匹、湧いてもよいではないか！」

「おまえ神様が嫌いじゃなかったのか?！」

「愉悅の前には、その程度、些事よ」

「こ、こいつ、本当に愉悅のために色々なものを投げ捨てるようになったな。」

「一郎さん、俺は気づいた。女って奴は可愛い、癒しだ」

え？

「可愛いっていうか、フワフワして見ていて飽きないよね」

ランチが終わって夕方になりさしかかる頃、店に何時も通りに来た爆豪君とデク君。

何故かその二人から、そんな色気話が飛び出しました。

「何があった二人とも!？」

コナン、騒ぐなよ、二人だって高校生なんだぞ。

「天変地異の前触れか!？」

ギル、おまえね。

「救急車を」

いや、エル、救急車よりおまえの回復魔法のほうが、何時も使っているだろうが。

「キューピットでも悪戯したかな？」

ソープ、おまえの知り合いにいたのか、いるのか、そうか。もつと早く教えてくれよ。

「いいぞ！ 実にいい!! 色恋事は人間を磨く！ 感性を熱くする！ 即ち音楽を成長

させるー！」

アインズ、おまえのそれって言いたいだけだろ。

「実はバレました」

はい、なんて言った？

「クラスメートたちにバレて、色々言われるかなって思ったら、面と向かって『凄い』って言ってくれて、色々と聞かれて褒められたり感謝されたりで」

ちよつと照れたようなデク君は、頬が少し赤かった。

「感謝は貰っていた。ファンレターも貰った。けどな、真つ直ぐにありがとうって言われたのは初めてだった。男と違うんだよな。なんつうか、こう胸のあたりが」

爆豪君、それは言葉に出来ない想いだから、無理に言わなくていいって。そつかそつか、二人にも春が来たのか。

思春期だねえ、春だねえ、もう俺自身が色々と幸せだから、周り中が幸せに見えてくるよ。

「ドキドキしてくるんです」

「モヤモヤだな」

「癒しで可愛いのは解るんですけど」

「ああ、そこは同意してやるぜ、デク。けどな」

うんうん、いいね、甘酸っぱいね、昔を思い出すよ、そっか、青春っていいなあ。

「あんなに細くてヒーロー出来るのかな？」

はい？

「華奢じゃねえ、折れそうだ。触った感じ、筋肉もついてねえ。ヴィラン相手に戦えるのか不安だ」

えっと、触ったの、爆豪君。

「筋肉を見るためです、相手も納得してくれました」

うわ、完全に邪な気持ちない奴です。普通、高校生が異性に触ったら、何かしら思うことがあるじゃない。

柔らかいとか、自分と違うとか、異性なんだなあとかさ。色々甘酸っぱい気持ちがあるじゃないの。

なのに、異性に触って、『ヒーローとして』なんて言葉が出てくるなんて。

「かつちゃん、明日、相澤先生に言って訓練内容を見直そう」

「そうだな。あいつらじゃヒーローになったら死にそうだ」

「勉強のほうも、もつと高度にしないと。知識はあつて邪魔になるわけじゃない」

「ああ、参考書を作るぞ、デク。一郎さん、鎮守府の資料室を貸してください」

「お願いします」

あ、はい、どうぞ。

入口を開くと、二人は頭を下げた後、走って行った。

「なあ、コナン、俺は二人の育て方を間違えたのかな？」

「はあああああ。いいやヒーローとしては間違っていないだろうな」

「そうだよな」

「高校生としては間違っているだろうけど」

やっぱり、そうか。そうなのか。

普通、もっと高校生ならさ、もっと青春してもいいんじゃないの。

「マスター、あいつらが選んだ道だからな」

そうかもしれないけど。

「一郎君が、色々と憂えています。考えています、横顔が素敵です」

「ヒミコちゃん、何時からそこにいたの？」

で、なんでスマホオ片手にしてるのさ。

「夫の写真を撮るのは妻の役目ですから」

「誰から聞いたのそれ？」

「ギルさんから」

へえええええそつか、そつか、ここに來るか。

556 嫉妬は見苦しいものです、見ていて悲しくなります。でも矛先が違うところを向くと、見ていて微笑ましくなりませんか？

「あ、あの！ お名前をうかがっても？」

「・・・死柄木・弔」

「私は八百万・百といいます」

世界の何処かの片隅で、恋の花咲くこともある。

田中・一郎の知らないところで、創造と崩壊が出会いましたとき。

復讐は虚しいものです、終わった後に何も残りません、だから煽りましようと言われたようなもの

治崎・廻は考える。

ヴィラン連合に、オール・フォー・ワンに襲われたとき、護りきれなかったのは自分の未熟さ故に。

奴らがまた来た時にエリを護れるように、いや他の誰が襲って来ても護れるようにどうにかしないと。

「よう、治崎、何を考えてやがる？」

「オヤジ。俺は考えに考えました。エリを護るために今の死穢八斎會の屋敷は『温すぎる』と」

「で？ てめえは何か名案があるのか？」

問われて言葉に詰まる。名案があるわけじゃない、打開策など思い浮かばないのだが、どうにかしないととは思いう気持ちがある。

焦ってもいるかもしれないが、だからといって手段を考えるだけの知識はない。

「何もねえのかよ」

「オヤジは何もないんですか？」

「俺たちが鍛えるしかねえな」

「それは当り前の話でしょうが。俺達はエリを護るために」

言い掛けて、ハツとした。

「ここは日本、日本で護るべきといえば姫、姫といえど何処に住んでいるかを。

「オヤジ、思いつきました」

「なんだ？」

「城を作ればいい」

決め顔でそう告げると、オヤジはポカンとした顔をした後に、両手を組んで顔をうずめた。

「治崎、てめえは」

呆れているのか、怒っているのか。しかしここは退けない、どうやって説得しようかと考えている彼の前で、オヤジが立ち上がる。

「名案があるじゃねえか!!!」

「そうでしょうオヤジ!!」

「ああ！ 作ってやろうぜ！」

「無論です！」

そこで二人はがっしりと握手し、同時に叫んだ。

「姫路城を！」

「名古屋城を!!」

スーと冷たい空気が握り締めた手の間を通り抜けた。

「おい、治崎、聞き間違えか？ てめえ、名古屋城つてのはどういう了見だ？」

「オヤジこそ姫路城なんてものは、何を考えているんです？」

「は、言うようになったな、餓鬼が」

「耄碌したのかよ、ジジイが」

二人の間に火花が散る、握り締めた両手は離され、やがて二人は拳を握りしめ相対した。

緊張感が高まり、やがてどちらともなく動き出しかけた時。

「たわけどもが!!」

「は?!」

「え、英雄王?!」

金色の光を纏い、我らが愉悦王推参。その片手には何かのプラモデルが握られてい

る。

「エリのための城など一つしかなかろう！」

「それは!？」

「あんた正気か?!」

驚く廻とオヤジの二人を見下ろし、ギルガメッシュは大きく頷く。

「正気だとも。エリのために我自らが助力してやろう。この地に築くは『江戸城』一択のみよ!!」

その声は、再建中の死穢八斎會の屋敷すべてを満たしたのだった。

どうも、田中・一郎です。

「きゅわきゅわ綺麗にしゅわしゅわお見事」

今日もうちの妻は絶好調です。何が嬉しいのか、楽しそうに掃除をしている姿に、俺の心はもう舞い踊ってしまつて。

「あれはな、マスター」

「コナン、言わないでくれ、俺はもうお腹一杯だ」

誰が作詞したとか作曲したかなんて、俺は聞きたくない。もう毎日のように家事ソングを聞いていて、耳に残っているんだからな。

「作詞、デク。作曲、爆豪だ」

「なんて言った、お前？」

「最近、推理してないな、と思うんだ。俺は探偵なのに、推理してないなあつてさ」

あれ、不味い。なんでそんな哀愁を背負っているのさ。え、コナンが追い詰められて禁断症状って、そんなこと今までは一度も。

あ、あつたな、うん。いつもの通りだ、この後に店の経営戦略とかやらせておけば、そつちへのめり込んで忘れるだろう。

きつと、そうだ。ダメなら令呪使えばいいし。

「一郎さん!!」

「なんだよ、エル？」

なんでそう滑り込んでセーフみたいなの恰好で、いきなり家の中に入ってくるのさ。

え、なに、おまえらつて一々ポーズ決めないと登場できない病気にでも、かかっているのかな。

だとしたら医者を用意してやろう、腕のいい外科医だ。おまえらの頭の中をえぐつてやる。

「二郎さん酷いです、僕で遊ぶだなんて。昔の素直で優しい貴方は何処に行ってしまったんですか？」

「はい？」

え、何それ。エルで遊ぶつてどういう状況？

は?!

「ま、まさか一郎君に、そんな趣味があつたなんて。確かにエル君は見た目は完全に美少女、服装をそれなりに整えたら丸っきりの美形だけど、でも性別は男なのに。いえいえ、旦那様の趣味を悪く言うなんて妻としては失格。でもでも、男色が趣味なんてどうすればいいの。もしかして、私との結婚はカモフラージュだったの。昨日、あんなに激しかったのに、もうヒミコは一郎君のテクニクにメロメロなのに、同性愛者だったなんて。迂闊よ、ヒミコ、もしかして私との後に、エル君とソープさんと一夜を共に。はうううう！ 美形二人に囲まれた旦那様、なんて魅惑的なの。いえ、待ってヒミコ、ひよつとしてまさかとは思うけど、弔君とも？ ダメよヒミコ！ その想像は私の体に

悪いわ！ 私のレベルが足りないの!! いえいえでもよ、でもなのよ。もしかしてそういう趣味と共に、妻も一緒になんて。はう!? 私の旦那様はなんて鬼畜なの！ そこにしがれる憧れるうう!!」

おう、なんだろう、ヒミコちゃんが悶えているんだけど、何故か彼女の言葉が聞こえないぞ。不思議だなあ、はははははは。

「現実逃避するなよ、マスター。で、エルはなんだって?」

「はい！ 鎮守府の資材がありません!」

「え?」

「おい、ウソだろ」

マジですか、嘘でしょう。だってあんなにあつた資材が消えるなんて、そんなバカなことする奴なんて、エル以外にいないじゃない。

「僕じゃありません。僕ならすでに使い切っていますから」

「誇るなよおまえ！ なんで毎回毎回！ 報告を後に持つてくるんだよ!」

「ロマンの実現には犠牲が付きものなんですよ!」

「犠牲を他にも出すなよ！ その前に犠牲なんて出すなよ!」

「いいじゃないですか！ 貴方のものは俺のもの、俺のものは俺のものです!」

「何処のガキ大将だてめえ!!」

こいつ、一度、本気で締めておかないとダメか?!

「あ、間違えました。ロボットののためにすべてをください、お願いします」
「ブレないなあ、本当におまえは」

はあ、まったくもう。

「二人とも落ち着けて！ エル、本当にないのか？」

「はい、ありません。もう倉庫が空っぽです」

「あれだけの資材がなくなるなんて、誰が使ったんだ？」

そうだった、今の問題はエルじゃない。資材が空っぽなんて、そんなことありえないのに。

エルじゃないとなると、誰だ。ソープは、資材を使う前に報告するし、アインズは使わないし。

ギルは、自分の宝物庫を使うだろうからな。

「誰なんだろう？」

「ただいま、一郎」

「お、御帰り、弔」

買い物、お疲れ様。

「そういえば、ギルが死穢八斎會のところに行ったが、何か聞いているか？」

「ギルが？ いや、俺は聞いてないけど」

あれ、何か嫌な予感がする。

あれえくくまさかのギルが犯人説が浮かんできたぞ。

「それとだな」

「まだあるのか？」

「死穢八齋會の屋敷が『江戸城』になっていたが」

弔の言葉に、俺とコナンとエルは一斉に頭を抱えたのでした。

「おまえかギルガメツシユウウウ!?」

まさかまさかの真犯人だったよ！

江戸城はすでに失われている。現在が何になっているか、俺は知らないけど、確か現存してないはず。

はずなんだけどなあ。

「立派な江戸城だね」

あ、うん、立派だな。凄い立派なんだけど、江戸城っぽい建物に見えなくもない。

「げ?!」

「こ、コナン、何だよ。どうしたんだ?」

「いや、ちよつとな。ハハハ、マスター、凄い悪い話と、ちよつと悪い話があるんだが、何から聞きたい?」

「えくくく何その最悪の二択?」

コナンもこんな時にジョークを交えるユーモアを身につけたらしいいな。いいよ、いいよ、平穏な世界においてジョークは世界を回す潤滑油らしいから、存分にやってくれよ。

ただし、俺にダメージが来ない方向で。

「マスター、現実逃避は止めてくれ」

「フ、いいじゃないか。俺は逃げたいんだ」

「じゃあ、僕から言っつていいかな?」

スープ、なんで俺を追い詰めたいんだ。珍しく、一緒に行くよってついてきたと思っ
たら、俺に対して愉悦かあ、おまえも随分と俗世に染まったなあ、この『天照』があ。

「いや、この場合さ、さっさと聞いておかないと後になって、一郎が困ることになるから
さ」

「そうか、優しいなスープは」

「いいよ。で？」

促され俺は深呼吸を何度かして、コナンに顔を向けた。

「いいぞ」

「じゃちよいと悪いから。あの江戸城の外壁とか、城の基部とか、鎮守府の資材だ」

「ギルガメッシュウ!! おまえの罪は重いぞ!」

あいつ本当に何してんの! この城を築くために資材を持っていたの! なんでお
まえの宝物庫を使わないんだよ!

あれ、でもこれがちよい悪い話って、もっと悪い話があるんだよな。

あ、解った。そっか、そうだよな、ギルが関わっている時点で察するべきだよな。俺
も何を忘れていたんだろう。

「気づいたようだな、マスター。じゃ答え合わせと行くか」

「いいや、コナン、俺はもう帰る。帰ってヒミコちゃんに膝枕してもらって、癒されたい」

「は！ 馬鹿いうなよ、マスター。舞台は揃った、役者も待っている。ならば、後は主人公が踊る番だろ？」

「俺は主人公じゃない、一般人Aだ」

「いいや、おまえは主人公だ。周りをひつかきまわす喜劇役者の中で、右往左往する主人公だよ」

「コナン、冷たいな」

「仕方ないだろ、俺達はまだ『演劇の中にいる』だからさ」

肩をすくめる仕草、本当に様になっているよ、コナン。

「解った、いいぜ」

「助かるよ、マスター。なら言うぞ」

「ああ、もう俺もここまでか」

「悲観しなくていいぜ、もう悲劇は始まっているんだからな。あれ、全部、宝具だ」

「もう嫌、どうしたのうちの英雄王」

本当に何で。あの門のところに飾ってある楯って、マシユって子が使っていた楯でギヤラハツドのじゃなかつたっけ？

原典しかないって話じゃないの、なんであの子の宝具が入っているの。え、あそこの柱に隠してあるのって、『アヴァロン』じゃないの。なにこの魔界、あっちにある槍って

誰の？

「カルナのじゃないか？」

「施しの英雄の槍かあ、ここら一帯が吹き飛びそうだな」

「……江戸城の屋根の中とか堀の各所に『ディングル』が配置されているな」

「ウルクじゃないんだからさあ」

本当、何してんのあいつ、なんでここまで死穢八齋會に力を貸しているの、え、そつちに鞍替えしたのか？

あ、不味い、ラツキーとか思った自分がいた。

「おおおお!! ようこそ我が師よ！」

「廻、あの馬鹿王は何処だ？」

門を開き出てきた廻に問い詰めると、彼は速やかに片膝をついた。

「我が死穢八齋會、以後、貴方様の組織の一員となります」

「はい？」

え、待つて、何それ。どういうこと？

「マスターよ、来たようだな」

「ギルガメツシユウ!! 出たな元凶が！」

「フハハハハ！ そう褒めるな、懐くな」

「誰が褒めた！ てめえ今度は何した?!」

そこでギルが怪しく笑い、右手を握った。

「平民の暮らしに飽きたのだな。さらなる愉悦のために死穢八齋會を下部組織として見た」

もう本当、勘弁してくれ。

俺は胃を抑えながら、そんなことを呟いたのでした。

馬鹿をいうギルを引つ張って店に戻ってきました。

廻も一緒です、エリちゃんはお留守番です。

「で?」

「ふむ、そう難しい話ではない。考えてもみよ、オール・フォー・ワンは確実にエリを狙っている」

まあ、それは解る。なんでか執着しているっぽういからな。あれ、あいつつてロリコンじゃないよな。個性に拘っているけど、そういうものに興味ないよな。

「前回の襲撃により死穢八齋會の家屋はすべてが倒壊、綺麗に消えている。故に、新しく建造するのは容易い」

「だからつてなあ」

「最後まで聞くのだ、マスター。現在の勢力図で考えれば、ヒーロー側、ヴィラン側共にそう差はない。この二つの勢力がぶつかれば、人民に少なくない被害でる」

いや、被害つてヒーロー側は人々を護るためにあるんだからさ。ヴィランはそういったこと考えてない。

「では、何故ぶつかると思う?」

「何故つて相手が許せないから?」

「違うな、『第三勢力がない』からだ」

え、コナン、そこで口を挟むつて何で。

「俺達の存在は関係者しか知らない。だから、ヒーローもヴィランも相手を叩きつぶせばいいと考える」

「そうだ、そこで我達が勢力を拡大させ、その姿を見せることで、ヴィランも迂闊に動きヒーローに攻撃を仕掛けても、その後に潰される危険性を感じさせると、どうなるか?」

「あ、迂闊に動けなくなる」

「ようやく解つたな、マスター」

なるほどなるほど、そうか。だから俺たちが勢力を増していき、二つの勢力へのけん制になればと？

「へえ、ギルつてそこまで考えていたんだな」

「フ、当然であろう、我がマスターの望みは平穩、それを手に入れるためならば我が宝物庫を使うのは当然のことだ」

「ぎ、ギル」

「そこまで俺のことを考えていてくれたなんて。疑つて悪かった、おまえはいい奴だよ。」

「褒めるな、マスター。我は当然のことをしているまでだ」

「褒めさせてくれ、今回ばかりはおまえの優しさが身に染みる」

「よいのだ、マスター。おまえは家庭を持った。ならば、その家庭を守るために我も全力で手を貸そう」

「ギルガメツシュ王」

俺は涙を流して彼に手を差し出した。

いい奴だ、本当にいい奴になってくれた。

涙を流して喜んでいる一郎を見ながら、コナンは隣で穏やかに微笑む英雄王にそっと問いかける。

「で、本音は？」

「第三勢力のトップとなったマスターの右往左往する姿が見たい」

「おまえ、いつかマスターに殺されないか？」

「フ、我がマスターは敵に苛烈かもしれないが、身内には甘いからな。そう言ったことはなからう。そもそも、語ったことは半ば本気であった」

「エリを護るためにか。死穢八斎會が俺達の傘下と知れたら、迂闊に手を出さないって思っているのか？」

「当然だ。次に何かしてくるならば、我は迷わずに『乖離剣を抜く』ぞ」

「はあ、まったくお前は」

笑うことなく真顔で語るギルガメッシュに、コナンは盛大に溜息をついた。

「仕方あるまい、今の我は田中・一郎のサーヴァント。マスターの身の安全は最優先であらう？」

「まあ確かにそうだけどさ」

「それにだ。これは治崎達への救済でも有る。復讐に走りかけたあいづらにとつて、見た目から完全にケンカを売っている城ならば、少しは慰めにもなろう」

「慰めねえ」

胡散臭そうにつぶやくコナンは思う。

前に襲撃してきた時、簡単に倒せたから相手はなめている。もう一度やっても同じだろうと、考えるのだろうか。

否だ、そんな甘い考えでヴィランを率いれるわけがない。

だとすると、これは復讐は無意味と語りつつ、相手側に強烈な挑発を行っているというところか。

『もし次に来たら、おまえらは全滅だ』と。

「ギル、おまえ、まさか」

辿り着いた答えに名探偵が冷や汗を流していると、隣に立つ英雄王は『笑っていない目で』笑顔を向けてきた。

「フ、それ以上は語る必要はないな」

静かにそう告げて歩きだすギルガメッシュの背中に、コナンはポツリと呟いたのでした。

「結局、おまえが一番、頭に来てんじやねえか」

どっとかかる心労を感じながら。

地雷を踏み抜いた気持ちで頑張っていたら、大地を割っていた。そんな話

その日、俺は信じられない話を聞いた。

「ギル、激怒しているぜ」

「へ？」

どうも、田中・一郎でございます。

いやいやいやいやいや、なんだってコナン？

まさかそんなことあるわけないじゃないか、だって今だってソファアに座ってワインを飲んでるんだぜ。

どこも変化、あ。

「うわあ〜」

気づかなかった。本当にマジで解らなかつた、うわあ俺って馬鹿じゃないか。ヒミコちゃんと結婚して浮かれていたのか。

「ギルが『カギ』を握っている姿って、久し振りに見るな」

「だろ？ どうするんだよ、マスター？」

どうするって。あんな状態のギルがもし、オール・フォー・ワンと出会ったら開幕に『エア』だろうが。やだぜ、俺、『星』が降ってくる世界で平然と生活なんてできないし。うん、そうなったらオールマイトから凄い勢いで怒られる、いや待ったそんなことになつたらヴィラン指定になって、全ヒーローから狙われるんじゃないか。

「とにかく、沈めるか」

「鎮めるじゃないのかよ？」

「いや沈めるだ。いざー！」

仕方ない。ギル、おまえは悪くない。悪くないけど、今回ばかりは状況が悪い。申し訳ないな、ギル、おまえは俺のために色々としてくれたのに。

裏切らせてもらうぜ。

「ユニコーン、ゴー」

「は~~~~い」

トテトテと可愛く歩いていくユニコーンは、やがてギルの近くまで行って、一言。

「ギルは笑っているほうがカッコいいよ」

「……フ、マスターよ、コナンよ。俺の弱点をついてくるか、良からう」

あ、不味ったかな。

不意に立ち上がり、ギルは『エア』を抜いた。

「ならば見るがいい！　これが英雄王の生き様よ!!」

そういつてあいつは金色の鎧を纏って、『エア』を掲げた。不敵に笑う姿は何処までも素晴らしくかつこよくて。

「これでよいか、ユニコーン？」

「うん、じゃあ私も！」

その瞬間、俺は思った。ギル、すまない、と。

「回避!!」

「貴様らああ!!」

遠くからギルの叫びが聞こえ、そして彼の前でユニコーンは禁断の艦装を使った。

「我が人生に、一片の悔いなし」

遠くからギルの声が聞こえ、続いて何かが崩れ落ちる音がした。

「猫耳ロリっ子メイド、上目遣いアタック、成功」

「マスター、そのうちギルに殺されないか？」

「はっはっは！　昔のギルなら確実に殺されていただろうけど、今のギルなら笑って殴って許してくれるさ」

たぶん、な。でも、激怒状態のギルをそのままにするくらいなら、俺に怒りが向いた

方が。

「二郎君！」

「あれ、ヒミコちゃん……え？」

そして俺の視界にミニスカ和服の猫耳つけた嫁さんが映ったのでした。くっそお、やつぱりこの手のことに関しては、ギルのほうが上手かあ。

「痛み分けとしよう、マスターよ。貴様はやはり、私のマスターに相應しい」
「褒めるなよ、ギル。いいぜ、痛み分けにしよう。俺のサーヴァントがおまえで本当に良かった」

「褒めるでないぞ、マスター。貴様は我が最後に引導を渡してやろう」

「よせよギル、そんな強がりをするなよ。おまえが弱く見えるぜ」

そんなことを俺とギルは言い合いながら、床に転がっていた。

血が足りないんだよ、血が。店の床一面を血に染めた俺達の戦いは、両者ダウンで終わったのでした。

うん、血とかつて中々に綺麗にならないって話だけど、なんかアインズが『ルーン文字で綺麗綺麗』とかやったら、一瞬で綺麗に消えたよな。

すげえな、うちのオーバーロード。

一家に一人いれば、大掃除が十分で終わるぞ。

「で、なんでそこまで怒るかな、ギル？」

「我のプライドの問題だ。マスターにはあまり関係ない」

「へえ、そっか、そっか。それってどの？」

正直、ギルのプライドってかなり広いつていうか、深いつて言うか。どれがどんな怒りに繋がるか解らないんだよな。

最近じゃ、そんなものあったのかってくらいに、とても懐が深くて優しいことが多いけど。

「無論、紳士としてだ」

そっか、そっか、エリちゃんが泣いていたからなあ。まあ、俺も人のこと言えないか

ら今回の話は、忘れようか。

「頼むから、ギル、あいつは『俺達の獲物じゃない』からさ」

「……よからう、ここはマスターの顔を立てよう。しかし、次に奴が愚かにも手を出してきたら」

「その時は俺が命令するさ」

二度目はないからなあ。

まあ、そうなる前にオールマイトが何とかしてくれることを祈ろう。

「で、だ。ギル、俺はおまえに言わなくちやいけないことがある」

「我にマスターが苦言を呈すると？ 中々に面白いジョークだ」

「いや、おまえね、資材を使った言い訳をして来い」

「フ、我がどう動こうと貴様以外の誰の許可が必要だというのだ？」

大笑いするギル、そうだよな、おまえの行動を制限するとか縛るなんて、今まで誰もやっていなかったよな。

でも今回ばかりはな、色々なところが怒っているんだよ。

「いいんだね？」

「ソープか。貴様程度が」

「いいんだな？」

「エンタープライズもか。貴様らがいくら束になろうとも」

「いいんですね?」

「吹雪だとお?! 待て貴様!」

「いいつてことですか?」

「大和?! 貴様、その聖剣を抜くというのか?! かの騎士王が許すはなかりう?!」

「いいつてことですよ?」

「エルもか?! 貴様は普段からやっていることだろう?!」

「いいの?」

「イオナ?! 貴様らこの英雄王を前にして何を企んでいる?!」

うわあ〜珍しくギルがフル装備でございますよ。鎧だけじゃなく『王の財宝』まで展開して下がっているギルなんて、凄く珍しい光景ですなあ。

あ、大和が抜いた。なんでもの子は、騎士王の聖剣が艤装に入っているのかな、まったく繋がりないはずなのに。

吹雪つて『エア』を壊せるって言うていたけど、本当かな。エンタープライズの光子魚雷つて、中身に反物質が入れられるって話もあるけど、何処まで本気なんだろ。

「ギル〜〜頑張れえ〜〜」

「謀ったな?! マスター貴様あ!!」

「フ、君が悪いのだよ。私たちに内緒で、皆が集めた資材を使いきるから」
「普段からエルがやっていることだろう?!」

確かに、普段からエルは資材を勝手に使っているけど。今回のギルとエルは決定的に違う部分があるんだよ。

「エルが作った装備、すべて鎮守府関係」

「そうか、我としたことが見落としてたのか。ふ、やはり怒りは王の目であつても曇らせるのか」

「ああ、他人に使ったおまえの罪は深い」

残念だよ、ギル。今回ばかりはおまえに勝ち目はない。

「ふ……ふはははははは！ マスターよ、貴様は失念しているようだな？」

「な、何を？」

「この我が『誰であるか』を!! 貴様は忘れていたようだな!!」

「何を言っている!?! この状況で逆転できる手段などない!」

そうだ! 今のギルに逆転の一手はない、ないはずだ!

「開け、宝物庫よ。さあ、我が使った資材はどれほどだ? よもや、この宝物庫の『資材』よりは多いとは言えないな?」

「く、くっそおおお!!」

ニヤリと笑うギルが叩きつけた資材に、俺達は膝をついたのでした。

「フハハハハハ!!! 甘い! 甘いぞマスター! まさか我がその程度、見抜かなかつたと?! 我が怒りを感じていたと?! 名探偵も衰えたものよな?!」

「き、貴様! まさか最初から?!」

「当然であろう! 我こそは王の中の王! 英雄王ギルガメツシュ! 我に見通せぬものなどないのだからな! 最初からこのための話よ! 今この瞬間! 貴様らが顔を歪ませ敗北し! 我的資材の前に崩れ落ちる瞬間のための布石よ!」

「ギルガメツシュうううう!!!」

「抗うかマスター?! よかろう存分に抗うがいい! この我的資材を前にして足掻けるものならばな!!」

ちつくしう! そんなわけあるか! あの資材があれば、もっと艦装を強化して色々と作れて。

「鎮守府の強化ができますね?!」

「待て、エル、何を言っている?」

あ、ギルが素に戻った。

うん、俺も疑問がある。え、何を言ったの、エル?

「何って、鎮守府の強化をするんですよ。もっと強力にして、銀河を貫く一撃を」

「いや、今のままでいいじゃない」

「何を言っているんですか?! 今のままじゃ星を砕く程度です! もっと強力にもっと強くならないと! 目指せ、『エア』ですよ!」

あ、うん、なんだろう、そっかそっか、えっと。

「ギル、頼む」

「いくら我でも暴走中のエルは不可能だ。マスター、我らはどうやら調子に乗ったようだな」

「そっか、そうだなあ。ギル、今日は飲もうぜ」

「付き合おうぞ、マスター」

そう言っただけで俺とギルは肩を組んで黒霧の店へと向かった。

「いやー郎さん、貴方は未成年でしょう?」

「ガッデム!!」

畜生! 転生してもその言葉は付きまとうんだな?!

馬鹿騒ぎをした一郎が店の奥で泣いている。その横で笑顔でホクホクしながら看病するヒミコがいるが、誰もそこに突っ込まない。

『弱っている一郎君を看病する、私は奥様、ああ、素敵』とかうつとりした顔で呟いたが、まったく気にしない。

弔はそんな父と母の姿を見つめた後、『息子として立派に働こう』と固く決意した。

店の準備を終えて看板を出す。今日のランチは少しだけ混雑しているようだが、捌ききれない数ではない。トツティとトルテもいるし、いざというときは艦娘から応援を貰えるようになっていく。

ギルは相変わらずソファで寝ているが、その横顔が少し蒼くなっているのは誰も気にしない。

彼も疲れることもあるのかと、一部の客からは不思議と安心感を得たと言われたが。

ランチタイムが終わり、そろそろ看板をしまおうかと考えていた時、店のドアが開いて爆豪とデクが入ってきた。

「弔さん、ちよつと連れがいます」

爆豪が真つ直ぐに見詰めてくるので、小さく頷いてカウンターの何時もの席を指差す。

二人の続いて入ってきたのは、黒髪の女性。見覚えがあるが、何処であったのか思い出せない。

「あ、あの、ご無沙汰しております」

「……誰だ？」

思わず素で聞き返すと、彼女が固まってしまった。

会ったことはあるだろう。記憶の何処かで見かけた気がするが、それが何処でだかは具体的に思い出せない。

「甲さん、知りあいじゃないのか？」

「ええ?! 八百万さん、知っているって言ってなかった？」

「は、はい、前にお会いして挨拶を交わしております」

爆豪が聞いてきたが、覚えがない。デクは本人に確認して、その本人が告げた内容に甲は首を傾げた。

「会ったことはあるだろうが」

「助けていただいたので、お礼も言いましたわ」

「……」

はつきり言つて、弔には覚えがない。いや、『覚えがあり過ぎて』解らないと言つた方がいいか。

日常的に人助けはしている。『ザ・ハンズマン』として、死柄木・弔としてでも。困っている人には出来るだけ手を伸ばしてきたから、彼女が言うような状況はいくらでもあつた。

「すまない、覚えていない」

「そう、ですか。一言、二言としか交わしておりませんでしたから、無理もありませんわね」

ちよつとだけ落ち込んだような顔に、弔は興味を失いそうになつて思い直す。前に一郎に『知らない人でももつと優しくした方が』といわれて、最近はそういつたことを考へて人と接するようになつていた、と。

「覚えていないから、少し話さないか？ 状況を教えてくれたら、思い出すかもしれない」

優しく、丁寧。一郎にするようには無理でも、顔見知り程度の相手くらいには話ができるかもしれない。

「はい喜んで！」

落ち込んだ少女が一転、笑顔になつて話をし出した。これでいいのだろう、と弔は思

いっつも料理のために手を動かす。

「今日は俺が奢ろう。爆豪とデクも、よく連れてきてくれたな」

「ウツス！ ゴチになります」

「ありがとうございます」

二人からの礼を受取、何時も二人が注文する料理に取りかかる。

「そっちは？」

「私ですか？ その申し訳ないのですが」

「適当に言ってくれて構わない。材料さえあれば大抵のものは作れる」

「そうですか。では、オムライスを」

どうしてその料理を頼んだのか、弔はちよつと疑問を感じたが、注文されたならば作るだけだ。女性を悲しませた、墜ち込ませてしまった以上、料理人としてもヒーローみたいなものとしても、手を抜かず最高のオムライスを出してやろう。

「このお店の噂は前から聞いていました。まさか、『弔さん』がシェフのお店とは知らず」
彼女の言葉に、爆豪とデクは首を傾げる。

初対面に近い時に、彼女が苗字ではなく名前で呼ぶことがあるのか、と。

「助けたって話だけど、何処で？」

「恥ずかしながら道に迷ってしまった時に、男の人に声をかけられて。お断りしたので

すが」

「ナンパか。そりや災難だったな」

爆豪がそう口にする、彼女は小さく頷く。

「殿方があのように強く迫ることがあるのですわね」

困った顔をする彼女に、そりやそうかもなど誰もが思ったのだったが、ここにいる男三人は『そつちの話』には敏感ではなく、また年相応に育ってはいない。

街中で八百万・百のような女性が歩いていたら、声くらいはかけるだろう。見た目よし、声もよし、丁寧な対応などされたら、普段からナンパなんてしている連中から見れば、『鴨がネギを背負っている』ように見えるだろうから、絶対に逃がさない。

「一人で歩いていたの？」

「ええ、探している店がありました。その、このお店です。噂では、とても美味しい料理を出すとのことでしたから」

「確かに、弔さんの飯は上手い」

爆豪は手を組んで真つ直ぐに弔を見つめる。一種の憧れに近い感情が瞳に灯っているが、シエフは苦笑しながら首を振った。

「俺程度はいくらでもいる。あまり煽てるな」

「そんなことないですよ！ 弔さんの料理、とても美味しいから」

「ありがとな」

デクからの称賛に、素直にお礼を述べた後、弔は二人の前に料理を置く。

スペシャルトッピング、カレーライス。ハンバーグとウインナーが乗った、二人が訓練が終わった後に、家の夕食まで持たないとこぼしていた時に作った特別メニューだ。

「それでこれが」

八百万・百は、目の前に置かれたメニューにちよつと驚いた。オムライスを頼んだのに、目の前にあるのはチキンライスのみ。

「オムライスだ」

フワツとその上に卵が乗り、自然と広がって行つた。まるで金色の衣が広がるように、ゆつくりとチキンライスを覆い隠した卵に、彼女の頬が緩む。

「さあ、暖かいうちに召し上がれ」

「いただきます！」

声を揃えて三人が食べ始める姿を弔は眺め、少しだけ微笑む。

美味しそうに食べてくれる人がいるから、料理人は止められない。嬉しそうに楽しんでくれるから、この瞬間はとても癖になる。

彼女はそれを真つ正面から見えました。真顔でそつけない態度でいる彼が、一見では冷たそうなシェフが、お客が食べる時に不意に見せる穏やかな笑顔。

とても暖かくて、柔らかく微笑む彼を見て、思わず頬が染まったのを彼女が自覚したかどうかは、誰にもわからないことだった。

「なあ、一郎」

「なんだよ、弔」

「頬を染めた女性って、可愛いな」

「・・・・・・はい？」

その日の夜、弔が妙なことを言っていました。

「え、うん、何があつたの？」

「弔君、何があつたんですか?!」

思わずヒミコちゃんまで詰問する中、弔はノートを取り出してペンを走らせる。

「そうか、この感情でチョコレートを作ればバレンタインは売れるのか。そうか!!」

「よっし、何時も通りの弔だ」

「弔君、もつと異性に目を向けましょう。なんだか心配になつてきました」

一心不乱にノートにメモを取り、料理を考える弔に、俺とヒミコちゃんは不安そうな顔を向けたのでした。

あれ、これって子供を心配する親のような、まさかねえ。

春ですね、青春してますか、色々と世間は騒がしいでしょうが、学生生活はたった一度なので、青春しましょうよ

とある日の放課後、爆豪と緑谷は職員室にいた。

「先日件のだ」

相澤に言われ、二人は姿勢を正す。すでに反省文は提出済み、誠心誠意に謝ってはいたが、悪いことしたかといわれて二人は黙った。

間違ったことはしてない、正しいことをしたつもりもない。ここは雄英でプロ・ヒーローはたくさんいる。今は学生の身だから、先生に頼るのが一番で、真っ先にクラスメートを逃がすことが優先だったはずだ。

それを、横から無理やりに介入した。止められていた『能力』を使って、隠しておいたはずの正体を晒して。

「ヒーロー公安委員から、二人を即刻、『引き渡す』ように話も来ている」

そこまでか、と二人は衝撃を受けた。確かに自分達は好き勝手に動いた。助けてと言われたら、黒霧の能力を使つて世界中のどこにでも行つた。

当然、今のヒーロー社会を担っている存在からは疎まれるだろうことは、一郎からも言われているしコナンからも忠告を受けている。それでも、じつとしていられなかつた。

助けての声が聞こえるから、助ける力があるから、いずれ自分達がどうなるか想像はついても、止まれなかつた。

「しかし、引き渡すような命令ではない。あくまで要請といった形だ。あちらでも意見は割れているらしい」

相澤の隣に立つオールマイトは、小さく頷く。

「今は私がいる、だが次はということだ。爆豪少年、緑谷少年。今のヒーロー社会で、学生の身でありながらそこまで『ヒーロー』できる存在はいない」

「だからこそ、逮捕するよりはいつそのことプロ・ヒーローとして登録しては、という話もある」

困つた話だ、と内心で相澤は思う。

二人の実力は確かにプロ・ヒーロー並だ。上位のヒーローと比べても、下手をしたら

二人一緒なら上位三位の誰と戦っても引き分けられるのでは、と考えるくらいに頼もし
いものだ。

しかし、だ。相澤としては二人をプロ・ヒーローに『したくない』。現在の二人は実力
と知識は素晴らしいものでも、『現在のヒーロー社会のヒーローとして』致命的な欠点が
ある。

「そのため、ヒーロー公安委員からは命令的な形では来てはいない。もちろん、俺はおま
えらを引き渡せと言われたら、否と答える。理由は解るか？」

問いかけに、爆豪と緑谷は迷わずに答える。

「実力不足です」

「あんな、お前ら。本気で言っているのか？」

「先生、俺たちに足りないものがある。だから一郎さんは、俺達を引きとめてねえんだ」
「もし、僕たちが本当にプロとしてやっていけるなら、一郎さんはとつくに試験を受けて
来いって言っていますから」

迷わずに真っ直ぐに、心の底から信じている発言に、相澤は同意を示した。

「だろうな。彼から見ても、おまえらには足りないものがある。なるほどな、だから『実
力不足』か」

「ああ、戦う力だけが実力じゃない。誰かの力になること、誰かの心を励ますことも実力

のうちだ」

爆豪が手を握り、何かを見つめるように開く。

「僕とかつちゃん二人なら、誰に負けない自信はあります。でも、戦って勝つだけじゃ『理想のヒーロー』には遠いから。だから、一郎さんはもつと色々と学べって意味で、今も学生を続けさせているんです」

緑谷は真つ直ぐに相澤を見つめつつ、ギュツと拳を握っていた。悔しいと表に出すことなく、自分の内心にとどめるように。

「学生生活はコミュニケーション能力を学ぶ一番の場所だからな」

何処かふてくされたような顔で、爆豪はそう呟いた。

「それだけじゃない。おまえら二人は、もつと違うところで実力不足だと俺は判断した」
相澤が二人を見つめ、真つ直ぐに言葉をぶつけてきた。それに対して二人は大きく頷く。

「だからまだ学生で学ばせてくれ、先生」

「お願いします。僕たちはまだまだ『あの背中に追いついていない』」

「当然だ。だが、やり過ぎるな。いいな、問題児ども」

「はい!!」

威勢良く返事をした二人を退出させた後、相澤は深々と溜息をついた。

「田中少年に会ってきます、相澤先生」

「そちらは願います、オールマイト。私はこちらを」

相澤の机の上に、ヒーロー公安委員の名前がついた封筒が置かれていた。

『シンガー・ボマー』、『グリーン・シップ』の兩名の現在の活動を、黙認する。ただし、二人がヴィラン的な行動をした場合は、

「まったく、二人はまだ学生なのにな」

小さく嘆息しつつ、相澤は封筒を引き出しにしまった。

新入学生の教室は、それぞれ知り合いのごとに集まって、派閥的なものが出て来るとい人もいる。

誰だっけ初対面の人に根掘り葉掘りなんて聞けないし、失礼だと思って尻込みしてし

まうことが多い。

しかし、世の中には対人能力がずば抜けて高い学生もいる。あるいは失礼、何それ美味しいの的に気にしない人も。

教室に爆豪と緑谷が入ったとき、クラスメートたちは自然と視線を向けてきた。先ほどまで会話していたはずなのに、誰も話すことなく歩いてくる二人を目で追ってしま

う。
周りの空気が少し硬いこと、自分達が見られていることを知りながらも、爆豪と緑谷は気にした様子も見せずに自分の席に座る。

前の事件からこんな雰囲気の日だ。無視されているわけじゃない、話しかけたり話しかけられたりしたら、普通に会話をするのに。

誰もが何か『腫れもの』に触れないように、会話をしている。

理由は、誰もが解っている。

「ああもう!!」

机をたたき立ち上がる影が一つ。

大股で歩きながら彼女は爆豪の前に立つ。

「質問いい?!!」

「なんだよ?」

「爆豪が『シンガー・ボマー』なの?!」

言ったぞあいつと誰もが目線で驚きを示す。前の事件の後から誰もが聞きたくて聞けないことを、場の空気とか周りの雰囲気とかに流されて質問出来なかったことを、真っ直ぐぶつける彼女に周りは一種の尊敬を向けていた。

「ああ、そうだ。そう『名付けてもらった』」

「名付けてもらったって誰に?」

「みんなだ。俺は自分で名乗ったことはねえ。誰かが助けてって、絶望の中で叫んでいるから助けた。その人たちが、俺に名前をくれた。だからイエスであると同時にノーだ。俺のための名前じゃねえ」

「そっか、そうなんだ。でも、『シンガー・ボマー』って言われて活動してたのは爆豪ってことでいい?」

「そうだな」

芦戸・三奈の質問に爆豪は、真っ直ぐに答える。

未だに名前が重い。でも、貰った名前を捨てることも、否定することもしたくはないから。

「じゃ緑谷が『グリーン・シップ』なんだよな?!」

切島が興奮したように立ち上がり、真っ直ぐに問いかけてきた。

「僕もかつちゃんと同じで、皆に名付けてもらったから、はつきりと名乗れないけど。うん、そうだよ」

「すげえええ!! ああ噂の二大ヒーローがクラスメートかよ?!!」

クラス中に歓声が響き渡る。誰もがテレビ越しに憧れた存在がそこにいて、しかも同じクラスとして話ができるとは。興奮しすぎてまともな会話になっていないが、憧れが目の前にいるとはそういうものかもしれない。

「静かに!!」

それを止めたのはある生徒の怒声だった。誰もが声を出すのをやめ、彼を見つめた。飯田・天哉は立ち上がり声を出した姿勢のまま、動くことなく俯いていた。

「君たちは、免許もないのにヒーロー活動をしていたのか?」

絞り出すような声に、爆豪と緑谷以外の誰もが固まる。そうか、彼らはまだ学生、同じ雄英生なのにヒーローとしての知名度は高い。

もし二人がプロならば、学生として通っているはずがない。つまり二人はプロ資格もないのに、ヒーローとして動いていた。非合法に。

「ああ、そうだな。助けてって声に答えて動いたことがヒーロー活動なら、そうなるだろうな」

「何故だ?! それは違法だ! 犯罪ではないのか?!」

顔をあげ怒りに顔を歪ませて、飯田は叫んだ。彼も『シンガー・ボマー』と『グリーン・シツプ』の活躍は見ていた。どんな状況でも人を助け、ヴィラン相手に一歩も引かない戦い方は、見ていて憧れた、胸が熱くなった。

見ている人を鼓舞し、泣いている人を励ます。助けての声に真っ直ぐに向かっていく姿に、きつと高潔な人物なのだろうと勝手に想像していた。

裏切られたと思った、まだ学生で無許可で非合法で、そんな人たちに憧れたのかと自分の過ちのように感じた。

「犯罪かもな」

「かつちゃん、言い方」

「黙ってる、デク。いくら言いかたを変えても、俺達はプロじゃねえ。資格なんて持ってねえんだよ」

止める緑谷に目線だけ向けてから、爆豪は立ち上がり飯田の前まで歩いてく。

まさかのケンカか、誰もが心配そうにしている中、緑谷は『仕方ないな』と少しだけ苦笑していた。

「悪かった」

真っ直ぐに爆豪は頭を下げた。

ハッと誰もが固まる。短い付き合いだ、彼がプライドの高い男なのは解る。粗野で

粗暴で、喧嘩っ早いと見ていたのに。

「おまえの理想を裏切った。悪かったな」

「な、君は、なんでそこまで出来て、非合法的な活動をしていたんだ」

飯田は信じられなかった。今までの爆豪のイメージとあまりにかけ離れていて、けれど何処か心の中で納得してしまう。彼はやはり、誠実な人物だったと。

「見捨てられなかった。助けてと言われて、黙っていられなかった」

頭をあげて、爆豪は真つ直ぐに飯田を見つめる。

飾ることなく、言葉を少なく感情と想いを乗せる。多くの言葉を学んだ、文章を構築したり、論文を考えたりと色々な文章作成能力を得ているが、爆豪はそれらを使うことなく、単純に真つ直ぐな言葉を選んだ。

「デクも同じだ。俺とこいつはな、『助けて』を無視できねえんだよ。だから動いた、後ろ指差されても、ヒーローから恨まれても追われてもな。誰かが泣いて絶望の中にいたら、助けたいって思ってしまったからな」

揺るぎない信念が飯田の前にあった。

世間から疎まれても、大勢のヒーローから犯罪者として追われても、絶対に譲れない何かを彼の中に感じてしまう。

栄光や称賛なんていらぬ、ただ助けてと泣いている人の涙をぬぐえるなら、笑顔に

なってくれるならそれで十分だ。

真顔で見つめてくる爆豪の中に、言葉にならない想いを感じ取れた。

「……俺のほうこそすまない。君は、『シンガー・ボマー』は俺の理想の通りのヒーローだった」

小さく顔を反らし、飯田は告げる。一時の感情で、自分は自分自身の理想を傷つけてしまった。憧れの気持ちを蔑にしたと、後悔が滲み出る。

「前にある人に言われた、『シンガー・ボマー』は俺の勲章だ。でもそれは皆のものだつてな。だから、飯田がそう思つて俺に言うのは、間違つてない。謝ることはねえよ」

「いいや、それでは俺の気持ちが済まない。爆豪君、君はその名前に相応しい人物だ」
「まだまだ三流だけどな」

ニヤリと笑う爆豪に釣られ、飯田も笑う。

「三流か、なら俺も君に追いつける三流になろう。どちらが先に一流になるか、勝負だ」
「いいぜ、俺を抜かせられるなら抜いてみる」

「言つたな。後悔するなよ」

「爆豪・勝己だ。『シンガー・ボマー』って名前を貰っている」

そつと彼は手を出し笑う。

「飯田・天哉だ、まだ名前は無い。けれど、君を超えるヒーローになる」

ギョツと差し出された手を握り、彼もまた笑う。

「僕もいいかな？ 緑谷・出久、『グリーン・シップ』の名前を貰った未熟者だよ」

「ああ、こちらこそだ」

爆豪と手を離し、今度は緑谷を握手を交わす。

ようやく、自己紹介できた、そんなことを三人は思った。

「はいはい！ 私は芦戸・三奈です!!」

「ずるいぞ芦戸！ 俺は切島・鋭児郎！」

横から割り込んだ芦戸と、負けるかと突撃した切島に釣られて、一年A組は自己紹介をやり直した。

「心配しなくてもいいようですね、相澤先生」

「いい奴らですよ、オールマイト」

それを廊下で聞いていた先生二人は、小さく微笑む。

桜咲く、季節は巡る、青春っていい響きだなあ。

どうも田中・一郎です。

「田中少年、爆豪少年と緑谷少年に何か言ったかね？」

オールマイトが訪ねて来て、そんなことを質問してきました。

え、二人に？ 何か言ったかな？

「特には」

「雄英の受験をさせたのは、何故だろうか？」

え、雄英。受験させたって、どうしてってそんなの決まってるじゃないか。

「オールマイトが言ったんじゃないですか」

「……シット!! 私だったのか?！」

「いやいや、だってオールマイトがヒーローになるには資格が必要だから、雄英を受験しようって言ったから、二人は受験したんじゃないですか？」

え、何、何があったの、えっと今回の話はそう言うこと。

「確かに言った覚えがある」

「俺から二人に何処を受験しろって言った記憶はないですよ」

うん、俺から二人に何かいったことはな、よな？ 追い詰めたこともないし、何か強要したこともないはず。

強いて言えば、もつと二人は穏やかな生活をしてほしいなあって思うよ。なんで何時も事件に飛び込んでいくのか。そりゃ確かに二人は助けてって声を無視できないけど、だからって二十四時間働けますって昔のサラリーマンみたいなことしなくても。

「私が原因だったのか」

あれ、オールナイトが落ち込んでいるけど、どうして？ 学校で何があったんだろう。

そして、何故かギルガメッシュが楽しそうに笑っているんだけど。

「フ、あの二人もやるようになった。ヒーローなど暇つぶし程度と考えていたが、案外に楽しめるものよな」

「おい、ギル、爆豪君とデク君に何かしてないだろうな？」

「おいおいマスター、我をなんだと思ってる。我はただあの二人の信念を称えているだけよ」

称えるう？ おまえが？ 愉悦しているの間違いだろうが。

「フ、マスター、我もふざけていい場合とふざけるべきではない場合を選ぶ。英雄王たる

我はTPOをわきまえているからな」

「へえくくそつかそつか。で、本音は？」

「あいつらのクラスメート、マジで青春過ぎて、愉悦と思っていたが、昔を思い出して赤面してしまう」

「え？」

「甘酸っぱいとはこういうものだろうな。フ、久し振りに甘い酒が飲めそうだ」

あれえくくなんだかギルが穏やかに笑っているんだけど、何で、どうして。嘘だ、あのギルがこんなに優しく穏やかに二人を見つめるなんて、あるわけがない。

いや、待て田中・一郎。最近のギルはこう、近所の気のいい兄ちゃんっていうよりは、穏やかに優しく見守る父親みたいになっていないか。

まさか?! ユニコーンとかエリちゃんを見ている間に父性に目覚めたとかじゃないよな?!

「マスター、孤児院を開いても良いか？」

「ウソだろギル! どうしたんだギル?!」

「我自らが育てた孤児が、やがて英雄となつて共に座に上がる。愉悦ではないか？」

「それは愉悦ではなく楽しみじゃなくてですか?!」

「そうか」

穏やかに微笑むギルに、俺の中の何かが浄化されていく。ああ、そうか、ギルはこんなに優しい王様になったっていうのに、俺はあいつを信じられなくて嘘だとか愉悦とか。

うう、俺のほうが悪れてしまったのか。

「一郎、どうしたんだ？」

「弔、俺はもう俗世の汚れに染まってしまった。こんな卑屈な俺を見ないでくれ」

「そうなのか。ギル、そういうえば『どつきり成功』って看板は何処に持っていけばいい？」

え、なんて？

あれえくくく？

「ぎ、ギル？ まさか、そんなことないよな？」

「マスター、その通りだ。弔よ、ここに立てるがよいぞ」

「解った」

そういつて弔は俺の目の前に看板を立てた。

『どつきり成功、見よ愉悦が見えるぞ』だつてさ。

「てめえギルガメッシュ！」

「フハハハハハ!! マスターよ、いや道化よ！ 見事な顔だつたぞ!! 自らが卑屈になつたことを知り膝を折つた貴様は、見事に道化だつた！ いいぞ特に許す！ 我の腹

をよじるほどの笑いを許してやろう！」

「おまえはあ?！」

信じた俺が馬鹿だったよ!!

「あれ、ギルさん、どうして顔が真っ赤なんですか?」

「黙れ、ヒミコ。今の我は普段とは違う」

「ええ〜?」

「そつとしておいてやれよ、ヒミコ。そいつ、珍しくマスターに尊敬されて、赤面して
るだけだから」

「名探偵、余計なことを言うな。我はもう寝るぞ」

「はいはい、まったく素直じゃないだからな」

桜は咲きましたか、春らしくなりましたか、ではお花見で騒ぎませんか？

少し暖かくなって、また寒くなって、今年は季節感があまりないかなって思っていたら、ちよつと暖かくなって。

どうも、田中・一郎です。現在、絶賛、手を繋がれています。

「今日も元氣にお買いもの、どんな日でも楽しくお買いもの、誰でも知っているお買いもの、今日のごはんはなんでしょう、毎日見ている旦那様、今日は困ったことないですか、私は奥さん、貴方のためにお買いもの」

絶好調です、俺の嫁さん。

手を繋いで滅茶苦茶可愛い笑顔で、スキップしているように歩く奥さんに、俺はもう嬉しくて楽しくて。

「いい日だな」

で、弔もいて俺の右手を握っている。繰り返すけど、俺の右手を握っているんだよ。で、弔の左手は俺の右手を持っていて、弔の右手はヒミコちゃんの左手を握っているわけなんだけどさ。

おかしくない？　なんで俺とヒミコちゃんが手を握っているんじゃないか、弔が間にいるのかな。え、マジでどうしてそうなった。

「おい、弔」

「子供は両親の間にいるものだ」

「その設定、まだ引きずりますか？」

「俺は今、幸せだ、一郎」

ク、卑怯だぞ、お前。そんな清々しい笑顔で言われたら、否定できないじゃないか。クツソ、てめえ。

「今回だけでぞ」

「一郎、ありがとう、おまえは俺の最高の父親だ」

「だから！　同い年！　俺とおまえは同い年！」

「照れなくていいぞ、父さん」

「おまえね！」

「いいですね、一郎君。お父さんですか、いいですね、弔くん？」

「解っている、母さん」

おい、お前。なんでそんな笑顔でヒミコちゃんを見るかな、いや解った解ったから何も言うな。悪ふざけ半分で、懐かしさ半分だつて解る。そう呼びたい気持ちも痛いほど解るから。

だから、おまえとヒミコちゃんが見つめあつていると、美男美女のカップルに見えるから、速やかに止めろ。

「ヤキモチですか、一郎君？」

「一郎、そうなのか？」

「二人して嬉しそうに言うな。まったくもう」

まあ、弔とヒミコちゃんが嬉しそうならいいか。俺の何かが崩れていく気がするけど、これも日常つてことで納得して。

できるか、ボケ！

クツソ、いつか弔にぎやふんつて言わせてやる。

「あ……お花見しませんか?！」

「はい?！」

え、なんで今このタイミングで？ あれえ、ヒミコちゃん、どうしてそのまま公園に突っ込んでいくのさ。

待つて待つて！ 今は買ひ物の途中！

「ヒミコ、ダメだ」

「どうしてですか、弔クン？ お母さんの言うことが聞けない、悪い子になりましたか？

そんな子に育てた覚えありませんよ？」

いや、ヒミコちゃんが育てたわけじゃないから。どちらかといえば、俺が育てた、かな。いや俺も育てたつていうよりは、一緒に頑張つたつてほうがいいよな。

「そうか、こんな気持ちはどういえばいいんだろうな」

「怒ればいいんじゃないか？」

「一郎、そうなのか？ 嬉しいような、楽しいような気持ちなんだ。そうか、親に育てたとか悪い子になったと言われるのは、こんな気持ちになるんだな」

「待つた！ そつちだったのか?! よしよし弔、そんな時な素直に謝つたほうがいい。ごめんなさいだ」

ま、まさかのいい方向での受け止めだなんて。弔、お前はマジで俺とヒミコちゃんの子供の気持ちだったんだな。幼児回帰か、後で精神科を探してやるからな。

「冗談だ、一郎」

「てめえ、本気で怒るぞこの野郎」

クツッいい笑顔で語るんじゃ?!

「ヒミコちゃん?!」

「二人とも置いていきますよ!」

何でこの子は俺と弔を引きずっていけるんでしょね。はあと溜息をついて隣を見ると、弔が珍しく驚愕した顔していて。

「桜が咲いている」

「そりや、春だからな。何を当たり前のことを言っているんだよ?」

「俺は失念していた。そうか、春か。もうそんな季節なのか、爆豪とデクが入学式をしていたのに、俺は忘れていた。見落としていた。一郎、失態だ、俺はなんてバカな奴なんだ。こんな簡単なことにも気づかないなんて。どうしてだ、俺はどうしてこぼしてしまっただけから気づく、もつと速く、もつときちんと毎日を見ていたら、こんなことはなかったはずなのに。俺は何時も気づくのが遅い、遅すぎるんだ」

「はい?」

「自分のことなのに呆れてしまう。吐き気がする。すべてが遅すぎる、終わってしまった。もうダメなんだ。もう手遅れだ。過ぎてしまった時間はもう戻れない、料理人としてこんなことも気づかないなんて。ヒーローを目指すなんてもう二度といえない。こんな失態を犯す者が、ヒーローを目指すなんて口に出来るわけがない。英雄を受けなくて正解だ、俺は人を助けるヒーローになれるわけがない」

「と、弔?」

「一郎、俺はどうすればいい? 俺はもう」

「何があつた?」

「なんだ、震えている。こんなに怯えている弔は初めて、いや待った前にもあつた気がする。」

「桜餅を作っていない!! 牡丹餅もまだだ! なんて俺は気づかなかつたんだ!!」

「あ、そつか、クリスマスとかバレンタインとかの時と同じか。ははは、すっかり料理人とヒーローになりやがつて。」

「とりあえず、だ。」

「ヒミコちゃん、お花見には弁当が必要では?」

「は?!」 そうでした、ヒミコの馬鹿馬鹿! どうしてそんなことに気づかなかつたの。簡単は話じゃない、お花見をするなら食べるものがあつたほうがいい、飲み物も当然あるべきじゃない。花を愛で、人と語りながら、美味しい食事と飲み物に心を踊らせる。花見はそういつたものじゃないの、馬鹿よヒミコ、旦那様に言われてから気づくなんて、妻失格じゃない。奥様を名乗るなら、旦那様が『花見に行くぞ』に『用意してあります』と微笑むのが当たり前じゃない。どうしてそんなことに気づかないの、なんて愚かなのヒミコ、一郎君に言われて気づくなんて、なんて愚かで愚図なの」

あ、こっちもか。

どうしよう、俺は落ち込む二人を見下ろしながら、小さくため息をついて空を見上げた。

うん、桜が綺麗だなあ。

現実逃避さ、知っているよ。

「花見しようぜ」

店に戻って俺はそう言った。

「な?! 正気か、マスター! こんな桜の季節に花見だなんて、何を考えているんだ?!
いつ、オール・フォー・ワンが襲ってくるかわからないんだぞ!」

コナン、どうしたんだよ。

「名探偵の言うとおりだ。マスターよ、些か迂闊ではないか？」

ギルまで？ え、俺ってそんなに変なことを言ったかな。

「場所取りは間に合うか。桜の見どころは抑えられているかもしれない。今から行つて桜がよく見える場所が残っているのか？」

おーい、コナン。

「ク、我としたことが迂闊であつた。桜の時期に花見をするなど、天地が別れた時から当たり前のことではないか。宝物庫を開くしかない、我の全能力を使って花見の場所を確保しなければ」

ぎ、ギル？

「待つていろ、マスター。俺の頭脳と推理でおまえに最高の花見の場所を見つけてやる」「フ、しばしの時間を貰うぞ、マスターよ。このギルガメツシュ、英雄王の名にかけて貴様に王の花見を見せてやろう」

お、おう、なんだろう、二人が珍しく意気投合してやる気だ。え、俺は花見つて言つたよな、他の何か言つてないよな、カチコミとか突撃なんて言つてないよな。

「エル、俺は『花見』つて言つたよな？」

「黙つていてください！ 機材の準備を始めます！ シートはこの素材では不十分です、もう一度、材料から考えないと。イスも必要ですが、強度に問題はありません。こ

れで生産を、待ってください、いや止めましょう。座面の感触が気に入りません」

「え、エル？ あれ、どうして？」

「ならこの素材を使おう。高級衣服メーカーでも使われている素材だから、感触はいいものだよ。肌触りもいい。シート素材は、軍服からもつてこよう、あれなら湿度チエックも通る」

「あれえ〜ソープまで」

「いいえ、この場合は感触を優先しましょう。地面の状況も考慮しなければなりません」
「そつちは僕のMHにやらせるよ。桜に影響ないように、緩衝材を置いてシートを乗せよう」

「助かります」

あ、あれ、俺って何か違うことを言ったかな。

「時期が遅いな」

「アインズ、俺って何か・・・え？」

見間違えかな、いやきつとそうだ。あの若大将スタイルのアインズが、常にギターを背負っている音楽家のあいつが。

今は桜の意匠の袴を纏っているなんて、あるわけがない。

「ギターは無粋か。いや三味線ではな。やはり、ここは桜色のギターを持つていくべき

だな」

見間違えじゃなかったよ（泣）。

え、今日はどうしたの、どいつもこいつも花見の一言に、人が変わったように動いているんだけど。

「よし衣装は決まったぞ！　作詞と作曲だ！　桜と花見！　このテーマで宴会の主題歌を作ろうではないか！」

「アインズの奴、気合いが入っているな」

「フ、名探偵よ、その顔を鏡で見るといっていいぞ。私の前で、他人を褒めるならばもう少し大人しい顔をしてからにせよ」

「英雄王も獲物を前にした獣の顔ですよ」

「エルもよく言うよ、『叩き伏せる』って顔じゃないの」

「挑戦者の顔をしているな、スープ。ならば、その挑戦を我が歌で答えよう！」

あ、全員が大笑いしている。

あれえ〜俺は花見って言ったよな。決戦って言ってないよな。

「弔さ、俺って」

「一郎、黙れ。俺は今、俺の料理人としての矜持をかけているんだ」

うわあ〜なんだろう、初めて見るくらいに鬼気迫る弔がいるんだけど、なんであんな

に気合に満ちた顔して料理しているのさ。

宴会でもやるのか、花見だよな、ただ桜を見上げて食事して飲んで騒いで楽しもうだよな。

え、これって決戦前の風景に見えるんだけど。

「黒霧?!」

「呼びましたか、一郎さん?」

「おまえは、まとも……じゃない?!」

「ええ、私も腕を振るいましょう。カクテルはアルコールだけじゃないこと、世界中に教えてあげましょう」

移動式のバーカウンターだ?! 何時の間にそんなものを作った?! いやおまえのことだから、コツコツと作ったかエルかソープに頼んだんだろうけど、こんな時に見たくなかったよ!

おまえだけはまともでいて欲しいと。

ヒミコちゃんはすでに着物をとってくるって、出かけたから手遅れだろうけど。せめて、ミニスカじゃないといいな。猫耳とかつけてきたら、俺は死ぬ気がする。

「我が師よおお!!」

「廻!! 俺はもうお腹一杯だから! もう一杯一杯だからさ!」

こんな時におまえまで来たら俺はもう破裂する！ 絶対に持たないから止めてくれ

！

「花見をすると伺ったので参上しました」

「あ、うん、そっかそっか。で、エリちゃんの今日のコンセプトは？」

言わなくても解るけど。

「さすが我が師です。今日のエリは、『我が青春の始まり、桜の妖精よここに』です！」

バーンって効果音でも付きそうな勢いで両手を広げた廻の前で、桜色のドレスを纏ったエリちゃんが、頬を染めて小さく頭を下げていた。

うんうん、そっか後ろの妖精の羽根を桜の形にしたのは、そういった意味か。へえ、そうなんだ。簪が薄紅なのは、色合いのバランスを取ろうとしたのかな。

「我ら死穢八斎會の忠誠の赤ですから」

ニヤリと笑う廻に、俺は思った。

いや、そんな生々しいものを小さい子の簪につけるな、と。

その後は、誰もが予想するような大混乱だった。

花見の場所をとるために、名探偵が戦略会議を始めるし。

「この場所を封鎖して、こっちに戦力をおけば。通行止めのために何か欺瞞情報を流すべきだな」

「こら名探偵、おまえの道德心は何処に言った？」

「花見の前では些細なことだろ、マスター？」

「こ、こいつは。」

ギルはギルでさ、宝具を使っているし。

「王の命である、とくと場所を開けよ」

「こらギル！ おまえ宝具を向けたままカリスマ全開にしてんじゃないよ！」

「マスターよ、いくら貴様でも今の我を止めれば、怪我では終わらぬぞ。良いのか？」

「おいおまえ！ ちよつと落ち着け！ 花見だから！ ただの花見だからさ！」

「たわけが！ 花見とは戦争よ！」

何処の常識だ、それ。

「では行きます！」

「エルう!!! おまえそれは軍用機！ 輸送機だから！」

「空挺降下を行います！ 機材を展開するにはこれしかありません！」

「止まれって！」

「全MHはテレポルト用意。座標視点に展開して場所を確保」

「ソープ！ なんでおまえまで！ 普段の冷静で少しおちやめなおまえは何処に行ったんだよ?!」

「何を言っているんだい？ これが僕だよ」

自信満々に告げるソープと、今すぐに輸送機に発進を命令しそうなエルがいて、俺は無意識にお腹を抑えた。

「ならばここはこのアインズ・ウール・ゴウンが！」

「おまえこそ何してんだよ?! それ効果範囲のすべてが『死ぬ』即死魔法だろうが！」
「すべてを無にしてその後 ゆっくりと桜だけ蘇生しよう。それでよからう」

「よくねえよ!!!」

「どいつもこいつも！ なんで花見ってだけでそこまでヤル気になるんだよ、殺意のほうにやる気じゃないから、もっと穏便にやろうぜ。」

「まったく、本当にこいつらは」

「ああ、我が師よ」

廻い？ え、この状況で俺に何を言うの、おまえ何がしたいの、え、待つてまだまだ俺を追い詰めたいの。

「我が死穢八齋會の本部に、桜があります。見事な桜並木になっていきますので、そこを提供しましょう」

「廻！ 俺はおまえのことを信じていた！ やる時はやる奴だつて知っていたよー」

「恐悦至極にございます」

優雅に一礼する廻に、俺は凄く感謝した。ああ、良かった、これで何事もなく平穩無事に花見ができる。

「ちいー」

「おい、こら、待てよお前ら。まさか、まさかだよな、あれだけの大騒ぎをしていたのつて、単純にお祭り騒ぎがしたかっただけじゃないのよな、えマジでお祭り騒ぎをしたかっただけ？ 花見だから騒ぎたいってだけで、あんなに戦争準備みたいなことしていたの、本当にそうだったたら、俺は困つちやうな、もう本当に困つちやうよ。信じていた連中が俺を裏切つたんだからな。どうなんだよ、おまえら!!」

「さあ、花見に行こうぜー」

「おう!!」

「答えろよこの馬鹿野郎どもおお!!」

俺はその日、悪のりってやっている方は凄いですつきりするけど、やられたほうはストレスが胃に来るって知った。

一度、壊滅したとは思えないほど、死穢八齋會の桜並木は見事だった。
「食べてくれ」

「こちらもありますよ」

弔のお弁当はまさに見事の一言で、誰もが無意識に手を出して食べるほどに美味で。
黒霧のカクテルは腕が上がったなって褒めるほどに素晴らしかった、ノンアルコール

のカクテルも練習してたんだなあ。

「二郎君、どうですか?」

「うん、すげえ」

着物に着替えたヒミコちゃんは、一言で言えば和服美人でした。桜色の着物に桜の簪つて、もう見事に春らしいなあ。

可愛いなあ、あれが俺の嫁さんなんだよな。

「な?! エンデヴァー?!」

「その名で呼ぶな! ここでは俺はヒーローではない、ただの同盟の紳士だ」

「そ、そうか。では何と呼べばいい?」

「エンだ。同盟の士はそう呼ぶ。俺はおまえをオールマイトではなく、トシと呼ぶことにする」

「あ、ああ」

「なら飲め飲め! お互いプロ・ヒーローではなく、ただのエンとトシとして飲もうではないか?!」

「わ、解った」

あれえくくあつちで変な会話しているけど、誰だろう。知らない顔だけど、もう一人はオールマイトだよな。あれ、引きつった顔しているけど、どうしたんだ?

「風流ですね」

廻、何か知っているんじゃないか？

「我が師よ、どうでもいいことではないですか？ 今は美味しい料理と上手い飲み物と、何よりこの桜を見つめましょう」

ク、忘れていた。こいつもイケメンだった。杯を持った廻は、桜の下でとてもいい絵になった。

「はい、一郎君、ジュースですけど」

「ありがと、ヒミコちゃん」

まあ、いいか。

「デク！ 俺がアインズさんの前座になっちゃった！」

「やったじゃない、かっちゃん！」

「き、緊張してきやがった」

「大丈夫だよ！ かっちゃんならできるよ！ だってかっちゃんは世界で二番目に最高なんだから！」

「一番はアインズさんで俺が二番目か。へ！ 言うじゃんねえか、デク。行ってくるぜ」「がんばれ！」

いい桜だな、爆豪君、歌うんだね。アインズの前に歌うって、それってかなり厳しい

んじゃないの。

まあ、いいか。廻の言うとおり、今日は桜と奥さんを愛でながら、楽しく過ごすか。

「あ、動いた」

「今日の最後の出し物は、『今ここオール・フォー・ワン』によるモグラたたきだな」

「え、これって地面の下なの？」

「埋めてきた」

コナンが何か言っているけど、俺は知らない。今は花見と綺麗な奥さんがいればいいんだ！

俺は何も聞かなかったよ！！

胡蝶の夢

夢から覚める瞬間を自覚することがある。

今が夢なんだと思い知り、これが覚めた時は自分がどうなっているかを、僅かな時間に思い描く。

強くあれたか、優しくあれたか、それとも弱くて冷たいものだったか。

何度も見つめる、現実のことを思い出すように、整理するように。

苦渋を舐めた。悲しみを刻まれた。辛い思いをしている誰かを、眺めるだけだった時間もあつた。自由に生きられない人々の嘆きを知つた。

絶望を知つた、怒りを感じた、それでも立ち向かう人たちの背中を見送つた。

辛いと悲しいと嘆くこともできずに、ただ頭を下げる人たちがいた。

辛かった、苦しかった、なにもできずに嘆き悲しむだけ。

何とかしたいと願つて立ち向かつて、相手はとて大きくて強くて。望んだものは

手の隙間からこぼれ、理想はすでに風化していた。

ああ、自分はなんて愚かであつぽけで、小さな存在なのだろう。もっと強ければ、もっと速ければ、もっと願つても辿り着けない。

自分一人では無理だった、もつと仲間が必要だった。それでも、勝てない相手はいる、国家を相手にしたら勝てるわけがない。

だから力を欲した、誰もが手を出せないほどの力を、自分らしく生きられない人たちのために、その願いをかなえる希望であるために。

他者の能力を奪う。それは悪だ、許されない罪だろう。しかし、その能力こそが、現在の世界を生み出した元凶。

原罪だ、人が楽園から弾かれ、自分の自由を得られない、束縛された世界に産み落とされた理由。

自由に、自分の心のままに生きることが悪いことで、誰かに合わせて、誰かの決めたルールに従つて、我慢して耐えて、心を偽つて、自分に嘘を言い聞かせて生きる。

そんな世界が正しいわけがあるか。正義のため、多くの人のためと大義名分を掲げて、一部の人たちが苦しんでいるのを見て見ぬふりして、それで世界が平穏だ平和だと。ふざけるなど叫ぶ。デタラメだと吼える。許せないと全身で訴える。

間違っている、世界はこんなものじゃない。生きている人たちが、肩身の狭い思いを

して、ジツと我慢して生き続けるなどあっていいはずがない。

平等であれと告げた者達が、その平等を壊しているのが解らないのか。誰もが選ぶ権利があると教えながら、その権利を実行する手段を教えないことが無意味だと誰も気づかないのか。

ならば、教えよう。世界の真理を、誰もが自由であるべきだと伝えてやるべきだ。

「そうか、私はそうだったのか」

フツと笑いながら歩く彼から、静かに『何か』が外れていった。

神秘的な道具、科学的な器具、そういったものが落ちた後、彼は久しぶりに仮面を外した。

「ああ、空はこんなにも高く広いものだったのだな」

小さく彼は笑い、そして再び仮面をつけた。

季節が過ぎるのは早いっていうけど、本当だなあと実感する今日この頃です、どうも田中・一郎です。

「体育祭？」

「雄英の一大イベントですよ」

デク君が報告に来てくれて、俺はそんなものがあるんだって知った。え、体育祭って秋じゃないの、今なの。

雄英って変わっているって思ったけど、そんなところまで変わっているのか。

いや待った、俺が知っている知識が違うのかな。

「文化祭もあったりする？」

「一郎さん、知っていたんですか？」

爆豪君が驚いた顔しているけど、そうなんだ。へえ、夏前に体育祭で、秋に文化祭か。

そうなんだ。そっか。

え？ 雄英ってイベント目白押しじゃない、そんな一年で大丈夫、ねえ。

「ヒーロー科が実力を見せるいい機会が体育祭で、他の学科がアピールできる機会が文化祭だな。どちらも雄英にとつて、特別なイベントだぞ、マスター」

「コナン、サンキュ。そっか、そうだよな。雄英つてヒーロー科が注目されがちだけど、他の学科もあるんだよな」

「どの学科も、将来の職場に直結するから、頑張っていますよ」

「大抵の奴が雄英はヒーロー科が一番だつて考えるけどな、俺は他の学科の奴らのほうがすげえと思う。裏方でヒーローを支えるつて半端な覚悟じゃできないからな」

うん、うん。デク君も爆豪君も、自分達だけじゃなく他の人達のこと、よく見えるようになったね。

特に爆豪君の言っていること、俺はよく解るよ。元々、裏方の存在だったからね。現場のほうが大変だ、最前線が一番の苦勞するつてよく言われるけど、実際にやってみると、裏方つて大変なんだよね。

現場が動けるように人員を配置したり、資料を用意したり。現場の人たちが困らないように情報を集めて、正確かつ的確な情報を瞬時に精査して、現場に指示を出すつていうのは、凄いい大変だからね。

「だよな〜」

「はい、そうですよね」

「うんうん、そうだね」

おい、こら、そこで頷いている馬鹿二人。コナンはいいよ、コナンは。俺のために裏方をすべて仕切ってくれているから、その苦勞を語るのはいいさ。

でも！ エルは駄目だろ！ おまえは何時だつて俺達の苦勞を吹き飛ばすじやないか！

「エル、何か言つたか？」

「はい！ ということは、デク君と爆豪君のためにカメラ一式を持つていけばいいって話ですね?！」

チィ！ こいつ、自分が不利だつて考えて、話題を反らしやがった。

「フッフ、エルも考えるようになってね」

「ソープ、お前ね。時々、一緒に裏方の苦勞を吹き飛ばすおまえが、言えることじやないんだけどさ?！」

「僕はそうだね、楽しんでおちやらけて、それで何時も通りさ」

「うわあ〜こいつの笑顔、今はムカつく」

なんか、すつきりした顔で言っているけど、ソープも暴走する時は必ず資材を吹き飛ばすんだよな。

はあ、ギルが前に使つた資材、ようやく戻せたつて感じなのに。

あいつの蔵に頼らずにやってやったぜ。

「それで、二人とも雄英の体育祭がどうしたんだよ？」

「ぜひ、来てくださいって招待状を預かってきました」

「なんかVIP待遇で対応するってオールマイトが言っていました」

え、なのその怖い話。

恐る恐ると俺はデク君が差し出した手紙を受け取った。爆豪君、そんな『当然だ』って顔しないでよ。

「こ、これって断ったらダメかな？」

怖い、本当に何が書いてあるんだろう。

まさか、『来ないと殺す』とか書いてないよね。俺は一般人、平穩を愛する一般人で雄英に何かなんてしないよ。

俺の知り合いとかは一般人粹じゃないだろうけど、俺の戦闘能力ってそんなにないからね。根津校長やオールマイトは知っているはず。

あれ、俺の個性、『手のひら鎮守府』の話はしたことあったけど、俺自身の戦い方とかって話してないような。

「マスター、開けないのか？」

ニヤニヤと笑うコナンに、俺は半眼を向けた。こいつ、解っていて言っているな。

クツソ、おまえは何がそんなに面白いんだよ。

「あけるぞ」

逃げてても仕方ない、ここは立ち向かおう。後ろでヒミコちゃんがキラキラした眼をしているからじゃない。隣で弔が当然だつて顔をしているからじゃない。俺は俺自身を裏切らないし裏切ろうなんてしない。立ち向かってやろうじゃないか。

いぎ!!

『来ないと殺す』。

「え? マジ?」

予想が当たつたよ。え、これ誰の字、え、ハートマークが乱舞している便箋に、血文字で書いてあるんだけど、誰の仕業。

「女の人の字?」

「ヒ?! ひ、ヒミコちゃん?」

「二郎君に、女の人の手紙、あれは確実にラブレター。しかも、可愛い血文字でハートマークが乱舞しているなんて、これは確実に『愛しています』の意味、そんな私の知らないところで、ライバルがいたなんて。そんなことあるわけがない、私の知らない一郎君の友好関係なんてないはずなのに。何時の間に、そんなに親しい女性が、ひよつとして私の警戒網を潜り抜けた猛者がいる? いいえ、ヒミコ待つのよ。そんなことはな

い、一郎君が何処で何をしているか把握しているのは私だけのはず。ならこの手紙は誰からの、雄英の招待状って言っていたけど、これは確実の恋文。まさか、誰かの偽造？探しましょう」

こ、怖い。うちの嫁さん、普段は可愛いのに、どうしてスイッチが入ると、殺人鬼も真つ青な殺気を放つのかな。

おい、コナン、エル、スープ、逃げるなよ。デク君、爆豪君もそつと顔を反らすなよ。「ヒミコ、俺も付き合おう」

「ありがとう、弔君」

「弔?! え、待って、なんでおまえまで?!」

「当たり前だ。父親の浮気は許してはおけない」

「そうですね、当然です」

「待って二人とも！ なにその気合!?! 待って待って！ とりあえず、包丁をおこうか二人とも！」

「命拾いをしたな、身の程知らず」

「今回は見逃しますよ、泥棒猫」

うわ〜なんだろ、これ。最近、弔とヒミコちゃんの行動が、ぶつ飛んでいる気がするんだだけ。

普段は優しい二人なのに、こうスイッチが入ると、もう止まれない暴走特急って気がする。

あ、胃が痛い。

とりあえず、雄英の手紙は二枚目に『ごめん、おちやめ』って書いてあったので弔とヒミコちゃんへの殺気は消えました。

え、女の子からの手紙じゃなければ殺すって書いてあっても、気にしないのね、それっていいのか、いいか。

まあ、平和が一番だ（混乱）。

とりあえず、デク君と爆豪君には必ず行くと伝えました。二人は嬉しそうだったけ

ど、何かあつたかな。まさか、俺がいくだけで嬉しくなつたなんて、そんなことはないよな。

「マスター、ひよつとして気づいてないのか？」

「なんだよ、コナン？」

「あのな、二人にとつてはおまえは恩人だ。その恩人に活躍しているとところを見てもらえるつて喜んでるんだよ」

「はっはっはっは！ まさかあ！ コナンも嘘が上手くなつたな、え、名探偵のスキルに嘘つてあるのか？」

「おいおい」

呆れた顔しても、演技だつて解るぜ。何年の付き合いだと思つているんだよ、おまえの仕草で俺の解らないことはないぜ。

「こいつ、普段は鋭い癖に、ポンコツな時は徹底的にポンコツだな」

「仕方ありません。一郎さんはポンコツですから」

「うん、確かにポンコツだね」

「おいこら、その馬鹿二人。おまえらのポンコツ呼ばわりされたくない。俺がポンコツなら、お前らはなんだ？」

そんなことを言うと、エルとソープはお互いを見合つた後に、自分自身を指差して笑

顔で告げた。

「ロボットを愛しロボットのために生きる凄腕のエンジニア。ちよっとお茶目で資材を吹き飛ばす風雲児」

「技術のためなら山越え海超え資材超え。不可能なんてない、『こんなこともあるのか』を目指す技術者」

え、マジでいつてるの。

「だから資材くらいもつとください!」

「二人してハモって何を言ってるんすかねえ?!」

「いいじゃないですか、技術の発展とロボットのためには資材が必要なんですから、ケチケチしないでください!」

「そうだそうだ! 最近の一郎はケチくさい、結婚して財布のひもでも握られたの!」

「握られてるか?! そもそもだな!」

「なんですか?!」

「何?!」

「俺の財布はコナンが管理してるだろうが!」

その瞬間、誰もが沈黙した。

全員の視線が、ゆっくりと動く。俺もそうだろう、まるで錆ついたロボットのよう

ゆつくりと動いた目線は、カウンターに腰掛ける小学生、の皮を被った英霊に注がれていた。

「おいおい、おまえら。なんだよ?」

「え、まさか、嘘ですよ。コナンが管理しているんですか?」

エル、なんで震えているんだよ? そんなに怖いことないだろ、昔からコナンは俺達の財政担当だったじゃないか。

「へ、へへへそうだったんだ。てっきり一郎が管理しているって思っていたけど、コナンがしていたんだ」

スープ、目が泳いでいるぞ、何を怖がっているんだ、神様だろ、おまえ。怖いものなんてないだろ。

「フ、そうだな、俺がしているぜ」

俯いて告げるコナンに、俺も何故か怖くなった。メガネが反射して目が見えないから、何を考えているか解らない。

でもひたすらに怖いのは解る。なんだか全身の震えが止まらないくらいに、怖い何かがある所にいた。

「どうした? そんなに怖いことはないだろ? まあ、エル、スープ」

「ひいひい?!」

え、どうしたの、あれ？

なんでエルとソープは土下座しているのかな。

「今後、無駄遣いしません」

「解ればいんだよ、解ればな」

あれえ〜これってコナンがトップって気がしませんかね。あ、そっか、英霊って知名度によって能力が上がるっていうし、この中で『異世界での知名度』で言えば、コナンがトップか。

うん、そうだよな、さすが俺の最大の協力者。

ビシ!!

あれ、何か音がした。

「マスター、悪い、ちよつと出かけてもいいか？」

「コナン、どうしたんだ？ あれ、その手に持っている機械って」

あれ確か、『今ここオール・フォー・ワン』じゃなかったか？

「ああ、ちよつと修理と調整してくるぜ、すぐに戻るからさ」

「別にいいけど」

なんか、雰囲気が違うくないか。

コナンもエルもソープも、なんか張り詰めているような。

何かあつたか？

薄闇に似た空を見上げ、彼は薄く笑う。

「まさかつて思つたけど、本当なんだな」

背後からかけられた声に、振り返る。予想通り、そこにいたのは小学生の姿をした彼だった。

「やあ、速かつたね。もう少し時間がかかると思っていたよ」

「お生憎様。俺達はおまえに油断はしてないんでね」

肩を疎める彼の隣には、黄金の王が腕組みしていた。

「フ、よもや私の宝具も外すとはな。よほど惨たらしく死にたいらしい。我が寛大で

あつても、此度の無礼を許すつもりはないぞ？」

「フフフ、これはこれは英雄王。やはり、君たちは素早いねえ。でも、何処までも傲慢だ、自分達が絶対だと疑っていないようだね？」

嘲るように告げる彼に、二人の目線が鋭くなる。

「前まで遊んでいた奴のせりふじゃないな。あのコメディアンのようなおまえは、それを外すための演技だったのか？」

「いや、あれも私だったよ、久し振りに楽しい時間だった。これは嘘ではない、本当さ」
本当に心の底から楽しかった、敵も味方も主義も主張も関係なく、笑える話にただ純粹に笑っていた。

笑えていた、と思う。久し振りに人間らしい感情を持てた。だから、思い出した。自分が望んでいたものを、理想とした答えと現実の夢を。

「あのまま道化を演じておけばよかったものを。貴様は王自ら引導を渡してやろう」
「なるほど、君たちはそうやって他人を見下すのだね。しかし、いいのかな？」

両手を広げると、視界に黄金の波紋が浮かぶのが見えた。

ああ、やはり彼らは『そういうった存在か』と確信した。

「何がだ？」

「君たちがやろうとしていることは、『あの時の私と同じ』ではないかね？」

名探偵が驚きを浮かべ、金色の王は僅かに目を細めた。

やはり、そこが彼らの『線引き』か。彼らは個性を持った普通の存在ではない、彼らは誰かに『決定権』を預けている居候だ。この世界に純粹に生まれたものではないから、この世界に生を受けたものではないから。

だから、この世界の住人を自らの意思で害することはできない。ただ一つ、彼らの『決定権を持つ人物』に危害が加わる場合のみ、その能力を使える。

そういった他者依存型の能力者だ。

「おまえ」

「フッフ、私はこの世界の人間だよ、名探偵。かつて、君たちは私を襲撃し倒しかけたけれど、最後の最後に見逃した。何故と考えたが、答えは実にシンプルだった。君たちに『私を倒すことができない』。どれほどの巨大な力を持つともね、君たちはイレギュラー。この世界に本来はいない存在、それ故にこの世界の人間を殺すことはできない。そのタブーを犯せば、君たちの存在は何かによって消される。違うかな？」

「高説、どうもと答えてやるよ。本当に俺達がおまえを倒せないって思っているんだったら、大間違えだ」

「ではやってみたまえ」

名探偵の呆れ顔が固まる。黄金の王は波紋を浮かべたまま、黙ったままだ。やはり、

そう言うことか。

彼は確信していたが、コナン達が止まった理由は違う。

「それとも、君たちが『個性の一部』だから、出来ないのということか？」

「おまえ」

鋭く名探偵が見つめてきた。正解はこちらだったか。

転生者がいるから神がいる、その存在が世界のルールを決めて、そのルールに抵触するから彼らが動けないと思っていたが、どうやら違うらしい。

考えてみれば当たり前前のことだ。彼らは『田中・一郎の個性』。彼らに意思があり、彼らが独自に動いたとしても、最終的な決定権はあくまで『田中・一郎』にある。

彼自身に危険が及んでいなくても力を使えるが、彼には被害が出ないならそれは『自己防衛』の範囲外、彼らが力を使える『規定以外』になる。

「不便なものだね。もし、君たちが普通に生まれ、この世界に生誕していたとしたら、今頃、私は消されているだろうね」

「そうかよ」

名探偵が肩を竦める。

ああ、そうだ、不便だ。世界はこんなにも理不尽で不便で、不自由なものでしかない。だから、自分は立つ。

「幸運に感謝するべきだろうね。君たちが彼の個性であったことに感謝しよう。個性か、そうだったね、個性といえれば疑問に思わないかね？」

「何をだよ？」

「何故、『個性』なんだろうね？」

その言葉に、彼らは大きく眼を開いた。

この世界において、能力を個性と呼ぶ。

その人だけの、他にない能力。誰もが持てない、個人個人に違う個性を持ちながら、お互いに違う能力を当たり前前に使っている。

「個性は発現する年齢が決まっている。おおよそで何歳までに、と。何故、その後に発生しない？ 何故、子供の時、生まれた時に発生しない？ 何故、個性と呼ぶ？ 疑問を感じなかったかね？」

彼は語る、大きく手を広げ、まるで星を抱きしめるように。

「人を巻き戻す能力、それを使えば個性は消える。誰の個性でもだよ。これはおかしいよね？ 発生する前に戻るなら、それは時間と共に再び戻るはずなのに、一度でも消えた個性は消失して二度と戻らない」

「何を言ってるんだよ、てめえ？」

「オーマジオウの力は素晴らしかったよ。この世界じゃない『私の記憶』を得られた。だからこそ確信し、思い出した」

あれは素晴らしい力だ。並行世界の自分を、可能性の先の自分を見られた。違う未来を夢想し、どう行動すればどうなるか、それを現実のものとして認識し記憶できた。

とても素晴らしい能力だ。だからこそ、エリの個性を奪うと決めた。

「世界を歪め、人々の自由を奪っているのは、『個性』だとね」

確信した。あれがあるからこそ、人は平等でいられない。自由に自分らしく生きられない。

「個性は誰かが人間に植え付けた『束縛』だ。そうあれと最初に決めてしまう、そうでし

かないと誰かを押しつける。無個性だと差別し、他者を見下す。個性があっても、それが使えないと蔑む。個性など、存在しない方がいい」

「おまえ本気で言っているのか？ 今の世の中で個性を消したらどうなるか考えたのかよ。」

「考えたさ。何度も試した、何度も考えた。混乱と恐怖の社会だった。だからこそだよ、だからこそ、支配者が必要だ。誰もが自由に過ごせる、誰もが他者を憎まず妬まずに生きられる世界を」

「不可能だ！ そんなことは誰も実現できなかった！」

「ああ、だからこそ、『巨悪』が必要なのだよ。誰もが恐れ蔑み、個人では勝てない存在がね。多くの負の感情を向けられる存在が君臨しているなら、誰もが他者を妬まず恨まらずに生きられる」

「おまえ、それは……その考えは」

「私が救うんだよ、名探偵。誰もが悩み戸惑い、悲しみと絶望に身を焦がす世界から、樂園に導く。人が自由に生きられる世界へ」

「その考えは、英雄のものだ。人を救うってヒーローじゃないか」

絞り出すような名探偵の声に、彼は首を振った。

「違う、私は悪だ。他者の個性を奪い、その人物に絶望を刻む人物がヒーローであるはず

がない。私は巨悪であり、ラスボスだ。世界の闇そのもの、憎悪の対象だ。故に私が立つ、すべての存在の上に立ち、そして世界に平等を示す」

彼は、オール・フォー・ワンは真っ直ぐに見詰めていた。

狂っている雰囲気もなく、激昂することもなく、ただ穏やかに。

そこにあるのは、確固たる意志。二度と退かない覚悟。

「私以外のすべてが同じ存在であり、全員が団結しなければ私に殺される。ならばそこにあるのは他者を労わり、慈しみ、支え合う世界、誰もが自分を自由に生きる世界だ」

「雑種、貴様は本気でそう考えているのか？」

静かに目を閉じ、黄金の王は問いかける。口調に怒りはなく、穏やかだ。

「本気だとも英雄王。人類の裁定者として貴方に告げよう、私はこの方法でこの世界のすべての人を救ってみせる、と」

「そうか、ならば私の答えは解っているだろう？」

「無論だとも。英雄王ギルガメッシュとしては静観、しかし『田中・一郎』のサーヴァントとしては、彼の決定次第。違うかな？」

問いに対しての答えはない。だが、彼は背を向けて姿を消していく。

「本当にやるつもりなのか？」

「ああ、もちろんだとも。名探偵、楽しかったと伝えておこう」

「自己犠牲の果ての平和は長く続かない。それは歴史が証明している」
「今までの歴史は私がいなかった。それが答えだ」

名探偵は何も告げずに姿を消した。

「さて、始めよう。私の『理想のために』」

彼はそう告げて、歩きだした。

願いを集め絶望を砕く者、ヒーロー

話がある、マスター。

そんなことを暗い顔でコナンに言われて、何かあったと察した。

「なんだよ、話って?」

「ちよつとな。今、オールマイトも呼んだから待っててくれ」

え、オールマイトもいないと不味い話?

あれひよつとしてオール・フォー・ワン関係かな、と考えていたのですが、なんだかギルが考え込むみたいな仕草なんだけど、勘違いかな。腕を組んで直立不動って、初めて見るんだけど。

「マスター、今回の話、心して聞くがよい。貴様にとって、決断の時かもしれないね」

「え?」

「何を決めようと、どう判断を下そうとも我は口を挟まぬ。好きにするがいい」

な、何があったんだ、ギル。どうした、その慈愛に満ちた顔は。

「だが一っただけ決して忘れるなよ、マスター？ 貴様は英雄王ギルガメッシュのマスターであり、名探偵と名高いコナンのマスターでもある。そして、その気になれば世界を滅ぼせる戦力を持った、『鎮守府』という組織の長であることを」

「え、はい」

うわ、なんだか本当に王様の前にいるような、あれギルは最初から王様だったな。あれ、なんだろ、王からの訓示を受けた気になってきた。

「そして、どのような結末であろうとも我は常に貴様の隣にしよう」

「おう、サンキュ」

「フ、我も随分と俗世にまみれたようだ。昔の我ならこのようなこと、考えることもなかっただろうにな」

なんだろう、ギルがいつになく優しいんだけど。あれえくくなんか、最終回って気がしてきたけど、気のせいだよな。

「はーはっはっはっは！ 私が来た！」

「よっし、揃ったな。じゃあ、始めるか」

「いやスルーは酷くないか、コナン少年？」

「わりいなオールマイト、ちよつとギャグにつきあえない内容なんだ」

え、ギャグなしでの会話、あれ、俺はちよつと付き合えないかな、と思っただらソ-

プやエルも凄い真面目な顔している。

アインズさえも普段と違う、あの魔王様って衣装をまどつているから、かなりきつい内容なのかな。

「オール・フォー・ワンが動いた」

その一言が、今回の事件の始まりを示している、そんな気がした。

いや、マジですか。え、何の冗談。でも、コナンがマジな顔しているから、冗談でもなんでもなく。

「本当のことなのか？」

オールマイトが怖い顔している。声が僅かに震えているのは、怒りを抑えているから

かな。

「ああ」

「ぶぎけるな!! あいつが! あいつが何をしてきたか! 知っているのか?!」

激昂したオールマイトの拳がテーブルを叩き、粉々に砕いた。

「あいつは、あいつはお師匠を、大勢の人たちを」

悔しさと怒りを混ぜ合わせたような、そんなオールマイトの横顔は初めて見た。俺たちよりもオール・フォー・ワンとの付き合ひ、いや戦いはオールマイトの方が長い。

もっと昔から、彼がヒーローになった頃から、ずっと続いてきたんだろうな。

「あいつは嘘は言っていない」

「コナン少年!」

「話の辻褄が合っちゃったんだよ、オールマイト。確かにあいつのしたことは許せない、以前のあいつが『誰もが平等で自由』なんて理想を掲げていなかったのは明らかだ」

「ならば嘘ではないか?!」

「けどな、『個性を奪って集めて自分を』って点においては、揺らいでない。人間って奴は厄介な存在だ。長い年月を過ごせば、理想を見失って、やがて何が目的か忘れちゃうことがある」

「忘れたから、忘れていたからと許されることではない」

「だからさ、オールマイト。だから奴は思い出して、俺達に宣言したんだよ。かつての自分の罪を見つめ、そしてかつての理想を叶えるってな」

怒りに震えて周りを圧倒するオールマイトに対して、コナンは何処までも静かで穏やかだ。何を入れても決して声を荒げず、諭すように話すのはあいつが推理を披露する時と同じ。

本当に、風に逆らわないようにスツと入ってくる話し方だから、俺は間違えずに話を聞けた。

「本気だったんだな？」

「ああ、それは確実だ」

「そっか」

彼にもあつたってわけだ。彼があんな行動をすることになった、何か根本的な出来事があつて、彼は理想を抱いたってことか。

オリジンって奴か。

「認めない、あいつは」

オールマイトの気持ちは解らないでもないけど。

「私は納得できるな」

「アインズ殿?!」

不意に呟いたアインズに、オールマイトが鋭く睨みつけた。
おい、この状況で言うかよ。

「納得は出来る。現在の世の中を考えれば、『個性こそがすべて』という考えはあまりに危険だ。個性があつて、人がある。そうではない、個性があるからこそ人でいられる、そう誰もが思っていないか？」

「それは」

オールマイトが言葉に詰まったように、顔を反らした。

確かにそうかもしれない。無個性を笑う人たちがいて、個性の強さ弱さで相手を見ている人たちが大半だ。

「個性がなければ人ではない、そう誰もが無意識に思ってしまうほど、世界の常識は個性に寄りかかっている。個性のみで、人の価値を決めてしまうほどに。これはとても怖く、そしてとても冷たい考えだ」

アインズは極端な言い方をしているけど、そうかもしれない。

今の世界は、個性を基準に構築されているから。個性がなければ無理だ、個性があればできる、個性だけを見てその人を見ない、個性だけが価値があつて個性がなければ人として生きている意味さえない、そんなことを誰もが無意識に感じて、実行している。

「僕はそうは思いません。個性は確かに人の価値を決めているかもしれない。でも個性

だけじゃなく、それ以外の何かをその人に見つけて、そして磨いている人たちだつています」

エルの意見もまた納得できる。個性だけで判断している世の中に傾いているけど、それを必死にとどめている人たちだつている。個性はその人の一部だつて言つて、全部じゃないつて言つている人たちは頑張つている。

「どちらも正しく間違つている。人つていうのは、そういった成否を併せ持つ性質を持つているからね。でも、今の世の中のあり方がこうなつたのはある意味、仕方ないかもね」

ソープはチラリとオールマイトを見た。

いや、待つた。待て、おまえ、それは駄目だ。まさか、『個性があるから人としての価値がある』を決定づけたのは、ヒーローが活躍したからとか言うんじゃないよな。

「オールマイト、きついことを言うけどね」

「何かな？」

冷静になろうとして、何とか何時も通りの声を出した彼に、ソープは冷たく告げた。「君たちヒーローが、今の世の中の意思を決めてしまつたんじゃないの？」

俺は止められなかった。

オールマイトは言われたことに対して、『言い返せなかった』。

彼も薄々、気づいていたのかもしれない。自分達がヴィランを相手にして、ヒーロー資格を持つて活躍して、平和を取り戻した結果の世界のことを。

必死だったんだと思う。誰もが悲しまない世界にしたいと走って、夢中で頑張つて、そして平穩を取り戻した世界を見回した時、彼は気づいてしまったのかもしれない。

個性こそがすべて、という考えを持つてしまった民衆の姿を。世界が個性こそがすべてと決めてしまったことを。

「とにかく!!」

わざと、コナンは大きな声を出して手を叩いた。

「あいつは動く、だからオールマイト、ヒーロー側に注意を促してくれ」

「解つた、すまない、ありがとう」

そう告げて立ち去る彼の背中中、何時もよりも小さくて弱々しかった。

「ソープ」

「ごめん、でも一郎だつて気づいてたんじゃないの?」

「まあ、それは。俺は提督だからさ。世間のこととか、ちよつとひねくれて見るようになっていたし」

まあ、鎮守府を預かっていると周辺住民の意識とか、影響力つて考えてしまうからなあ。

「オールマイトは、平和の象徴として頑張つて人々に平穩を取り戻した。その結果が、これか。皮肉だな」

「彼への称賛が、そのまま彼への批判になるなんて、世界は冷たいですね」

コナンは肩をすくめて、エルは自嘲気味に笑っているけど、これって人ごとじゃないんだよな。

「で、マスター、俺達はどうする？ 死穢八齋會は俺達の下部組織になっているから、マスターの決定がそのまま『俺達の行動指針』になるぜ？」

うわあ、いきなり重圧をかけるなよ、コナン。

俺はちよつと考えながら、チラリとギルへと視線を向けた。

腕を組んで直立不動で瞳を閉じている英雄王は、何も告げてこない。本当に俺の決定に従うつもりか。人類の裁定者ってそれでいいのかよ。

「俺達は」

まったく一国の防衛を担う軍令部総長なんて、とつくの昔に引退したはずなのにさ。世界の命運も背負えって？ ごめんだね。

何処をどう歩いたか、覚えてはいない。ただ、誰にも会わない道を歩き、ふらつくように足を進めていただけ。

重く言葉がのしかかる。世界を見て、混乱している人たちの嘆きを聞いて、誰もが悲しまない世界を作りたいと思っていた頃。

ヴィランを相手に戦い、助けての声に答えてひたすらに動き続けたあの頃が、今ではとても眩しく感じる。

今の自分は、あの頃の自分の目にどう映っているだろうか。理想とした自分のままでいられるか、それともヴィランのように映っていないか。

馬鹿な、あり得ない。自分はヒーロー、ナンバーワン・ヒーローだ。正義のために戦い、人々の悲しみを拭うために突き進んできたはずなのに。

自信を持って言えたことが、今では揺らぐ。助けられない人たちの影が、目の前をチラつく。どうして助けてくれなかったのか、どうして呼んでも来てくれなかったのか。

もう一歩、速ければ。

もう少し先に動ければ。

救えた命はあつたのではないか。

何度も自問してどうにか乗り越えた答えが、今では揺らいで見えなくなつた。

「私は」

「やあ、オールマイト」

声に反射的に顔を上げた。

狭い路地裏、その直線の先にあいつがいた。

「オール・フォー・ワン!!」

「どうした? ナンバーワン・ヒーローが酷いあり様じゃないか?」

「貴様! 貴様が!」

「その様子だと名探偵から聞いたようだね。そうだ、私は人々の自由と平等のために、

『私の理想のために』戦うことを決めた」

「貴様が何をしてきたか忘れたのか?! 多くの人を苦しめ、多くの悲しみを広めた貴様が! 今更人々の自由と平等などと!!」

怒りが渦巻く。こいつは偽善だ、嘘を並べて人を惑わす悪人だ。ヴィランだ、倒しておかないとまた世界が。

拳を握るオールマイトの前で、彼は真つ直ぐに見詰めて答えた。

「ああ、そうだ。私がしてきたことだ。すべての人々を苦しめ、自分のために個性を奪つて、平穩を乱した極悪人だ」

間髪入れずに答えられたことに、さらに苛立つ。

「開き直るのか?!」

「事実を受け止めているだけだ。私の個人的な感情で動き、個人的な理由で人々の個性を奪つた。これは純然たる事実、それに言い訳をするつもりはない。すべてが私の罪だ。間違いなく」

「貴様ああ!!」

「そういう意味では、君も大差ないのでは、オールマイト?」

言われた言葉に、彼は意識が追い付かなかつた。

何を言つた、何を言われたと疑問が頭の中を廻る。

「君はヴィランを倒した。自由でありたい、自分らしくありたいと願つた人たちを悲しみのどん底に落とした。これは私とどう違う?」

「まったく違う!」

反射的に怒鳴つた。感情のままに怒鳴り返し、ふざけるなど心の底から叫び声を上げる。

「貴様らヴィランは普通に生きている人たちを虐げた！ それを止めた私と貴様が同じだと?!」

「同じではないか？ 誰かの意思を捻じ曲げる、それは同じことだろうか？」
「詭弁だ！」

「正論だよ、オールマイト。私達はお互いの『信念』の元、立ち位置が違うだけで同じ存在でしかない。君は、平和の象徴」

オール・フォー・ワンの右手がオールマイトへ向けられる。

「私は人々の『欲望の象徴』」

今度は自分へと左手が向けられた。

「表と裏だよ、オールマイト。正義も悪も、見方によっては逆転する。だからこそ、私は裏側になる。誰もが私を真つ直ぐに見つめ、私が世界を見つめることで価値観は統一され、誰もが平等になる」

オール・フォー・ワンの両手が合わさった。

「貴様の詭弁など聞く耳などない!!」

「そうかね。私は君には聞かせたい、宣言したいと考えていたがね？」

「何を?!」

「ワン・フォー・オール of オールの継承者の君こそ、私にとって超える壁だからだ」

真つ直ぐに彼はオールマイトを見つめる。

『ワン・フォー・オール、オール・フォー・ワン』。一人は皆のために、皆は一人のために。元は一つの言葉が、一つの力だったものが二つに分かれ、一つは私に、もう一つは受け継がれ君の中に宿った。だからこそ、私達はお互いがお互いに超えるべき壁だ。超えた者が、完璧を手に入れる」

「ならば貴様は私が倒す！」

全身に力を巡らせる。この場で倒せば、後に起きる混乱などない。オールマイトはそう決意し、力を解き放とうとした。

「間違っているな、オールマイト。私を倒すのは君じゃない。君が私を倒せば、後に残るのは象徴としての君だ。誰もが君に依存し、他の何も考えない人として『終わっている世界だ』」

「何を言っている？ 貴様は何が言いたい?！」

意味が解らない、こいつは人を惑わしているだけだ。

「私が君を倒しても同じかもしれないがね。象徴がどちらかになるだけ、人が一人で世界を支えることに変わりはない」

「虚言か、オール・フォー・ワン!!」

「いいや、心理さ、オールマイト。私も君も、『本当の意味で人々の代弁者』ではない、と

いう意味では同じだからね」

言っている意味が解らない。目の前の男が何を言いたいのか、オールマイトには察することが出来なかった。

「象徴ではない、相対するのではない。多くの人の願いと希望を背負って、真っ直ぐに進む存在。それこそ、世界のあり方を示す道しるべではないかね？」

「なるほど、貴様は自分の言っていることを嘘だと認めるのだな?! 先ほどの貴様の言葉とまったく違うではないか?!」

「いいや、違わないさ、オールマイト。私が目指しているのは自由と平等だ。そこに個人も世界も関係ない。多くの人が考え、多くの人が願う、そういった平等な世界だ」

「ならば私がおまえを倒して手にして見せよう!」

「君では無理だ。今のヒーローでは不可能なんだよ、オールマイト。理由は解っているだろう?」

「世迷言を!!」

「今のヒーローは人々の代弁者ではない。自らヒーローを名乗り、自らの活動を『仕事』と思っている者達では、人々の希望を集める存在ではない」

「ふざけるな!! 今の世界のヒーローはそういった存在だ! 今の世界にそれ以外の……」

気づく。オールマイトは言い掛けて、気づいてしまった。

この世界にたつた三人だけ。仕事ではなく、自ら名乗ったのではないヒーローがいることを。

「気づいたようだね？」

何処か嬉しそうに、オール・フォー・ワンは語る。

『ザ・ハンズマン』。

『シンガー・ボマー』。

『グリーン・シツプ』。

彼らは自ら名乗ったわけではない。救った人たちが、助けてと叫んだ人たちが、その願いの先に見つけた存在。

多くの人達の想いが込められた名前を名乗る彼らこそが、ヴィランでもなくヒーローでもない、この世界に初めて生まれた他者の願いのために戦う英雄こそが、この世界の歪んだ何かを正してくれる。

「きつと僕や君を倒すのは、象徴を倒し人々の、一人一人の心に希望を灯すのは彼らのような存在だろうね」

「私は、私は」

納得をしてしまった。支えるのではなく、見上げるでもない。ただそこにあつて勇

気を与えてくれる存在、同じ道を歩き、その先に背中を見せて『ついてこい』と道しるべのように告げる。

ああ、だからこそ田中・一郎はこう言ったのか。

絶望を砕く
悲劇を祓う最高のヒーロー、と。

「フッフ、もちろん、私は負けるつもりはないがね、君にもあの三人にも。私はやり遂げるさ。誰もができなかったことも、私ならできる」

そう告げて彼は、闇の中へと姿を消していった。

後に残されたオールマイトは、開いていた手をゆつくりと握る。

理解はできる、納得も悔しいがしてしまった。

しかし、だ。まだまだ譲るつもりはない。

あの時、田中・一郎と約束したのだから。大人として教師として。

前を進む
ナンバーワン・ヒーローとして。

「私も負けるつもりはない。まだまだ彼らには教えたいことがたくさんあるのだから。首を洗って待っている、オール・フォー・ワン」

彼はそう告げて、光の中へと歩き出した。

例えば、君がいつか何処かに行つてしまふとも

いつだって、世界は冷たい。どんな時も辛いことばかりしかない、頑張つて耐え抜いて必死に唇をかみしめて、どうにか前に進んだ先ではもつと大きな何かが立ちふさがつていて。

「僕はいつか、偉大なヒーローになる」

迷いなく両親に告げて、そうなると信じて進んでいても、どうにもできないことはあるつて知つた。

ヒーローになれる人間なんて、ほんの一握り。ヒーローつて職業につける人間は大勢いても、本当のヒーローになれる人はとても少ない。

画面の中で活躍する彼に憧れる。

どんな時でも前向きに笑つて、『私が来た』と告げる彼に憧れて、ヒーローになろうと頑張つても。

無理だよ、彼は特別だ、君では届かない。

いやというほど味わっても、どうしても手を伸ばしてしまふ。

昔の同級生は、ヒーローになった。いつしか自分の周りは、大人になった友人たちが、それぞれの道を歩いて行っている。

自分の道は何処に、探しても見つけようとしても、ヒーローなんて道は何処にもないから。

「ならば、君はどうしたい？」

不意な声に振り返る。誰かと顔を向けた先には、闇に浮かぶ誰かがいた。

「君はどうしたい？ 君はどうなりたい？ 今の世界は君にとって、不幸ではないかな？」

「貴方は？」

「私は、オール・フォー・ワン。さあ君の『不幸』を私に預けないか？」

甘く、心の底に染みわたるような声。もう無理だと諦めた心が、そつと救われたような気持ちになって、手を伸ばしてしまった。

「確かに、君の絶望を貰ったよ」

その瞬間、自分の中で『私』が消えた。

何かと手を伸ばしても、変化などない。今まで使えた何かが使えなくなった奇妙な喪

失感、二度と戻らない何かを求めて手を振り上げても、世界に変化などなくて。

「返せ！ それは私の！ 私だけのお!!」

必死に伸ばし、喉の底から叫んだとしても相手の姿はなく。

こうして彼は絶望の中で絶叫した。

『ああ、これでヒーローになれない理由言い訳ができた』と思いながら。

「クソ個性が!」

何度も殴られる。悪いことなんてしてないのに。個性が悪かった、親の個性を受け告げなかったから。

「なんで俺からてめえみたいなのが生まれるんだよ!」

理不尽って言葉を知ったのは何時からだろう。

こんな個性いらぬ。親のために生まれたわけぢやない。何度も膝を抱えて逃げて、もう逃げられないことを悟って。

また殴られる。

「ここにいたのかよ、クソ野郎」

ああ、また来た。あんな親なんていらぬ、こんな虚しい個性なんていらぬ。自分が自分らしく生きたい、そう思つて諦めて笑う。

「やあ、君の個性は何かな？」

「あ？ 誰だ、てめえ」

「個性だよ、個性。そんなに相手を貶すのだから、さぞかし素晴らしい個性なんだろうね？」

「当たり前だろ。俺の個性は、こせいは？ あれ」

「どうしたんだね？ 是非、見せてくれないか？」

「てめえ！ 何しやがった?! 俺の個性をどうした?!」

「おや、私を疑うなんて酷いぢやないか。君の素晴らしい個性を奪うなんて、酷いことをしたとでも？」

「おまえ、何なんだよ。誰なんだよ？」

「自己紹介がまだだつてね、私はオール・フォー・ワン。巨悪、あるいはラスボスだよ。

じゃあ、ね」

「止めろおおお!!!」

目の前で、『親らしい男』が消えた。呆然と見上げる男の人は、とても冷たくて怖くて、でも優しい気がした。

「さあ、今度は君の晩だよ。君の不幸を貰おうかな」

「おじさんは、悪い人なの？」

「ああ、とても悪い人だよ。悪くて、冷たくて、人の敵だよ。覚えておくといい」

「でも、僕を助けてくれたよ？」

「フッフ、君は素直でいい子だね。でも、そんな子だと騙されてしまうよ」

ゆっくりと男の人は、『僕から僕を消していった』。

でも怖くない。なくなっただとしても、失っただとしても、どうでもよかった。あんなのはあっても意味がないから、辛いだけだから。

「ありがとう」

小さく呟く声に、答える人はいなかった。

「無個性だつて？ おまえ個性ないんだよな？」

何度も言われた。何度も、クラスメートに馬鹿にされた。

今だつてそうだ。クラスで一番の個性とか、将来が有望だつて言われてい子から虐められている。

無個性が悪いのか、個性があるのがそんなに偉いのか。何度も繰り返し疑問が浮かんで、口にする事なく消えてしまう。

「答えろよー！」

蹴とばされて地面に転がった。痛いと言きたくなつた、でも本当に痛いのは体じゃないんだ。もう何度も無個性って言われて、両親に『ごめん』と何度も謝られた。

無個性だつていいじゃないか。人が生きていくのに個性が、本当に必要なか解らないけど、虐めとかしている子が強い個性を持って、泣いている子が個性を持たないなんておかし。

今だって、この子は『ヒーローになるからな』とか言っているのに、やっていることはまるでヴィランだ。

「なんだよ、その目は？ 無個性が」

「ヴィランみたいだ」

「なんだと?! 俺はヒーローになるんだよ！ ヴィランなんて俺が倒すカスなんだよ！」

「なるほど、ヴィランは倒すカスカあ。いいね」

誰かの声があった。いじめっ子がゆっくりと顔をあげて行って、蒼白になった。

自分の後ろに誰かいるのだろうか。振り返ろうとした視界に、黒い腕が入ってきた。

「じゃあ、私みたいなヴィランを倒せるんだらうね？」

「や、やめ」

「フフフ、無個性がどうしたんだらうね？ 君は無個性だどう思うんだい？」

「生きてる価値ねえんだよ！」

精一杯の強がりですれど叫んだ声に、男の人の笑い声が響いた。

「じゃあ、今の君は生きてる価値がないね？」

「何を言ってるんだよ。あれ、なんで、なんで個性が使えないんだよ?!」

「決まってるじゃないか、君が無個性だからだよ？ 良かったねえ」

「ふざけるなよ、返せよ！」

必死な叫びに答えることなく男の人は消えた。

そして蹲る彼に向って、小さく呟く。

「君と僕は無個性だよね？」

「ふざけるな！ 俺は、俺は・・・」

「個性がないんだから、同じだよ」

薄く頬笑みを浮かべていることを、彼は知らないまま、いじめっ子だった少年を見下ろしていた。

頭の痛い問題は常に傍にある、なんて明言だろうか。

「大々的に始めやがったな、あいつ」

報告を持ってきたコナンは、渋い顔をしていた。

コナンが集めてきた情報はどれも、目を覆いたくなるような内容ばかり。

児童虐待、虐め、将来への絶望、色々なケースはあるけど、どれもが個性を奪われたことを示していた。

「こんなにもあるのか？」

オールマイトが震える声で言っている。まあ、確かにこんなにあるなんて信じられないよな。

あ、どうも、田中・一郎です。今、ちよつとギャグになれないので、ご容赦を。

「親が子供を虐待する？ 個性がないから？ 個性が使えないから？ そんなことが」

震えて俯いているオールマイトの背中が、とても小さいものに見えた。

彼からしてみれば、今までの頑張りを足蹴にされたようなものか。必死になつてヴィランを倒し、人々の平穏と平和を勝ち取ってきたというのに、その結果がヴィランにならない、『ヴィランのような一般人』の増加。表に出ないだけで裏側では犯罪のようないことが起きていたってことで。

「子供同士でも個性のことでいじめが起きていたなんて」

「今まで知らなかったのかよ？」

「いや知っていた。知ってはいたが、ここまでひどいとは」

コナンの声に、オールマイトが震える声で答えていた。実際、彼の体は震えている。怒りか、それとも悲しみかはわからないけど。

「昔から人は変わらないよ、オールマイト。誰よりも優れたたい、優福でいたい、あいつよりも強くなりたい、隣人よりも楽をしたい、そんなものだからね」

ソープ、追い打ち掛けるな。今、オールマイトのアイデンティティが崩壊寸前なんだからさ。

「犯行現場、犯行時間がバラバラだ。世界中のどこにでも出現している。これは黒霧と同じ能力を得たか、あるいは」

「高速移動をしているか、でしょうかね？」

コナンの推理の途中で、黒霧が言葉を挟んだ。

そうでないと、この事件件数の多さはちよつと説明がつかないよな。

「ワープ系の能力はとも珍しいものです。なら、移動系のほうが見つけやすいのでは？」

エルの疑問にコナンは首を振った。

「いいや、珍しいだけで前例がないわけじゃないからな。実際、黒霧以外にもワープ系の個性はある」

チラリとコナンは言葉の途中でオールマイトを見た。

ひよつとしてヒーロー公安委員のほうで、個性を把握しているとか。いやまさか、そんなこと。あり得るかもしれない。

「……君たちに話してもいいと許可をもらっている。黒霧青年のようなワープではないが、座標点に飛べる個性はいる。いや、『いた』」

絞り出すように告げたオールマイトの言葉に、誰もが顔をしかめるしかない。

厄介な相手に、厄介な能力が渡ったものだ。これで、オール・フォー・ワンの行動予測は不可能だ。何時、何処から、どうやって侵入してくる強奪能力者なんて、悪夢だろうが。

「ただし、行ったことがある場所にしか飛べないとのことだ」

「弱点はある。けれど、弱点じゃない弱点か」

「一回の移動距離も五十キロが限界だと言われているが」

「複数の個性を組み合わせたら、それも限界かどうか疑わしいね」

あいつのことだから、絶対に弱点を強化して無くしているだろうな。

「死穢八斎會の拠点は、大丈夫なんだよな、コナン？」

「あつちにはギルがいるからな。念のためアインズも控えてもらっている」

「二人がいるなら大丈夫か」

「吹雪、本当にあつちでよかったのか？」

コナンが鋭く見てくるので、俺は頷いておく。

俺が決めた方針は、『今は静観』だ。オール・フォー・ワンの言葉は、本心だろう。今まで自分が忘れていたことが、前までのことで思い出したって話も、たぶん本当のこと。でも、それが『何時まで』か解らない。

人々を平等に平穏につて願つて行動しても、それがズレてしまったから、あの頃の他人の個性を奪つて脳無を生み出して、人々を怖がらせていたオール・フォー・ワンになつてしまったんだろうし。

だから、今は見届けるかなつて思つたわけで。

まあ、襲撃はあるだろうしエリちゃんの個性を狙つているから、最大戦力を配置したいつて言つただけだ。

艦娘達、俺から離れるの拒否したんだよな。まあ、俺の個性を奪われたら、最悪の結末になるつていうのは解るんだけど、だからつてエリちゃんを放つておけないし。

だから、ギルとアインズに行つてもらつて、で吹雪を説得して動いてもらつただけどね。

廻からは『御意。しかし』と言われたけど。

『殺してしまつてもいいのでしょ？』なんて、フラグを立てるあいつは不敵に笑つて

いたなあ。

怖いなあ、廻の奴、絶対に何か隠し玉を持っているな。

「マスターがいいならいいけどさ」

「できれば、第一艦隊もつけたかったんだけどなあ」

エンタープライズ、大和、イオナ、コンゴウ、土佐、信濃の六隻で第一艦隊なんだけど、全員が拒否してくるからなあ。

「一郎君は愛されてますね」

「ヒミコちゃんのこと愛してますよ」

「キャー！ そんな、皆がいる前で止めてください」

イヤンイヤンって顔を振る、俺の嫁さん、超可愛い。

「あれ、弔は？」

「出かけましたよ」

エルに言われ、店のドアへと顔を向けた。

あいつ、何処へ行ったんだろう？

まさか追いかけたとか、いやまさかなあ。

「止めてくれよお!!」

悲鳴を聞いたのは偶然。調味料が足りなくて買い出しに行ったとき、路地裏から聞こえた声に、思わず飛び出す。

顔にはつけ慣れた仮面。手の形をした仮面をつけて路地裏を駆け抜けた先、とても見慣れた男が立っていた。

「やあ、弔、久し振りだね」

「オール・フォー・ワン」

名を呼ぶと、男は何処か嬉しそうに笑っていた。いや、あのゾイドらしい鎧を着ているから、顔までは解らないのだが、何故か弔には笑っているように感じた。

「こんなところで君に会えるなんて、とても嬉しいよ。おや、一郎君は一緒じゃないのかい?」

「今は一緒じゃない。おまえ、本気なのか?」

「ああ、名探偵から聞いたんだね。本気だよ、私は人々に平穩をもたらして見せよう。誰も個性を持たない、誰もが他者を見下すことなく過ごせる、とても素晴らしい世界じゃないかい？」

確かに、素晴らしいのかもしれない。

誰も優れていない、誰もが他者と競わない。誰もが等しく無個性で、同じような視点で物事を見て、同じように感じて、最大の敵に向かっていくなら。

「君もそんな世界に行ってみないかい？」

「……確かに、この個性を疎ましく思ったことはある」

「そうだね」

「俺の個性が家族を殺した。それは揺るがない事実だ」

「だったら」

「だから、俺はこの個性を手放さない」

オール・フォー・ワンの手が止まった。闇の中で伸ばしていた彼を見据え、弔はゆっくりと言葉を紡ぐ。

「辛かった、苦しかった、とても怖かった。逃げ出して、さ迷って、何度も自分なんていなくなればいいって考えた」

「だったら」

「だからこそ、一郎に会えた」

止まった手が動き出しかけて、戸惑うように揺れる。

「俺が辛かったから、今の幸せをかみしめられる。俺が苦しかったから、今が大切に思える。あの時も絶望も怖さも悔しさも悲しみも、そういつたマイナスなものすべてが、今の俺を支えてくれている。今の世界が『そんなに悪いもんじやない』って思えるんだ」
「甲、君はあえて絶望と悲しみを味わうというのか。それが消せるというのに、誰も苦しまず、誰も悲しまない、そんな世界があるのにな？」

「夢のような話だ。きつと素晴らしい世界なんだろうな」

「ああ、そうだよ。だから」

「けど、そんな世界は『停滞しているだけ』だ」

きっぱりと告げて、手を振り払う。相手の懐に入り、右手をのびしかけて、影が消えるようにオール・フォー・ワンが消えた。

「絶望があるから、強くなるうとした。悲しみがあるから、他人に優しくしようとした。苦しみがあるから、誰かの笑顔に癒される。全部、俺だ。俺なんだよ、オール・フォー・ワン。喜怒哀楽、一つも俺の人生において無駄なものはない。この経験があるから、俺はここに立っていられる」

家族を崩壊させて世界が一瞬で暗いものになった。

逃げだして怖くなって何も信じられなくて、そんな時に彼らに出会えた。

最初は、一郎だけがいればよかった。

次は、黒霧がいてちよつと安堵できた。

コナンがいて助けられた。

ギルに会えて楽しみを覚えた。

エルと一緒にいて笑顔に釣られるようになった。

ソープと話して穏やかになった。

アインズの歌を聞いて、体が踊る気持ちを感じた。

艦娘達に会って、自分はここにもいいんだと思えた。

「全部、俺だ。俺を形作ってくれるすべてだ。だから、俺は、俺の絶望も悲劇も悲しみも

苦しみも、楽しさも優しさも温もりも」

右手を握り締める。ゆっくりと姿勢を落とし、オール・フォー・ワンを睨みつけて見

据えた。

「その先の未来ここからのことも賭けて、おまえを倒す。楽な方がいい、そんなことは当たり前だ。で

もな！ そんな生き方の先にあるのは、退屈で死にそうなほどつまらない日々でしか

ない！ 誰かに強要するつもりはないさ！ 俺の人生だ！ 誰からも強要されない！

俺は俺の意思のままに生きて！ 俺が決めたヒーロー像に向かって走って！ そして

俺らしく死んでやる!! 解ったか?! オール・フォー・ワン!!」

視界の中にあいつを捕らえた。個性を使う、手に触れなくても崩壊はできる、何度も訓練した成果が、今こそあいつを倒す。

二度と一郎に、いや誰かを苦しませないために。

「ク?! 弔、君は素晴らしく強くなつたよ。ああ、流石だ。さすが人々が名付けたヒーローなだけはある」

「そんなに大層なものじゃない。俺は俺の意思で戦っているだけだ。お前の言うような、人々の願いの結晶ヒイじゃない」

きつとそれはあの二人だけの称号だと弔は思う。人々が名付けたのは自分も同じだが、あり方はまったく違う。

『ザ・ハンズマン』は、自己の意志のままに動く。けれど、『グリーン・シップ』と『シンガー・ボマー』は人々の願いのために動くから。

最初から何事にも全力で能力を使う自分と違い、彼らは例え自分が死ぬことになっても『能力のすべて』は使わないだろう。

そこに願いがなければ。

「フフフ、なるほど。君は、そういう『あり方』を選んだんだね。まったく、本当に君は『染まってしまった』ようだね」

「戯言はそれだけか？　なら、次は」

フツとオール・フォー・ワンの姿が消えた。また何処かへ移動かと視線を巡らせるが、相手は何処にもいない。

「君に倒されるほど、私の理想は低くはないよ」

言葉だけが風に乗って弔の耳を打った。

「……俺の理想も、おまえの理想に負けるほど安くはない」

小さく呟き、弔は歩き出した。

暗い路地裏から、表通りの光の中へと。

「お帰り、弔、どうしたんだ？」

「……なんでもない」

「おくり、なんで間があつた？ 誰と会つてたんだよう？」

問いかける一郎に、 弔は立ち止まってちよつと振り返る。

「一郎、ありがとうな」

「は？ え、何それ？」

「なんでもない」

小さく微笑みながら、 弔は再び歩き出した。

ありがとう、おかげで今の自分は何処にいても、歩いていける。

「なんだよ、それ？」

「今日はカレーにしよう」

「え、今日は金曜日じゃないけど？」

「いいじゃないか」

とても嬉しそうに弔は笑いながら、冷蔵庫を開く。

「今は食べたい気分なんだ」

最初の出発点、そこをちよつとだけ懐かしく思いながら。きつと、自分のオリジンは、不器用ながら一生懸命作ってくれた、温もり一杯の一杯のカレーライスだから。

「弔がいいなら、いいけどさ」

「ああ、とびきり『あつたかい』カレーライスを作るさ」

とても楽しそうに笑う弔に、一郎も自然と笑顔を向けたのでした。

譲れない想いと、揺るがない真理

何気なくだった。資料室を貸してもらったから、特に考えることなく資料室の中を見て歩きながら、一つ一つと本を手にとっては目を通し、気になったものへと移っていき、流し読んではまた戻すを繰り返していた。

そんなときだった。

「なるほど」

一つの資料に目を通した時、彼は深く頷いた。

自分の能力と似通っている部分がある。これならば、いくらでも戦える。元々、自分の個性は戦闘向きではないと考えていたところだ、いくら試行錯誤を繰り返しても決定的な一撃が放てない。

どうするべきか、悩みに悩んでいた時に資料室を見せてもらえたから、何かヒントになればと思っていたら、まさかの出会うと出会えるとは。

「面白い、実に面白い『能力』だ」

本を隅々まで読みなおし、治崎・廻はゆっくりと閉じた。

資料は、戦闘用ではなく、ただの物語をつづつたもの。

彼は何処までも突き進んだ。自らの拳を武器に、ただ前の壁を壊して突き進む男だった。

失意もあつただろう、喪失もあつただろう、それでも男は立ち止まらずにただ前に進んで行った。

知識など不要、技術なんて知ったことではない。ただ己の拳を信じて突き出して、我武者羅に突き進んで、そしてその先に手にしたもの。

自分とはまったく正反対な性格、その戦い方はとても優れているとは言えない。不格好でとても馬鹿らしく、ある意味で無様かもしれない。

けれど、だ。その姿は鮮烈で苛烈で、何処か心惹かれるものがあつた。

「私も男だつたということだな。ありがとう、君のおかげで私は進むべき道が見えた」
そつと本棚の資料を指でなぞる。廻の指がなぞつた場所には、手書きでこう書いてあつた。

『スクライド』と。

雄英体育祭を中止せよ。

通達が来たとき、根津はついにと思った。前々から言われていた、最近の事件の多さ、一般人だけではないヒーローも能力を奪われたことが続き、オール・フォー・ワンが盛大に動き出したことよって、世間の緊張感はかなり高まっている。

個性を失うことに対しての恐怖、自分が今まで見下していた相手と同列になる恐怖、誰もが平等になつていく怖さ、今までの何かが崩れていくことへの怖れ。

世間の感情はそう言ったものだ。誰だってそうかもしれない。今まであったものが消えたら、ずっと続くと思っていたものがある時に消えてしまったら、誰もが恐怖を感じるだろう。

次は自分の番かもしれない。明日には失っているかもしれない、見えない何か近づ

いてくる音におびえて、外出を拒否する人まで出てしまった。

もしかして、あいつがやったのか。そんな声が出るのに、そう時間はかからなかった。あいつが憎んでいるから、あいつを虐めていたから、あいつを見下していたから。そんな感情から、疑心暗鬼になって他人を疑うようになってしまったのは、仕方のないことかもしれない。

オール・フォー・ワンは自分がやったと公言している。個性を奪った時に、あるいはメディアの放送をジャックして、あらゆる通信手段を使って自分が個性を奪い、この世界中の全員を無個性にしてしまうと宣言している。

しかし、それを信じられる者がこの世界にどれだけいるだろう。個性を奪えるなんてこと、あるわけがないと信じられない者のほうが圧倒的に多かった。

オール・フォー・ワンの誤算は、そこかもしれない。彼は、個性さえなければ世界は平穏になると信じている、誰もが無個性であり、個性を持つ彼だけがすべての上に立ち、あらゆる感情の矛先を自分に向けることで、世界を一つにまとめようとしていた。

実際は、誰もが誰もを疑って、時にヒーローさえ疑う場面が出てきてしまうほど、世界は不安定に揺れてる。

今の世界は、一つの要因を取り除いて、憎しみの対象を差し出ただけでまとまるほど容易い世界ではない。

彼は、ラスボスだ。巨悪だ。やっていることは、史上最大の犯罪であったが、彼ほど『人間を信じている』存在は、この世界にはいない。

だから間違えた。

いや、と根津は考えてしまう。彼のハイスペックが別の可能性を考えてしまった。もしかして、彼は『現在の混乱を予想して、その先を見据えていた』のかと。

もし、そうならばとんだ策士だ。希代の戦略家といつてもいい、世界中の人間の混乱さえ予想に入れ、その先の最終目標までの筋書きを描いているなら。

今はそれではないか。

「校長、解っているのでしょうか？ 今の状況で、雄英が体育祭を行うことは、世間からの

非難が集中します」

「解っています。世界中が不安にかられているのに、ヒーローさえ危機にひんしているのに、普通どおりの体育祭を行うのは、危機管理がなっていないと言われると」

「ならば中止しなさい」

ヒーロー公安委員の会長は、静かに告げる。

表情を変えることなく穏やかに言われた声には、逆らうことは許さないとといった感情が乗っていた。

中止するべきなんだろう。普通に考えたら、ここは体育祭を中止して生徒達の安全を

図るのが当然の選択だ。

個性の集う学校において、体育祭を行うなんて、個性を奪う対象を集めて『来てください』と言っているようなもの。

「それでも、私は行いたい。今、中止にしたら生徒達に動揺が広がります」

「行つた場合、もしもの時は、雄英の廃校もありえます。解つていますか?」

「解つていません。だからこそ、です。今、体育祭を中止にしたらヒーロー達は『世界の平和を護れない』と公言するようなものです」

学生の行事さえ中止にしなければならないと、ヒーローが認めたと世間には映るだろう。

もう護つてくれない、ヒーローは頼りにならない。世間にそう思わせてしまったら、そう『確信』させたら。今のヒーロー社会は崩壊して、二度と戻つてこない。

人は一度の失敗に学ぶ。いい意味でも悪い意味でも、失敗したことは二度と繰り返さないようにするだろう。

「だからこそ、生徒達を危険にさらせ、と?」

「いいえ、私たちがいます。雄英の教師は現役のヒーローでもあります。だからこそ、私たちが護ります。生徒達の日常を、世界の平和を」

真つ直ぐに見つめた後、根津は深々と頭を下げた。

「責任は私が取ります。どうか、お願いします」

会長は何も答えず、ジツと根津を見つめた。

メリットもデメリットもどちらにでもある。中止と開催、冷静に考えるならば、どっちが正しい選択なのか解らない。

分水嶺、今後のヒーロー社会のための決断なのだろう、と会長はそんなことを考えていた。

どうすればいいか、どうしたら最善か。そう考える彼女の脳裏にチラリとよぎる影が一つ。

考えるまでもなかった、と彼女はポケットからある物を取り出す。最近は何時もちち歩いてるそれを。

「今のヒーロー社会の裏側を私達は知っています」

話が変わった。根津はそう思って顔を上げると、会長は小さな写真を眺めていた。何時から持っていたのか解らないが、それを見つめる彼女の表情は見たことがないほど穏やかだ。

「仕事として決めたのは我々ですから、ヒーローが職業であることは十分に理解しています。そうしたのはい我々ですから」

「そのおかげで、個性を持った人々は争うことなく過ごせると思います」

御世辞ではなく根津はそう感じたから告げた。けれど、会長は自嘲気味に笑って告げる。

「ええ、そのために『ヒーロー』の姿はなくなりました」

「それは」

「いいのです、解っていたことだから。あの時の決断に、後悔はないわ。誰もがそう言うでしょう。でも、今は少しだけ違う方法があつたのではないかと考えることがある」
手に持っていたものを仕舞、会長は別のものを根津に差し出した。

「裏側を知っているからこそ、今までは素直に呼べなかった。けれど、今なら素直に言える気がする」

そつと差し出したものはライセンス、書かれた名前は『シンガー・ボマー』と『グリーン・シップ』の二つ。

「爆豪・勝己と緑谷・出久ではなく、あの二人に私たちがからの許可証を渡してもらえるかしらっ」

「はい、喜んで」

根津はしつかりとそれを受け取ると、会長はゆつくりと微笑んだ。

「これで私もようやく素直に呼べるわね」

『ヒーロー』と。

時は満ちた、というには遅すぎたかもしれない。

庭先で遊ぶエリを見つめながら、廻は右手を握りこむ。

ああ、ついにか、と思ってしまう。

エリと一緒に遊んでいた吹雪が、不意に顔をあげて右手にナイフを握った。

縁側で寛いでたギルガメツシユが起きがり、ギターを抱えてたアインズが豪華な衣装を身に纏う。

「フフフ、歓迎されているねえ。いいよ、いいよ。それでこそ、奪い価値があるというものだ」

黒い点が広がるように、あるいは闇のようが広がるように、そいつは姿を見せた。

オール・フォー・ワン。

「やあ、エリ、君の『不幸』を貰いにきたよ」

「.....」

彼女は怯えた様子で下がろうとして、足を止めた。

「私は、不幸じゃない」

「君の個性が、君を両親から引き離れたのだろうか？ 子供は親の元で育つものだ。両親の庇護のもとで未来を夢見て、進んで行く。そうでないのは、とても寂しくて辛い、そんなこと誰にも味あわせたくない。だから、君の個性は貰っていくよ」

なるほど、と廻は思う。前と雰囲気はまったく違う、あの時とは違っていて圧迫感はない。無理やりに押し通そうとする雰囲気もない、相手の話を聞いて相手に話を通して、その上で奪っていくのか。

あの時とは全く違うが、それでも状況的には同じか。

結果的にオール・フォー・ワンは個性を奪いに来た。エリの気持ちを無視してでも。

「させません」

「吹雪か。その目、『直視の魔眼』だったね？ それも個性なら私が奪えたんだだろうけど、無理だろうね」

「知っているなら、『貴方も殺します』よ？」

うつすらと笑う吹雪に、オール・フォー・ワンはにやりと笑ったように見えた。

「それで私が退くとでも？ さあ、エリ、君の個性を私に」

「あげない。私の個性は、『私だから』。辛いこともあったよ、苦しいこともあった。でも、これがあつたから私はここにいられるから」

はつきりと幼子は、自分の意思で拒否した。

出会ったところは流されていた。自分の意思で語ることはなく、周りの顔を見ていたのに。こんなにも怖い状況で、はつきりと自分の意思を通せるようになったとは。

廻は感慨深く思う。あの小さかった子は、今も小さいままだが、心は大きく成長している。良かったと素直に思う、嬉しいと内心で感じる。

「君も弔と同じことを言うんだね。君たちは本当に、辛くて苦しい道を選ぶのが好きだね」

「辛くて苦しいほうが、人生は楽しい。幸せをその分、多く味わうことができるって、言われたから」

「誰にだい？」

問いかけの答えは、彼女の口から出なかった。

代わりに、一撃がオール・フォー・ワンの顔面を殴り飛ばした。

「御託は終わりでいいか？」

彼は巨大な装甲をつけた右手を、殴った姿勢のままにして問いかけた。

「ふ、フフフフ、フハハハ!! どうしたんだい、廻?」

「いい資料に巡り合えたからな。語ることはない、話すこともない、単純な話だよ、オール・フォー・ワン」

「今までの君らしくないねえ」

「俺らしく? 俺の何を知っている? まあ、俺らしくないといえましょうかもしれないが」

「両手を打ちつける。鉄鋼、それもただの鉄ではない。艦娘が使っている鋼鉄を使って『再構築した』両腕だ。」

「さあ、ケンカしようぜ。ぐちゃぐちゃと話すより、そのほうがシンプルだ。おまえはエリの個性を奪いたい、エリはそれが嫌で、俺はエリの意思を尊重する。要するにだ、個性が欲しいなら俺を倒せ」

「いいだろう」

起き上がり、オール・フォー・ワンが両手を突き出した。

さあ、ゴングを鳴らせ。今こそ、あの時の屈辱を叩きかえす時だ。

右手を叩きつける。オール・フォー・ワンの左手を弾き、今度は左手だ。真つ直ぐに突き刺したストレートが、相手の体を捕らえた。しかし、浅い。その上にまるでゴムのような感触だ。

「いいね！ 今の君は実にいい存在だ！」

「ありがとう、よ!!」

右手をアツパー。相手の顎を狙った一撃は、確実に入ったはずなのに硬い感触に阻まれた。鎧か、あれがある限り有効打にならない。何処か脆い場所を探して、と考えている思考を吹き飛ばす。

関係あるか、一発で足りなければ十発、十発で足りなければ百発。相手が倒れるまで何度で殴ればいい。

右手で顎、左手で腹、大きく踏み込んでの右ストレート。ラツシユにラツシユを重ねる。相手に反撃させない連撃、何処を狙うなんて考えない、ただ相手の体に拳を叩きこ

む。

「今日の君は脳筋だねえ！」

「おまえに使う思考がもつたいないんだよ！ 俺は多くの人に自分に合う服を着てほしい、そのために考えて悩んで試行錯誤を重ねるならいい！ でもてめえには必要ねえ！！」

言葉使いが崩れるが、関係あるか。今、必要なのは相手を殴る、絶対に倒すって意思だけ。他は必要ない。

「それで私を倒せると思っているのか?！」

グニヤリとオール・フォー・ワンが崩れる。何かの個性かと考える前に、両手が掴まれた。

「なに?!」

「奪えるかよ！ 今の俺はなあ！」

地面を踏み締める、陥没するほど強く踏みしめた威力をそのまま体の中を通して、振るように飛ばした波動をそのまま、右手に乗せて叩きつけた。

衝撃波が地面とオール・フォー・ワンを抉る。

「艦娘の鉄鋼と同じ成分で出来てるんだよ！ 天然の鎧じゃねえ！ 俺自身が『鎧』なんだよ！」

「クー！ 田中・一郎の個性の欠片を、そんなことに」

「足もとがお留守だなあ！」

拳だけじゃない、刈り取るように右のローキック。右手を突き出した勢いのままに蹴りを出したが、案外に上手く入るものだ。

「次い!!」

そして空中で回転したままの、左の飛び蹴り。

「ブハ!!」

「どうしたてめえ!!」

「いい蹴りだ！ いい拳だよ廻!!」

オール・フォー・ワンの両手での一撃。空中で回避できない廻に突き刺さり、彼は地面に叩きつけられた。

衝撃が胃の中をかき回す。意識が持つて行かれそうになったが、グツと堪えた。視界の中にエリがある、心配そうじゃない、グツと拳を握って頑張れと目が訴えていた。

立てと廻が内心で叫んだ瞬間、横から蹴りが入った。体が衝撃に耐えきれず、吹き飛ばす。

「まだまだだねえ、年季が違うのさ」

庭を転がり、庭園の岩にぶつかってどうにか止まった。

ペツと口の中のを吐き捨て、廻は立ち上がる。内臓がやられたか、関係ない。再構築すればいい。周りにいくらでも物質はある、いざとなれば艦娘の鉄鋼の予備はあるのだから、それで内臓も補えばいい。

「なんだよ、おまえも『そっち』だったのか?」

「もともと、素手での戦いのほうが好みだね。まだまだやれるだろう?」

「当たり前だろ!!」

廻は飛びつく。オール・フォー・ワンも迎え撃つ。

拳を飛ばし、相手を殴り付け、蹴りを放ち、相手を吹き飛ばす。何度も飛ばされても戻り、何度も倒れても立ち上がる。どちらも相手を叩き潰すために力を振るい、やがて相手しか見えなくなっていく。

始まりなんてどうでもいい、相手が誰かなんて関係ない。

ただ、こいつを倒したい、それだけが思考を埋めていく。

「君はいい加減に倒れろ!」

「おまえが倒れろ!」

「鬱陶しいな!」

「お前の方が鬱陶しい!」

言葉も使って相手を殴る。アッパー、ジャブ、ストレート、ロー、ハイ、そんなもの

じゃないただ殴って蹴って、絶対にあいつを倒して最後まで立っているために。

「いい加減に！」

「倒れろ！」

そして最後にはお互いにストレートを叩きこんで、同時に倒れた。

「なかなか、いい拳だったよ。昔を思い出せた」

「は！ てめえの昔なんて知ったことかよ。なんで、こんなこと始めたんだ？」

「世界は何時だったってこんなはずじゃないことばかりだ。そんな風に思ったからだ。法では護れない存在もある、法で傷つく人もいる」

オール・フォー・ワンは、ゆっくりと右手を挙げて握り締めた。

「だから、私は立とうと思った。仕方がない、それしかなかった、普通に考えれば当然だ、そんな逃げ道で逃げて犠牲者から目を背けるなど、出来ない」

「おまえだって犠牲者を出している。おまえのために悲しんでいる奴が何人いると思っているんだ？」

「知っているさ」

オール・フォー・ワンは上半身を起こし、鋭く見つめた。

「だからこそ、止まらない。始めてしまった者の責任であり、理想を語る者の宿命だ。悲しんだ者すべてのために、私は平等で平穏な世界を作る」

虚言ではないと、廻には感じられた。拳を交えたから、相手の気持ち解るなんて言えないが、相手の男の言葉には重さが乗っていた。

自分達がエリを護る時の言葉と同じように。

「俺には認められない。俺達はエリに救われた、俺たちがあるのはエリのおかげだ。その出会いは個性がなければ、始まらなかつた」

「フッフ、君たちがそう言うなら私を倒すといい。私は逃げないからね」

そう告げて、オール・フォー・ワンは姿を消した。

「逃げてるだろうが」

廻は小さく呟き、ゆっくりと立ち上がる。

向こうで涙を堪えながら、笑顔で拍手している『我^エらの旗^リ』へと勝利の報告をするために。

「今度こそ、護り抜いたぞ」

胸を張りしっかりと彼はそう告げた。

死穢八齋會、襲撃される。

廻、殴り屋になる。

「はい？」

「はあゝゝゝ」

報告を受けて、俺は何のことだかと首をかしげたのでした。
で、隣でコナンが凄い深いため息をついている、と。

「あいつは、なんでケンカ屋になってんだよ」

「どっちかっていうと」

「いい、言うな、マスター。まったく。それで？」

コナンが顔をあげて問いかける先には、吹雪が立っていた。死穢八齋會の襲撃の報告に来ただけで、他にもあるんだよね。

「はい、出来ます」

できそうではなく、出来ますって言いきったよ、この子。

「解った、戻ってくれる？」

「はい。でも、本当は司令官の傍にいたいです」
「ごめん」

また襲撃があつたとき、はつきりとオール・フォー・ワンに対しての、『カウンター』になるのは、今のところ吹雪だけだからね。

店から出ていく後ろ姿を見送って、俺はポツリと呟いた。

「予想外だったなあ」

「俺は予想出来てたぜ。なんていつても、『生きているなら神様だつて殺してみせる』つてのが『直視の魔眼』だからな」

「だからつてさ」

普通、考えないし思いつかないだろ。

『個性を殺せる』なんてさ。

心の底から震えるほどに、赤く燃えて、青く冷たくなって、それでも叫び続けるような、決意

雄英体育祭、開幕。

多くの想いと願いを込めて、毎年に行われた体育祭は、今回は特別な意味を持って行われた。

噂が流れていたから。未登録のヒーロー、誰も正体を知らないが誰もが今では知っている二人のヒーローが、実は雄英にいるかもしれない。

ある事件の時に、その二人が雄英の訓練場にいた、という話が世間に流れてしまい、今年の体育祭は過去最大の来客数を記録した。

見てみたい期待と、今の世界の不安を忘れるために楽しみたい気持ちと、何より『ヒーロー』に縋りたい希望が渦巻く中、雄英体育祭は激動の始まりを見せた。

『誰が予想した?! 誰もが予想しなかったって?! いいや予想していたけどまさかだよ

な?!』

プレゼント・マイクの叫び声が響き渡る。

誰もが注目する運動場の中、二つの影が走り抜ける。誰も寄せ付けない、誰も近づけさせない。

『ウソだろおまえら! 本当に一年生か?! なつって速度でクリアーしやがるかな!』

過去最高記録だぞ!』

観客席は歓声を上げ続けた。新入生なんてまだ高校生になつたばかりで、個性が上手く使えずに右往左往するに決まっているのに、今年に入った新入生が飛び抜けた実力を持っているとしても、これは予想さえしなかった。

『ゴール! おまえら本当に一年か?!』

他を大きく引き離し、二人は同時にゴールを決めて、お互いの拳をぶつけあった。

「まずは、一つ目だな」

ゴールした姿を遠くから見たA組の誰もが、信じられない顔をしていた。知っていた、実力があるのは解っていた、あの二人ならやるだろうと。

「うん、一つ目、だね」

あの姿の二人なら圧倒的な実力を見せてくれるって、そんな憧れのようなものを持っていたのに。

二人はそんな思いを簡単に裏切ってくれた。あの姿にならなくても、単純な身体能力だけで、彼らは他の個性を使った誰もを圧倒していた。

「示してやろうぜ」

爆豪・勝己と。

「うん、証明しよう」

緑谷・出久は。

「俺／僕にかけてのは間違いないじゃないって」

汗一つ見せずに、悠然と歩いていた。

それは体育祭が始まる直前のこと。

デクと爆豪は、根津校長に呼び出された。

「実は渡すものがあるんだ」

「僕たちにはですか？」

「何かあつたんですか？」

校長室にはオールマイトと、相澤先生もいた。二人とも渋い顔をしていたが、何処か納得したような雰囲気を見せていた。

「うん、実はね、ヒーロー公安委員の会長からこれを渡すように言われたんだ」

机の上に置かれたのは、二つのカード。見覚えのないカードに二人が視線を向けて、その瞬間に気づいた。

「ヒーロー活動許可証だよ」

当然のように告げる根津の言葉が、世間話のように言われた声が、とてつもない重さを持つて二人の肩にのしかかる。

多くのヒーロー志望の生徒が、このために努力を続けている。何倍もの関門を越えて、幾度となく努力して必死に耐えて頑張つて、限界を超えても届かない人もいた。

たった一枚のカードのために。

この僅かな証明書のためだけに、人生を潰した人だつていた。家族を失うような瀬戸

際に落とされた人もいた。

どんなに頑張っても、手に出来なくて失意の底に落ちた人もいた。

それが、今、簡単に目の前にあるなんて。

「ただし、これは『緑谷・出久』と『爆豪・勝己』にじゃない」

根津は二人を見つめながら、声に力を込める。

「これはね、『グリーン・シップ』と『シンガー・ボマー』の許可証だよ」

重さが、今までとは違うものになった。

今までのが潰されそうな重圧なら、これは人々の願いの重さだ。悲しいと叫んだ人がいて、苦しくて泣いた人がいて、辛くて死になつた人がいて、多くの苦難を味わつた人たちが、『助けて』と小さく呟く声に確かに答えるための証明書。

これを受け取つた後は、今までのような中途半端は許されない。今までも全力だった、一部の隙もなく全身全霊で臨んでいた。救えない命があるのが許せない、助けられないことがあつてはならない。

決意を持つて臨んで、絶対に取りこぼさないと誓つたものが、これからは『最低限』になる。

出来て当たり前。救えて当然のこと。それが、ヒーローだから。

「これを渡した時、会長は言っていたよ」

二人が感じている重圧を知りながらも、根津校長は言葉をつづけた。もしかしたら、二人にはもつと重荷になるかもしれない。潰れてしまうかもしれない。

二度と立てなくなるかもしれない。

けれど、言っておきたい。あの時の彼女の顔を見て、あの二人に許可証を渡してもらえるかしらといった彼女の、その言葉に込められた想いを伝えるために。

きつと、立てる。きつと、二人なら重荷を背負いながらも、足を止めることなく進んでくれるだろう。

「これは、『グリーン・シツプ』と『シンガー・ボマー』への、ヒーロー公安委員会からの希望を託すって意味だよ」

同時に、自分達からも。

どうか耐えてほしい、そう願いながら根津が告げると、二人の表情が晴れていく。

ああ、やっぱりこの二人はヒーローだ。誰かの苦しみに敏感に気づき、誰かの苦しみに答えて、絶望の中にいる誰かを救うために真っ先に駆けつける。

自分達がどんな苦境でも、どんな不利な状況でも、助けてと言われた真っ先に動いてしまう、心の底からヒーローになっている。

「今の時代、ヒーローは職業だからね。裏側を知っているヒーロー公安委員は、迂闊に言えないからさ。助けてと言ってしまったら、ヒーローは動く。ヒーローが動いたら、も

う後には戻れないからね」

静かに語る根津の視線は二人を見続ける。

真つ直ぐに見つめ返す二人は、真顔でありながらも少しだけ微笑んでいた。

真面目に聞いていながらも、相手を安心させるように笑う。とても大事で当たり前のことだ、実際の犯罪現場にいた時に何人のヒーローが実践できるだろう。

実際の災害現場に辿り着いたヒーローが、相手に安心を与えるために笑顔を向けられることが、出来るだろうか。

二人はそれを自然としている、少しに不安を感じ取って『大丈夫』と全身で語るように微笑んでいてくれる。

「敵ヴィランの実力と駆け付けたヒーローの実力、周辺の被害、あるいはその後の補填、もしかしてヒーローが殉職したら、家族へはどういえばいい。色々と考えてしまうとね、素直に言えないんだよ」

裏側を知っているから、制度を司っているからこそ、言えるわけがない。助けてなんて、ヒーローを呼ぶなんてできるわけがない。

絶望的な状況でも、苦しくて泣きそうでも、必死に耐えて救いを求めようとして手を伸ばしかけて、無理やりに抱きしめるように手を隠す。

「君たちには酷い話かもしれないけど」

「構わねえよ」

当然のように、爆豪は『シンガー・ボマー』の許可証を手にとった。

「大丈夫です」

デクも自然と『グリーン・シップ』の許可証を受け取る。

「俺達はもうヒーローだから、誰であつても助けてつて言うなら助けるさ」

「だから、遠慮なく言ってください。僕達の全力で助けます」

「世界中のどこだろうとな」

「取りこぼすことなく、助けだします」

真つ直ぐに笑顔を浮かべたまま、二人はそう告げた。

半端な覚悟じゃない、全身全霊だけじゃ足りない。自分の未来さえかけて、この許可証に相応しいヒーローになってやると、決意を新しくして。

「ありがとう。君たちに出会えたことは、僕の人生で一番の幸運だったよ」

「大げさなんだよ。これからだろ？」

「これからですよ」

まだまだ先に行くから、見ていてください。二人の宣言を受けて、根津は深くイスに座り直した。

二人が退室してしばらくして、オールマイトと相澤は根津に詰め寄った。

「反対です」

「私もです」

「解っているよ。あの二人が、『燃え尽きないか』不安なんだね？」

大きく頷くオールライトと相澤に、根津は同意を示した。

「僕もだよ。でもね、僕は賭けてみたいんだ」

「何を、ですか？」

相澤が不審そうな顔で見つめる中、根津はゆつくりと微笑んだ。

「二人のヒーローとしての資質にね。どんな状況でも誰かを救うためには、どんな状況からも生還するのが最低条件だからね。多くの人を救う、誰も取りこぼさない、二人の決意が本物なら、ずっとこの先も『グリーン・シップ』と『シンガー・ボマー』は消えることなく走り続けてくれるさ」

「希望的すぎます！」

オールライトは激しく机を叩く。それに対して、根津は怒ることなく大丈夫と口にした。

「そのために、僕らがいるから。二人しっかりと教えておこう、大丈夫さ。まだ学生生活は始まったばかりだからね」

しっかりと教え込んで、二人が生き急ぎすぎないようにしないと。

三人は決意を新たにしながら、まさかあんな事態になるとは思っていなかった。

大番狂わせとは、このことだろう。

何でも有りの障害物競争、ポイント争奪戦の騎馬戦。最初のほうは個人技だったから、二人の強さは際立っていた。

個性を使った様子もないのに、他の生徒を圧倒する速度でゴール。汗一つかかずに悠然と歩いていく姿に、観客席からは多くの声援が送られた。

続いたの騎馬戦はチーム戦、いくら個人的な実力があつたとしても、チームを率いているならば、多少の差は埋まるのではと考えていたのだが、多くの予想を裏切つて、二

人のチームはポイントを総取りをしてしまった。

きつちり二人でポイントを山分けしたように。

『おいおいおいおい!! 今年の一年の二人は化け物かよ?! 個人で強い上にチームを率いても強いなんてさ!』

プレゼント・マイクの言葉は、会場の全員の意見を代弁していた。観客はもちろん、参加している生徒達の気持も。

強すぎる。

圧倒的なんて言葉が霞むほどに、二人の実力は次元が違っていた。

「チー! 同点かよ」

「かつちゃん、相変わらず悩むと突撃するよね」

「おまえだって、攻めると守るじゃ、守るに傾くだろうが」

「まあ、それはね」

点数を見ながら、デクと爆豪は談笑していた。

「ね、いたの解った?」

「ああ、一郎さん、来てくれたんだな」

「弔さんと黒霧さんもいたね」

「エリと廻さん、動いていいのかよ」

「ギルさんとアインズさんもいたし、エルさんとソープさんもいたから。コナンさんもいたよね」

「勢ぞろいで応援か。気合入れなおさねえとな」

「うん、まさか艦娘の皆さんも総出って、嬉しいよな」

「言うな、デク。俺は震えてきたぜ」

まさかまさかのオールスターでの応援なんて、これは下手をしたら再訓練にならないか。

ブルツと二人して震えが来た。

考えるのは止めよう、どちらともなく言い出して次の競技へと向かった。

次は個人戦、トーナメント戦だ。

うわあ〜あの二人、マジでやっているよ。

どうも、田中・一郎です。いやいや、手加減って言葉知らないのかな。あ、でも手加減したら周りに失礼か。それにしても、艷装もコスチュームもなしに、他の生徒を圧倒しているよ。

「二郎君、これって体育祭ですよね？」

「それね、どうしたのヒミコちゃん？」

「ガチバトルって体育祭に必要なんですか？」

え、ガチバトル。えっと、あるの、そんなの？

「ギル、念のために宝具用意な」

「解っている、コナンこそ宝具を使う準備はいいな？」

「ああ、まさかなあ」

「フ、青春とは眩しいものよな」

あれ、あつちでなんか凄い嫌な会話しているんだけど、嘘だよな。

「アインズ、結界用意して」

「よかろう」

「エルも魔法障壁準備ね」

え、あれ、なんだかトーナメントが進むにつれて、うちのメンツが騒がしくなってきたんだけど、なんで。

え、まさかそんなに大事になるの。え、まさかだよね。

先生の中にも防御が得意な人はいるから、その人に任せた方がいいんじゃないの。

「司令官、もしもの時は艦装を使ってもいいか？」

「エンタープライズまで、そんなこと言うってマジなのか？」

「ああ、ひよつとしたらなあ」

これはガチだなあ。俺はちよつと苦笑いしつつ、許可を出すのでした。

トーナメントは、やはりというか圧倒的な二人が駆け上った。

見どころは確かにあった。二人に必死に挑んだ生徒達に、観客は惜しまない拍手をした。

負けたとしても、その姿は立派だったと。さすがヒーロー候補生だと、誰もが称賛を送った。

そして、次の対戦カードが開く。

緑谷・出久対轟・焦凍。

現在、圧倒的な実力を示す生徒と、前評判ナンバーワンの生徒の対決だった。

轟は一人、会場への道を歩く。様々な想いが内心で渦巻く、これから戦う相手は自分が憧れたヒーロー。

絶対防御、絶対保護の代名詞になりつつある『グリーン・シップ』。

戦いたい、あいつのようになりたいから、あいつに今の自分が何処まで通じるかを確かめたい。

震えるような体を抑え、グツグツと上がってくる何かに蓋をして、ゆっくりと歩いてく。

ふと、廊下の途中に誰かいた。誰だと顔を向けた瞬間、先ほどまでであった体の中の何かが瞬時に冷めた。

「おまえはあいつと戦うつもりか？」

「関係あるか」

エンデヴァーは、静かに壁に背を向けたままこちらを見ようとしない。前からそう

だ、何時の頃から彼は自分を見ようとしなない。

当たり前か、お互いに嫌っている。どうしようもないほど、家族でありながら溝が出来てしまった。

「実力差は解っているはずだ」

「黙れ」

「それでも戦うのか？ 負けると解っていていいの？」

「黙れ」

「……今の貴様は、かつての俺だ。ナンバーワンになりたくて、無様に足掻くだけあがいた、愚か者のな」

「黙れと言っている!!」

叫んで睨みつけると、エンデヴァーも轟をみつめた。

「今の貴様は、かつての俺だな」

「ふざけるな、お前みたいにならない。俺は」

「ヒーローの顔じゃない。今のおまえは、『何のために戦っている?』」

「お前が言うか、おまえが!!」

「そうだな、俺が壊してしまったものだ。だから」

エンデヴァーは顔を背けた。何処を見ていると轟が視線をたどった先、試合会場の上

に立つ彼と目があつた。

「すまない、俺の我儘と『願い』をおまえに託す」

ポツリと呟いた言葉は、轟の耳には届かずに風に乗って消えた。

けれど、彼は頷いた。聞こえるはずなのに、緑谷・出久は大きく頷いていた。

何が言いたいと轟はグルグルと考える頭のままで、足を進めていく。今更、父親面がしたかつたのか、アドバイスでもくれたのだろうか、それともみじめに負ける自分の姿が見たかつたのか。

何度も考え、何度も答えを出そうとして出せずに、そして彼は。

「考え事？ 余裕だね？」

ハツとした、気づいた時には目の前にいて、デクは拳を握っていた。

不味い、あのパワーを直に受けたらとても立っていられない。間合いの内側に入られた、どうすればいい。

瞬間、轟は全力で『氷結』を振るつた。

訓練場が凍りつく。巨大な氷柱が吹きあがり、観客席も覆うような氷が壁のようにそびえ立つ。

しまった、全力過ぎた。体が凍りつく、運動機能が低下してしまう。

「轟君は、追い込まれると氷で薙ぎ払おうとするよね？」

声はとても穏やかに、そして衝撃は容赦なく氷を消し飛ばした。

「氷結は確かに強力だよ。氷はそれだけで武器になるし、壁に使えば相手の攻撃を防げる、密度を上げれば大抵の攻撃は防げるね。でもその反面で」

「デクの指がゆつくりと上がり、轟をさした。その凍ってしまつた半身を。」

「あまりに強すぎる凍結能力は、君自身の行動を制限してしまう。訓練の時に指摘したはずだよ」

「ああ、そうだな」

「なんで炎を使わないの？」

「あいつの力なんてなくてもな」

再びの氷、密度を上げた氷結が壁をなしてデクに迫る。

しかし彼は、左手の一撃で粉碎して見せた。さすがに無理か。あのパワーの前には氷だけじゃ勝てるわけがない。

まだあいつは全力じゃない、まだあいつはあの姿になつていないのに。焦つた顔一つ浮かべず、汗一つかいていないのに、こちらは体の半分が鈍くて全身の動きが阻害され始めた。

「あいつの力？ 誰の力だつて言うんだ？」

「エンデヴァーの力なんてなくても、俺は一番になつてやる。おまえにだつて負けない

ように」

「轟君」

「そうだ、負けない。絶対に負けてはいけない、負けたらあいつが正しいと証明してしまふ。そんなことは絶対に許せない、あの母の姿を見た時に、あの父の顔を見たときに、許せないって誓ったじゃないか。」

「君は何と戦っているのさ？」

「なにいつてんだ？」

「僕はヒーローを目指しているんだ。ヒーローが戦う相手は、決まっている」
「ヴィランだって言うのかよ」

「当たり前のこと、言って動揺させるつもりか、それとも策略か。轟が身構える前で、デクはゆつくりと言葉を紡いだ。」

「ヒーローが戦うのは、自分自身の『弱さ』だよ」

言葉に思考が止まった。

「助けられない、負けるかもしれない、情けない姿を見せたくない。そんな自分自身と戦うんだ。ヴィランじゃない、周りの何かじゃない、ましてや両親じゃない」

「おまえ!!」

思わず怒りを燃やして轟は叫んだ。

「両親を憎んで、父親を否定して、母親を怖がって、それで能力を制限して一番になる？
轟君、君はさ」

「なんだよ?! おまえに何が解るんだよ?!」

何を言うつもりか、何を否定するつもりか。どんなことを言われても納得なんてできるわけがない。轟は怒りをにじませてデクを睨みつけ、そして突きつけられた。

「今まで必死に頑張ってきたヒーロー達を、馬鹿にしているの?」

感情が、止められた。

何を言われたか頭が理解できず、内容から目を反らして、心が蓋を閉じた轟は呆けてしまった。

「みんな、必死だったよ。全力で戦った、理不尽な暴力からみんなを護るために、傷だらけになって懸命に戦った。仕事だからって線引きした人もいたかもしれない。でもね、誰もが人を救うために全力全開で頑張っていた。なのに、君は半分の力で一番になるって?」

淡々と語っていたデクの表情が歪む。初めて見せたのは、明確な怒り。

「君はヒーローを馬鹿にしているの? 全力でやっているヒーロー達の、今まで努力を嘲笑うのか、個人の事情とか関係ない、君もヒーローになるなら全力で来い!!」

荒波のように容赦なく叩きつけられた激情が、轟を大きく揺さぶった。

「お、俺は」

「君の何かを知っているわけじゃない！ だって君は語らなかった！ 事情を話さなかった！ なのに理解してくれ?! 君は傲慢だ!! 誰だって事情がある、誰だって苦しいことの一つや二つはある。でも、君は誰かの事情を理解しようとした？ 自分は相手を理解しようとしなのに、自分の事情は理解しろなんて、そんなひどい話はない」

「俺は!!」

「全力でやらない奴が、全力で頑張っているヒーローになんてなれるわけがないだろ!!」

「ならおまえは全力なのかよ?!」

「思わず言いかえす。」

「俺だってそう思うさ！ でもな!! どうしても考えちまうんだよ！ この力が母さんを追い込んだ！ 親父の昔の姿が眼の浮かぶ！ どうしろっていうんだよ！ もうグチャグチャなんだよ！」

「だったら！ だったら来いよ！ 頭がぐちゃぐちゃなら全力で来いよ！ 僕が全部、受け止めてやる！ 何があっても受け止めてやるから!!」

両手を広げ声を張り上げるデクに、轟は何かを言おうとして言葉に詰まった。

そうだな、と変わりに出てきた言葉は今までの思い出の中で、もつとも鮮明なもの。

過去のすべてが脳裏をよぎる、もう何も考えられない中で、鮮明に思い出せるのはあの背中。

『絶対に護る』と語ってくれた、大きな偉大なヒーローの背中だった。

轟・焦凍は、ゆっくりと顔を上げた。

「俺は、お前みたいになりたい」

「うん」

「俺は、あんなヒーローになりたい」

彼が顔をあげて見つめる先で、デクは気づく。彼が見ているのは自分であって、自分ではない存在。

「だから、戦いたい。俺がもし、『あの人』みたいになれるなら。だから、戦ってみたい。俺が、俺らしく、俺でもヒーローになっていいって」

「そっか」

言葉が乱れていることに、気づきながらも大きく頷いた。

これは、願いだ。彼の心の底からの願い、小さくて今にも消えてしまいそうなほどの本音が、ゆつくりと胸の底に届く。

「俺は、『グリーン・シップ』みたいなヒーローになりたい。誰かを護れる背中をみせる、あんな凄いヒーローに。だから、俺はおまえと戦いたい」

「うん、解った」

「無茶なこと言っているって解ってる。でもな、この気持ちだけは嘘じゃない。全力のおまえと全力で戦ってみたい」

グツグツと煮えるような何かと、体の心から震えるような何か、轟の体の中を駆け巡る。

母のことも、父のことも、頭から消えていた。怒りも憎しみもなく、ただ前を向いて願いを届ける。

「悪いな、緑谷。ありがとう」

不可能だろうな、と轟は思っただけで顔を背けた。こんな状況じゃ、戦えないから棄権するかと背を向けた瞬間、轟音と閃光が会場を揺らした。

「何処に行くのさ？」

声に導かれるように、轟はゆっくりと振り返る。

「まだ『僕達の試合』は終わってないよ」

ああ、と轟は涙を流して前を向いた。

「君の願い、確かに受け取った。『グリーン・シップ』だ、君の全力に答えて、僕の全力で相手するよ」

轟からは憧れた背中は見えない、けれど彼は満足していた。

こうなりたいと願ったヒーローが、大勢ではなく、たった一人を見ていた。

轟・焦凍を、『グリーン・シップ』は見つめて『戦おう』と言ってくれたから。

己が自覚を持ち、前を向け

衝撃は、予想と違って真つ直ぐに來た。

轟は氷結のために腕を振るいかけた途中で、弾き飛ばされた。弾丸、砲弾そんなものじゃない、ただの衝撃波だ。

何が起きたと視界を向ける先、『右手を振るつた』彼がいた。

まさか、腕の一振りだ。そんなことがありえるのかと疑問が脳裏をよぎる間にも、彼は距離を詰めてくる。

ゆつくりと、しかししつかりとした足取り。一步一步も踏みしめる足と同時に、迫ってくる巨大な鋼鉄の城。

まるで海に浮かぶ戦艦。人間の数倍の大きさを誇り、何者も寄せ付けない圧力を与え、巨大な獰猛な獣。

大地を進む彼の背中、荒波をものともしないで進む黒鋼の巨城が浮かび上がった。

あれが、『グリーン・シップ』。灰褐色の装甲には緑色の光が走る、三連装の主砲が幾

つも浮かび、空には航空機が舞い踊る。

逃がさない、通さない、誰にも屈しない。無言で語る瞳に、轟は気圧されるよりも嬉しくなってきた。

ずっと憧れていた背中など見なくとも。

何度も夢を見ていた姿はただ自分を見つめている。

追いつきたいと願った彼がそこにいる、理想と思つた彼が目の前にいる。大勢を護つていた意思が、ただ轟・焦凍を倒すために向けられていることを、彼自身は怖さよりも嬉しさが込み上げてきた。

「ああ、そっだよな」

自然と笑顔になつていく。冷笑や凄味のある笑みじゃない、心の底から嬉しいと思つて浮かべる笑顔だ。

理屈なんて知らない、この後のことなんてどうでもいい。優勝なんてもう意味がない、誰よりも正しくあるために勝つ、そんなことがどうでもよく感じられる。

ただ、勝ちたい。この人に、あの『ヒーロー』に。戦つて、何度でも挑んで無様でも何度でも向かつて行つて。

そして勝てたら、どれだけいいか。

簡単な話じゃない。今も巨大な氷は、相手の腕の一振りで砕け散った、足元を覆うよ

うな氷結は、足の踏み込みで粉碎された。

打つ手がない、決め手に欠ける。それでもいい、それでこそ懂れた背中だ。

「そうだよな」

何度も繰り返す。馬鹿の一つ覚え、そう見えるかもしれない。通じないのに何度も水を練り出す自分が、周りにそう映っているかもしれない。

でも、それでもいい。愚直なまでに同じことを、何度も何度でもやってやる。通じるまで、『グリーン・シップ』に届くまで、何度だって。

「そうだよな、ああそうだよ！ ヒーローは諦めない！ そうだったよな緑谷、いいや『グリーン・シップ』！」

密度を上げろ、精度を組み直せ。昔から使っていたことだ、あいつが嫌いだから炎を封印してから、何万回と使っていた氷結の能力。

それが、この程度のわけがない。母の姿が一瞬だけ脳裏を通り過ぎる。

あの人から受け継いだ能力だ、何度も使ってきた個性だ。

この程度、いいやもつとだ。冷たく、震えるほどに深く、不純物など一切ない、深く沈みこむように、広くすべてを捕らえるように。

そして、あらゆるものが停止するような『凍結』。

「爆豪、おまえの言うとおりだよ」

一瞬、ギャラリーにいる彼を見た。

『てめえは半端だな』と言った彼を思い出す。最初は炎を使わないからかと思った。二つの能力の片方だけだからと、勝手に考えていた。

違う、彼が言いたかったのは『使っている能力を中途半端に振り回してる』だけ。極めることも、能力の幅を広げることもせず、子供のように拳を振り回すだけ。

「俺は半端者だ。だけどな、今ならできそうだ」

深く、広く、深淵のような闇の底。

絶対零度のさらにその先、雄英の校風のように『その先へ』。

「行くぜ、『グリーン・シップ』、これが俺の『氷』だ」

そう告げて、轟・焦凍は『振り切った』。

時刻は少しだけ戻る。

ギャラリーで見つめる爆豪は、『やつぱ半端野郎だ』と口の中で呟く。

先ほどから同じ攻撃しかしてない。

決意は見事だ、願いを叩きつけたこと、自分の内心を暴露したことはよくぞ言ったと褒めてやれるが、その後の攻撃はお粗末でしかない。

「なあ、爆豪、いいのかよ？」

「何がだ？」

隣にいた切島に言われ、小さく視線を向けた後、また試合会場へ戻す。

「だっておまえらの正体が」

「あそこでデクが出さなきゃ、俺が吹っ飛ばしてた」

「いや、だって秘密だろ？」

「轟は願いを見せた。戦いてえって本気で願った、その願いに答えなきゃ俺はあいつをぶっ飛ばしていた」

「そりゃ、そうかもしれないけどよ」

切島は不安なのかもしれない。なおも食いついてくる物言いに、爆豪は小さくため息をつく。

「俺とあいつの名前は、多くの人の願いで出来ている。願って名付けられて、俺達はあの姿になれた。だからな、誰かの願いを無碍にしたら、その瞬間から俺達はあの姿でいる

『資格』^{権利}を失うんだよ」

穏やかにゆっくりと語る彼の声に、並大抵じゃない覚悟が宿っていた。

自分だけの能力じゃないから、例え自分が死ぬことになっても自分のためには使わない。どんな状況に追い込まれても、絶望的な何かがあっても、自分のためなんか使わない。

あの時、あの場所で決めた。

「そんなことあるわけ」

「あるんだよ。力は、ただ力でしかねえ。それは麻薬みたいに持った奴を狂わせる。無自覚で振るったら、誰かを助けるつもりが、誰かを傷つけることはよくある話だ」

「そりゃ、そうかもしれないけどな」

切島は口の中で呟く、彼はまだ納得できていないのか。

周りをチラリと爆豪は見回す。A組の誰も聞き入っているようだが、聞かれて困る話じゃない。

「だから、俺とデクは決めた。あの力は、誰かを助けるため、誰かの願いのためにつてな。特にデクの艦装は、その願いの純度が高いからな」

「なんだよそれ？」

質問に、爆豪は言葉に詰まる。

あの人達のことを言ってもいいものか、けれどここまで語って言わないわけにいかないだろう。

どうするかと考えて、彼は口を開く。

「かつてな、救いたい人たちを救えずに沈んだ人たち、その人たちの『今度こそ』って願いを込められたのが、あの艦装だ。二度はない、二度とこぼさないって決意の証なんだよ」

ギユツと拳を握る。解っていると爆豪は思う、これは嫉妬だ。同じ場所で訓練して、同じ人に師事してもらっても、同じものは与えられないように、爆豪と緑谷の能力としてのスタートラインは、まったく違う。

爆豪・勝己の能力が両親の願いから始まり、『祈りが込められた』コスチュームを得て、多くの願いを集めて『シンガー・ボマー』になった。

緑谷・出久は両親の悲しみから始まって、艦娘達の嘆きと決意の艦装を得て、多くの願いを集めて『グリーン・シップ』になった。

どちらも、他者からの想いで始まったことだが、その方向性はまったく別方向からだ。無個性だったから、緑谷は方向性など定まっていなかった。

個性があるから、その方向性しか選べなかった爆豪とは違う。

だから嫉妬する。無限の中から選べる自由を持つ緑谷を爆豪は嫉妬する。

同時に、緑谷は確固たる足場を持ち、揺るがない選択ができる爆豪に嫉妬している。どちらも、自分にならないものを羨んで、それで嫉妬を抱えながらも、それを糧にして願いを果たすために進んできた。

「俺もあいつも、同じだよな」

小さく呟いた言葉は、誰にも消えることなく流れた。

そして、爆豪は大きく眼を開く。

「やりやがった」

「爆豪？」

「あいつ、やりやがった。そうだよ、それでいいんだよ。おまえは氷が使える、氷結だろうが。だから、『凍らせる』ことができるのが、空気や水分とか物質だけって誰が決めた」興奮したような爆豪の様子に、クラスメートたちは試合会場を見た。

そして、気づく。轟・焦凍の周囲に細かい吹雪が舞っていることに。

「やれよ、やってやれよ！ 行けよ轟・焦凍！ おまえはな、二分の一じゃねえんだ！

おまえは『二つの極み』を行けるんだよ！ 俺達は一つで無限大になれる！ ならおまえは二つ持って『最大限』になれるんだよ！」

「おい、爆豪！」

「いいから見てろ！」

戸惑う声を一括して、爆豪は立ち上がってさらに叫ぶ。

「理論上は不可能じゃねえことを、あいつが証明するからよ！」
嬉しそうに叫んだ彼の声は、会場を駆け巡った。

緑谷・出久は感じていた。今までと明らかに違う、と。明らかに能力の深さが違う、密度が違う、そんな単純な言葉じゃない。

彼は振りきれた。

「クライン・ワールド全開」

小さな指示に妖精が親指を立てた。

くる、絶対に来る。あのアインズが一度だけ見せたことある、秘儀。絶対的な効果を
持ち、決まればほぼすべてが『抵抗できずに終わる』。

エルにも説明を受け、ソープの解説も聞いている。
三次元において、逃れる術はない。

けれど、緑谷は怖さよりも嬉しさが勝る。何度も訓練してもできなかったことが、こんな大舞台で出来るようになるなんて。

「轟君、君は凄いよ。僕が、『グリーン・シップ』が認めるよ」

圧力が高まった、ついに来るかと身構える緑谷の視界に、轟の顔が入りこんだ。
とてもいい笑顔で笑う彼の口が動く。

『緑谷、ありがとうな』と。

「それは僕の方だよ」

微笑みを浮かべた彼の周囲に、『空間凍結』が降り注いだ。

物質じゃない、時間さえも凍らせる『氷結能力の最上位』。

『マジか?!』と田中・一郎が観客席で叫んだ、今までアインズしか成功させたことがない絶対能力は、こうして轟・焦凍の手によって世間に知らしめられた。

「やりやがった! マジでやりやがったぞあいつ!」

ギャララーで爆豪が大騒ぎで喜んでるのが聞こえる。少しは心配してほしいな、なんて思う緑谷だったが、気持ち的には同じだ。

凄いなと思いつつも、彼は『勇気の結晶』に勇気を注ぐ。全身の力が増す、艦装に

走る緑色の光が増していき、装甲全体が緑色の光を宿す。

「ミラーリング・システム」

瞬間、空間凍結が弾け飛んだ。幾重にも重なり、砕け散って流れていく欠片は、まるでスターダストのように周囲を照らし続けた。

「凄いや、轟君、さすがだね」

「簡単に破つておいて、よく言うぜ。もう、俺はなんも出ないからな」

床に座りこみ、そのまま大の字で倒れる彼に、につこりとほほ笑んだ。

まさかミラーリング・システムまで使うことになるなんて。油断できないな、少しでも油断していたら追い抜かれてしまいそうだ、今まで圧倒的な実力差を示していたなんて、余裕を持つなんてことはできない。

この会場の誰もが、この学園の誰もが、自分達を追い抜く可能性がある。

『グリーン・シップ』を、『シンガー・ボマー』を、あるいはオールマイトさえも、追い抜いてナンバーワンになるかもしれない。

「楽しみだよ」

追い抜かれるかもしれない怖さはある、けれど楽しみでもある。誰が自分達を追い抜いて、もっと強いヒーローになってくれるか。

誰もが憧れる、誰もが挑もうとする最高のヒーローになってくれるかもしれない。

それが緑谷には、とても嬉しかった。

パチパチと小さな拍手が聞こえてきた。きつと、今の彼に対しての称賛だ、と緑谷が音の元へと顔を向けていき、凍りついた。

「見事、やはり学生とはいえヒーローを目指す子は、素晴らしいね」

闇のような漆黒の姿、鎧を纏った怪物。そんな印象を受ける相手のことを、彼は何度か見たことはある。

しかし、相対したのは初めてだ。

怖いと感じる、まるで周囲すべてが何も見えない闇に覆われたような、奇妙な圧迫を与えながらも、彼は世間話でもするように歩いてきた。

「素晴らしいね、君は今の僕と相対しても折れることはない。やはり、君とあちらの彼は、間違いなく違うね」

ゆっくりとそいつは、爆豪に手を向ける。

爆豪もそいつを真っ直ぐに見つめ、ブレスレットを握り締めていた。

「名乗るのが遅れたね、『オール・フォー・ワン』だ。つまり、君たちの倒すべき『ラスボス』障だよ」

嬉しそうに語る彼に答えるように、大歓声をあげて『とある集団』が雄英体育祭の会場に出現した。

ここに雄英史上でも最悪かつ最大の、ヴィラン連合迎撃戦が始まったのだった。

「ヒヤッハー！ いいぜいいぜ！」

「殺せ殺せええ！」

「示してやるぜヒーローども！」

大勢の音がする、観客席の一番上から出現したヴィラン達に、観客達はパニックを起こしたように逃げ惑う。その姿をニヤニヤしながら見つめるヴィラン連合に、ヒーロー達は動きだしかけて足を止めた。

誰も彼もが手配書で見たことがある顔ぶれだ。殺人罪、重犯罪、中にはヒーローを何人も殺してするような顔まである。

勝てない。無理だ、いくらヒーローとはいえ、正義を語り無謀にも突撃する者達ばかり

りじゃない。

仕事だから、ヒーロー資格を持っているからと戦っている人たちもいる。普段から困った人の手助けをしていて、戦うなんて滅多にないヒーローに、今から戦えなんて言えない。

一人、一人と足を止めて、足が下がる。誰もが周りを見回し、同じように蒼白になった仲間を見て、無理だと視線を下げてしまう。

助けたいと思う、救いたいって気持ちはある。でも、怖い。殺気を受けて体が震えて仕方がない。

逃げてもいいんじゃないか。

そう、誰かが呟いて泣きそうな顔で背中を向けかけた。

「逃げるなああああ!!!」

怒声がヒーロー達の『何か』を吹き飛ばす。

ハツと顔を向けた先、ヴィラン連合との最前線に彼は立っていた。筋肉で覆われた長身。誰かがオールマイトと呟くが、彼は違う。

オールマイトは、教師達の中からその背中を見つめていた。

燃え上がる炎、決して揺るぐことなくただ立つ背中が、昔とはまったく違ったように見える。

「逃げるな、そこで逃げてどうする？ 貴様たちは何者だ？」

振り返る視線にヒーロー達は顔を背けた。

だって、なんでもか口に呟く彼らを見つめた男は、フツと笑った。

「人間だからな、逃げたくなる気持ちもわからんでもない。俺も色々間違えた、ヴィランだと言われたこともある」

苦笑するように語る男は、自分の昔を語りながら振り返る。

「逃げて、どうする？」

衝撃が走った、ヒーロー達は動かしかけた足を止めて、顔を上げる。

「逃げて、ヒーローといえるのか？ 逃げた先に何かあるのか解っているのか。俺達はヒーローだ。ヒーローが逃げて、その後待っていることが解らないのか？」

穏やかに語る彼は、今までとは違っていた。怒りと憎しみで歪んでいた顔は、今はすつきりと穏やかで、燃え上がる炎はただ赤く力強い。

「俺達の下がった後に何がある？ 俺達の背中に誰がいる？」

彼は一通り、全員を見回した後、再びヴィラン連合に向き合った。

「守るべき民間人を見捨てた者が、『プロ・ヒーロー』など名乗れると思うか?!」

叫び声が、再び会場を揺らす。逃げかけた足が止まり、震えていた彼だが、別の震えに襲われた。

「俺たちはヒーローだ！ 逃げて見捨ててその先でヒーローを名乗れるものか?! 逃げなな！ 迷うな！ 真つ直ぐに敵を見つめる！ その背中を見せつける！ 護るべき者達に、我々がここに在るぞ！」と叫び続ける！」

彼は右手を掲げた、燃える炎が天を焦がすようにわき上がる。

「逃げるな！ 我らヒーローに退避も後退も敗北も許されぬ！ 俺たちが負けたら逃げたら！ 力なき者達が絶望に染まるだけだ！ そんなことでいいのか?! そんなことを見て仕方がないというつもりか！」

熱が伝わる、誰もが震えている。これは恐怖じゃない、体の底から震えるほどに全身を貫くのはもつと違うものだ。

「否だ！ 断じて否と叫ぶぞ！ ヒーローが逃げるわけにいかない！ ヒーローは絶対に退かないものだ！ もしも貴様らが無理だと思えば！」

そこで彼は、エンデヴァーは振り返ってにやりと笑った。

「俺を呼べ。この炎で貴様らの魂を燃やしてやる。震えているな、それは怖さじゃないだろう」

問いかけじゃなく、決まったことのように話す彼に、ヒーロー達は大きく頷いた。

「それは武者震いだ、貴様らの魂が燃えている証拠だ」

彼は全身から炎をだして、魂の奥底から叫んだ。

「ならば後は前に進むだけだ！ 行くぞ！ ヒーローたちよ！ 今こそ見せてやる！

ヴィランどもに、この世界に貴様たちの『悪事』が挟む余地はないとな!!」

「おおおおおお!!」

気合の掛け声が、会場を揺らす。

誰もが不安そうに見ていた、一般人は怖さで震えていたのが、今では誰もが安心した顔で見っていた。

多くのヒーロー達を、その先にいる彼を。

「エンデヴァー、君は」

彼の隣に降り立ったオールマイトは、今までと全く違う彼を穏やかに見詰めた。

「貴様に比べたら、拙いものだが、今は許せ」

「いや、そんなことはない。私以上に、今の君は『ナンバー・ワン』だ」

「そうか」

悪くないなと思いつながら、エンデヴァーは視線を試合会場に向けた。

「焦凍、見ている。今までの私ではない、今の私を。これが貴様に見せる、^父最高のヒーローの背中だ」

轟・焦凍は困惑したように彼を見つめていた。

「さあ、行くぞ！ オールマイト！」

「ああエンデヴァー！　今の君となら誰にも負けなさそうだ！」
「当たり前だ！」

気合を込めて二人は突き進む。それに従うヒーロー達。
相対するは、オール・フォー・ワン率いるヴィラン連合。
今こそ、激突の時。

「まったく」

そこで、オール・フォー・ワンは小さくため息をついた。
「君たちは本当に、僕を失望させてくれるよね」

彼はそう呟いて、『後ろから走ってきたヴィラン連合の一人』を叩き潰した。

ただ一人、理想を求め追い求め、ただそれだけを望む

空間に静寂が満ちた。

誰もが信じられない顔をしながらも、顔を背けるように周囲を見回してしまおう中で、彼は突き出した拳をゆっくりと下ろした。

「まったく本当に失望させてくれる。君たちは僕の何を聞いていたのか」

静かに語る男は、ただそこにいる。

凄まじい気配を放っているわけでもなければ、殺気を滲ませているわけでもない。ただ、そこに立っているだけなのに、妙な圧力を感じる。

闇のように、何処までも揺るぐことなく立つ姿は、まさにこの世の深淵のように深く暗い。

「何時、僕が君たちに『ついてこい』といった？」

溜息交じりに振り返る彼の視線が、ゆっくりと勢いにのまれていた集団を見回した。

「僕は君たちに共に行こうなどといったかな？」

手首を軽く回し、続いて体の向きを変えた男は、間違いなくヒーロー達に背中を向けていた。

無防備な背中、倒すべき敵がこちらを見ていないことに、ヒーロー達は気づいていた。今なら攻撃できる、倒せると理性が言っているのに、体は本能が縛って動かせない。

今、攻撃したら確実に『死ぬ』。

「僕はそんなこと言っていないよね。ただ僕は、皆の絶望を集めているだけだ。他の誰でもない、僕だけ」

そこでふと、彼は言葉を止めて、溜息をついた。

「いや失礼、興奮しすぎておかしくなっていたようだ」

軽い苦笑が流れ、男は深く呼吸を繰り返す。

「さて」

そして、全員が感じた。

深い闇だと思っていたものが、実は薄闇でしかなかったことを。

「私を怒らせるのは、君たちの趣味かね？」

広がるように、深く染みわたるような何かがヴィラン連合を襲う。睨みつけるような眼など見えないはずなのに、全身を切り刻まれたような錯覚を感じて、誰もが足を止め

て、ゆっくりと下げた。

「世界で私だけがすべてを集める、他の誰でもない、私だけだ。君たちの手を借りて、世界を君たちと共に支配する？ そんな夢を抱いたのかね？」

一步、一步と彼は足を進めた。両手を広げ、まるで天を仰ぐようにして。

「今なら自分達の望みのままに？ いいね、実にいい話だ。君たちのその願いを私は否定しない」

「じゃ、じゃあ」

誰かが圧力を縫うように声を出した。

今までヒーロー達のために、動けなかったから。こうありたい、こうしたいと願いつつもできなかったことが、今ならできる。

ヒーロー達を倒して、自分達の好きなように生きられる世界が、ようやく手に入ると思っていた。

だから、誰もが動いた。ヴィランと呼ばれ、世間から『お前らは違う』といわれ続けた者達が、今度こそ『自分の心のままに生きる』と決めて決起したはずなのに。

「しかしだ」

願って伸ばした手は、彼によって消された。

「私は、それを認めない。お前たちと一緒に？ 冗談ではない。欲望のままに生きるこ

とを否定しないさ。私もそうだからね。しかし、だ」

彼が足を踏みしめた。轟音と共に床が砕け散り、破片が周囲に吹き荒れる。

「世界の中心であり頂点は私だけだ。君たちを連れて成し遂げても、いずれは私を倒して誰かが変わるだろう。そんなものは、私の願いではないからね。世界の誰もが恐れる存在、それこそが『オール・フォー・ワン』だ」

気配が膨れ上がった。先ほどまでの彼は本気じゃなかった、今の彼こそが本気のラスボス。

警察であつても軍隊であつても、あるいは神でさえも彼を倒せない、そんな感情が誰の心にもわき上がる。

「だから俺達を倒すつていいのかよ?! おまえだけが好きに生きたいからつてふざけんな!」

恐怖が怒気に押されて消えた。

「そうだ! おまえだけつてなんだよ?!」

誰かが叫んだ一言に釣られるように、次々とヴィラン連合から声上がる。

「あんたの理屈はうんざりだ!」

「そんな話なんて解らねえよ!」

「俺達は俺達で好きにやらせてもらうぜ!」

声は、次々に派生して、彼一人が出していた圧力を霧散させていく。大勢が放つ熱は、たった一人が出せる気配を大きく上回り、今までのうっ憤を晴らすように大きな波となつて会場を揺らした。

しかし、彼らは忘れている。目の前の男が誰だったか、多くにヒーローを、多くの個性をもった人たちを、世界さえも敵に回して戦ってきた男だということを。

「そうか。ならば、私はこう告げよう」

フツと彼は、笑つたように見えた。

「お前たちが気に入らないから、潰そう」

小さな声だった、けれどそれは誰よりも大きな音となつてヴィラン連合を揺さぶつた。

昔、一騎当千という言葉があつた。

たつた一人が千もの人間に匹敵する。同じ人間とは思えないほどの武力と、何者も寄せ付けない力を見せられ、味方は士気を上げる、敵には畏怖を与えて動けなくさせる。

敵としてまみえたなら、これほどの恐怖はない。何もせずに味方が吹き飛び、気づけば誰もいなくなつた戦場で、ただ怯えて震えるだけ。

味方ならば、これほど頼もしいものはない。被害などです、ただ彼の背中を見つめて追いかければ戦場の恐怖とは無縁で、生き残ることができる。

では、どちらでもないとしたら。

オールマイトは、体の震えを自覚した。

一人、二人と倒していくのではない、一撃で数人が吹き飛び、個性を使えば数十人が消し飛ばされる。

「行くぞオールマイト!」

「え、エンデヴァー?」

ハツとして隣を見れば、彼は震えるような気配さえなく、ただ前を睨んでいた。

「今ならヴィラン連合を潰せる！ ヒーローとしてヴィランを倒すぞ！」

「しかし」

「人々の平穩のためなら俺はヴィランだろうと利用してやる！ 今なら奴の矛先はヴィラン連合に向いている！」

「それは、そうだが」

オールマイトは、拳を握り再び彼を見つめた。

無防備な背中、今もヴィラン連合を叩き伏せていく彼は、こちらを見ようとしないう。攻撃してくれと言っているようなものだが、かといって攻撃して通じると言われたら自信がないというしかない。

以前なら、倒せるといえた。

彼がどんなに巨大でも、必ず叩き伏せてやると。ヴィランならばヒーローとして必ず倒すといいきれたのに。

今の彼はなんだ、あいつは何なんだといたい。

前に会った時のふざけた態度も、コメディアンみたいな態度の時の彼も、今のあいつとはまったく違う。圧力も気配も、何よりその纏う力の濃さもまったく違う。

今まで会ったヴィランとは、比べ者にならないほどの気配。勝てないなど思いたくない、戦っても無理だと考えたくもないのに、全身のあらゆるものが叫んでいる。

戦うな、と。

「何を尻込みしている?!」

ドンつと背中が押された。ハツとして隣を見れば、怒気を浮かべたエンデヴァーがこちらを見ていた。

「ナンバーワンだろうが！ 貴様はヒーローのトップではないのか?!」

グツと再び背中を押された。そうだ、とオールマイトは奮い立つ。自分はナンバーワン、誰よりも前にいて、誰よりも先に進む者だ。

自分がためらってどうする、チラリと背後を振り返ればヒーロー達が自分を見ていた。誰もが怖い中、誰もが震えている中、前に進む勇氣に火を灯してくれた仲間と、その勇氣の火を炎と燃やして前に進んでくれたヒーロー達のためにも、オールマイトとして退くことはあり得ない。

いいや、そんなことは絶対に許されない。

震えていた心に、火が灯る。まさか、自分が怖じ気づくことがあるなんて、とオールマイトは内心で苦笑しながらもエンデヴァーの肩を叩いた。

「行くぞー！」

しかし、返答はない。何がと隣を見たオールマイトの顔に、溜息をつくエンデヴァーの表情が入りこむ。

「見ろ、貴様のせいで先を越されたぞ」

「え？」

「まったく、これではどちらがヒーローか解らんな」

何かと視線を前に向けたオールマイトの視界に、いくつかの影が躍った。

「君たちは」

オールマイトは呆れながらも、何処か眩しそうに彼らを見つめた。

彼らが出た瞬間、緑谷・出久と爆豪・勝己はすでに動き出していた。

艦装を纏っていた緑谷は真っ先に、一般人とヴィラン連合の間に降り立ち、爆豪はギヤラリーから飛び上がり、コスチュームを身に纏う。

「デク！」

「偵察機発艦！ 周辺状況を確認！ 催涙弾とトリモチ弾を搭載した艦載機も発艦！」

「よおおし！ 行くぞ！」

爆豪の右手に槍が握ら、そのまま振るわれる。爆炎が二つの集団を隔てる、ヴィラン連合と一般人の間に爆炎の壁が降り立ち、その外側に爆豪は降り立った。

「さて、聞かせてやるぜ。おまえらを沈める歌をなあ!!」

怒声に負けない、爆音に負けない歌が響き渡る。誰よりも速く、誰よりも強く、誰にも絶望を見させない絶唱。

『シンガー・ボマー』の名に相応しい歌声に、会場が揺れ動く。人も、空気も、そこに渦巻く感情さえも、彼の声に答えるように奮い立つ。

「この先は、誰も行かせない。もう止めるんだ」

聳え立つように、鋼鉄の壁が進む。何も通さない圧倒的な山のような、見た者を震えさせるほどの圧迫感を持った戦艦が、ゆっくりと前へと進んで行く。

二人はヴィラン連合に向かいながらも、何度も視線を別方向へ。

前だけを見てヴィランを倒し続ける『オール・フォー・ワン』を見ては、再び前を向いてただヴィランの無力化を続けていく。

普通なら、彼を真っ先に倒すべきだ。一番の障害、最も倒すべき敵なのだから、多く

の人を絶望に落とした、たくさんの人を泣かしてきた相手だから、願いの塊の二人ならば、真っ先に倒すべきなのに。

今は、こちらが先だ。絶望を払うために、最高のヒーローを指すために、やるべきことを間違えてはいけない。

最優先は、現在において悲しみに包まれている人たちの救助、及びその原因の排除。ラスボスはその後だ。

「いい判断だ」

声と同時に、銀色の影が降り立つ。

特徴的な艦装を持ち、弓を構えた女性は、二人をチラリとみた後に弓を構える。

「エンタープライズ、エンゲージ」

静かに彼女は告げて矢を放った。

「ちょ!?! エンタープライズさん?!」

「マジかよ!?!」

「フフフ、まさか二人と同じ戦場に立つ日が来るとはな」

彼女は振り返り、眩しそうに二人を見つめた。

「ありがとう、まずはそう言おう。とても素晴らしいものを見せてもらった」

「え、あの」

「どうも」

戦いの最中だというのに、飛びきりの笑顔を見せられて、思春期の二人は顔を赤らめて固まってしまった。

「貴方は少し、自分の魅力を自覚してください」

「すまない」

呆れた顔の吹雪が降り立ち、逆手に持ったナイフを振るう。それだけでヴィラン連合の何人かが崩れ落ちた。

「えげつねえ。なんで十メートル以上も離れてるのに、気絶させられるんだよ」

爆豪、顔面蒼白で呻く。前に一度、訓練中に食らったことがある。とても理不尽で、滅茶苦茶な一撃だったのでよく覚えている。

「は、はははは、悪夢だよね」

緑谷、空を仰いで嘆いた。

初めての時は、説明を求めて何度も吹雪を呼びとめた。

『え、なんとなくできそうだなあって』なんて答えを受けて、理系の緑谷は世の中の理不尽さを身にしみて学んだ。

「では、改めて」

吹雪は小さく告げて、周りを見回す。彼女の隣でエンタープライズは小さく頷き、道

を譲るように小さく頭を下げた。

「これより我が鎮守府は提督の命令により、ヴィラン連合への攻撃を開始します」
彼女の宣言と同時に、爆炎の壁の外側に艦娘達が降り立った。

戦況はすでに混乱ではなく終息へ。

ヒーロー達対ヴィラン連合から、第三勢力『鎮守府』の介入により、勢力図は一気にヴィラン連合不利に傾いていた。

すでに彼らが旗頭と仰いでいたオール・フォー・ワンが、ヴィラン連合を否定した瞬間から、勝ち目などなかったのかもしれないが、一度でも動き出した勢いは止められず、またあれだけ『馬鹿にされて』引き下がれるヴィランはいなかった。

結果、誰もが逃げることなく戦うしかなく、例え勝ち目がなくても突き進むしかなかった。

勝利を信じて、ただ自分達の希望のために、願いのために。

その願いを『グリーン・シップ』と『シンガー・ボマー』は感じ取ってた。誰だつて自分らしく生きたい、誰かが否定しても、誰かに違うと言われても自分を曲げられない人たちが、不器用な生き方しかできなかった人たち、そういう風にヴィラン達が映っていた。

でも、その願いを二人は認めるわけにいかない。自分らしく生きたいとただ望んだ人たち、その願いは世界を混乱させて多くの絶望を生んでしまう。

願いだつたとしても、二人は領けないし肯定できない。

二人が目指している最高のヒーローは、そんな絶望を砕くために存在しているのだから。

「フフフ、君と背中を合わせるようになるとは」

「黙れ、次は貴様だ、オール・フォー・ワン」

「いいとも、向かってきた前、オールマイト」

敵だった者同士が背中を合わせ、ヴィランを倒し続ける。

「あ、お久しぶりです、師匠」

「師匠?!」

「そういう言い方は止めてください、エンデヴァーさん」

「知りあいだったの?!」

「ああ、私に新しい生き方を教えてくれた、吹雪師匠だ」

意外なところで、意外な事実が出てきたりとか。

「この先に行くなら崩壊させるぞ」

「ケンカなら俺の出番だな」

悠然と歩く弔の横を、最近では考えるより体が動くと言評の『脳筋』野郎になった廻が走り抜けていく。

ヒーロー達はそんな存在に気付きつつも、ヴィランを倒すことを優先として手を出さなかった。

いや、出せなかったのかもしれない。

鎮守府と名乗った勢力、その頂点に君臨しているだろう、『黄金の王』の存在感によって。

「今、愉悦の気配が」

「止めろって。ギル、それは止めておけ」

「フ、よかろう、名探偵よ。ところで、マスターは何故そこで項垂れている?」

「武力介入かあ」

何故か、命令を出したはずの田中・一郎は一般人のように扱われ、立っただけのギルガメツシュがトップとして見られていた。

「いいわよ！ 実にいいじゃない!! カメラを持ってきて良かったあ！ そこよ『グリーン・シップ』！ もっと歌って『シンガー・ボマー』!! 生写真ゲットよお！」

なんだから、何時も違うハイテンションな会長らしく人物がいた、らしいが周囲の人達は見なかったことにしたため、誰にも知られることはなかった。

そして、戦闘はやがて当然のように終わった。

ヴィラン連合、壊滅。一人も残らずに逮捕されて連れて行かれる中、異様な静けさが

試合会場を包んでいた。

「君達の決意に敬意を示そう」

胸に手を当てて黙とうするオール・フォー・ワンを、誰もが遠目に見ていた。

話しかけることも、攻撃することもせずに。

誰もが解っていた、自然と思いついてしまった。

彼を倒すのは、その資格がある者達だけだ、と。巨悪を、誰もが恐れる存在を倒すのはヒーローだ。

けれど、多くのヒーロー達は『自分たちじゃない』と確信していた。あのような存在を倒せるのは、もつと強くもつと理想を宿した存在。

「さて、始めようか」

オール・フォー・ワンが振り返る。その視線の先には四つの影が、揺るぐことなく立っていた。

「因縁を終えよう」

オールマイトが。

「貴様を倒す」

エンデヴァーが。

「今日のラスト・ナンバーだな」

『シンガー・ボマー』が。

「その航路は、ここで終わらせませす」

『グリーン・シップ』が。

どれほど巨大で大きな影であっても、どんなに強い相手でも怖気づくことなく立ち向かえる、そういった存在。

本物のヒーローが、巨悪の前に立っていた。

光と影、あるいは二つにして一つの存在

歴史が変わる瞬間、というものがある。

誰もが立ち会えるわけじゃないけど、必ず人の歴史の何処かで『転換期』は訪れて、その後の歴史を違う流れで紡いでいく。

不意に、俺はそんなことを思い出していた。

田中・一郎にとって、何度か見たことがある、歴史が変わる瞬間。

「クッソ」

悪態くらいいつかせてくれよ。

なんだよこれは、何だつて言うんだよ。

「よもや、ハハハまでとはな」

ギル、俺もそれは思ったよ。まさか、だよな。

「こうなるんじゃないかって思ってたんだよな」

コナン、予想していたならいってくれよ。

「本当にまったくさ。クツソつてもう一度、言いたくなってきた」

俺の目の前で、オールマイトが、エンデヴァーが、『グリーン・シップ』が、『シンガー・ボマー』が、地面に倒れていた。

「さあ、次は君たちかな？」

そして、四人を倒したあいつは、ゆっくりとこつちを見てきた。

最初の攻撃は、確かオールマイトからだった。

「行くぞお!!」

「来い!」

気合の乗った拳は確かに、オール・フォー・ワンを捕らえた。轟音と衝撃が会場を揺らし、細かい破片が飛び散った。

でも、あいつは動かない。

「燃え尽きろ!」

続いて、エンデヴァアの炎が燃え盛る。オールマイトごと燃やしつくしそうな炎の渦が逆巻いてって、あれオールマイトごと?!

「避けたな! オールマイト!」

「ああ! もっときつめでもよかったぞ、エンデヴァア!」

うわあ、あの二人、息びったり。あれ、でもエンデヴァアってオールマイトを憎んでいたんじゃないかって。よく観察しているってあるよね

「憎んで妬んでいたから、よく観察しているってあるよね」

「ありますね」

ソープとエル、なんでそんなに嬉しそうに笑っているわけ。え、そういうものなの。

「決まってるじゃない」

コナンが重く呟くと同時に、炎が散った。いや、あれって風か、まさか風を操る個性

まで持っているって、どんだけ多くの個性を扱えるだよ。

今だって肉体強化に全身を覆うような鋼だろ、その上に回復系も使っている様子もあるし。

「フッフ、まさかその程度で倒せると思っていいのかい？」

「思ってたねえよ！」

瞬間、会場が爆発した。

うわあ、爆豪君、初っ端から全力だ。自分の個性と槍の能力を使って、一気に吹き飛ばした。

「デク!!」

「いつけえええ!!」

あ、あれ。

「待ったデク君!!」

ちよつと待った！ あれは不味い！ 本当に不味い！

「アインズ！」

「もう展開した」

あ、封鎖結果、間に合った。これで周りの被害は出ないと信じたんだけど。

デク君、最初の一撃が『超重力砲』って、そんなにござ立腹だったのかな。いやオール・

フオー・ワンがやってきたこと考えると、怒りたくなるのも納得できるけど。

「二郎君、まだです」

「ヒミコちゃん、いやいや、さすがにもう終わったって」

「まだ、です」

ちよつと顔色が悪いけど、どうしたのさ。いやだって、超重力砲だぜ、重力の塊だし、ブラックホール並の威力があるって。

「嘘だろ」

マジか、なんだよあいつ。本当に何の個性を使えば、あんなこと出来るって言うんだよ。

「もう終わりかね?」

不敵に笑った、よな。あいつ、笑って片手を『クイクイ』って、明かに挑発している。

「あれで終わらねえのかよ」

爆豪君、その気持ちはよく解る。

「たたみかければいいだけだ!」

オールマイトが動く。全身に気合をが満ちたのが、俺でも解る。ギルが『ほう』って感心したような声を出したから、あの一撃が凄まじいのは解るのに。

オール・フオー・ワンは一步も動かなかつた。

「覚悟しろ！ オール・フォー・ワン！」

拳が入る。腰の入ったいい拳で、素晴らしい一撃だ。素人目にも解る一撃に大地が割れて、あいつの体が吹き飛んだ。

よっし、有効打！

「俺の炎があ程度の度だと思ふなよ!!」

飛んで行った先に待っていたエンデヴァアの全身が燃えた。凄まじい勢いで燃え上がる炎が、オール・フォー・ワンを包む。

「プロミネンス・バーン！」

吹きあがるような焰があいつを上に巻き上げた。

よっし、上がった。

「行くぜ！ 爆王撃!!」

あ、名前つてそれにしたんだ。

爆豪君の槍が膨張、彼の個性の『爆破』の能力をギュツと凝縮して、放たれる。その一撃は、一発の最大威力は核に匹敵するほど。

回避はしない、防御もない、まさに直撃。その衝撃と威力が、オール・フォー・ワンを叩き潰した。

「貴方の航路はここで終わりです。波動砲、撃て」

よっし、終わった！ あれで終わりだ！ 波動砲の直撃だ、いくら生身でも下手したら宇宙が壊せるって一撃を受けて、終わらないはずがない。

爆発と衝撃、それが生み出した突風の中、黒い影が落ちてきた。

ボロボロになった鎧と、傷だらけの肉体、あれって。

ゆっくりと落ちてきた肉体が、地面に叩きつけられた。

油断していたわけではないが、まさにここまでとは。

四対一だった、相手のヒーローの強さはどれも一級品以上だった。そんなものはい訳でしかない。

戦うと決めて、倒すべき敵だと見据えてきた。エンデヴァーがあそこまで『人を引つ

張る気合を示した』ことは予想外だったが、それでもオールマイトを倒すために、『シンガー・ボマー』と『グリーン・シップ』を打倒するために、力を磨いてきた。

多くの個性を吸った、多くの不幸を知った、多くの絶望を飲み込んだ。

地面に叩きつけられた体が動かない。

遠くに見える四人は、誰もが満身創痍ではない、余裕はなさそうだが、まだまだ戦えそうだ。

立ち上がらなければ。気合を込めて、体を動かそうにも、入れた力がゆつくりと抜け落ちていく。

どうにかと歯を食いしばったところで、抜けて行った力は戻らない。個性を使えば、どれを使えばいいかと思考を巡らせる中で、彼らは歩いてくる。

油断していない顔だ、実にヒーローらしい。ヴィランである自分が倒れていても、油断は欠片もしていない。

「フッフ、いいね」

思わず声が出た。そうだ、そうでなければ。油断して倒したと安堵して、見逃されるなんてことは、絶対に許さない。

一瞬も油断せず、一時も樂觀せず、全力で倒しに来てくれないと。そうでなければ、自分というラスボスはただの薄い壁で終わってしまう。

ラスボスとは最後まで立ちふさがり、最後には倒される存在。

馬鹿な、と内心で激怒した。倒されるだと、倒されて終わり、ヒーローが勝つて後はめでたしめでたし、ハッピーエンドだとしても自分は思ったのか。

呆れてしまった、自分はそんなに『悲観的』だったのか、と。こんな結末のために立つたわけではない、こんな終わりのために彼らに宣言したわけではない。

「終わりだ、オール・フォー・ワン」

オールマイトの声にグツと力が入った。

「おまえは、確かに強い。けれど、私たちヒーローのほうが強い」

「そうかな」

気合を入れろ、もつと力を絞り出せ。もつと高く、もつと強く、もつと魂の奥底からだ。

「強いとそう思っているだけではないかね？」

「そうかもしれない。しかし、私たちは負けるわけにはいかない。私たちヒーローは護るべき者達、そのために何度でも立ち上がる。その人たちのためにも、負けられない」

拳を握るオールマイトの背中に、一般市民の姿が見えた。四人の背中越しに、逃げている人たちの顔を見た。

自分を見る視線には、恐怖が宿っていた。

ああ、良かった、と。オール・フォー・ワンは思った。

「そうだね。君たちヒーローは護るべき者が多いようだ」

一人一人が自分を怖いと見つめる。ヒーロー達でさえ、恐れを抱いて自分を見ていた。

ああ、良かったと心の底から思った。

「彼らを護るために戦い、彼らのために平穏を勝ち取る」

不思議と体が動いた。先ほどまで動かなかった手足に、力が巡っていく。

「多くの人を護るために、多くの人の意思のままに」

痛みはない、苦しみもない。先ほどまで重かった体が、今は羽毛のように軽く感じる。

「ああ、だからこそ」

オールマイトが何か告げようとしたが、その先は『自分のセリフ』だ。

「でもね、私にもあるんだよ。護るものがね」

「何を言っている?」

「あるんだよ、私にも背負うべきものがね」

拳を握り、足に力を入れて、立ち上がる。

「貴様が背負うものなどない!!」

エンデヴァーが炎を纏った拳で迫る。その姿を見ながら、僅かに身を引いて一撃を回

避。

「あるんだよ」

無防備となった脇腹にひざ蹴り、一撃に衝撃波と重力を合わせて彼を弾き飛ばす。

「エンデヴァー?! 貴様あ!!」

続いてくるのはオールマイト。得意の『スマツシユ』だろう、やたらと力を込めた一撃、先ほどとは違う拳か。

「DETROIT SMASH!!」

向かってくる拳は顔の横を通り過ぎ、変わりに筋肉を増強した一撃がオールマイトの顔を捕らえた。

「あると言った!!」

そのまま風圧を込めてオールマイトを殴り飛ばす。

「私にはある! 今まで奪った個性の者達の! 無個性故に蔑まれた人たちの! 多くの不幸と絶望を! 私は背負ってここにいる!」

「てめえ!」

『シンガー・ボマー』が来た。槍の一撃はおとり、本命は左手にため込んだ爆破か。

爆破は衝撃、空気の断層を作って威力を流しながら、振動を叩きつけた。

「恐怖せよ! 絶望するがいい!!」

彼を地面に叩きつけ、跳ね上がってきたところ右足の一撃。加速させた一撃は、彼をギャラリー席まで吹き飛ばした。

「貴方は！」

続いて『グリーン・シップ』の砲撃。砲弾は威力がある、艦載機まで来たか。それでも、だ。こちら弾丸は作れる、爆弾は作れるから。

すべてを相殺、ついでに特大の砲弾を彼に当てて弾き飛ばした。

「私こそが、オール・フォー・ワン。貴様らの敵だ」

そう宣言しよう。誰もが自分を見て、誰もが自分に恐怖する。だからこそ、誰もが隣人を愛し隣人を信じる。

恐怖の対象を前に、人は一致団結するものだから。

うっそだろ、クッソ。なんであの四人がかりで、止められないんだよ。

「提督、行ってくる」

「ああ」

できれば介入したくなかった。

そう思う俺にエンタープライズは笑って頷いてくれた。

相変わらず彼女たちは、俺の気持ちを組んでくれている。

「一郎、俺も行ってくる」

「私も行きましょう」

弔と廻も行った。エルもソープも、アインズさえも合流して一斉に責め立てた。

攻撃に落ち度はない、威力も十分で、誰もが手加減なんてしてなかった。

だって言うのにさ。

「なんだよこれ」

ウソだろって俺は言いたい。だって、あの世界で深海棲艦だろうと、BETAだろうと宇宙怪獣だろうと、簡単に倒してきたうちの鎮守府だぞ。

「まさか、()までなんてな」

コナンが啞然としているなんて、初めて見るよ。

「よもや、か」

ギル、予想してなかったなんて、言わないでくれよ。

「残りは、誰かな?」

オール・フォー・ワンは無傷で立っていた。艦娘は全員が地面に倒れている、アインズもエルも、ソープでさえ倒された。

「行ってくるぞ、マスター」

「ギル、けど」

「確かに今の我は対人戦闘能力は高くない。サーヴァントとは、クラスに能力を落とすこむ故にな。転生特典として、多少はそれが緩むことはあるが」

「俺も付き合うぜ、多少はかきまわせるはずだ」

コナンまで。

そう、だよな。俺も覚悟を決めないとな。なら、全戦力を使うべきか。出し惜しみして、後のことを考えたら勝てるものも勝てないから。

やるしかない、よな。

「吹雪」

俺は唯一、戦闘に加わらずに待機していた彼女に声をかけた。

「いいんだな、マスター?」

「貴様の決定ならば、我は従おう」

「ああ」

今の個性社会において、吹雪の能力はオール・フォー・ワン以上に『厄介なことになる』。

個性を消せるとか、個性を戻せるじゃない。個性を殺すつてことは、二度と戻らないこと、再生や巻き戻しでも戻せないことを意味している。

下手をしなくても、全世界を敵に回す結果にしかならない。だから、俺は使わないように、何があっても露見しないように吹雪を下げている。

「……あいつの個性を殺せ」

「はい」

トンつと小さな音がして。

「君が来るのか……ね？」

身構えるオール・フォー・ワンの呆けた声と同時に、いつの間にか彼の背後にいた吹雪のナイフが、一閃された。

「オール・フォー・ワン、悪いけど今まで吹雪は『全力』じゃなかったんだよ」

「な、何が？」

戸惑っている彼を見つめながら、俺は小さく呟くように告げた。

「十分の一、艤装を使わない状態でその程度しか、日常生活で使つてなかつたんだ。動作もたち振る舞いも、全部に枷をかけてあつた。アインズとエル、ソープにも協力してもらつて、毎日の生活に『重り』を付けていた。何故つて聞きたそうだな？」

目線に向けてくるオール・フォー・ワンに、俺はちよつとだけ苦笑を向けた。

「吹雪だけ、艦娘つてカテゴリーから逸脱してるんだよ。その能力値も、その攻撃方法もな。『直死の魔眼』を全開で使つた時、全部の枷が外れて全力の吹雪になれる。これが俺の最大のカードだよ」

できれば、使いたくなかつたけど。その凶悪なまでの滅殺能力とは裏腹に、吹雪の性格は温厚だから。

「そうか、そういうことか。フッフ、君の最大の切り札は、それだったのか」

終わりか。できれば、この世界のことはこの世界のヒーロー達に任せられたけど。

「マスター！」

「コナン、どうしたんだ？」

「読み間違えた！」

は？

崩れ落ちるのが自覚できた。自分の中の個性が、すべて『死んでいく』のが解る。残らない、滅びて欠片も残されない。

『直死の魔眼』、聞いたことがある。誰かの個性を奪った時に、その名前が出てきていた。

生きているなら神様だって殺せる、ものの死が見える魔眼であり、その魔眼が見た線を切るとすべてを殺せる、つまりは滅ぼせて消せるというらしい。

まさか、ここまでとは。個性さえ殺せるなんて、そんなことないと思っていたが、どうやら思い違いだったようだ。

個性も、生物の一部。ならば殺せるのが道理か。

一つ一つと死んでいく。今まで集めた個性が、体の中から抜け落ちていく奇妙な感覚の中で、オール・フォー・ワンは笑うしかなかった。

到達していない、目的を果たしてない。もつと多くの畏怖を集めて、もつと大勢の前に君臨するつもりだったのに。

ここで終わりか、志半ばだというのに、もう進むことは許されないのか。

慢心していたわけではないが、艦娘という彼の最大の戦力を倒せたから、もう後は英雄王と名探偵を倒せば終わり、駆逐艦クラス一隻が残っていたが、勝てると思つてしまったから悪かったのか。

いや、ダメだ。まだ終われない、個性を奪った人たちも分まで、彼らの不幸を吸いこんだ自分がここで終わったら、人々は永遠にお互いを憎しみ、お互いを傷つけて生きていく。

そんな世界、苦しくて悲しいだけだ。

しかし、もう個性がない。最後の残った個性も、もうすでに消えて。

いや、まさか、とオール・フォー・ワンは気づく。

「ふ……ふはははははは!!!」

思わず笑つてしまう。そうか、と妙に納得してしまふ。

「マスター!」

名探偵が叫ぶ、一郎はきよとんとした顔のまま固まっていた。

勘違いをしていた。自分の個性は奪うものだと、誰かの個性を奪つて自分のものにす

る。そして与える、それですべてだと。

勘違いだ、思い違いをしていた。

かつての自分は、オールマイトに語ったではないか。

『オール・フォー・ワン、ワン・フォー・オール。元は一つの力』と。自分で語っておきながら、その本質をまったく理解していなかった。

「ありがとう、弟よ。おまえのおかげで私はまだ戦える」

フツと笑い、オールマイトを見た。

君たちが紡いできた聖火のごとき力は、確かに大勢を救う源だ。

「私さえ、救って見せたのだからね」

心の底から、その時の自分は感謝しながら笑っていた。

「ダブルだ！」

「は?!」

いやいやコナン！ それじゃ解らないって！

「存在分離、いやこの場合は存在を分けたのか。ク、我としたことがこんな単純なことも見落とすとは」

「だから！」

誰か説明してくれよ、それで解るのはおまえらだけだつて。

「あいつの個性は、あいつの中だけじゃない。もう一つ、分けてあつたんだよ」
「分けるって、そんなの」

誰にどうやって分けるって言うんだよ。今のあいつなら、誰かに託すつてことしそうだけど、昔のあいつはそんなこと考えてなかっただろうし。

「いいや！ あいつ自身が意図したものじゃない、でもな、結果的にそうなった。クツソ、完全に予想してなかったぜ」

コナン、なんだよ、どういうことだよ。

「まさか」

あれ、オールマイト。良かった、まだ戦えそうだ。

「ああ」

え、コナン、なんだよ、その顔。なんでピンチって顔しているんだよ。オールマイトが立ち上がったんだぞ。

エンデヴァーも、デク君も爆豪君も立ち上がった。艦娘達だって、まだまだ戦えそう。もう一度、これで総攻撃かけて吹雪を突撃させて。

「それじゃまた同じだ。あいつの個性の根本を、『オール・フォー・ワン』を殺さないとだめだ」

「いや、それはさつき出来なかつただろ。なんか、他の手段を考えてさ」
「今度はできるだろうな」

ギル、さすが頼りになる英雄王。もう手段を見つけたってことだよな。

あれ、でもなんでオールマイトを見ているんだよ。

え、まさか、だよな。

「そうか、そういうことか。なるほど、な」

オールマイト、何を悟った顔しているんだよ。いや、待てよ、なんで貴方がそんな顔しているんだよ。

覚悟を決めたって顔、なんでしているんだよ。

「二つで一つ、か。確かにそのようだな、オール・フォー・ワン」

「気づいたようだね、オールマイト。意図していたわけじゃないけど、今は感謝しているよ」

「貴様の感謝などいらん。しかし、『これを行った時の貴様には』感謝しよう。おかげで私はおまえを倒すことができる」

「させると思ふのかね？　また私が奪えばいい話だ」

「それを私が許すとても？」

いやいやいや、二人だけで話を進めないで！

つまり、つまりさ。

「オール・フォー・ワンの個性を消すためには、オールマイトの個性を殺さないといけな
いってことか？」

恐る恐ると口にした俺の顔を、コナンもギルも見ようとしなかった。

無言の返答、俺の体に重く押し掛かった。

それは聖火の如く受け継がれる

重くのしかかるような、空気が周辺に渦巻いていた。

田中・一郎の言葉に、誰もが顔を向けてはいるが、頭がついて言っていない。

彼が言ったことが何だったのか、それとも何も言っていないのか。

先ほどまでの激闘が嘘のように静まり返った会場の中で、最初に動いたのは誰だったのか。

誰もが誰かを見ようとして見れず、指示を、あるいは言葉を聞きたくて、聞きたくなくて。

矛盾したような感情を抱えたまま、時間だけが流れて行った。

結論を先送りにして、このまま時間が過ぎて解決すればいい、そんなことを考えるのは無理もない。

今まで平和を支えていた、人々に安心を与えていたヒーローが、ようやく一番の強敵

を倒す手段を見つけたというのに。

それが、彼というヒーローを『殺す』ことになるなんて。

誰もが信じられず、否定して欲しくて思考と視線を巡らせる中で、声が自然と降りてきた。

「迷うことはない、やるんだ、田中少年」

「オールマイト」

彼は静かに立つ。傷だらけの体であり、疲労もあるだろう中で、それでも立つ姿は一切の揺るぎはない。

平和の象徴、ナンバーワン・ヒーローはまったく動揺も見せずに、微笑んでいた。

「やるんだ。これであいつが、オール・フォー・ワンが倒せるなら、迷うことはない」
「けど」

一郎は迷う。彼はやれというが、彼を失うことがどういふことか、冷静に考えられるから。

もし、何もなければ。彼がいなくなっても、世界が変わらないのであれば一郎も迷わなかっただろう。きつとコナンもすぐに『やれ』というはずだ。

しかし、そうはならない。

オールマイトが倒れたなら、ヴィランは勢いを増す。

プロ・ヒーローが消えるわけじゃない、勢力図が一気に反転することはない。変わらない日々が続いていくかもしれないが、そこに人々の心を支える何かが存在しない。

「いいんだ」

「いいわけがあるか?!」

怒声が、オールマイトの笑みを陰らせた。

「エンデヴァー」

「詳しい話はよく解らん！ 言っていることも俺には解らん！ いいや解りたくない！

おまえの個性を消せばあいつが倒せる？ だから個性を消す？ 馬鹿を言うな！」

「エンデヴァー、それでいいじゃないか」

「ふざけるな!!」

激情のままエンデヴァーはオールマイトに詰め寄る。その顔は怒りに歪んでいるように、瞳の中に涙が浮かんでいるほど悲しんでいた。

「ナンバーワンだぞ！ 俺達ヒーローのトップだ！ 今まで平穩を支えていたおまえが

！ 何よりも平和を望んでいたおまえが！ そこにいないなどあっていいはずがない
！」

炎が踊る、先ほどまで多くの者の心を震わせていた炎が、今では違う感情のままに流れていく。

赤い炎は、まるで涙のように乱れるように火の粉を飛ばしていた。

「確かにそうかもしれない。私もそうあってほしいと願う、それであれと頑張ってきた」
「ならば……！」

激情のままさらに腕に力を込めるエンデヴァーの両腕を、オールマイトはそつと触れて顔を上げた。

「だからこそだ、私の個性一つで平和が訪れるなら、安いものじゃないか？」

今まで見た見た高笑いではなく、大きな声でもなかった。けれど、その声は今までの彼のどの言葉よりも高く広く、多くの人の心に届いた。

エンデヴァーは反論しようとして、オールマイトの顔を見て止めた。

穏やかに笑う彼は、まるで『憑きもの』が落ちたようだったから。

「………解った」

エンデヴァーはゆっくりと手を離し、オールマイトから離れた。

「ありがとう。後は、頼む」

その肩を叩き、オールマイトは歩き出す。

「待たせたようだな、オール・フォー・ワン」

「何、ヒーローの友情を見守るのも、巨悪の余裕だからね。でも、この先はそんなサービスはしないよ？」

先ほどまでと同じ位置で立っていたオール・フォー・ワンに、オールマイトは頬笑みを浮かべたまま拳を突き出す。

「その余裕、今日で見納めにしてやろう」

「いいね、オールマイト、それでこそだよ」

二人は向かい合ったまま、ゆっくりと歩きだした。

勝利条件は、たった一つ。

コナンが俺に小さく告げる。

「同時に、だ。完全に同時に二人の個性を『殺す』。それで終わりだ」
「解った」

やっぱり、やるしかないのか。

オール・フォー・ワンを倒すには、オールマイトの個性を消すしかない。理屈は解る、オールマイト自身もそれを望んでいるのも解った。

でも、さ。でも、他の方法があるだろう。こつちにはギルがいるから、『エア』を抜いて。

「マスターが、そうと決めたなら、我はその決定に従おう」

ギルガメッシュが俺を見ている。その瞳には、嘲笑も怒りもない。まるで鏡だな、あいつが見ているのは俺の魂か心か。

エルもソープも、アインズも、もちろんギルやコナンも。艦娘達だってまだ全力じゃない。制限をつけたまま、本気の能力を解除してない。

そりゃ、能力は制限していても技量は制限してないから、オール・フォー・ワンに倒された時は驚いたけどさ。

でも、全員の制限を解除して全力で当たったら、それはこの世界に『戦争』を持ち込むことだから。

この世界のこととは、この世界のヒーロー達がやるから、俺達はいくまで異邦人だからって最初に決めたじゃないか。

「……吹雪」

だから、オールマイトが決めたことを尊重しよう。その後に何かあったら、それはその時に頑張つてどうにかしよう。

「オールマイトの」

「一郎さん!!」

で、デク君？

「やめてください！ 話は解りました！ でも、そんなことしないでください！」

「けど、それはオールマイトが」

「僕がどうにかしますから!!」

そっか、デク君にとってオールマイトはヒーローを目指した原点、オリジンの一つだから、失われることが認められないんだ。

「デク！」

「かっちゃん」

爆豪君も、そう思っているのかな？

「邪魔すんな！」

「な、なんで?!」

「オールマイトが決めたんだよ！ 俺達が憧れたヒーローが決めたんだぞ！ それを俺達^が止めていいわけないだろうが！」

「何を言っているのさ?! オールマイトだよ! ナンバーワンがこんなところで倒れたら! そうなったら!」

「あの人が決めたんだよ! 願ったんだよ!」

あ、爆豪君、泣いている。そっか、君も本当は認めたくない。絶対にさせたくない。でも、君はオールマイトの『願い』を優先してくれたんだね。絶対になんか。

デク君は多くの人の『願い』を、オールマイトにまだ象徴でいてほしいっていう願いを優先しようとしてくれた。

でも、爆豪君はオールマイト個人の願いを叶えようとしている。

本当、君たちはどっちもどっちだね。誰かの願いのために全力であろうとして、願いのために自分の心さえ抑え込むなんてさ。

「だからって認められないよ! 僕はまだ!!」

「甘えてんじやねえぞデク!! 俺達はなんだ? 俺達はこういう存在なんだよ!」

そうだね、デク君。君は今、爆豪君の言葉で固まった。思い出したんだね、自分達がオールマイトに憧れてその背中を追いかける少年じゃなく、その背中を超えていくヒーローだってことを。

「思い出したかよ、『グリーン・シップ』」

振り払うように、爆豪君は自分の左手に『資格』を持ち上げた。

「うん、そうだったね。ありがとう、『シンガー・ボマー』」

デク君も、資格を手を持って見つめた。

「行くぞ」

「うん」

「あの人の最後の花道だ、かっこわるい姿、見せんなよ」

「当たり前じゃないか」

そう言つて二人は、オールマイトとオール・フォー・ワンの方へと駆け出して行つた。

その後の歴史においても、今回のような戦闘は起きたことはなかった。

ヴィラン連合対ヒーロー連合対第三勢力対オール・フォー・ワン。複数の存在が入り

乱れる中で、たった一人で多数を圧倒した巨悪というのは、後にも先にもオール・フォー・ワンだけ。

彼は、彼が語った通りに最後の障害ラスボスだった。

「届かせる!!」

「届くわけがないよね?!」

オールマイトの拳を、自らの拳でたたき落とす。

「燃え尽きろ!」

「君がね!」

エンデヴァアの炎を、蒼い炎で巻き返す。

戦闘は長引く、時間だけが過ぎていく中で、オール・フォー・ワンに有効打は与えられない。

艦娘も入り乱れての戦闘であっても、一步も引かない。相手が複数であっても、真つ正面から打ち砕く。

その姿、たち振る舞いは、彼の思想とはまったく別のものに見えた。

誰かが小さく告げた、まるで彼は『ヒーロー』みたいだ、と。

やがて民間人の退避が完了、会場内にはオール・フォー・ワンと相對する四人のヒーロー、そして一郎率いる鎮守府勢力のみとなった。

「フフフ、ようやくかな。ようやく、全力でやれそうだ」

「周りの被害を考えていたような物言いだな！」

「当たり前じゃないか、オールマイト。私は巨悪でありラスボスではあるけどね、『殺戮者』ではないんだよ。それにね」

気配が変わる。滲み出るように圧力を増すオール・フォー・ワンに、周囲を囲んでいた全員が気合を入れ直す。

「私の怖さを広める人々が多いほうがいいだろう？」

暴風が周囲を薙ぎ払った。防御も回避もできずに飛ばされるヒーローと艦娘達、同時にアインズが結界の密度を上げるも一瞬で崩壊。

「まったたくさー！」

「なんて威力ですか?!」

空かさずソープとエルが結界の外側に防壁展開。外へと広がる威力を封殺した。

「久しぶりに、全力となったわけだが、まだ立てるかね？」

満身創痍だった。正直に言っただけで、オールマイトもエンデヴァーも、先ほどの一撃で立っているのもやつとになってしまった。

デクと爆豪は臙装とコスチュームのおかげでまだ動けるが、先ほどまでの攻防が出来るかと言われたら、素直に首を振るしかない。

艦娘の方も同じか。艦装が大破状態の子が何人か。無傷なのは、吹雪とエンタープライズのみ。

「さすが切り札の子は護りきつたみたいだね」

「貴方の『個性』は私が必ず殺します」

「私とオールマイトの、二つを同時に？ どうやってかね？」

ニヤリと笑うオール・フォー・ワンに、吹雪は言葉に詰まる。ほぼ同時に殺しきる自信は、ある。しかしそれは二人の距離が五メートル以内にある時のみだ。それ以上に離れると、同時には無理だというしかない。

きつとそれはオール・フォー・ワンも察している。先ほどまでの立ち回りで、吹雪の近場にいる時は、オールマイトが離れている時のみ。

やり難い、個人の能力が高いのに、戦いの組み立て方も一流。さすが、今までヒーロー達を相手にしてきた巨悪。

「エンデヴァー」

そつとオールマイトは、自分の隣に立つ仲間の名を呼ぶ。

「なんだ？」

エンデヴァーが顔を向けると、オールマイトが真つ直ぐ見詰めてきた。

言葉はなかったのに、エンデヴァーは彼が何を言いたいか不思議と解った。

「頼めるか？」

「当たり前だ」

「では、頼む」

「おう!!」

炎が立ち上った。炎が燃えるでなく、猛々しく吠えるような。そんな炎の渦が『オールマイトの背中で炸裂』した。

「な?!」

「オール・フォー・ワン!!」

砲弾のように弾き飛ばされたオールマイトは、そのまま啞然としているオール・フォー・ワンに飛びついた。

「今こそおまえと私の因縁を断つ！」

「まさかそんな方法で来るとはね?!」

「今だ!!」

チャンスを逃すことはなく、吹雪は速やかに二人の個性を殺した。

自分の中から何かが失われていくのを感じた。

オールマイトは、目の前で倒れていくオール・フォー・ワンを見ながら、視界が徐々に別の何かを映していくのを感じていた。

お師匠、それと影のように並び立つかつての『ワン・フォー・オール』継承者たち。すみません、けれどこれでよかったですよね。

心の中で語りかけると、歴代の継承者たちは微笑んだ後に首を振った。

違うのか、間違っていたのか。やはり、こんなことでワン・フォー・オールを失うのは自分の身勝手だったのか。

小さく悔やむオールマイトの視界で、継承者たちはゆっくりと指をさす。

『まだ終わりじゃないだろ?』。

確かに聞こえた声と、小さく背中を押した感触でオールマイトは前を向いた。

「まだだああ!! 私はまだ終われない! 終わるわけにはいかないんだ!!」
オール・フォー・ワンが大地を踏みしめる。踏んばるように足を突き出し、その拳を握り締める。

相手は複数の個性持ち、自分とは違い個性が消えるまで時間がかかるか。攻撃が来る、そしてその攻撃を防ぐのは今の自分では不可能だ。個性を失った自分に何ができる。

限界だ、もう力がな。

『限界だあって感じたら、思い出せ。自分の原点、オリジンって奴をさ』。

グツと背中を押された。声が全身に廻り力を湧きあがらせる。そうだ、とオールマイトは両足を踏みしめ、腰に力を入れた。

「私もだ! 私もまだまだ終われない!」

拳を握る、両足を踏みしめる。十分に力を込めての一撃、最後の最後の一撃。

自分のオリジンを胸に抱きながら拳を握るオールマイトの背中に、多くの人の影が浮かぶ。今まで彼が救った人たち、今まで彼が救えなかった人たち、その想いの欠片が、オールマイトの全身を突き動かす。

そして、その背中をそつと押す、『志村・転狐』の想いも。

だから、さらだ、オール・フォー・ワン。

「LIMITED STATES OF SMASH!!!」

オールマイトとしての最後の一撃、渾身のラストSMASH。

さらばだ、ワン・フォー・オール。

全身全霊をかけた一撃は、確かに彼を叩き伏せた。

終わる、もう欠片も残っていない力。全身が痛みを訴え、崩れ落ちるしか許されないような感覚の中。

オール・フォー・ワンはオールマイトの背中に見える多くの人達が、笑顔で前を向い

ているのを見ていた。

ヒーローとは苦難に立ち向かう、多くの絶望と悲劇を前にしても諦めずに進む存在。その姿は、涙を流し苦しむ人たちに勇気を与えてくれる。

そうか、と彼は思い、同時に『まだだ』と叫んでいた。

「おまえがそう背負うならば！」

力など入らなくてもいい。

「おまえがそうであるならば!!!」

全身が崩れようとも構わない。

オール・フォー・ワンは両足を砕けんばかりに、大地に突き刺した。

「私は、絶対に倒れるわけにはいかない!!」

気概を吐き、気合いを叩きつけるオール・フォー・ワンの背中に、多くの人が浮かんでいた。

泣いている人、苦しんでいる人、誰もが過去の辛いことのために、暗い顔をしていた。オール・フォー・ワンとワン・フォー・オールは確かに二つで一つだった、けれどその方向性はまったく違うものだった。

片方は喜びや楽しさに、もう一方は悲しみや苦しみに。

まるで人間のように、二つの側面を持った力は、本来なら一つであったものが二つに

分かれて、こうしてここに存在していた。

オールマイトは彼の背中の人たちを見つめ、そして自分がまったく動けないことを知りながらも、何処か晴れやかに笑った。

「ああ、そうだったな。だからこそ」

オールマイトの手がゆっくりと上がり、指差す。

「次は君たちの番だ」

瞬間、オールマイトの背中から飛び出す影が二つ。

「その絶望は!!」

「その苦しみは!!」

拳を握った二人の姿に、オール・フォー・ワンは驚きながらも何処か『良かった』と感じていた。

「俺／僕が砕く!」

二人のヒーローの一撃は、巨悪が集めた人々の絶望を砕いた。

テレビモニターを見ていた人達は、オールマイトが崩れる姿に嘆いた。
けれど、その後映し出された二人のヒーローの姿を見て、嘆いていた顔をあげて見
つめる。

そこにいる、絶望人々のを砕自由いて祓護うヒーローの姿を見るために。

貴方にとってヒーローってなんですか？

長い長い、戦いが終わった。

とても一言で片づけられないけど、とても長い戦いだった。

彼が始めたことが、ここでようやく終わりを告げた。

考えてみれば、最初の始まりは彼だった。

彼が願ったこと、彼が思ったこと。その結果、今の世界が作られ成長したとしたら、彼は間違いなくこの世界にとっての始まりの『ヒーロー』だったのではないだろうか。

オール・フォー・ワンは巨悪だった。確かにやってきたことは褒められるものじゃないけれど、彼が始めたからこそ今の社会が作られたとしたら。

もしも、彼が弟に能力を与えなければ、どうなっていたか。

ワン・フォー・オールが生まれなかった世界、オールマイトが立たなかった混乱の時代、そう考えると彼はある意味で、『ヒーロー』と呼べるのではないだろうか。

「先輩、何を書いているんですか？ 明日の朝刊の記事、終わったんですか？」

「ん、いやちよつと私的なメモを取っていただけだよ。俺って、すぐに忘れるからさ」
「そうなんですか」

先輩の言葉に頷いて、彼はパソコンを閉じた。

あの悪夢の似た雄英の襲撃事件後、色々なことが起きた。

まず最初に雄英の上層部が世間から叩かれた。何故、行ったのか、どうして体育祭を開催したのか。

それに対して、教師陣は誰もが逃げず真つ直ぐ誠実に答え続けた。

守るべき子供たちの未来と、何よりその自由を奪いたくなかった、と。

嘘も虚言も交えない返答は次第に世間に広がって行き、やがて雄英に対しての批判は少なくなっていくた。

同時に持ち上がったのが、オールマイトの引退、及びその後を継いだナンバーワン・ヒーロー、『エンデヴァー』の話題。

彼はオールマイトのようなナンバーワンではなかった。彼のように真つ先に飛び出し、誰よりも速く駆け付けられるわけでもなく。

「行くぞおまえらー！」

「オー!!!」

常に仲間を引き連れ、その先頭に立ち事件現場へと突撃していった。

たつた一人の孤高ではなく、多くの者の先頭を走って行く姿は、世間では『オールマイトより弱い』とみられていたが、次第にその背中を追いかけるように、惹かれるように人気が高まって行き、やがて『ナンバーワン』と誰からも認められるようになった。

「エンデヴァー、貴方はどうしてそんなに強くいられるのですか？」

ある日、雑誌の取材に応じた彼に対して、記者はそんな質問を投げた。

「昔の俺を知らないのか？」

「いえ、知っています。あれが幻だったように思えます」

「そうか。ならば、答えてやろう。今の俺は、俺だけじゃない『あいつ』の意思を受け継いでいるからな」

フツと笑う男に、昔のすべてを憎むような面影はなかった。

「オールマイトの、ですか？」

「ああ、そうだ。それだけじゃない、人を救いたい、多くの人の自由を護る、そんなヒーロー達の意味が、俺の中で燃えている。だから、強く在れる。ただそれだけだ」

炎を燃やし語る彼の言葉は、何処までも熱くて何処までも心を燃やしてくる。彼がいてくれるなら、怖いものはないと思えるほどに。

「では、最後に、貴方は『グリーン・シップ』、『シンガー・ボマー』とお知り合いだと伺

いました。紹介していただけませんか？」

「なるほどな。だが、断らせてもらおう」

「どうして、と質問しても？」

てつきり二人を紹介してくれると考えていた記者に対して、エンデヴァーは軽く首を振り口を開く。

「あいつらはな、まだ学生だ」

「はい、解つています。それでも」

「そして、一流のヒーローだ。きつとインタビューを受けるより、助けての声に答えることを優先するだろう」

「そうですか」

「残念そうだが、あいつらへのインタビューを企画しているなら、最高の場を知っているぞ」

「それは何処ですか？」

驚いて問いかける記者に対して、エンデヴァーはちよつと悪戯っぽく告げた。

「助けてと声が出したところへ行け、そこに最高に輝いている奴らがいる。あいつらの活躍を見れば、後は言葉など無用だろう？」

「ああ、確かに」

記者は納得したように笑った。

今日も彼らは動きだす。

「おい！ 緑谷！ 爆豪!!」

「先生すみません！」

「後で補習でもしてくれよ！」

走り去っていく背中を見送りながら、相澤は深くため息をついた。

あの事件後、授業を真面目に受けていた二人は、こうして授業を抜け出すことが多くなつた。

「焦っているのか、あいつら」

「先生、俺もいいか？」

「おい、おまえな」

轟の発言に困った顔を向けた相澤は、クラス全員が同じ顔をしているのに気づく、小さく嘆息する。

「馬鹿なことを言っているな、おまえらはまだ学生だ。いいから授業を受けろ」

「でもよ！ 爆豪と緑谷はいいのかよ?!」

切島の発言に、クラスメートたちはそうだそうだと大合唱。自分達も行きたい、助けての声に答えたい。

あの事件を目の当たりにして、体全体で意思と理想のぶつかり合いを見た全員が、心の底から『ヒーロー』になりたいと叫び続けていた。

「あの二人の学力に追いつけるのか？」

途端に、誰もが顔を反らして声が消えた。

「あの二人の実力に追いつけたのか？」

誰もが頷かない。視線を反らし、それでも顔を上げた生徒達を見つめながら、相澤は笑顔で迎え撃った。

「安心しろ、お前達は必ずヒーローにしてやる。あの二人に負けないくらいのヒーローにな。だから、今は学べ。知識をつける、個性を磨け、技術を身につけろ」

相澤は口で否定し態度で駄目だと告げながら、表情はとても晴れやかで嬉しそうに笑っていた。

「あの二人に追いつけるように、俺達教師が徹底的に鍛え上げてやる。だから今は授業を受けろ、解ったな有精卵ども」

「はい!!」

「なら、教科書を開け。言っておくが、あの二人は、先日のMIT試験と東大の試験、全教科で満点を叩き出したからな」

蛇足のように二人の実力の高さを叩きつけると、誰もが蒼白になって項垂れたのだが。

追いかける、と相澤は無言で告げる。あの二人は間違いなく、ヒーローの頂点を目指して駆けあがっている。ならば、その背中を目標して追いかけて、追い抜いて行け、と。

その先に、誰もが憧れるヒーローの姿があるのだから、と。

無言のエールを送りながらも、彼は今日も教鞭をとる。

そして、クラスメートたち、あるいは全国のヒーローアカデミアの生徒達が目指す二人は。

「デクー！」

「二百メートル先、火災に巻き込まれた人たちがいる！」

「そっちは俺が何とかする！ おまえは火元を消せ！」

「うんかつちゃん！ 任せた！」

「おまえこそしくじるなよ！」

二人して同時に分かれ、ヒーローとしての姿を身に纏う。

以前よりもしつくりと体に馴染むそれは、今では重石でもあった。

あの時、最後の一撃をオールマイトから譲られたから。巨悪を倒し、その理想と願いを砕いたから、だからこそ今の自分達は一步でも退かない。

絶望も悲しみもない、誰もが平等に笑って過ごせる世界のために。

理想すぎるか、いいや理想は高い方がいい。叶えられないかもしれない、でも自分達は絶対に諦めない。

最初の時、誰もが諦めた巨悪に対して、立ち向かった最初のヒーローのように。

混沌の時代にあっても、ヴィランに対して闘い抜いたヒーロー達のように。

そして、自分達のようにヒーローに憧れて、その背中を追う人達のために。

「次だデク！」

「うん、かつちゃん！」

足を止めずに前に進もう。

振り返ることもある、辛くて立ち止まることもあるかもしれない。

それでも、前に前に。ただその先へ。

最初のヒーローが胸に抱いた想いを、その意思を受け継いで未来へ、その先に待つて
いるヒーローに渡すために。

ヒーローの意思

それは

希望

聖火の如く

受け継がれるのだから。

そして、時は流れて。

『今日のゲストは、噂のナンバーワン・ヒーロー！ 多くを救い、多くのヴィランも救つてきた不屈の超人！ 『ノービス』です！』

『いや、そんな恥ずかしいですよ』

『いえいえ、歴代最高と呼ばれる貴方を招いて番組を始められるなんて、こんなに光栄なことはありません』

『歴代最高、ですか？』

『そうですよ。貴方ほど強いヒーローはいないでしょう？』

『いいえ、違いますよ。俺は、『ノー^{未熟者}ビス』ですからね。俺よりも強いヒーローはいましたよ』

『ええ。そんなことないでしょう？』

キャスターの返答に、彼は一冊の本をテーブルの上に置く。

『これは？』

『古い友人からもらったものです。これが俺の原点であり、オリジンです。彼らに比べたら、俺なんて未熟者ですから』

『そうなんですか』

キャスターが手に持った本を開く。カメラの画面には、そこにある古ぼけた写真を次々に移していった。

混乱の時代を切り開いたオールマイト。

ヒーローの心に炎をともしたエンデヴァー。

『ああ、知っていますよ。伝説のヒーローですよね』

『はい、そうです。その背中を追い掛けて、俺はヒーローになりました』

彼は常に余裕を持って、優雅に振る舞ったヒーローだった。けど、今の彼は何処か少年のように憧憬を持って本を見つめていた。

『なるほど。では、ここで少し意地悪な質問をしてもいいですか？』

『意地悪かあ、ちよつと怖いですね。どうぞ』

『では、『貴方にとつて最高のヒーロー』って誰ですか？』

先ほどまで笑っていたキャスターが、笑顔を消して真顔で問いかける。

対して、ノービスも真顔になりゆっくりと瞳を閉じた。

『俺は実は、三・三・いえ二人、どうしてもそうなりたいってヒーローがいます』

『お、噂のノービスを育てたヒーローですね？ 誰も名前を知らないヒーローの名前、ついに公開ですか？』

『はい、俺の戦闘技術、俺の知識、俺の精神、いやノービスってヒーローを鍛え上げてくれた、最高のヒーロー達です』

憧れた少年の顔から、青年の顔へ。彼は語りながらも、昔を懐かしむようにゆっくりと告げた。

『グリーン・シップ』

『シンガー・ボマー』。

『俺の中で、最高のヒーローですよ』

そう笑う彼は、再び少年の顔に戻っていた。

憧れて、手を伸ばして求めて、その背中を必死に追いかけていた頃に。

インタビュウが終わり、機材の片づけを始めたスタッフの中、現場へ戻ろうと歩きだしたノービスを、先ほどのキャスターが呼び止めた。

「さつき、三人つていいかけましたよね？」

「気づかれちゃいましたか。あと一人は、話だけ聞いていて会ったことないんです」

「なるほど。でも言わなかったのは？」

「ヴィランだったんです。それも、史上最悪の」

その言葉で、キャスターは誰もことか解った。

「オール・フォー・ワン」

「ええ。あの人のやったことは、確かに悪ですし許せないものでした。でも、理想のために、ただ一人であつても強く高く、多くの人のことを考えていた人はいない。そういう意味で、『ヒーロー』ではなかったかな、と」

すみませんと謝るノービスに対して、キャスターは首を振った。

「いえ、私もそう感じることはありませんよ。ということは、貴方もあの『本』を？」

「貴方もでしたか。はい、持っています」

「彼は許せない、最大級の犯罪者です。でも、その姿勢は立派なものだった」

「私は、ああんりたい。誰に言われても、誰が攻めてきても絶対に揺るがない、最後の最後まで諦めず立ち向かうヒーローに」

「そうですか。私も立場は違えど、同じ気持ちです。真実を、人々の自由のためにこれを選んだ」

キャスターはそつとマイクを持ち上げる。

「お互い、道は違いますが、その志は同じ、ですね」

ノービスはそう告げて、手を差し出す。

「はい、同じ志を持った者同士、頑張りましょう」

「ええ。そういうえばあの本に、書かれていたこと、覚えていますか?」

「最後の一文ですよね? 私も好きなんですよ」

「私もですよ」

そう言い合つて、二人は笑いながら、同じ言葉を告げた。

貴方にとって、

ヒーローってなんですか？

第二幕 彼ら・彼女達の非日常的な日常風景

悪い知らせ、不幸の便り、そして世界の絶望を望んで終わる

その日、治崎・廻は絶望を知った。

「あのね」

長い間、見守ってきた少女は立派に成長を遂げた。

「話があるの」

女性になる一歩前という危うい雰囲気のある、十六歳の少女となったエリの話に耳を傾けながら、廻は心の中で思う。

うちのエリちゃん、天使じゃなくなった。

まさに女神。

「私ね、好きな人がいるの」

瞬間、彼女の言葉を脳が拒否した。

「いったい、どうしたことか、何時も彼女の言葉は真っ先に聞き、素直に答え、時には厳しく叱つたりもしたというのに。」

「なんだって?」

廻は手に取っていた、作りかけのサマードレスを作業台に置いて、きよとんとした顔をエリへと向ける。

「だからね!」

しかし、エリは質問に答えずその先を口にした。

「その人と結婚したいの!」

真っ赤な顔で告げるエリを見つめ、『ああ、今日もうちの女神は可愛い』と感じながら、廻の脳は別のことを考えていた。

よし、そいつを殺して世界を滅ぼそう。

穏やかな午後の昼下がりに。

今日も平和な一日だな、と死柄木・弔は思っていた。

「我が師よおおおお!!!」

「平和って尊いな」

店のドアを蹴り破って入ってきた廻を見ながら、弔は誰もが一度は思うことを口にしたのでした。

「廻、おまえはドアを蹴破るのが趣味か、と一郎なら言っているな」

「趣味ではない、生き様だ」

「もつと悪いわ。それで、何の用だ？」

「は?! 我が師は何処に? 非常に可及的重要かつ、危機的状況なのです」

ピシッとスーツを纏い、一流の商社マンのような雰囲気と冷静な顔をしながら、言っていることが意味不明な暴走馬鹿を見ながら、弔は呆れながらも答えてやることにし

た。

「二郎なら、今日はいないぞ」

「ガッテム!!!」

見事に崩れた廻に、本当にこいつは今では大派閥となった『鎮守府連合』の幹部の一人か、と思つてしまう。

弔もその一人だが、同じ幹部として情けないと思ふべきか、それとも真つ先に最前線に飛び込む猛者の『弾丸グラップラー』の治崎・廻とは、別人と割り切るべきか。

小さな疑問を感じる弔の前で、廻は崩れ落ちたまま拳を床につきたてた。

あ、床が壊れたな。後で修理させればいいか、と弔はのんびりと思つていたという。

「なんとということだ。私はどうしてこう間が悪いのか。先日のヴィラン連合・矢じり会との戦闘もそうだった」

「そうだな、おまえは『ヴィラン連合とヒーロー対決ショー』を、本気の抗争と思つて突撃していったな」

「いや! 違うな、あの時ではない。悔やまれるのは、保育園への制服の一件だろうか」
「ああ、あの一郎に話が来たから、幹部会でどうするって話をしていた途中で、軍服のよ
うな園児服を作つて持つて行つた件か?」

「私はどうしてこう間が悪いのか」

嘆き悲しみ、慟哭を嘯みしめながら立ち上がる廻を、弔は半眼で見つめる。

思えば自分も丸くなったな、と思ひながら。昔なら真つ先に潰していかないか、あるいは崩壊させてすつきりとか。

「ク！　それで我が師は？」

「今日はイヨの中学校の下見だそうだ」

「は?!　そんな、馬鹿な」

再び廻が崩れ落ちる。失態だ、どうして忘れていたと。

「我が師のご息女の大切な日を忘れるとは。何たることだ」

「いや、ただ公立じゃなく私立がいい、制服可愛いところがいいって、我がまま言っているだけだからな」

「スケジュールを確認しない私が悪いのか?!　秘書をつければいいのか?!」

「おまえ、秘書を徹底的に『グループラー』に鍛えるから、幹部会から『もうつけない』って言われてるだろうが。俺達は武闘集団じゃないんだぞ」

「いやそれよりも携帯端末を持ってば!」

「先日、エルとソープが『絶対壊れない端末』を作ったのに、二秒で砕いたおまえが、どんな端末を持てるっていうんだ?」

「私はどうすれいい弔?!」

「いいから人の話を聞け」

喜劇のように、舞台の役者のように、一つ一つの動作が大げさな廻に、弔は盛大に溜息をついたのでした。

「あら、廻さん、いらつしやい」

「お久しぶりです、百夫人」

「今日はどうなさったのですか？」

騒ぎを聞きつけたか、あるいは丁度よく戻れたのか、店の入り口から入ってきた死柄木・百（旧姓、八百万）は、笑顔で廻に挨拶した。

店の入り口が完全に壊れていることに気付きながらも、何時ものことを微笑んで流す妻の姿に、弔は『こいつも染まったな』と感心してしまう。

「そうでした!!」

ようやく本題を思い出したか。弔はそう思いながらも姿勢を正す。

「実はエリが好きな人ができたので結婚したいと言いました」

「……よし、そいつを殺そう」

「核弾頭、今の私なら創造が可能ですよ」

ほんわか空気から一転、店内には殺気が満ちたのでした。

死穢八齋會が一郎達の派閥に下ってから。いや、無理やりに入ってから。まった、あれは取りこんでの方がいいか。

とにかく、彼らが鎮守府と行動を共にするようになってから、エリはこの店にもよく訪れるようになっていた。

可愛い天使、最初は戸惑っていたが周りの優しさに触れ、暖かさに触れてよく話すようになった彼女を、見守り続けた。

見守つて、願いを叶えて、間違っていたら叱つて。誰もが彼女の親のようにふるまい、彼女を慈しみ育てた。

結果、エリちゃん過保護親バカが増えた、と。

「事態は由々しきところまで進んでいます」

「ああ、解っている」

凄みのある笑みを浮かべた廻の言葉に、同じように殺気を滲ませた弔が答える。

まさか、まさかだ。あの蝶よ、花よと育ててきたエリにそんな悪い虫がつくことになるとは。

「廻、おまえは何を見ていた？」

「申し開きもありません。エリにそんな相手がいるなど、私の情報網に引つかかることはなく」

「おまえ、本当に何を見ていたんだ。幹部会での報告にはなかったぞ」

「見落としていたとしか」

肩を落とし、絞り出すように告げる廻の胸倉を弔は掴んだ。

「見落としていた？ おまえ、本当に死にたいのか？ それで許されると思っていないか？」

「私とて！」

廻は弔の手を弾き、直立不動で睨みつける。

「そんなことで我が罪が許されるなど思っていない」

「なら、どう責任をとる？」

きつい口調の言葉に、廻は黙って拳を握る。

どうすればいい、どう対応すればいいか。二人の男は悩みに悩み、結論を出せないまま固まっていた。

一方、百はというと。

「幹部会の招集もありえるか、と」

『心得た。では、私が動こう』

「いえ、相談役はそのままでもお願いします。貴方が動くと世間的に、色々と問題があります」

『ふむ、では何かあったら連絡を望む。頼むぞ』

「はい、では」

通信を閉じて、百は未だに固まっている二人を見つめ、両手を叩いた。

「はい！ このお話は一郎さんにしてから、というのはいかがですか？」

「そうだな。廻、おまえの処分はその時にだ」

「解りました。御配慮、ありがたく」

チツと舌打ちする弔と、ギユツと拳を握り一礼する廻。それを横から見ながら百は思う。

『でも、今回の話を進めないとエリちゃんは結婚も恋愛もできないのでは？』と。

「ふむ、厄介なことにならなければいいが」

締め切った部屋の中、薄闇の中で通信端末を置いた彼は、深くイスに腰掛けた。材質からこだわった一品は、今まで全身を優しく包んで癒してくれたのだが、今日は違和感を覚えてしまう。

「私の方から一報を入れるべきか、あるいは」

しばらく悩んだ彼は、すでに何度も押しして慣れた番号へと連絡を入れる。

「すまない、少し厄介事だ、力を借りられるか？」

『………何時も、何時も思うのだが、我々は盛大に戦った仲ではないか？』

相手から、とても苦々しい返答が来たのだが、それならば通信にでなければいけないので、はと思うが、彼は一度たりとも通信に応じなかったことはない。

「フフフ、いいじゃないか、それはそれ、これはこれだ。君こそ、一郎君の提案を受けた、ということとは君も『愉悦部』に染まったということだろう?」

『昔の私なら『貴様なんぞに!』と言っているところだろうが、年をとったものだな』

「お互いに、ということだろう。では、もしもの時は頼めるかな『オールマイト』?」

『解った、私も酔った勢いとはいえ、参加してしまった責任と義務がある。承った、『オール・フォー・ワン』』

「その名前は捨てたはずだよ。今の私は、『フィクサー』さ」

『いやそれは完全に前のおまえではないか?! 最初に偽名を知った時の私の気持ち解るか?!』

「いいじゃないか。黒幕として世界を見つめたいのさ。中学生に戻ったみたいだ」

『おまえの立場でやったらまずいことを解ってくれないか?! 一応でも、鎮守府連合の相談役だからな!』

「いいね、いいね、昔と変わらない気概じゃないか、オールマイト」

『また殴ってやろうか! オール・フォー・ワン!』

「もう老人に対して、何たる仕打ち。君は雄英の校長になって、丸くなったではないのか

ね？」

『今も職員会議の真っ最中だ!!!』

「それは失敬。では」

相手が何か叫んでいるが、彼は無言で電話を切る。会議は邪魔しては駄目だ、何があっても。

「さてさて、今回はどうなることやら。ム！ こんな時間ではないか」

時計を不意に眺めて、彼はテレビをつける。

『それいけ！ ア●パ●マン!!』

「フ、やはりいい作品だ。転生者の知識を奪い、作成しただけはある。やはり、和気あいあいとした姿こそ子供たちのためになる」

ニヤリと笑う彼は、その後も子供向け番組を見続けたのでした。

引退した元凶悪のおじいちゃんは、今日も元気に黒幕みたいなことで愉悦しています。

どうも、田中・一郎です。

現在、俺はエリちゃんの相談を受けています。

「なんだか血相を変えて、飛びだしていつちやたの」

「ええ、廻おじさんってそうなの？」

相談を受けているはずなんだけど、うちの娘と話しこんじやって。でも、内容的には、どっちもどっちかなあって思うんだよね。

「イヨ、エリちゃんはお父さんに相談に来たのよ」

ヒミコちゃん、いいんじゃないの。って思っ顔を見ると、『話が進みませんよ』って返されたよ。まあ、確かに。

「は〜い、お母さん。でもでも、私もちよつと解るなあって」

「私も解る」

「お姉ちゃんもだって」

いや、カグヤの解るはまったく違う方向を向いてないか。

「奪ってくれるくらいが男らしい」

キラリつて瞳を輝かせて言うか、うちの長女様は。なんだろう、俺と同じ黒髪なのに、瞳がヒミコちゃん似だから凄く可愛いけど、凄味がある時があるんだよな。

「二郎君」

小声で注意が入りました。

「おい、タケル。おまえの妹達、どうにかしろ」

「父さんの娘だろ、何とかしてくれよ」

まったく別のテーブルに座った長男に話を振ったら、真っ先に否定しやがったよ、こいつ。

「それで、エリちゃんはどうしたいの?」

さっすがヒミコちゃん、頼りになる。そうだ、まずはエリちゃんがどうしたいか、をね。

「私はやっぱり逝ってきます」

「え?」

決意した少女は、そのまま駆け出して行った。

「今さ、いつてきますのニユアンスが違ってなかった?」

「頑張れエリちゃん!」

「負けるなエリちゃん!」

「いいぞエリちゃん！」

「なあ、タケル、うちの女性ってどうしてこう、熱くなると人の話を聞かないんだろうな」

「俺が知るかよ、父さん」

「そうだよな。はあ、エリちゃん、暴走してないといいけど。」

そして、舞台は弔のお店へ。

廻が壊して直したばかりのドアをけり破り、エリちゃんは店内へ飛び込んできた。

「治崎・廻さん!!」

「エリ?! おまえはなんという!」

「私と結婚してください!!!」

「は?」

「小さい頃から私を見てくれていた貴方と結婚したいんです!　お願いします!」

店内の空気が固まった瞬間でした。

その後、動きだした弔に『おまえを殺せばいいのか?』とニヤニヤと笑いながら言われ、百からは『取り越し苦労でしたわね』と言われ。

「.....」

「廻さん!」

「おい廻!　どうした?!　傷は浅いぞ!」

「女の子の告白を受けて答えないまま逝くなんて!　私が許しません!」

燃え尽きたように倒れた廻は、一言だけ告げた。

「我が人生に、一片の悔いなし」

その顔はとても安らかだったという。

こうしてエリちゃんの告白は、意中の人へ届いたのでした。

しかし、その後は大変な混乱だったのです。

治崎・廻対、鎮守府連合幹部会、プラス現役を退いたはずのオールマイト、死んでい
たと思われたオール・フォー・ワンの大乱闘。

「エリを嫁にするなら、俺たちくらい倒せるよな?」

元死穢八齋會の親分まで揃った一大馬鹿騒ぎに対して、治崎・廻は不敵に笑ったので
した。

「いいぜ!! 俺の拳を止められるもんなら止めてみるおお!!!」

そしてね。

「あの、一郎さん、お願いしますから」

「本当にあんたのところは、馬鹿騒ぎが好きだよな」

「ごめんなさい」

俺こと田中・一郎は、駆けつけてきたデク君と爆豪君に対して、土下座したのでした。

世界の中心にして、人の世の脇役、人の心を壊し癒すもの、あるいは誰かにとっての命

それは、人にとって必要なものですか。

「必要です！」

それは、世界にとって大切なものですか。

「食事時には必要ない」

それは、物体ですか。

「物体でいいのかな、あれ有機部品を使っているから」

つまり、なんですか。

「私の宝物庫にもあるものだ」

「マジかよ英雄王。ウソだろ、おい?」

「名探偵よ、我が嘘をついてると? 面白いジョークだ。笑え、名探偵ジョークだぞ皆」
盛大に大笑いしているのに、誰も笑えないでいます。

どうも、田中・一郎です。

大変なんですよ、本当に凄く難しい問題が発生しています。もうね、どうしてこうなったって、誰かに八つ当たりしたいけど、原因が解らないから当たれないって言うかね。

「一郎君、大変です、本当に大変です」

「あ、うん、ヒミコちゃん、解った、解ったから、落ち着こうね。君は今、妊娠中。解る?」

「解ります、解りますけど、大変なことですよ。こんなことになるなんて、誰も予想していません。どうしましょう、こうなってくるとお金が必要なのは解ります、予想していません。貯金がいくらあるか、確認しないと」

「落ち着こうか、妊婦さん。君は、初産だからね。本当に医者さんに『気をつけてね』って言われてるからね」

「一郎君はどうしてそんなに落ち着いているんですか?!」

うわあ、俺の嫁さんが妊娠して情緒不安定ですよ。普段の冷静さが、あれ冷静さ、冷

静であったこと、あったかなあ？

ヤンデレ寸前のヒミコちゃんしか思い浮かばないのは、俺がおかしいわけじゃないよね。え、うちの嫁さんってヤンデレだったの。

いや、マジかあ。そっかそっか。

「フ、マスターよ」

「ギル、どうした？」

なんで腕を組んで顔を沈めているんだよ。あれか、あれだよな、噂の司令官スタイルって奴だよな。

「貴様、事態の深刻さを理解していないな？」

「いや深刻なのは解るけど、そんなに慌てなくてもさ。代用品あるし」

「理解してないのかよ、マスター？」

「コナンまで、どうしたんだよ」

「世界が終わったかもしれないんだぞ」

大げさな。いや待った、ひよっとして俺が知らないだけで、世界規模の何かを暗示する機能でもついているとか。

俺はチラリとエルとソープを見た。

うん、こいつらならやりかねない。俺が知らない間に、家庭の電化製品を伝説級の武

具とか、トラン●フォーマーに改造するくらい、呼吸するようにやるからな。

「ム?! 何処かで僕の天才を褒めている気がします!」

「は?! 誰かが内緒で進めていた計画を言い当てた気がする!!」

「こら待ておまえら! エルの天才発言はいいけどな!」

「いや〜」

クツソ可愛い笑顔で頬を染めんな、この女顔のロボットオタク!

「照れんなおまえは! そっちじゃない! ソープおまえ! 内緒で進めていた計画ってなんだよ!」

俺の叫びにソープは、見惚れるくらい綺麗な笑顔を浮かべていた。

「ロマンじゃないか。解るよね?」

「解るか?! おまえとエルは少し自重しようぜ! 昔と違ってうちには今、妊婦さんがいるんだからさ!」

もう色々々と神経を使えよ、あの弔でさえ神経を使っているんだらな。

「え、ベッドが自動車へ変形はヒミコの提案だけど?」

「あれアイディアはヒミコちゃん?! まさかの妻の裏切り?!」

「はい! 寝ながら外にお散歩したかったの。ごめんなさい!」

うん許す。上目遣いで頬染めたヒミコちゃん的笑顔で、俺は何でも許せそうになっ

た。

「よかった」

「ソープ、てめえは駄目だ。いいから白状しろ、何をした？」

「『まだ』何もしてないよ」

清々しい笑顔で、予告してんなよ、おまえ！

「ところで、なのですが」

「黒霧、どうしたんだよ？　今、俺はこの馬鹿をな」

「いえ、それよりもです」

なんだよと顔を向けたら、黒霧が指さした先から煙が出ていました、とき。

「令呪を持って命じる！」

「貴様マスター?!」

「落ち着けよおまえ！」

「ギルガメツシユ、あの洪水の宝具を！」

「貴様が最も冷静ではないであろうが！　たわけがああああ!!!」

そして、俺の家の食堂で世界を洗い流す大洪水が起きました。

「一郎さん、俺はな、言いたくて言うわけじゃねえんだよ」

「うん、爆豪君、解っているさ」

「一郎さん、お願いですから」

「ごめん、デク君、本当にごめん」

「いや土下座がみたいわけじゃないから」

え、まだいいの。大洪水により周辺が浸水したので、俺は代表で怒られています。

まったく、ギルも困ったもんだ。もっと規模を考えてくれよな。

「離せ！ 離すのだアインズ！ 今日是我慢ならん！」

「待て待つのだギルよ！ 理解はできる！ おまえの怒りは尤もだ！ しかし仮にもマ

スターだ！」

「離せえええ!! 今こそ『天の理』を叩きこんでやる！」

「落ち着け！」

あ、不味い、本当にギルが激怒している。いや、そんなに度量が狭いでどうするんだろう、英雄王。そんなんじや、王の中の王って言えないぞ。

「久しぶりに見たな。マスターの必殺、『おまえ何してんの』」

「責任転嫁ですね、解ります。僕もよくやりますから」

「昔の一郎を見ているようで、清々しいね。うん、あれで提督していたんだから、凄いいね」

懐かしい顔してんなよ、コナン、エル、ソープ。俺は何時だつてこうだよ、転生してちよつと大人になつたけどな。

「一郎、おまえ反省してないな？」

俺の後頭部を弔が掴んでいました。あれえろく弔まで激怒ですか、そうですか、不味いかな、かなり危ないことになつたかな。

「キッチンが責任を持って直すからさ！」

「そつちじゃない」

え、弔が怒っているのはキッチンが全損したからじゃないの。あれ、他の理由、他の理由つて。

「俺の弟に何をしている？」

「え？」

「ヒミコの子なら、俺の弟だ。いくら父とはいえ許さん」

あれれえ〜。弔が言っていることが、俺には理解できないよ。おかしいなあ、何を言っているんだろうな。

「いや待った、その理屈はおかしい」

「おかしくない。いいか？ 兄が先に生まれるのは弟や妹を護るためだ。だから俺は父親である一郎が相手でも、戦ってやる」

「なにその意気込み?! 待った弔！ 理屈がおかしい！ 本当におかしいから！」

「少しは反省しろ」

「はい」

もうこれは大人しく返事するしかない。弔の手が、ミシミシって俺の頭を握り潰そうとしているんだから。

痛い痛い痛いつて!!

「もう弔君ったら。お兄さんしていますね」

「ヒミコちゃん!? ちょっと助けてくれますか?!」

「ダメです、一郎さんは少し落ち着いて反省しましょう」

「ヒミコちゃん?!」

昔なら真つ先に助けてくれたのに?! か、艦娘に応援を頼むべきか。いやあつちで

『馬鹿提督』って顔しているから、助けてくれない。

トツティちゃんんとトルテ君に！ あ、ダメだ。店先で崩れ落ちている、うんうんあのお店の内装は気にいっていったんだね、解るよ、解るけどさ。

先の俺を助けてえ!!

「一郎?」

「あい」

「おまえは父親になるんだ。少しは自覚しろ」

「はい」

「ついでに、『鎮守府連合』の代表だと理解しろ」

「いやそつちは納得してませんからね！ なんて俺の知らない間に連合になっているのか説明しろよ！ なんて俺の名前が代表になってんだよ?!」

「生まれてくる弟と妹のためにだ」

その時、弔が浮かべた笑顔を、俺は忘れることはなかった。

いやヒーロー活動した後よりもいい笑顔って、どういうことだよ。

「兄か、いい響きだ」

「弔、そこまで。そつか、そうだよな。おまえの家族は」

「ああ、もう二度となくさない。今の俺なら世界さえ崩壊できそうだ」

いい笑顔で親指を立てる弔に、誰もが思うのでした。
あ、こいつが一番パニツクになっているって。

「とにかくです！」

その後、周辺被害はエルとソープと、その配下のゾイド部隊とかが頑張ってくれました。
た。

一時間で五キロ圏内の被害を修復って、こいつらは何処に向かっているんだろう。

「現在の状況を見ると、原因を早急に排除するべきです！」

「エルの意見に賛成だな。今回の原因をどうにかしないと、俺達は一步も前に進めない」
コナン、そんな神妙な顔しなくても。おまえがいてくれるなら、どんな問題だって一

発解決だろうか。

「マスター、探偵にだって限界はあるのさ」

「そんな悲しいこと言うなよ、名探偵。おまえが本気になったら、今回の一件なんて簡単に解決だろ？」

「悪いな、俺の推理じゃもうどうにもできないことだ」

コナンが。あの鎮守府時代から、何があっても頼りになったコナンが、そんなことを言うなんて。

「名探偵よ、貴様の弱気など聞きたくはないぞ」

「悪いな、英雄王。俺だって言いたくないさ。でも、今回の一件は俺じゃ無理なんだよ」
「そうか、世の中は無情出会ったな。今になって思い出すとは、我も随分と錆ついたものだな」

「いいじゃねえか、ギル。全盛期のおまえが必要な世の中じゃなくなった、そう思えば
さ」

「慰めか、悪くない気分だぞ、コナン。その気持ちは、王としてではなくギルとして受け
取っておこう」

「よせやい、おまえと俺の中だろ」

「フ、そうであつたな」

うう、泣かせるな。ギルとコナンが拳を合わせているって、こんなに感動するものなんだ。

「感動シーンありがとうございます！ では早速！」

というわけで、食堂の壁一面にエルが図面を広げました。

え、何これ？

「これでもって今回の原因を解決します！」

「大丈夫だよ、僕とエルが全力でやるからね」

いや待った、二人が全力でやるから、大丈夫？ え、待って、その理屈がおかしいことに誰か気づいて。

「よかろう！ その計画、このアインズ・ウール・ゴウンも助太刀しようぞ！」

「ならば英雄王たる我も参加しなければな！」

「いいぜ、俺の頭脳が何処まで役立つか、試してやろうか」

あれえくくくなんだろう、なんで図面を見た瞬間に、皆の気合いが入るのかな。

「俺の個性が崩壊でなければな」

弔まで何を言っているのかな？

「私のワープも、必要ならば使ってください」

黒霧?! え、待って、ちょっと待とうか。

「我ら艦娘も動く時だな」

エンタープライズ、落ち着こうね。

待つて待つて、俺がパニックになつて大混乱してやらかしたのは悪かつたつて謝るから、なんでそう皆して決戦のようなやる気になつていいのか教えてつていうか、止めて落ち着いて冷静になろうね！

「フツフツフツフツフ！ 乗つてきましたよ！ 皆さんのやる気があれば僕らに不可能はありません！」

「待つたエルネステイ！ おまえ何をやろうとしてるんだよ！ その凶面の重力子機関つてなんだよ!」

「もちろん動力源です！」

「材質の超合金Zつて必要か?!」

「強固なフレームこそが命ですから！」

「装甲にフェイズ・シフトつて何処を目指してんだよ！」

「外部からの衝撃が一番の敵です！」

「おまえ一次元結晶つてどっから持つてきた!？」

「そこはソープさんが！」

「がんばつて加工したよ！」

「がんばるなよ！ おまえら落ち着けよ！」

もうなんだよ、そんなもの使って何を作るつもりなんだよ、解っているのか、本当に作るものが解ってるのか疑問だよ。

計画名をよく読んでくれ、おまえらさ、そんな超技術を使って何を作るつもりなんだよ。

「では皆さん！ やりましょう！」

「オー!!」

「落ち着けておまえらああああ!!」

もう止めるしかない。全力で令呪を使って。

「い、一郎君」

「止めないでヒミコちゃん、俺は」

「そうではなくて」

あれ、ちよつと苦しそうな声してるんだけど、どうしたの。

「産気づきました」

「・・・・・・ギルううう!!!」

「ヴィマーナ!!!」

「アインズ！ 魔法だ！」

「タイム！」

「最短ルートをかつ飛ばせ！」

「無論だ名探偵よ！ 我の体のフルに使えばこの程度！ 造作もないことよ!!」

「行くぞギルガメツシユ！ 産婦人科へまっすぐだ！」

「任せろマスターよ！ 見よ、これが英雄王の妊婦輸送だああ！」

その時、俺達は気づかなかつた。

俺とギルとコナンでヒミコちゃんを送って行く中、エルだけがニッコリ笑顔でいたことに。

無事に男の子が生まれました。タケルと名付けました。ヒミコちゃんが決めていた

みたいです。

で、次は女の子だろうから、カグヤって。いや気が速くないですか、もう次の名前を決めているなんて。女の子ってどうして解るのさ。

「……………」

「完成です！」

「あ、うん」

「見てください！ 内部に動力源を持っているため停電でも問題なく動きます！ 内部のフレームは超合金Zを使用し、内部パーツはすべて魔法術式を刻んで強化と固定化をかけているので、超重力砲の直撃にも耐えます！ その上外部装甲はフェイズ・シフトを採用！ 実弾に対しての防御は完璧です」

「あ、そう」

「さらにさらに！ ソープさんの協力で画面は一次元の結晶構造体！ もうどんな攻撃も受け付けません！」

「そっかそっか、で？」

もう呆れながら俺は半眼でエルに問いかけた。

「はい！ できました！」

「解った、解ったから、これはなんだよ？」

「見て解りませんか？」

「見て解るけど、説明から理解できないんだよ。で？」

さらに強く問いかえると、エルは呆れた顔で首を振った後、当然のように告げたのでした。

「二郎さん、まったく初めてのの子供を見てパニックになったんですか？ これは『テレビ』です」

「……………解っているけど信じたくなかったんだよ！ 馬鹿野郎があ!!」

もう俺は絶対、こいつらを野放しにしないと誓ったのでした。

「すげえ綺麗だよな?!」

「ホントに綺麗に映りますね?! どこメーカーですか？」

その後、食事をしに来た爆豪君とデク君がキラキラした眼で問いかけてきたので、俺

は真つ直ぐに土下座したのでした。

「ごめん、そのことについては聞かないで」

二人はきよとんとしたまま、固まっています。

少し寂しいけれど、旅立ちつてこんな感じになるのだらう

初めてお酒を飲んだ時のことをよく覚えている。

苦くて不味くて、大人はこんなものをよく美味しいなんていえるなって、思った。二十歳になった僕、緑谷・出久がお酒を飲んだ時の感想は、そんなものだった。

最初に酒を飲んだことは、もう思い出したくねえ。

不味い、苦い、なんだありやつてのが感想だ。正直な、作っている連中の熱意は解る。

俺だって理解はしてるけどな。

あんなもん、好んで飲んでる奴らの気がしれねえ。それが俺、爆豪・勝己が酒に抱いた印象だ。

まあつまりだ、緑谷・出久と爆豪・勝己にとって、酒ってのは不味い苦い、口にしたくないってものだった。

あの時までは。

バーとは、昔は『隠れ家』だった。

重い扉の先、誰も入れないような雰囲気の中には、大人たちが思い思いに酒を飲んでいた。

昔は、そこで取り締まるべき警官と、取り締まられるギャングが一緒のテーブルで飲んでたこともあった。

扉の外のことは中に持ち込まず、扉の中のこととは外に持ち出さない。

バーつてところは、まさに隠れ家つて言葉が似合う、そんな雰囲気のある場所だったこと。

大人になったとき、最初に連れて行ってもらったバーは、そんな言葉がびったりな場所だった。

地下に降りる階段、重厚な扉、軽く押しただけじゃ開かなかった重さに、拒絶されているんじゃないかって不安になって、それでも先に立って入っていく先輩の背中を追って入って行ったら、店内は暗くて照明は控え目、人の顔が上手く見えないのに、カウンターの中に佇むバーテンダーさんの顔と、皆が飲んでるカクテルだけはよく見えた。

「二郎さん、いいんですか？」

「ええ、黒霧も俺は駄目だつて？」

「いえそんなことは」

ちよつと昔を思い出してグラスを傾けていると、目の前にいる黒幕真つ青な外見のバーテンダーが口を挟んできた。

「私は皆さんの『本当の年齢を知っています』から」

グラスを磨く黒霧の目線は、俺の後ろのテーブル席に向けられていた。

入口からもつとも奥に、今は他の席から見えないようにされた場所で、ちよつと秘密の飲み会が開催中。

「バー口、たまには飲みたいんだよ、悪いかよ」

「そうですよ」

テーブル席からした、よく聞いたことある声に、俺は笑ってしまふ。

そりゃ、他で飲んだら怒られるじゃ済まないよな。あいつら、二十年以上も生きているのに、外見が変わらないんだもんなあ。

「……犯罪臭がするなあ」

「てめえ、マスター」

「一郎さん、僕らの楽しい時間を邪魔するんですか?」

「悔しかったら、成長してみろよ」

途端に背後からの声がやんで、何やら呪文のような声がしてきた。

「嫌われろ離婚しちまえ」

「ヒミコさんに愛想尽かされて、追い出されればいいんだ」

「あいつ、なんで飲んでんだよ。奥さんと子供を放っておいて」

「まったく夫の風上にもおけない馬鹿ですね。子供が夜泣きしたら、奥さんが大変なんだから帰れ」

へっへっへ、負け犬の遠吠えが聞こえるなあ。

大丈夫、今日はヒミコちゃんの許可ももらったから、本当に大丈夫。それに今はエンタープライズと電がお泊りだから、カグヤが夜泣きしても大丈夫。

「・・・なんでヒミコちゃんの宣言通り、女の子が生まれたんだろう?」

「ええ、本当に」

「未来予知だろ、あんなん」

「本当にどうやったんでしょね?」

俺の言葉に、三人からため息が出てきた。

マジで当てるなんて、うちの奥さんは何者なんだろう。

次も女の子ですって、笑顔で宣言されたんだけど、三人目も産むつもりなのね。あれ、今日は飲んできていいって、『そういうこと』をするから自由にしているよってこと。

「フ、黒霧よ。我にお代りを頼む」

「はい、ギル。今日は随分と甘いカクテルばかりですね」

「砂糖が多い日なのでな」

あれ、いたのギル？　なんで普段は豪華とかゴージャスって感じなのに、バーではひっそりと飲んでいるんだろ、こいつ。

「マスターよ、バーではひそやかに楽しむのが礼儀というもの。絢爛豪華な酒が飲みた
いなら、オーセンティック・バーではなく、フレア・バーにでも行くがいい」

「ああ、酒びんとかシェイカーとかが踊る。俺はちよつと苦手なんだよ」

「ならばのんびりと楽しむがいい。今日は」

ギルが手元の皿に目を落とした。

「弔のつまみもあるのでな」

「へえ、作って行ったんだ」

「はい、今日は奥様とデートだとか」

キュツと黒霧が磨くグラスが鳴った気がした。

「あいつが結婚するなんて、俺は想像できなかったよ」

「あ奴も大人になった、ということだろう。マスターよ、祝ってやるがいい」

「いや祝ったけど、祝ったんだけど」

ちよつと怖いくらい、思い出したくない。

「あれは決戦だったな」

「久しぶりに弔さんが怖く見えました」

コナンとエルも、そう思うか。そうだよな。

『いいから、百をよこせ、あいつは俺の嫁だ』なんて弔が言うんだから、よつぽどのことがあつたんだらうな。

「あの子さ、『まさに計画通りですわ!』とか言っていたけど」

ソープ、おまえそれ何処で聞いた。

「え? 弔と婚姻届を出しに行つた後、店で言っていたよ。顔が真っ赤で弔が呆れた顔していたから、口から出まかせかな?」

「だろうなあ。あの百ちゃんが、そんな計画を建てられるわけないって」

家に呼び戻されたとき、ガチ泣きだったからな。

「フ、女の涙は我が『エア』に勝るな」

「計算通りじゃなく、『必死な願い』はあつたけどな」

ギルとコナンは、お見通しだったわけね。

「はあ。黒霧、何かない?」

「では、『ブラッディ・マリー』はいかがですか?」

「.....あ、はい」

え、それって血関連の個性を持った奥さんがいる、俺に対しての厭味が当てつけです

か？

カランとグラスの中で氷が音を立てた気がした。実際はそう思えるだけで氷の音は響いてこない。

ただ、その音を聞き逃さない職業の人はいるらしい。

「お次は何を？」

「ウイスキーをロックで」

「はい」

短く答える男は、手元をつまみの一つ、生チョコを手に取り口に入れる。

「自家製か。死柄木少年も随分と手広くやるようになったな」

「それは、奥様の方ですね」

意外な製作者に、彼は驚いた顔を黒霧に向ける。

「なるほど、八百万少女も……と、しまったな。私は何時までもあの二人が子どものつもりらしい」

小さな謝罪を口にしたオールマイトに、黒霧はお代りを出しながら告げた。

「先達にとつて、後輩や教え子は何時まででも子供です。自分が限界を超えて年をとつたと思わない限りはね」

「なるほど、では私もまだまだ現役ということか」

「ええ、オールマイト。貴方はまだまだナンバーワンの風格を持っていますよ」
「煽ててくれる。しかし、悪い気はしないな」

出されたウイスキーを喉へ流し、再び生チヨコに手を伸ばし、口へと運ぶ。

「美味い味わいだ。死柄木夫人も料理が上手くなったようだ」

「夫に負けたくないそうですから」

「なるほど」

変われば変わるものだ、とオールマイトが昔の教え子の成長を感じていると、扉につけられた鈴が来客を知らせた。

「すまない、遅くなった」

「いや、いいんだ」

男はゆっくりとした動きでオールマイトの隣に座り、黒霧に注文を伝える。

「同じものを」

「はい、では同じウイスキーをロックでおだししますね」

彼が準備のために背を向けると、入ってきた男は小さく謝罪した。

「すまない、オールマイト。今日は焦凍の奴が、『どうしてもできない』と言ってきてな」
「いいことじゃないか。彼もヒーローとして第一線で活躍中だ。君も鼻が高いんじゃないか、エンデヴァー。いやエン」

「まだまだあいつは炎の扱いがなっていない。氷だけでヒーローやっているようなものだ、トシ」

お互いに相手の名前を呼んでいると、黒霧がグラスを差し出してきた。

「さて、まずは一杯目といこう、乾杯でもするかい？」

「そうだな。では、『かつて、平穩を支えたヒーロー』に」

エンがグラスを差し出すと、トシはちよつと驚いた顔をした後、別の言葉を口にした。

「『今も人々の自由を護るヒーロー達』に」

乾杯、とグラス同士が合わさり、ガラスの小さな音が零れた。

「最近はどうだい？ 皆は頑張っているかな？」

「おまえの教え子は、誰もがタフで粘り強い。イレイザーヘッドの教えも、おまえの教えも、全部を持つているからな。どんな絶望的状况でも絶対に退かない」

「それはそうだろう。誰もが緑谷少年や爆豪少年の背中を追い掛けて、二人を追い越そうと頑張っていたからね」

「さすが、雄英の黄金世代だな」

懐かしそうに遠い眼をするトシの横顔を見つめたエンは、世間で言われている言葉を口にしました。

絶対に折れない、絶対に退かない、不屈の黄金世代。

あの時、オール・フォー・ワンとの決戦を見ていた彼ら・彼女らは、誰もがどんな状況でも絶対に折れず逃げない、そんな強靱な精神を持つようになった。

「あの時、私が引退したことに、誰もが『いやだ』とは言わなかった。その代り、『絶対に追い抜く』と宣言されたものさ」

「おまえの背中は、人を魅了する。誰もがお前の背中を見て振るい立って追いかけたのだろう」

「君の背中もそうじゃないか。エンデヴァーの燃えるような背中に、誰もが魂を燃やして奮い立ったものだ」

「俺は、そんなに大層なものじゃない。ただ、あいつらの前に立つ以上は、情けない姿を見せられない、そう思っただけだ」

グラスを傾け、あの時の気持ちを思い出すエン。

後のことなど考えなかった。ただ前に進むもうと思っていた。以前に英雄王から言われたことを胸に刻み、息子が見ている前で以前のような嫉妬だけの自分ではなく、護るべきものを護れるヒーローの背中を、父として揺るぎない信念を見せたかっただけだ。

「子供にいいカッコしたい、そういう男でしかない」

「いいじゃないか、いい父親とはそういうものだろう?」

慰めるように肩を叩くトシに、エンはフツと笑った。

「子供のいないお前に言われたくないな」

「シット! それを持ち出すのは反則じゃないか?」

「言われたくなければおまえも結婚すればいい」

ニヤリと笑うエンに釣られるように、トシも笑顔を浮かべて酒を煽った。

二十歳を超えたから、ヒーロー活動も順調なようだから。

そんな理由で呼び出されたデクと爆豪は、食事会のつもりでいた。呼び出した相手、オールマイトには『酒がまずい』と言つてあるから、お酒が出ないだろうと思つていたのに。

最初の待ち合わせは弔の店。彼が振るう料理に二人は、久し振りに美味しい食事だと喜んでいた。

考えてみれば、最近はヒーロー活動ばかりで碌に食事していなかったな、と。一郎からも『休みは必要』と言われても、助けての声が聞こえれば動かないわけにいかないから。

美味しい食事が終わり、解散か考えていた二人に、オールマイトは笑顔で指をさした。

「では次に行こう」

指をさした場所は、黒霧の店。

場所を聞いた二人は思わず顔をしかめて、断ろうかと考えていたのだが、せつかくの

オールマイトのお誘いだからと来ることにした。

「さあ、二人とも座った座った」

勝手知ったるなんとやら。重い扉や雰囲気などものともせずに入ったオールマイトは、当然のようにカウンター席に座った。

彼の左右にデクと爆豪が座ると、黒霧は注文も聞かずにカクテルを差し出した。

「では最初はこれをどうぞ」

グラスに入ったお酒は赤、添えられているのは輪切りにしたレモンだろうか。

「ありがてえんだけどさ。俺らはちよつと」

「すみません、お酒は苦手で」

出されたものにつけないのは礼儀に反するけど、お酒はどうしても最初に飲んだ『苦いまずい』のイメージがあるから飲みづらい。

「そうだったのか？ ビールが最初かな？」

オールマイトは気づいていながらも、大げさに知らない風に話を振る。

「ビールだな」

「二十歳になって成人式も終わったから、飲んでみようかなって。かつちゃんと一緒にね」

「ああ、ありや不味いもんだった」

味を思い出したのか、二人の顔色が少し悪くなる。

「そうですか。それはそれは」

「なるほど、ビールか。田中青年の言葉を借りるなら、『ビールは魂を持ち上げる』だったかな?」

「ええ、その通りです」

オールマイトの言葉に、黒霧は頷いてデクと爆豪へと交互に視線を向けた。

「日本酒は魂を燃やす、ワインは魂を潤す、焼酎は魂を活気立たせる、ウイスキーは魂を満たす、そう一郎さんは言っていましたね」

「一郎さん、そんなこと言ってるのか」

「そうなんですか」

あの人がそんな洒落たことを言うなんて、よっぽどの酒好きなのかと二人が考えていると、黒霧は小さく首を振った。

「下戸ですが」

「下戸かよ?!」

「え、飲めないんですか?!」

「いいえ、飲めるのですが、あまり強くありません」

ビール一杯で酔っ払います。立てないくらいにと黒霧が言うと、二人は呆れた顔をし

て固まってしまおう。

「ウイスキーはザルだったような」

「日本酒とウイスキーはザルですね」

「あの人はどっか普通と違うところばっかりだな」

「一郎さんらしいですね」

オールマイトの呆れと、黒霧の嘆息に、デクと爆豪は笑ってしまった。

本当に見ていて飽きないというか、予想外なこととしてくれるというべきか。

「どうぞ、その一郎さんでも飲めるものです」

ならばと二人は手を伸ばし、ゆっくりと口に運んだ。

本当だ、飲める。美味しいと笑顔を浮かべる二人に、黒霧は微笑みながら『その意味』を伝えた。

「花に花言葉があるように、カクテルにも秘めた言葉があります。そのカクテル、『カリフォルニア・レモネード』に込められた意味は、『永遠の感謝』」

飲んでいた二人が、ハツとしてグラスを置いた。

「ありがとう、助かったよ、とても嬉しい、答えてくれて感謝する。これは今まで多くの人を救ってきたヒーローへの、感謝の気持ちのカクテルです」

語り終えた黒霧は、小さく頭を下げた。

今まで多くの人を助けてきたヒーローの方々、今宵ばかりは助ける立場ではなく助けられる立場、感謝を受け取るところにいてお楽しみください。

多くを語らず、黒霧は無言でそう伝え、にっこりとほほ笑んだ。

「ありがとう、そうさせてもらおう」

「楽しませてもらうぜ、黒霧さん」

「ありがとうございます」

三人が笑顔を浮かべて答えるのを見て、黒霧はどうぞごゆつくりと伝えるのでした。

夜も更けた深夜過ぎ。

デクと爆豪はカクテルの楽しさに触れて、気持ちいい笑顔で店を後にした。

オールマイトは、まだ少し飲みたいと店に残り、一人カクテルを煽る。

「隣、よろしいかな？」

「・・・好きにしたらどうだ、オール・フォー・ワン」

「つれないねえ、オールマイト。それに今の私はフィクサーさ」

声をかけた相手は見なくてもオールマイトには解った。纏う雰囲気と声を、忘れたことなど一度もない。

「おまえが『外へ出てくる』など、珍しいこともあるものだ。明日は世界の終わりか？」
「フフフ、柄にもないことをいうものではないよ。君がいる限り、そんなことは起きない、そうじゃないかね？」

ゆっくりとオールマイトの隣のイスに座ったフィクサーは、棚を見回した後小さく注文を口にした。

黒霧はそれに頷き、カクテルを作り始める。

「二人を見たよ。もう立派なヒーローの顔をしていた」

「当たり前だ。あの時とはまったく違う、あの時おまえを倒した時よりも成長している」
「そのようだね。背丈も歩く姿も、その瞳の意味も、僕を倒した時よりもとても強くなっていた」

注文したカクテルが届き、フィクサーは口へと運ぶ。

実においしい、これだけで黒霧のバーテンダーとしての腕前がよく解る。

「貴様は何をしに来た？」

「君と酒が飲みたくなつた。それでは駄目かな？」

「ふざけるなよ。おまえは」

オールマイトが鋭く視線を向けたが、すぐに顔を正面に戻した。

「ここはバーだ。ケンカをするところではないから。」

「おまえがしたことは消えない」

「当然だ、私がしたことを消させはしない。永遠に私が背負っていくものだ。誰でもない、私が私の意思でしたことを、誰かに否定させるつもりはない」

「ならば解っているだろう、貴様を恨んでいる人は世間に五万といる」

「解っているさ」

「ならば」

オールマイトの手に力がこもる。こいつがやってきたことは許せない、倒されたとしても、個性を失つたとしても、罪を償ったわけではないのだから。

「私を刑務所に入れたい、そう思っているなら私は捕まらないよ」

「貴様、何が望みだ？」

「そうだね。次の世代のヒーローの背中、と言っておこう」

「馬鹿にしているのか？」

憤怒が込められたオールマイトの声に、フィクサーは答えずにカクテルを飲み干した。

「馬鹿にはしていない。私は負けた、敗者には語る権利はない。しかし、勝者を称え、その道筋を見守ることはできる」

「彼らをどうするつもりだ？」

「その背を見守るさ。私はもう表に立つことはない、だからこそ『フィクサー』と名乗っているのさ、オールマイト」

御代わりと頼む彼は、注文を聞き返した黒霧にこう答えた。

『XYZ』と。

これで終わり、また明日は頑張ろう、そういう意味のカクテルを。

「恨み続けることだ、オールマイト。私を忘れず、私がしたことを決して許すな」

「何を当然のことを」

鋭く睨むオールマイトの視界に、グラスを掲げたフィクサーが映った。

「私がした大罪を忘れるなよ、オールマイト。これが悪だ、これがラスボスだ。そして、これを知っているなら、人は誰もが忘れずに進める」

オールマイトはその言葉で気づいた。

彼は、悪の指標をやろうとしているのか、と。誰もがそうならないように、誰もが他

者を虐げないように。

負けた後でも、『こうなるな』と示すために。

「オールマイト、これからも頼むよ」

「貴様に言われるまでもない」

差し出されたグラスに、もう一つのグラスが当てられた。

バーは隠れ家、その中でのことは外に持ち出さない。

「それにしても」

誰もいなくなつた店内を掃除していた黒霧は、ポツリと呟いた。

「私の店も、随分と賑やかになつたといいますが、楽しくなりましたね」

すべてを掃除し終えた彼は、カウンターの奥にあるガラスでできたグラスに向き合
う。

「今日も、私のカクテルは誰かの魂を癒せたでしょうか？」

かつてバーテンダーの修行をした師匠が、店を出したいといった時にくれたグラス。

イーデンホールの幸運が宿ったグラスに、黒霧は語りかける。今日も自分は師匠が教
えてくれたように、傷ついた魂を癒せるカクテルを出せただろうか。

グラスは答えず、僅かな光を反射するのみ。

黒霧は最後に一礼して、扉のプレートを反転させた。

日常的でありふれている会話なのだけれど、している人たちがこの人たちだと周りから見たらどう見えるか理解していますか？

ある日、俺こと田中・一郎は考えた。

可愛い奥さんもできた、可愛い長男のタケルも生まれた。ちよつと奥さんの宣言通りで怖いけど。

長女のカグヤも生まれた。ちよつと奥さんの宣言通りで、めちやくちや怖いけど。

次女のイヨも生まれた。なんで宣言通り三連発って奇跡が起きたのか、それとも奥さんの個性が『未来予知』なのかと疑ったりもしたけれど、可愛い子供が三人もいて、毎日が充実している。

「代表、書類を」

うんうん、充実しているよ。

「私がやっておこう」

「助かります、廻さん。代表どうしたんですか？」

「フ、我が師は今、未来を見据えている。邪魔するな」

「解りました」

後ろの方で、なんだかすごい尊敬の目線を感じるけど、気にしたら負けだ。気にしたら駄目だって俺の第六感が叫んでいる。

とにかくだ、俺は家族に恵まれた。だからこそ、考えるべきことがあるんじゃないかって思うわけだ。

「予算案はこれでいいのか？」

「すまない、弔、料理部門は少し削ることになる」

「前回は貰い過ぎだったからな。建設部門が今回は大忙しじゃないか？」

「ああ、テーマパークの建設許可が下りたからな」

「そうか、ついに」

弔がなんだか嬉しそうだし、廻も微笑んでいるけど、俺には関係ない話だろう。きつとそうだ。

「鎮守府遊園地か」

なんつて言った廻？

「一郎キングダムが却下されたからな」

おい、弔、あれはおまえか？

「仕方ない。一般人にも馴染み深い名前でない和不味い、とのことだから。今回は我が師の名は控えよう」

「ああ、それで次のテーマパークは？」

「無論」

廻、なんでおまえはそこで『キラリ』なんて瞳が輝くんだよ、あれかどつかで別の誰かが個性で光らせてるのか。

「我が師の威光を次こそ示すため、最強田中王国とする」

「流石だ」

「ちよつと待てこら！ お前ら何を画策している!? そもそも俺達がなんでテーマパークを造ることになってだよ!」

突つ込むしかなかつた！ もう見て見ぬふりなんて無理だったから！

「何を言ってるんだ、一郎？」

「我が師よ、どうなさいました？」

「なんで二人して疑問を向けてくるんですかね?! 俺がおかしいの? 俺が間違っているの!」

「そうだ、今や俺達『鎮守府連合』は、小さいものはG細胞から、大きいものはコロナーまで。そういうった企業じゃないか」

「え? え、待つて。小さいものは何からだつて?」

「我が師よ、最近はご多忙でお疲れだったのでしょう。ここは、治崎・廻にお任せを」

「いや、任せていたら何が怖いような」

「まだ私は我が師の信頼を勝ち得ていないとは。十年、貴方に仕えていたつもりでいましたが」

「え、待つて、十年つてどっから出てきたの? え、そんなに」

「おまえは急ぎ過ぎるからだ、廻。俺を見習え。一郎のことから、一挙手一投足、すべて把握している」

「いやそれはそれで怖いから」

「さすが、死柄木・弔。我が師の最愛の息子だ」

「よせ、照れるじゃないか」

「息子にした覚えはないんだけど」

ダメだ、この二人の前だと会話が、会話が変な方向へ行ってしまう。それでいて業務

に関して、完璧だから。

いや甲はこつちが副業で、コックが本業みたいになっているから、書類つてやってな
いような。

「……おい、マスター」

俺は見ない。見てはいけない。あつちで、死にそうな顔をしているコナンとか。

「……」

無言で書類を進めているギルとか。天下無敵の傲慢不遜、慢心王があんな真面目な顔
で書類しているって、誰かに言ったら信じてくれるかな。

「ところで、一郎、何を考えていたんだ？」

「そうです、我が師よ」

なんでいきなり話を振ってくるかな。まあ、いいやいい機会だし俺が考えていたこと
を実行しよう。

「いや俺も家族が増えたからさ」

「はい」

廻、なんで立ち上がって通信端末を持ったの？

「だからさ」

「なんだ？」

甲、どうしておまえまで立ち上がるのさ。

「二人とも、何かするつもりじゃないから」

「何処かヘカチコミかと」

「襲撃じゃないのか？」

「お前らの中で俺がどういう存在か、良く解ったよ」

最近はずかしくしているだろうが。というより、俺から襲撃かけたことなんてないのに、どうしてこいつらは。

ク、後でしつかりと教育しておかないと。

「俺はな、家族が増えて家族と出かけることもあるからさ」

「確かにそうですね」

「家族サービスは重要だ」

うわあ、甲がそんなことを言うなんて、おまえも立派になったな。

百ちゃん、君は甲を立派に教育してくれているんだね、俺は君にとっても感謝しているよ。

できればもつと一般常識を教えてと言いたいけど。

「だからな、俺は免許を取ろうと思って。車の運転とかさ」

瞬間、室内の空気が凍りついたのを俺は感じた。

え、あれ、俺って何か不味いこと、言ったかな？

普通のことだよな、単純に車を運転して家族と旅行とかお出かけしたいから、免許が欲しいって言っただけなのに。

「二郎」

「なんだよ、弔。なんでそんな地の底から出たような声してんだよ？」

「おまえ正気か？」

なんでそこで正気かどうか疑われるかな。え、あれ、俺って運動音痴じゃないよな。

「マスター」

「ギル？」

「……貴様、私の運転が信用できないというのか?!」

「はい?」

待つて待つて、どうしてそういうことになるのさ。俺はただ、運転免許証が欲しいって。

「鎮守府連合が出来てから、いやその前より貴様を運んだのは我だぞ!」

「ちょギル! 首は止めて!」

「それをなんだ?! 貴様は運転免許が欲しいだど?! 私の運転技術を疑うなどと、貴様はそれでも英雄王のマスターか?!」

「苦しいから!」

「ええい! 貴様がそこまで我を信用しないというならば!」

あれ、ギル、なんだよ、その小箱。え、待つて、なんで小箱の中に赤いボタンがあるのかな。

「貴様に改めて教えてやろう、英雄王のドライビング・テクニックを!!」

「……はい?」

あれえ〜ギルがボタンを押したら、壁が開いて金色のワゴン車が出てきたんだけど。

あれ、ここって鎮守府連合の執務室だよな? なんで隣がガレージ?

ビルなんて嫌って地上に広がるオフィスを作ったけど、ガレージが隣にあるなんて俺は知らないんだけど。

「これこそが！」

「僕らが頑張った結果！」

「出たなこの変態鬼畜機械コンビ！」

凄いい事なポーズだよ、エルとソープ。本当に決めっ決めだけど、そのノリの良さが凄いいんだけど。

「まず動力炉は縮退炉を搭載しました!!」

「最初から突っ込みどころが満載なんですけど!!」

「駆動系はマグネット・コーティング済み！ 亜光速にも対応可能だよ！」

「おまえらは飛ばし過ぎだろ?！」

「さらにフレームは超合金Zにて構築！」

「内部装甲はフェイズ・シフトを採用！」

「ライトはアインズ協力の圧縮レーザー使用！」

「十秒の照射でガンダリウムを溶かすからね！」

「ウインカーは小型ミサイル搭載！」

「左右から迫られても一撃で撃破可能さ！」

「続いて外装は純金を使用！」

「百年経つても輝きを放つことは保障するよ！」

「内部にはAIを組み込んだゲーム機を各種搭載！」

「一日、乗っけていても飽きないね！」

「エアコンは魔法にて制御！ さらに空間事独立させてみました！」

「外部の温度変化はもちろん、核の直撃にもビクともしない！」

「そしてハンドルを握るのは！」

「もちろんこの人!!」

「フ、天下無敵の運転王！ ライダーとしても一流であることを証明してみせよう！」

「この我、ギルガメッシュがな!!」

「まさに死角なしです！」

「誰が来ても大丈夫さ！」

「フハハハハ!! だというのに、貴様は何が不満だマスターよ!!」

「そうだ！ 何が不満なんですか、一郎さん！」

「答えてもらおうか、一郎！」

腕を組んで自信満々に言うこいつらに、俺は深くため息をついた後、真顔で言っちゃった。

「色」

「……………」

「はい、撤収しましょう。これは後で治します」

「そつかそつか、色かあ。色ねえ、色……いいじゃない」

ギル、固まったなあ。

エルはこう言うとき、妙に冷静なんだよな。

スープ、なんでおまえは黄金を否定すると、そうやった卑屈に笑うんだよ。

「何処の世界に金色なんて」

「ええい!! ならばこの我が財を見よ!」

「いやギル、なんでおまえは飛行系宝具を出しているのさ? そうじゃなくてな。俺が

自分で運転したいんだよ」

家族を乗せた車の運転って、父親の役目だろ。

あれ、待った、なんでそこで皆がまた固まるんだよ。

あれえく〜。

後に、治崎・廻はこの時のことを回想して私的な日記に残した。

「まさに最終戦争だった、と」

室内の空気が固まった後、解散としたのは死柄木・弔の英断だった。

とにかくだ。一郎を追いだした後、弔は自分のイスに座って深くため息をついた。

「恐れていた事態だ」

「ああ、まったくあのマスターは」

コナンは悪態をついて一郎が出て行ったドアを睨んだ。

まったく理解していないとは、自分のマスターながら恐れ入る。あれで三回は世界を救っているのだから、人の能力は見た目に左右されなければいい。

「二郎が自分で車の運転して、家族で出かける？ 冗談じゃない」

弔は吐き捨てるように言った。彼は理解していないのか、それとも理解しようとしな
いのか。

危機感がないと昔から思っていたが、まさかここまでとは。

「世界は今、三極構造です。ヒーローとヴィラン。今まで二極化だった世界に、僕たち鎮守府連合が割り込みました」

エルは静かに思い出すように語る。

あの日、オール・フォー・ワンを倒した時から、徐々に勢力を広げてきた鎮守府連合の構成員は、今や世界中に広がっている。

正義ではなく、欲望ではなく、人々の自由のために。

理不尽に泣くことなく、未来に絶望することなく、人が人であるように生きられるために。

そんな壮大なことを考えていないが、鎮守府連合がやっていることは、世間からはそう見えていた。

無個性に光を、個性がなくても笑っていられるように。その一環で始めたアインズやエルによる魔法講座により、魔導師と呼ばれる人工が少しずつ世界に増えてきている。

「だからこそ、気に入らない人達が多い。だって言うのにさ」

ソープは深くため息をついて、最近の報告書を持ち上げた。

鎮守府連合所属のビル等にヴィランが襲撃した事件が、このところ増加してきている。

今までヴィラン達は無差別に選んで襲撃などをしていたのに、ここ最近は何目的を絞ったように鎮守府連合に襲いかかっていた。

ヒーロー側もそれを知って防衛しているけれど。

「正直に言つて、ヒーローも一枚岩じゃないからな」

コナンの言葉に誰ともなく頷いた。

ヴィランを妨害し逮捕するのはヒーローの役目。だが、目的が鎮守府連合ならば『見落としてもいい』のでは、なんて考えるヒーローもいる。

表に出してはいないが、内心でそう思っているヒーローもいるだろう。

「だというのに、我が師は」

廻は変わらない一郎に、少しだけ笑ってしまう。

彼は何処までも彼であつて、他の何かになるようなことはない。その気になれば世界さえ支配できる力を持っていても、彼はそれを使って世界を支配するなんて考えていない。

「とにかくだ。マスターが運転免許を得るなど、必要ないと教えよ。我がいるのだからな」

くだらんと最後にギルが告げた一言に、室内の空気が微妙に硬くなった。

「俺も持っている」

弔が懐から出した免許に、ギルが少しだけ眼を細めた。

「ほう、貴様が我よりも腕がいいと。そう語るつもりか、弔？」

「同じ奴が運転する車に乗るのが、嫌になつたんじゃないか？」

「貴様」

バチリと二人の目線が火花を散らした。

「ということ、僕でもいいんじゃないかな？」

「ここでソープ参戦。免許証を持ち上げて、二人に笑いかける。目が笑っていないが。

「僕だつてできますけど」

「俺も新一モードならな」

エル、コナン強襲。室内に火花が散った。

「よかろう、誰がマスターの車のハンドルを握るにふさわしいか」

ギルガメツシュ、立ち上がり『エア』を抜いた。それに反応して全員がそれぞれの手に武器を取り出す。

「我の前で証明して見せるがいい!!」

その日、鎮守府連合執務室が吹き飛んだ、らしい。

「免許が欲しいんだけどさ」

「そうなんですか？」

「一郎さんが運転つて危なくないか？」

「え、爆豪君、俺つてそんなに危険人物？ あれ、ひよつとしてヴィランとヒーローから

狙われているとか？」

「確かに鎮守府連合をよく思わないヒーローもヴィランもいますけど、襲撃つてないと

思いますよ？」

「デクの言うとおりだ、一郎さん。ヴィランの襲撃傾向は『お金ありそう』だからな。鎮

守府連合が襲われたのは、一年も前の話になるな」

「え、そうなの、じゃあのデータって何処からだろう？」

「鎮守府連合を襲った後、ヴィラン相手に吹雪さん達が突撃していったから、もうないで

すよ」

「ありや俺達でも『逃げ出した』からな。なんで吹雪さん、レベルアップしてんだよ」

「かつちゃん、思い出させないでよ。なんで吹雪さんってあんなに」
「艦娘ってあんなにレベルが上がるんだな」

ガクガクと震えるハンドルを握る爆豪と、その横で通信端末を操作しているデク。

丁度、帰ろうと思ったら二人に会った一郎は、そのまま同行することにしたのだった。

「ああ、あの時の。あれが通常だよ」

「……え？」

デク、思いっきり振り返る。

「ウソだろ」

爆豪、ハンドルを握り締めて呻いた。

「まあ、いろいろとあったからね。ところで俺が免許を持つて話名だけど」

「止めてください、一郎さん、死人が出ます」

「やめといた方がいいぜ」

デクと爆豪に即答され、一郎はなんでと疑問を浮かべたのでした。

「あなたの車を運転するって、ちよつとした憧れになっているからな」

ハンドルを握る爆豪は少し嬉しそうで。

「だから、誰もが狙ってるんですよ」

デク、ちよつとだけ隣を睨んでいたりして。

「ええ、何で？」

「さあなんでだろうな？」

「どうしてでしょうね？」

二人は答えず、楽しそうに笑っていた。

田中・一郎は知らない。彼の車を運転したら、願いが叶うなんて都市伝説になるとか、なっていないとかって話を。

そして彼は運転免許を得るために教習所に通うことを奥さんに話したら。

「ダメです、一郎君はちよつと運動が苦手なところがあるので、ダメです」

「解ったよ、ヒミコちゃん」

奥さんの一言で止めることにしたのでした。

芸能人に会いたいか、会えるといいな、隣にいるよって状況です

現実には小説より奇なり、なんて昔の人は言ったらしい。

「爆豪、CDを出さないかって話が来ているんだが」

「あ?」

寝耳に水か、あるいは馬鹿げた話か。ともかく、爆豪・勝己のところになんか話があったのは、あの大決戦が終わってから一か月後のことだった。

不動のナンバーワンが引退。個性を失ってヒーロー活動を休止し、その代わりに燃えるような男、現在一押しのお熱血ヒーローとか言われ始めたエンデヴァーがナンバーワンになってから、そんな時間が流れた頃だった。

「相澤先生、病院に行くか?」

素で敬語とか使わずに聞いてくる爆豪に、相澤は首を振ってため息をついた。

「俺は正気だ」

「……精神系の個性か？ ち、デクの奴が今日はいないのが悔やまれるぜ、あいつなら精神系の個性に対してのカウンターがかけられるつてのによ。『ちよつとデート』とかふざけやがって。吹雪さんとデートなんて、デートか、デートなあ。なあ、先生、殺し合いを最近はずてっていうのか？」

「知るか」

「違うか。どちらにしろ、先生にかけられた個性を解くには俺の爆破しかない。宝具は、使ったら相澤先生を消し飛ばしちゃう。クツツがあ、脳細胞の中をミクロン単位での爆破なんて、もつと設備が整ってねえと無理だ。こんなことなら、アインズさんに『脳細胞内のウイルスを遠隔爆破だ』って訓練の時に、もつとしつかりやつときゃよかったぜ。こんなことに使うなんて考えてなかった、どちらにしてもやるしかねえ、というわけで先生！」

「待て爆豪！ いいから落ち着け！ 俺は個性で洗脳されているわけじゃない！」

「個性で洗脳されてないならなんだ?! この学校にも洗脳系の個性持ちはいるだろうが。いや待った、あいつを呼んでくれば、相殺できないか。やってみる価値はある。先生、そこで待っててくれ」

「俺は正気だ。『シンガー・ボマー』の歌をCDにしたいって話なんだよ」
怒りに震えそうなのをギリギリに抑えた相澤は、何とか言葉を絞り出した。こいつが
普段、自分をどう見ているか、後でしっかりと問い詰めるつもりでいるが、今は表に出
すことはない。

後日、補習だ、とか思っていることも含めて。

「俺の歌を、CDにしてどうすんだよ？ あれか、魔除けか？」

心の底から解つてない顔をする生徒に、確かにと相澤は頷いてしまう。

この歌が聞こえたら、『シンガー・ボマー』がここにいる、誰も近寄るな、ヴィランは
特に近づいたら爆破だ、宇宙の彼方まで吹っ飛ばしてやる、なんて言葉が流れてきても
おかしくないだろう。

疲れているのか、と相澤は自分が思いついてしまった、妙な考えを振り払うように口
を開いた。

「何処かの音楽会社が聞いて、是非って話だ。今までは『シンガー・ボマー』が捕まらな
かったから、話を持って行けなかつたらしいがな」

正体不明のヒーロー。ヒーロー委員会でも捕まえられない謎の存在相手に、CD出し
ませんかなんて言えないか。

爆豪は相澤の説明に納得したように頷いて。

「いや無理だろ」

当然のように断った。

「いい話じゃないか」

「いい話だろうが、何だろうが、俺の歌じゃまだ駄目だ。ロックが足りねえ、まだまだアインズさんの足元にも及ばないのに、俺がCDなんて出せるかよ」

爆豪は頑なに拒否を重ねた。

彼自身、歌に自信がないわけではないが、目指すべき場所に到達していない以上は、それを売りにすることはしたくない。

もつと先、自分のロックの魂を教えてくださいましたあの人に、まだまだ追いついていないのだから。

「アインズさんか、そういえば、俺はあの人の歌を聞いたことないな」

ポツリと呟いた相澤に、爆豪の目が怪しく光った。

「そりゃ人生最大の損だぜ先生！ あの人の歌を聞いたことがないなんてな！」

「あ、ああ」

普段よりも熱く、普段より激情のように詰め寄る爆豪に、相澤は引いてしまう。そんな先生を逃がさないために、爆豪は相手の襟首を掴みかかり。

「あんなに魂を震わせる音は他にねえんだ！ 聞いていたら自然と体が踊りだす！ 理

屈なんてどうでもいい！ ロックなんだよ！

「お、おい！」

「心が震える！ 魂が燃える！ 一度でも聞けばわかるんだよ先生!!」

「だから!!」

「いいから聞いてみるよ！」

「爆豪少年！」

オールマイトの呼びかけに、爆豪はなんだと横を向いた。

「話の内容は解った、解ったんだが、その」

「あ？ なんだよ、オールマイト」

「話の内容を聞いてないと、君が相澤君を締め上げているように見える」

「.....」

云われて爆豪は自分の両手を見た。襟首を掴んでいる、確かにこれは不味い。さらに掴んだ両手そのまま、相澤に押し掛かっている。

自分の姿を客観的にみた爆豪は、その両手を離して真顔になって。

「すみませんでした」

反射的に土下座したのでした。

そんな一悶着が朝からあつた日の夕方。

「デク、生きているか？」

「かつちゃん、僕は生きているかな？」

「ああ、おまえはまだ生きてるぜ」

「そっかそうなんだ。うん………かつちゃああん!!!」

「デクううう!!」

「僕はやったよ！ やり遂げたよ！ 『艤装の扱いが甘い、再訓練』って笑顔でナイフを持つているフル装備の吹雪さん相手に！」

「ああ！ あああ!!」

「立ち向かつて防いで！ 逃げださなかつたよ!!」

「すげえぜデク！ おまえはやっぱりすげえ奴だよ！」

「かつちやあぁん!!」

「デクうう!!」

なんて叫びながら抱き合う男二人。最近になって噂のヒーローだったことが発覚したクラスメートの奇行に、周りは温かい目を向けるのでした。

「うう、ところでかつちゃん、相澤先生に呼び出されたって聞いたけど？」

無理やりに忘れるために話題を変えるデクに対して、爆豪は盛大に不機嫌な顔を向けた。

「俺の歌をCDにしてえんだとよ。笑えるだろ？」

「え？ あ、そっか。まだアインズさんも出してないからね」

「笑えるぜ」

吐き捨てるように告げる爆豪に、対してデクは大きく頷いた。

爆豪の師匠であるアインズさえCDを出してないのに、その弟子が先に出すなんて。技量で並んでいたり、超えていたりしたなら解るが、未だに辿り着けてない自分が出すなんて、馬鹿馬鹿しいと思っっているのだろう。

「え、爆豪！ CD出すの?!」

思わず聞いてしまった彼女が、普段とはまったく違う様子で話しかけてきた。

「出すかよ。俺はそんなに歌が上手いわけじゃねえ」

「いやだつて今」

耳郎が手で何かを示そうとしているが、爆豪はそれを読み取らず。

「俺はまだまだなんだよ。そんな半端な奴がCD出すとか、全世界のアーティストに失礼だろうが」

羨ましいとか出したらいいじゃんとか、耳郎が思っていることを爆豪は察していたが、すべて無視して一蹴した。

「いいじゃんか、爆豪、出してみろつて。『シンガー・ボマー』の歌なら、俺は欲しいけどな」

上鳴が話に乗ってきて大きく頷いていた。

「アホか。あんなのは『俺が来た』って掛け声と変わらねえよ。もっと、魂を燃やして震わせる歌じゃなきゃ、ダメだろ」

「相変わらず自己評価が厳し過ぎんだろ。いいじゃんか。出してみろつて」

「うるせえボケ。俺自身が認められねえんだよ。アインズさんだつて、まだ何だし」「さつきからその『アインズさん』って誰？」

思わず耳郎が聞き返した名前に、爆豪が大きく眼を見開いた。

「嘘だろ、おい。おまえ音楽やってんだろつて！」

「そ、そりややつてるけどさ」

「なんで知らねえんだよ！ アインズさんだぞ！ ロックの伝道師だぞ！」

「え、そこまでの人？」

「当たり前だろうが！」

普段の十倍は怖い顔で言い放つ爆豪に、耳郎と上鳴が少しだけ後ろに下がった。

「アインズさんはな！ 絶唱だ、その歌の一つ一つが魂を燃やす、音の一つ一つでも芸術品だ。クラシックもやれる、ロックもできる。あの人が一人いるだけで、オーケストラだってやれるんだよ。けどな、もつとも熱いのはロックだ。聞いているだけで体中が熱くなって、心が叫び出して、そして魂が燃えてくる。理屈じゃねえ、半端じゃねえんだよ。まさにロック！ そういうしかねえ」

拳を握って力説する爆豪に、聞いていた誰も思う。

そんな実力者なら、知らないはずがない。きつと爆豪が大げさに言っているだけだろう、と。

「かつちゃん、かつちゃん」

「なんだよ、デク」

「いや皆が解らないって顔しているからさ。聞いてもらった方がいいんじゃないの？」

云われて爆豪が周りを見回し、疑問を浮かべるクラスメートの顔が視界に入ると、速

やかに彼はポケットの中から携帯端末を取り出した。

「いいかてめえら。よく聞けよ。これが」

音楽プレイヤー起動、録音してあるアインズの歌の中でも、爆豪が最も好きな一曲。

『ガイコツが墓場でハートビートブレイクダンス』。

「これがアインズさんの魂のロック・ビートだ!!」

そして流れた爆音が、教室を揺さぶったのでした。

耳郎・響香と上鳴・電気からしてみれば、それは音楽ではなかった。音が奏で、旋律が歌い、声がそつと入ってくる音楽ではない。

音の爆撃。

最初に感じたのは全身を振動させる未知なもの。なんだと疑問を感じる前に、全身を揺さぶる魂の咆哮。

続いて奏でられるギターとドラムの音が、身構えていたはずの体を吹き飛ばす。音楽なんて楽しいものじゃない、全身を貫くような衝撃の後に、それらに負けないほどの声が鳴り響いた。

理屈じゃない。理論じゃない。楽しいとか苦しいとか、そんな感情なんて置き去りにして、ただただ体を動かしたくなる。ジツとしてなんていられない、この爆音のようなものと一緒に、踊って叫んで波に乗りたくなってくる。

心が動けと叫び、魂が弾けると轟く。

感想なんていらない。

音楽のセンスがどうか語ることもない。

ただ言えることは、一つだけ。

『これはロックだ』。それだけで十分に、この音楽を語り尽くせる。聞いただけで、ロックだと言える音の爆音に、思わず両手を振り上げた。

見回せばクラスメートたちは誰もが踊っていた。

今が教室、そんなの関係ない。

放課後で先生もまだいる、知ったことか。

自分達は踊りたいから踊る、叫びたいから叫ぶ。こんなロックな音楽を聞いて、ジツと黙っているなんて。

それこそ、音楽への冒瀆だから。

「どうだ！　これがアインズさんだ!!」

「………すげええええ!!!　爆豪なんだよそれ?!」

「こんな凄い音楽、初めて聞いたよ！」

「誰の曲!?!　何処で売っているの?!」

熱気に包まれたように迫ってくるクラスメートを前に、爆豪はにやりと笑う。

「いいぜ、教えてやる、この人こそな」

彼がその名前を高らかに宣言しようとしたとき、教室のドアが開いた。

「うるさいぞ、お前ら」

「はい、すみません」

先ほどまでの熱気が一気に消えるような、冷たい眼光をした先生がそこにいたのでした。

馬鹿騒ぎが終わった後、帰路についた爆豪は、緑谷を伴って一郎の店へ。

「今日、アインズさんのライブやるって？」

「ああ、新曲があるんだってな。震えるぜ」

楽しそうに笑う爆豪に、緑谷も楽しそうに笑いそうになって、チラリと後ろを見てしまった。

「かつちゃん」

「ああ。出て来いよ」

柱の影に向けて爆豪が鋭く目線を飛ばす。学校から誰かがつけているのは知っていた、偶然かと思っていたがここまで来ると、確実に狙いはどちらかだ。

爆豪か緑谷か、あるいは。

「あ、ごめん」

声に反応して出てきたのは耳郎だった。少し申し訳なさそうな顔の彼女に、二人は『え、何で』と疑問を浮かべてしまう。

「気になってさ。ほら、あんなに凄いロックは聞いたことがないし」

「あ、なら来いよ。今から聞きに行くからな」

「いいの?」

誘われるとは思っていなかった耳郎は、本当にと目線で問いかける。

「いいんだよ。アインズさんの歌はな、たくさんの人を楽しくさせる。だからロツクなんだろ?」

ニヤリと笑う爆豪に、そうだねと緑谷は頷いた。

「心臓、ヤベえーぞ、覚悟しろよ」

「あ、うん」

ドクンと耳郎の心臓が大きく跳ねた。先ほどまでの熱が残っているような、あの魂が揺さぶられる音がまだ耳の中にあつたのかもしれない。

「行くな、速くしないと始まっちゃう」

「そうだね」

爆豪はそう言って歩き出した。緑谷もその後が続いて。

「待ってよ」

耳郎は慌ててその後を追って行ったのでした。

そしてその日、アインズのファンが一人、増えましたとき。

爆豪・勝己は数年後に思う。

「あつたな、そんなこと」

耳郎・響香は数年後に思い出す。

「あれが始まりだったじゃん」

そんなことを言われて、爆豪は飯を食っていた箸を止めた。

「そうだったか？」

「そうだったよ」

正面に座つてご飯を食べていた耳郎は、そう言つて嬉しそうに笑つた。

「……そうかもな」

爆豪はそれに対して、小さく答えて飯の続きを楽しんだのでした。

「次のアインズさんのライブ、行くんでしょ？」

「予定、開けておけよ」

「ご飯が終わり、二人は玄関のところでそんなことを言っていた。

「もちろん、開けてあるよ」

「なら楽しもうぜ」

「当然」

そう笑いながら、二人してドアのカギを閉めたのでした。

「まさか、あの二人が同棲するなんて、思わなかったです」

二人の共通の友人、緑谷・出久はそんなことを言いました。

あとがき風味のお話です。

これにて、サルスベリのヒロアカ三つ目は終幕とさせていただきます。よく解らない長いタイトルで、内容もまったくヒロアカっぽくないお話に、ここまでお付き合いいただき、ありがとうございます。

サルスベリの技量不足にて、描写が甘いところや、突っ込みどころが万歳だったのに、こんなにもお気に入りや評価していただき、本当にありがとうございます。

皆さまの日常の小さな楽しみになっていたらなら、サルスベリとしては幸いです。

正直に言えば、ここまで続くとは考えていませんでした。

ヒロアカは何度か見たことあるけど、書けないような、それか前の二作品のように、一話だけとか、考えていました。

ここまで続いているのは、皆様が広い心で許していただいたおかげであります。感謝、感激です。

以下、書ききれなかったネタ、書けないと思つたネタを少しだけ。

『エンデヴァー、家族が好き過ぎて愛しすぎて、芸能人になるんじゃねと不安にかられ、悪役顔でスカウトを遠ざける』。

『黒霧の優雅な午後、猫を探してエンデヴァーと遭遇、お酒飲む』。

『切島は斬り払い・受け流しを覚えた』。

『青山、スープにキラキラ負け。輝きの意味を知る』。

『轟・焦凍、麗日お茶子に土下座で求婚』。

『デク、艤装の件でI・アイランドにて捕まる。メリッサと出会う。その後メリッサがスープとエルに染まっていく。デク君ピンチ!』。

『ナイン、理想の世界を目指してギルに見つかる。粛清!』。

『飯田君のスピードアップ計画。『光を超えろ! 次元を超えろ! 飯田君マツハでクロックアップだ!』計画始動』。

『とろけるほどに甘い弔の、初めての結婚記念日。百轟沈編』。

長い間、お付き合いいただきまして、ありがとうございます。

正直に言えば、こうしたいああしたいって考えはありますが、本筋が完結しているのに、いつまでも続けるのは、いかがなものかと考えました。

後は、何度か書いてみたけど、やはり纏まらないなど結論が出た話もあります。

ネタは浮かべど、文章は来ないなんて状況に陥ることもありました。

本当に完結できて、よかったというのはサルスベリの本音ですし、皆様の感想をお陰だと思えます。

本当にありがとうございます。

それでは、これにて失礼いたします。

さて、田中君、次は。

「一郎君は私のです」

あ、ヒミコちゃんはね。

「一郎君は！ 私のです!!」

はい、ごめんなさい。

「勝った！ 勝利だ！」

おのれ田中・一郎め!!

次はもつとお前の胃を痛めつけて。

「なんででしょうか？ 私の一郎君がどうしました？」

何でもありません！ ヒミコ様！

「よろしい。では、皆様、さよならです」